大宰府条坊跡

第 200 次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第75集

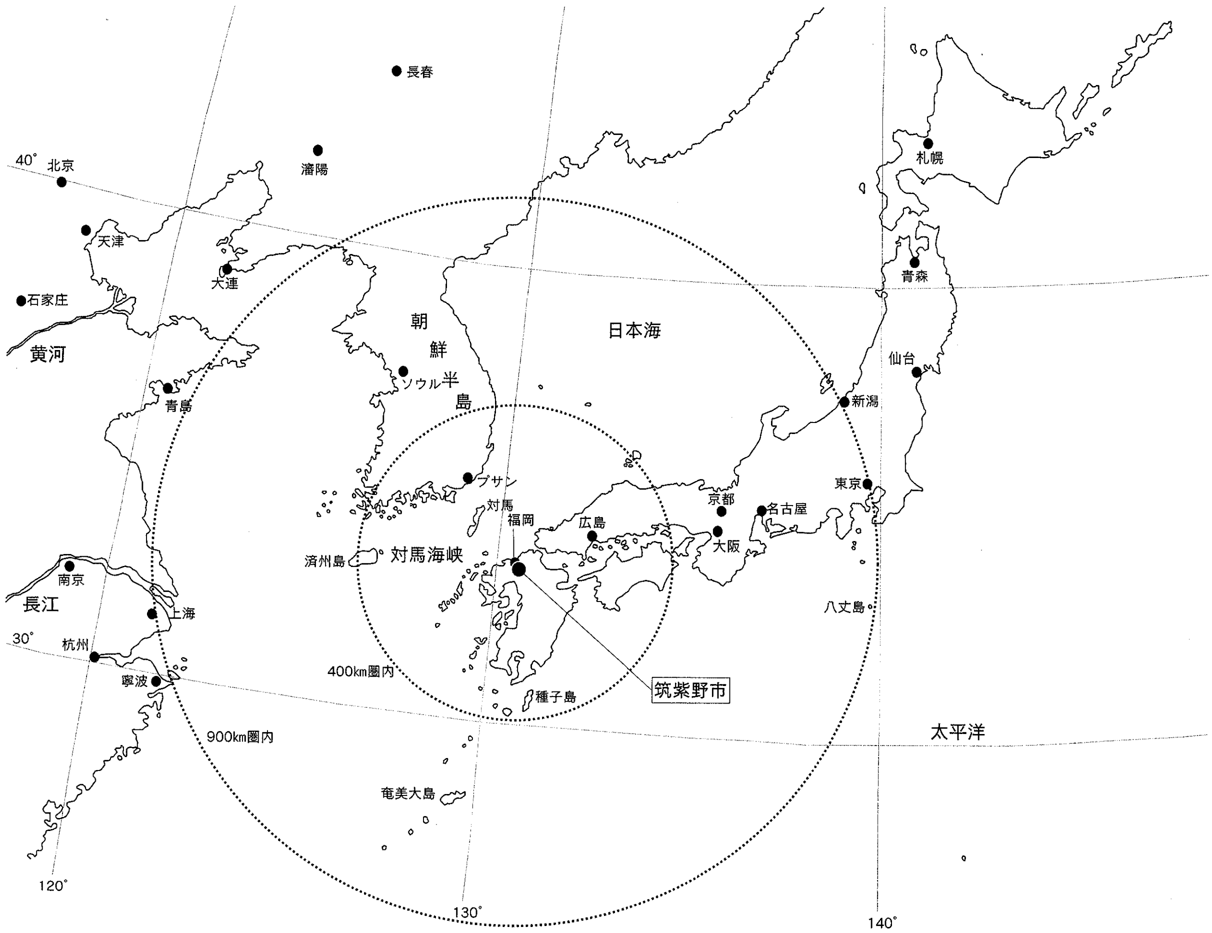
2003

筑紫野市教育委員会

だざいふじょうぼうあと

大宰府条坊跡

第200次発掘調査



例 言

1．本書は、店舗建設に伴い㈱松村組から筑紫野市教育委員会が委託を受けて実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．現地における発掘調査は、平成10年度に行った。調査地は筑紫野市大字二日市700番1（二日市中央５丁目３番10号）で、調査対象面積は2,700㎡である。

3．本件に係る各担当者は、以下のとおりである。

事前協議	筑紫野市教育委員会	文化財課	技師	渡邊　和子
発掘調査	〃			小鹿野　亮
整理報告	〃			小鹿野　亮

4．発掘調査に係る主要な遺構実測は小鹿野が行った。全体測量については、㈱東亜建設技術に委託して空中写真測量を行った。

5．本書に掲載した遺構写真撮影は小鹿野が行い、空中写真は(有)空中写真企画、遺物写真は陶磁器を小鹿野が行い、その他はフォトハウスおかに委託した。

6．本書に掲載した遺物実測は、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。このうち、主要な土器・陶磁器類については小鹿野が行った。

7．本書に掲載した図版の浄書は、一部を除いて㈲文化財テクノアシストに委託した。その他については小鹿野が行った。

8．本書に掲載した墨書土器の赤外線写真データの取得は、㈱埋蔵文化財サポートシステムが行った。方法は赤外線スキャナーを使用し、コンピュータ上で補正したものを掲載した。

9．調査によって得られた図面および写真などの資料は、筑紫野市教育委員会が保管している。

10．本書の編集ならびに執筆は、小鹿野が行った。

目 次

挿図目次(Fig.)

表目次(Tab.)

写真目次(PL.)

本文

写真図版（PLATES）

凡　例

1．本書の構成は、遺構種別ごとに昇順で配列している。遺構を検索する場合には、巻末に掲載した遺構番号対照表、遺構別出土遺物一覧表を参照していただきたい。なお、文章中で表現される個別遺構の表記は、以下のとおりとした。

（例）大宰府条坊跡第〇〇次調査において検出したS－△△△が、整理の結果「井戸」と判断された場合。

条〇〇	ＳＥ	△△△
（調査次数）	（遺構種別）	（遺構番号）

2．本書で使用される遺構の略号は、以下のとおりである。

略号／種別／備考

ＳＡ／柵・塀／築地遺構は、本市では未確認。柵列群は性格不明のためSXとする。

ＳＢ／建物／掘立柱建物、礎石建物など。

ＳＤ／溝／自然流路を含む。また、削平により不連続な土坑状になるものは、埋土の状況などが確認できる場合のみに溝とする。

ＳＥ／井戸／確実に井戸と認識できる場合にのみ適用する。該当しないものはSKとする。

ＳＦ／道路／側溝を伴う場合は、両側溝の内法の空間を示す。

ＳＩ／竪穴住居／小形竪穴住居を含む。

ＳＫ／土坑／

ＳＴ／墳墓／確実に墳墓と認識できる場合にのみ適用する。該当しないものはSKとする。

ＳＸ／性格不明遺構／

3．遺物番号については、遺物台帳記載上の抽出個体番号をアラビア数字で記述した。挿図（Fig.）と図版（PL.）の遺物番号は同一である。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。

4．本書で使用する面積は、全てプラニメーターによる５回計測の平均値である。

5．本書に使用した方位は国土調査法第II座標系を基準としている。従って図中の方位は特に注記のない限り座標北（G.N.）を示している。また、遺構などに示される主軸方位は、この座標値を基に計算上導き出したものである。

6．本書で用いられる大宰府政庁（政庁II期）中軸線の振れは、N－0°34′12″－Wを基準とした（狭川1990）。

7．図化データは、解析図化機により３次元モデル（DEM）を作成し、DXF.フォーマット形式で保管している。データの構造は、以下のとおりとした。

種別	名称	種別	名称	種別	名称	種別	名称
上場	遺構上場	下場	遺構下場	主曲線	主曲線	図根点	図根点
	遺構上場陰線		遺構下場陰線		主曲陰線		図根点数値
	法上線		法下線		補助曲線	ケ　バ	棒ケバ
	攪乱上場		攪乱下場	計曲線	計曲線		Ｔケバ
	攪乱上場陰線		攪乱下場陰線		計曲陰線	標　高	標高数値
	試掘範囲上場		調査範囲下場	指示点	指示点		遺物
	遺構稜線		推測線下場		基準点	遺物等	遺物陰線
	調査範囲		推測線下陰線	単　点	単点数値		石外周
	推測線		下場ハング線	引出し	引出し線		石外周陰線
	推測線上陰線						石稜線

8．本書に掲載される遺物の分類等については、次の文献を参考にした。

土師器･須恵器

・太宰府市教育委員会「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』 1983年

・　　　〃　　　「遺物各説」『宮の本遺跡Ⅱ－窯跡編－』太宰府市の文化財第10集 1992年

・山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『九州上代文化論集』 1990年

・中島恒次郎「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　1992年

・中島恒次郎「都へ行った土器」『古文化談叢』第28集　1992年

・中島恒次郎「大宰府における土師器甕の変遷」『大分・大友土器研究会論集』　2001年

施釉陶器

・山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について－九州の緑釉陶器･灰釉陶器の基礎資料集成－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集　1999年

・高橋照彦「防長産緑釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 1993年

輸入陶磁器一般

・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器の分類について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978年

・太宰府市教育委員会「付編　土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』 1983年

・太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　2000年

長沙窯系黄釉褐斑陶器

・湖南省文物考古研究所･湖南省博物館･長沙市文物工作隊『長沙窯』 紫禁城出版社　1996年

高麗青磁

・山本信夫「日本における初期高麗青磁について－大宰府出土品を中心として－」『貿易陶磁研究』No.5　1985年

磁州窯系白釉陶器

・森本朝子「博多出土の磁州窯系陶器と仿定器」『楢崎彰一先生古希記念論文集』真陽社 1998年

権衡器

・吉村靖徳「権衡に関する一考察－福岡県内出土権状製品の検討と課題－」『九州歴史資料館論集』20　1995年

硯

・横田賢次郎「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館論集』9　1983年

瓦

・石松好雄、高橋章「大宰府出土の瓦について（一）」『九州歴史資料館研究論集』2　1976年

・石松好雄、高橋章「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館研究論集』4　1978年

・高橋章「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢』（下）　1983年

・高橋章「都府楼瓦考」『大川清博士古希記念論文集　王朝の考古学』　1995年

石製銙具

・田中広明「官衙および関連遺跡と腰帯」『シンポジウム3　地方官衙とその周辺』日本考古学協会　1995年茨城大会　1995年

・平尾政幸「平安京の石製銙具とその生産」『研究紀要』第7号　(財)京都市埋蔵文化財研究所2001年

9．本書中で示す土層や遺物の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帳(Revised Standard Soil Coler Charts)』を基準とした。色情報については感覚差があるため厳密に分類した訳ではないが、参考までに併記した。

10．度量衡に関連する文献史料は、下記文献を基に検索した。

・星野聰・村尾義和編『続日本紀総索引』　高科書店　1993年

・亀田隆之・中西康裕・安田政彦編『令義解総索引』　高科書店　1991年

・米田雄介編『類聚三代格総索引』　高科書店　1991年

Ⅰ．調査に至る経緯

福岡都市圏の南部に位置する筑紫野市は、博多の奥座敷である温泉街や近隣市町村を商圏域とする商店街を形成し、周辺の森林田園地帯と共存した閑静な街として推移してきた。しかし、昭和40年代以降の自動車社会の到来と交通網の整備と相まって福岡市のベットタウンとしての脚光をあび、近年では小郡・筑紫野ニュータウン建設のような大規模開発がいたるところで展開され急速に住宅都市として変貌しつつある。二日市地区は、市の中心部として早くから市街化が進んだ地域であり、今なお開発件数は多い。

このようななか、平成9年6月25日付けで株式会社松村組九州支店から筑紫野市教育委員会に対して、店舗建設に伴う「埋蔵文化財の所在について」の照会があった。計画地は筑紫野市大字二日市700番1（二日市中央5丁目3番10号）である。このエリアは周知の埋蔵文化財包蔵地（大宰府跡・遺跡番号210044）に該当しているため、工事着手の60日前までに文化財保護法第57条の2第1項の届出が必要であり、工事計画の内容から判断して事前の確認調査の実施を指導した。また、計画地の確認調査について具体的に打ち合わせを行った。ここは、大宰府条坊跡の中央道路（朱雀大路）推定ラインに当たっていたが、以前に筑紫野警察署の庁舎が建っていたため、建物の基礎等により遺構が破壊されている可能性が高いことが大方の予想であった。

市教育委員会は、平成9年7月5日にトレンチ（試掘坑）を3ヶ所に設定して確認調査を実施した。この結果、現地表面より－40～100㎝の深さで遺構が所在していることが確認された。検出された南北溝は、従来より推定されていた朱雀大路西側溝の推定ラインと概ね合致しており、遺構の全体的な遺存状況は予想に反して良好であった。

その旨を平成9年7月6日付けで回答し、併せて開発にあたっては文化財保護上の措置をとるように指導した。その後、平成9年7月22日付けで埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の2第1項）が提出され、市教育委員会は直ちに県教育委員会に進達した。平成9年8月11日付けで、県教育委員会から当該事業者に対して、記録保存のための発掘調査実施の通知がなされた。

これを受けて、平成9年8月1日付けで「文化財発掘調査委託申請書」が提出され、具体的に発掘調査委託に係る協議を進めた結果、翌平成10年度に発掘調査に着手することで合意に達した。平成10年4月6日付けで「埋蔵文化財調査委託契約書」を締結し、発掘調査を開始することとなった。

現地における発掘調査は、平成10年4月13日より行った。調査実施面積は約2,700㎡で、排土置き場の確保が困難であったために、南側半分をⅠ区、北側半分をⅡ区として遺存状況の良いと想定されるⅠ区から調査を開始した。7月中旬に反転し、同年9月20日で調査を完了した。

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

Ⅱ．遺跡をとりまく環境

1)現在の土地の利用状況

筑紫野市は福岡市から南東15kmに位置しており、面積は87.63km²と広大で、その形は蝶が羽を広げた形に例えられる。市域には国道3号線・JR鹿児島本線・九州自動車道・西鉄大牟田線といった南北九州を結ぶ基幹動脈が縦走し、平成10年には筑紫野インターチェンジが設けられた。また国道386号線・JR筑豊本線が市域の中央部より分岐するなど交通の要衝としての役割を担っている。

市域の北側は主に太宰府市に接し、北東では糟屋郡宇美町に、西では大野城市と筑紫郡那珂川町に、東では嘉穂郡筑穂町に、南東部は朝倉郡夜須町に、南では小郡市と佐賀県三養基郡基山町に、南西では佐賀県鳥栖市にそれぞれ接している。

市内の集落は宿場町・市場町・温泉町として発展した二日市の他に、原田・山家などの宿場町と周辺の農業集落を主としていた。しかし、福岡市の中心部からほど近く、交通も至便であることから、福岡都市圏の拡大とともに、近年はその一部として急速に都市化しつつある。人口は福岡市都市圏のベットタウンとして著しく増加し、これらの都市化現象は、二日市低地帯とその周辺から始まり、現在は丘陵地を大規模に開発した住宅団地へと広がっている。

2)地形および地質

筑紫野市は、北部九州の地形の骨格を担う筑紫山地と、その間に開けた地溝状の二日市低地帯、筑紫山地から二日市低地帯方向に流れる河谷によって形成された河成低地などから構成される。

市域は、東部には筑紫山地の一部である三郡山地に属する三郡山から夜須高原までの山並みが連なり、西部には筑紫山地の西部を構成する背振山地とその前面の丘陵が広がっている。その間の二日市低地帯は、博多湾側の福岡平野と有明海側の筑後平野とを結ぶ平地である。

この低地は市域の中央部に位置しており、御笠川や宝満川水系の河川によって形成されたものである。二日市低地帯の西縁付近には、警固断層系とその延長部が所在し、山地と平野の境界を構成する。このため、筑紫野市の景観は東西を山地に囲まれた盆地的景観と、

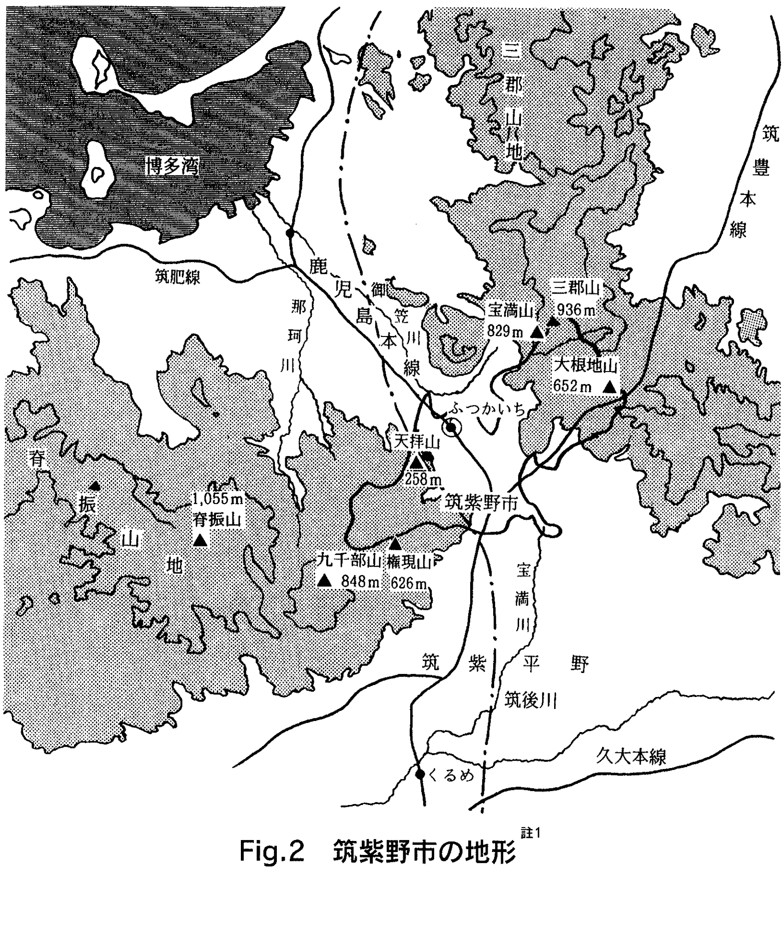


Fig.2　筑紫野市の地形[註1]

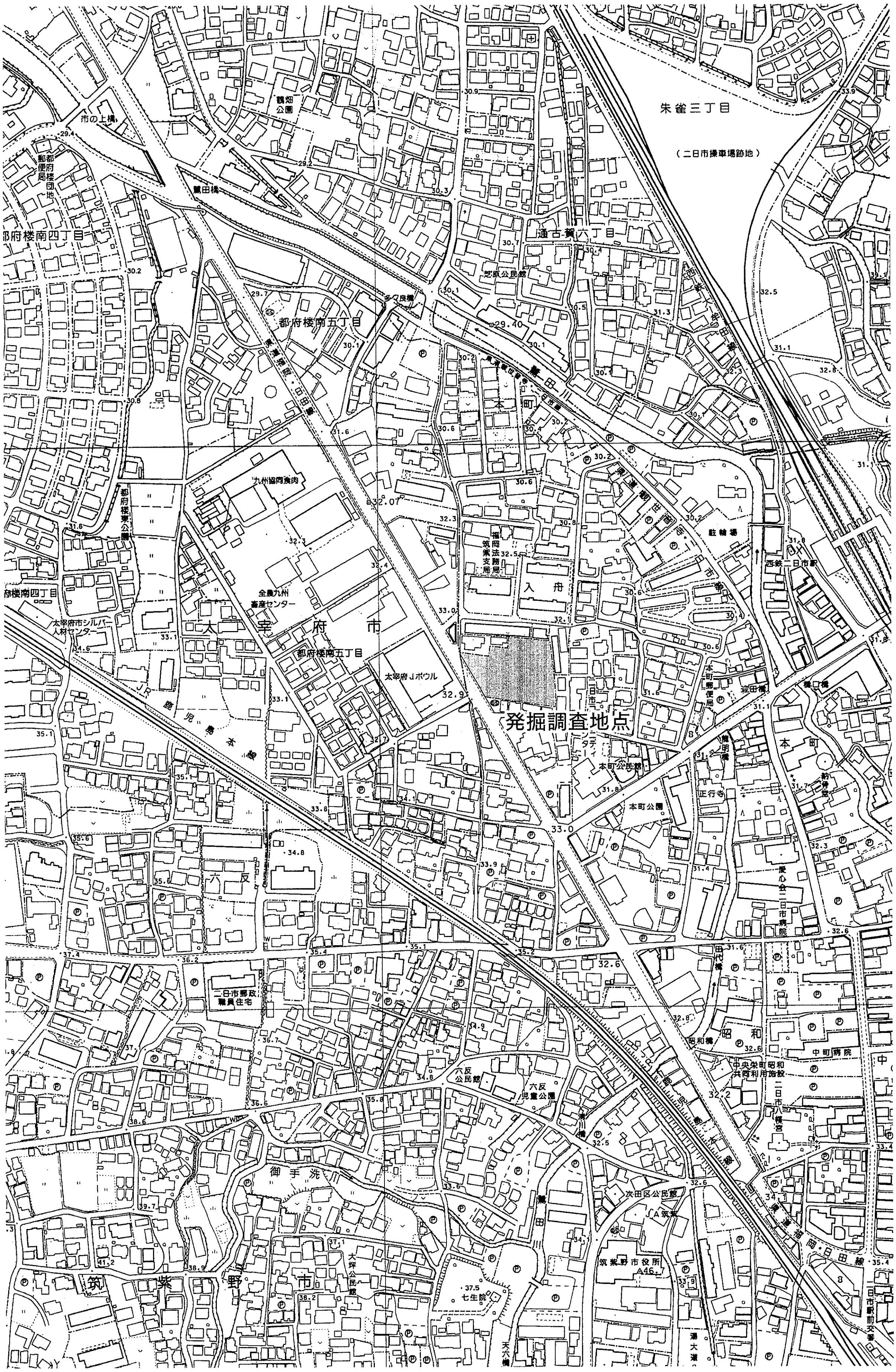


Fig.3　調査地点周辺図（1/5,000）

北西方向と南西方向に開けた平野的景観との双方を持ち合わせることになった。

二日市低地帯のうち、市域の北側に当たる部分は博多湾に注ぐ御笠川水系の鷺田川流域、その他の地域は有明海に注ぐ筑後川水系の宝満川流域となる。この低地帯には、博多湾側と有明海側との流域界があり、その結果、筑紫野市域は内陸にありながら双方の流域に面することになり、北部九州と中部九州および海外からの文化の交差する場所となった。

二日市低地帯は、幅1.2～1.5㎞程で、主に沖積段丘堆積物に覆われている。古代にはこの低地帯の一部に大宰府の条坊が施行され、長期にわたって大宰府政庁が設置された。これには低地帯の持つ交通の利便性と防衛拠点としての閉塞性を同時に兼備している地形的な特性に依るところも少なくない。筑紫野市は、海に開けた平野と山に囲まれた盆地を同時に備えた自然地形の特色を古代から生かしてきた。

3)歴史環境

筑紫野市二日市周辺の平野部では、後期旧石器時代後半が初現である。しかし、資料の絶対数は少なくその歴史的中心は奈良時代から中世にあり、検出される遺構の多くは当該期のものである。これは、この地に「大宰府」が設置され、その後の歴史的展開に大きく関与したことに起因している。

狭長な平野部北側の太宰府市には、かつて「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府政庁が設置され、周囲には蔵司、月山官衙群をはじめとする多くの官衙が取り巻き、東には学校院、さらに観世音寺と当時の官庁、官寺が並んでいる。これらの南側に広がる平野には、大宰府条坊と呼ばれる古代都市遺跡が展開し、筑紫野市北部まで広がっている。政庁の背後には天智朝に築造された大野城、博多湾側の平野が最も狭くなっている部分には水城、南側の平野を挟んだ対面には基肄城が築かれ、大宰府ならびに北部九州の軍事面での防衛ラインの一翼を担っていた。

この地域は、その地勢から九州北部沿岸部と内陸部とを結ぶもっとも平坦なルートであった。奈良時代には大宰府から放射状に各地に延びる官道が整備され、九州の各地からのアクセスが可能であった。大宰府の東に位置する御笠地区遺跡（筑紫野市）では、奈良時代の大形建物が多数検出され、大宰府から米ノ山峠を越え豊前方面に通じる官道の最初の駅で、万葉集に詠まれた「蘆城駅家」である可能性が指摘されている。また近年では、前田遺跡（太宰府市）・大宰府条坊跡第99次調査（筑紫野市）で検出された水城西門ルートや岡田地区遺跡（筑紫野市）の西海道豊後ルート、筑後国府周辺（久留米市・筑後市）の西海道、吉野ヶ里遺跡周辺（佐賀県三田川町）の西海道肥前ルートなど各地で官道の検出事例が増加し、それぞれの官衙・寺院をつなぐルートの解明に大きく寄与している。

近年の調査研究の成果では、奈良時代には幅約36mの朱雀大路を中心に、西側ではおよそ100m間隔で南北路が走っていたことが判明している。また、区画内の様相に踏み込んだ井上信正の研究成果もあり、東西約100m弱の敷地を4分割する宅地割りが推定されている。

今回の調査地点は、これらの官道がアクセスしてくる朱雀大路を中心としたエリアである。対象地が広範囲であったこともあって、朱雀大路西側の様相について重要な所見が得られた。大宰府条坊跡の全容解明にはまだほど遠いが、平成13年度には大宰府条坊跡第219次調査（未報告）において、本調査地点の北東の至近距離を調査しており、古代から中世にかけての朱雀大路を挟んだエリアの様相が着実に判明しつつある。

参考文献

・井尻正二・新堀友行『地学入門』　築地書館　1976年
・太宰府市史編集委員会『太宰府市史』 1992年
・太宰府市教育委員会『太宰府・佐野地区遺跡群X』太宰府市の文化財第50集　2000年
・太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡X－推定大宰府朱雀大路の周辺の調査－』太宰府市の文化財第37集　1998年
・筑紫野市教育委員会『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集　1986年
・筑紫野市教育委員会『大宰府条坊跡 第99次発掘調査』 筑紫野市文化財調査報告書第52集 1997年
・筑紫野市『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』　2001年
・筑紫野市『筑紫野市史　上巻　自然環境・原始・古代・中世』　1999年

註1　図版の出典は『筑紫野市史　上巻　自然環境・原始・古代・中世』　1999年　5頁第1図

凡例

掘立柱建物跡

撹乱

※本図中に記載の番号は、本書記載遺構のS番号（通し番号）である。
※グリットは、国土調査法第Ⅱ座標系の標記である。

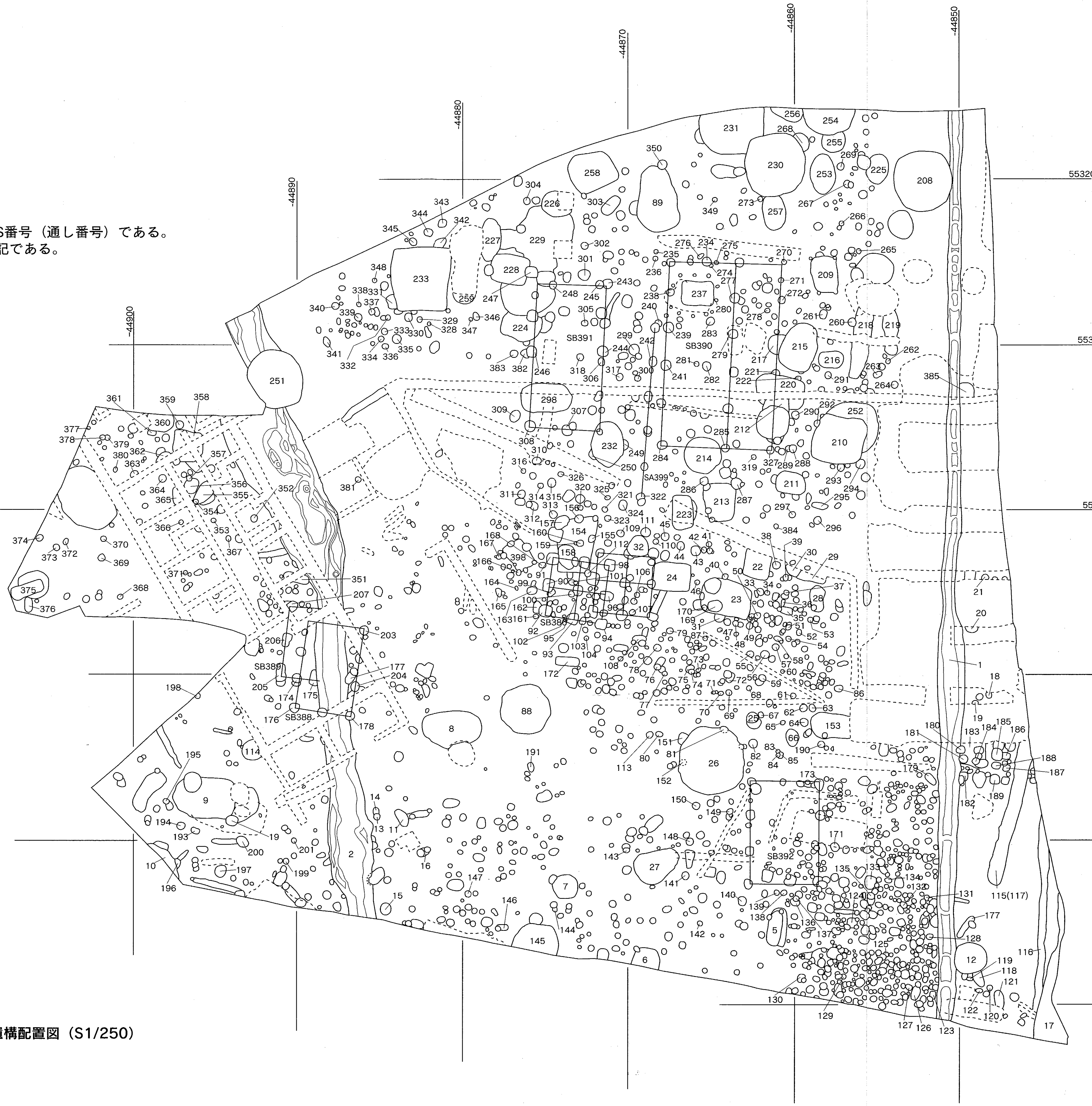


Fig.4　調査地点遺構配置図（S1/250）

Ⅲ．調査の概要

本地点は、筑紫野市大字二日市700番1（二日市中央5丁目3番10号）に所在する。調査面積は2,700㎡である。太宰府の盆地の南部、鷺田川の西岸に位置し、鏡山猛氏の推定条坊右郭1坊17～18条付近に相当する。南側に条107次・条150次、北側に条129次、北東側に条219次、北西側に条56次・条178次、西側に条162次が位置している。周辺エリアでは最も広域に調査が行われた事例となった（Fig.1～3・138）。

調査区は南側半分をⅠ区、北側半分をⅡ区として遺存状況の良いと想定されるⅠ区から調査を開始した。建物基礎や掘り込みによる攪乱が多かったが遺構の検出状況は良好で、柵1列、掘立柱建物7棟、竪穴住居1軒、小形竪穴住居7軒、溝5条、井戸7基、土坑28基が検出された。以下、それぞれの遺構の概要を示す。

1)基本層序（Fig.5・43、PL.15）

今回の調査地点は、周辺域の宅地化が早くから進んだ地域であると同時に、筑紫野警察署庁舎の跡地であったために、建物基盤や掘り込み・パイプなどの攪乱が多い。遺構面全体も著しい削平を受けていた。調査区の基本層序については、Fig.5に模式図を示す。

最上層（1層）は、現代の盛土であり、真砂により約50cm程客土されている。その下部には、暗褐色土（2層）が5～10cm程堆積しており、恐らくは旧表土に近い土壌であると考えられる。さらにその下部には整地層と考えられる黒褐色砂質土があるが、調査区の東側のみにしか見られない。5cm～15cmと薄い堆積で、バックホーで一剥ぎするとなくなってしまう状況である。その下部に地山（7層）の褐色粘質土がある。

本来は検出面（地山）上面には整地層が1層被っていたものと判断されるが、削平によりほとんど消失しているものと思われる。検出面でのレベル差を見ると、道路面より宅地エリアの方が20～40cm高い。高い箇所の整地層が大きく削られ、低い箇所のみに残ったと見るのが妥当であろう。

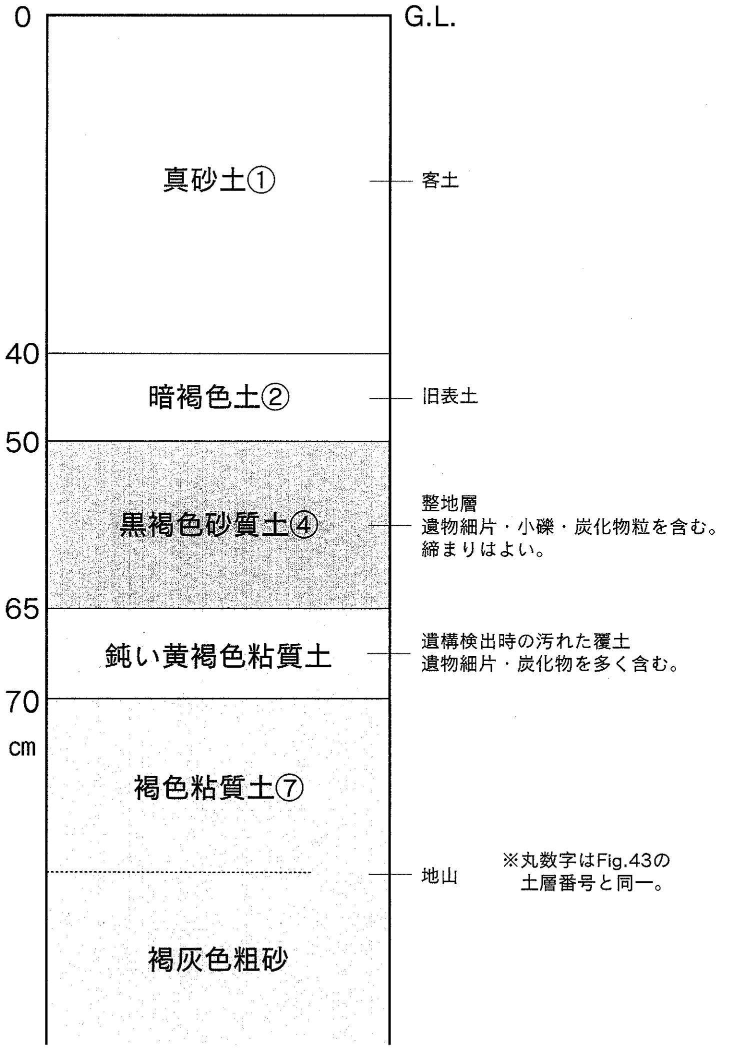


Fig.5　基本層序概念図

2)SA（柵）

SA399（Fig.6）

調査区の中央付近を南北に延びる柵である。SB390、SB391に挟まれた空間に位置し、主軸方向はN－0° 4′ 0″ －Eに採る。柱穴の形状は円形で、径約60cm、深さ10～30cm、柱間寸法は約2.1m（7尺）を測る。出土遺物がないため時期は不明確だが、主軸方向が建物群にほぼ一致しており、該期の所産と考えてよい。

3)SB（掘立柱建物）

SB386（Fig.7、PL.7）

調査区の中央付近に位置し、SB387と同じ位置に建っている総柱建物で、柱間は2間×2間、柱間寸法は1.6～1.8mである。大きさは3.4m×3.4m、建物の床面積は11.56㎡でほぼ同等のものである。掘り方は隅丸方形のプランを有し、径60～80cm、柱痕径は20cmを測る。

SB387（Fig.9、PL.7）

調査区の中央付近に位置し、SB386と同じ位置に建っている総柱建物で、柱間は2間×2間である。大きさは3.3m×3.6m、床面積は11.88㎡を測る。掘り方は円形プランを呈し、径50～70cmである。SI024を切っている。

SB388（Fig.8、PL.6）

調査区の西側に位置する側柱形式の2間×3間南北棟である。梁行3.3m・桁行5.2mを測り、床面積17.16＋α㎡である。掘り方は円形プランを呈し径60cm程である。SD002を切っているものと思われるが、溝を掘削する際に確認ができなかったため、切り合い関係は不明確である。

SB389（Fig.10、PL.6）

SB388と同じ位置に建っている側柱形式の建物である。

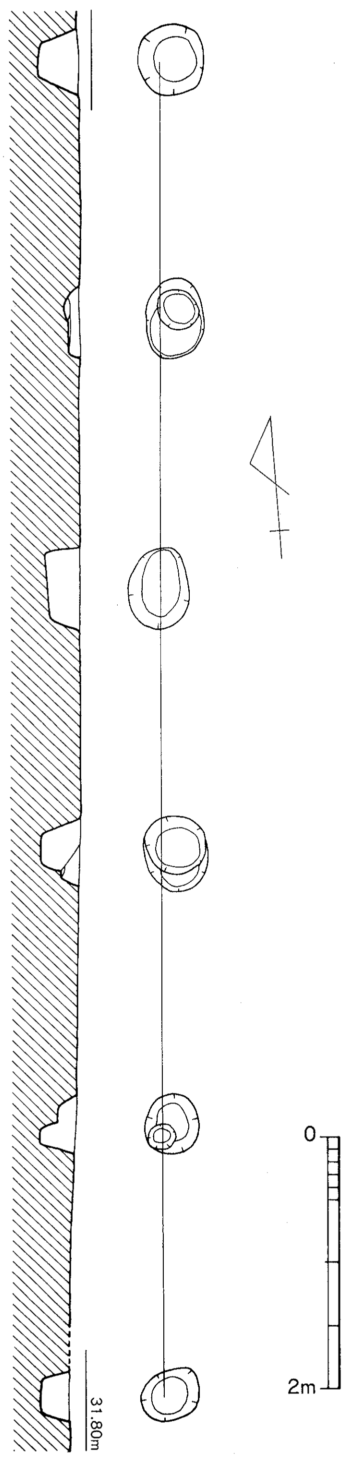
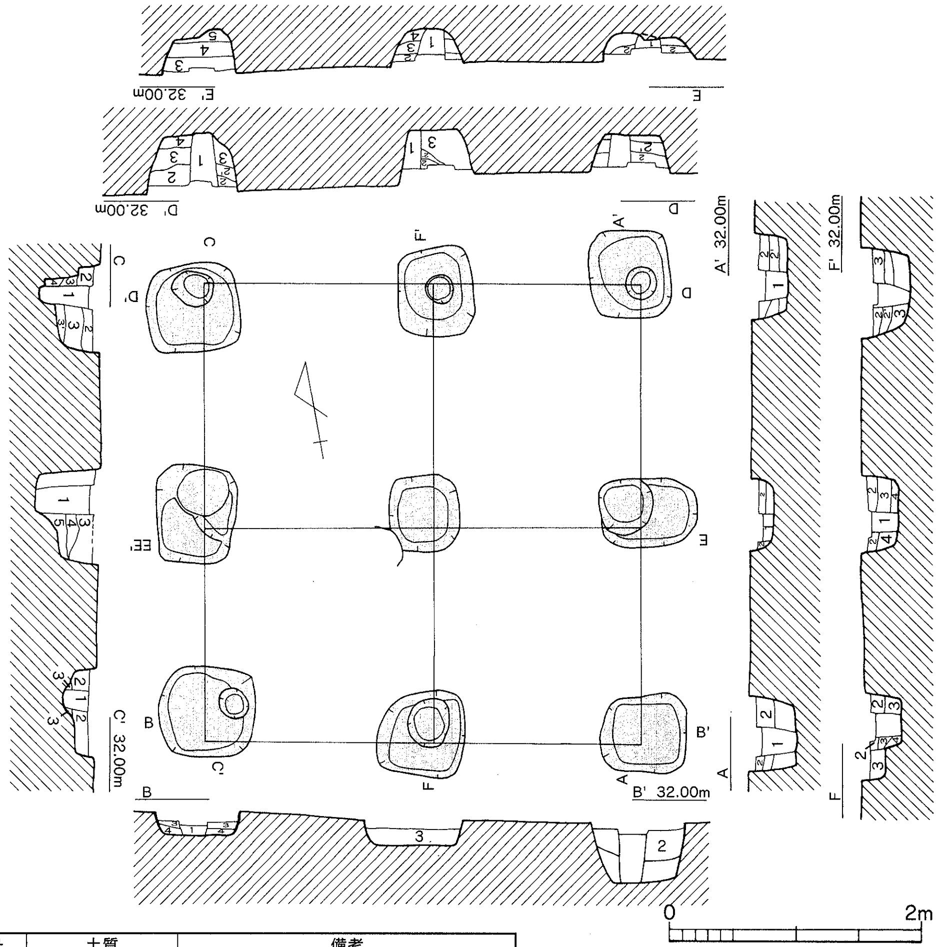


Fig.6　SA395実測図
（1/60）



土層番号	土質	備考
1	灰茶褐色土	柱痕。微量の黄褐色土粒を含む。
2	灰茶褐色粘質土	遺物細片、炭化物を含む。
3	暗茶褐色粘質土	暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色土塊を含む。
3'	暗茶褐色粘質土	3層より黄褐色粘質土塊を多く含む。
4	黒褐色粘質土	
5	茶褐色粘質土	

Fig.7　SB386実測図（1/60）

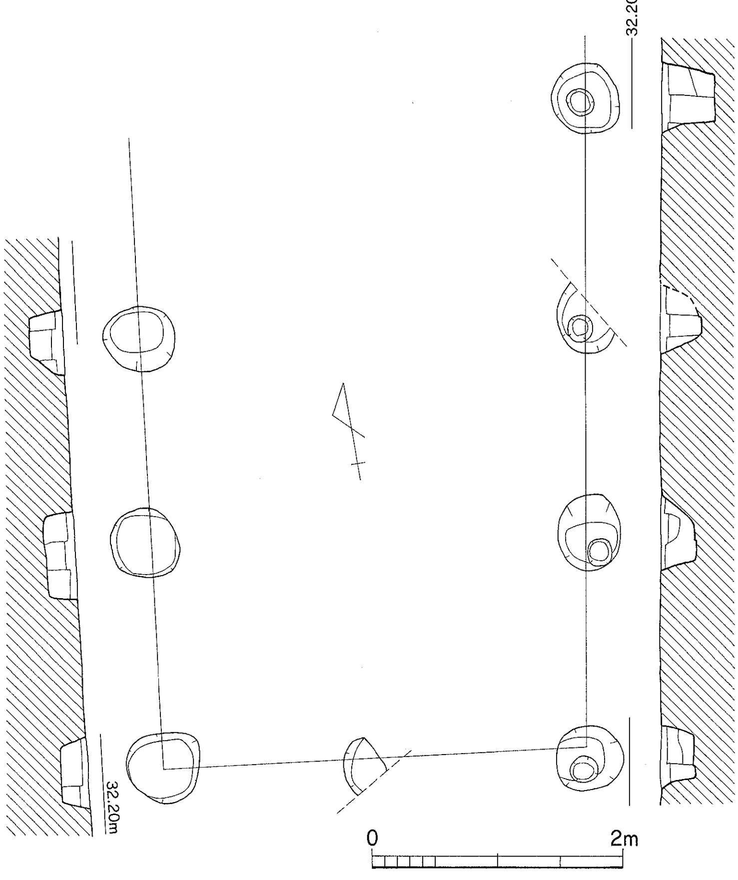
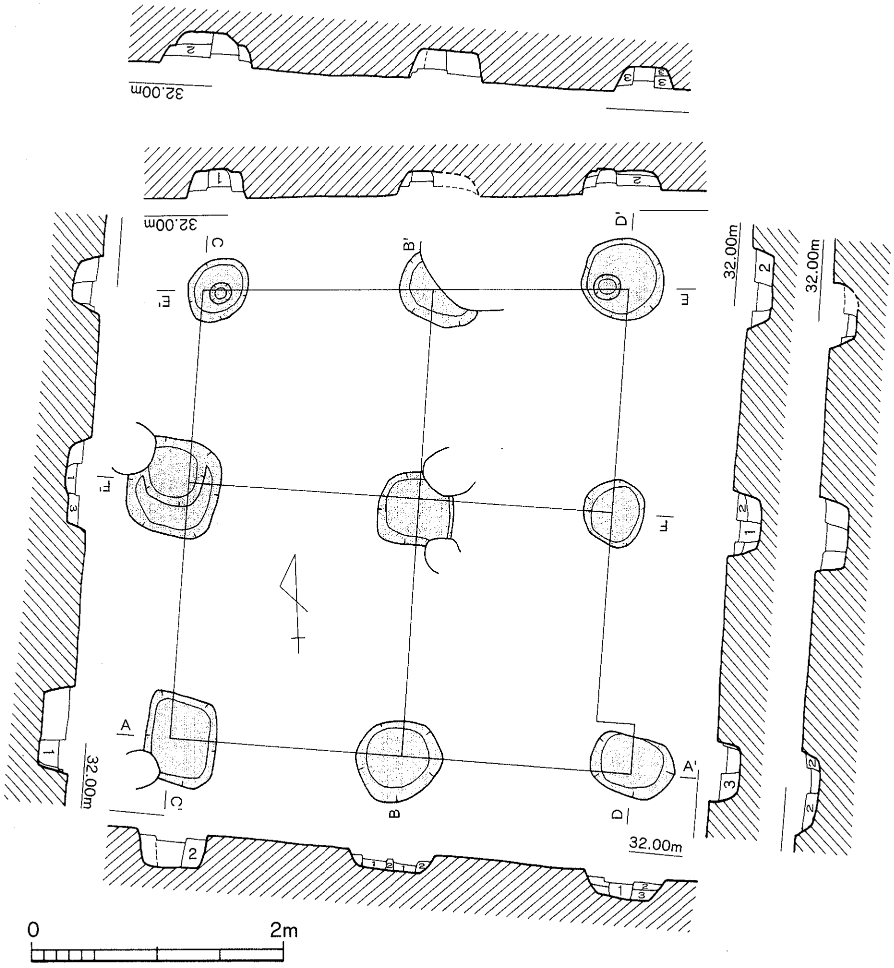


Fig.8　SB388実測図（1/60）

柱間は2間×2間で、2.1m＋α×4.2m、床面積8.82＋α㎡を測る。掘り方は円形プランを呈し、径50～60㎝である。SB388と同様にSD002を切っているものと思われるが、確認ができなかった。また、SB388との先後関係についても不明確である。



土層番号	土質	備考
1	灰色砂	
2	暗茶褐色土	砂粒を多く含む。
3	黒色粘質土	

Fig.9　SB387実測図（1/60）

SB390（Fig.12、PL.5･6）

調査区の北側中央に位置する側柱建物で、SB391の東側にSA395を挟んで並列する2間×5間の南北棟である。東面に廂を有している。梁行3.9m、桁行11.2m、身舎面積43.68㎡、総面積73.92㎡を測る。掘り方は円形プランを呈し、径30～60㎝である。

SB391（Fig.13、PL.5）

調査区の北側中央に位置する側柱建物で、SB390の西側に並列する2間×4間の南北棟である。梁行4.2m×桁行10.6m、床面積44.52㎡を測る。掘り方は円形プランを呈し、径50～60㎝である。SK298、SK232、SX229を切っている。

SB392（Fig.11）

調査区の南東隅のSD001沿いに位置する側柱建物で、柱間は2間×3間である。梁行4.2m、桁行6.2m、床面積26.04㎡を測る。掘り方は円形プランを呈し、径40～70㎝を測る。

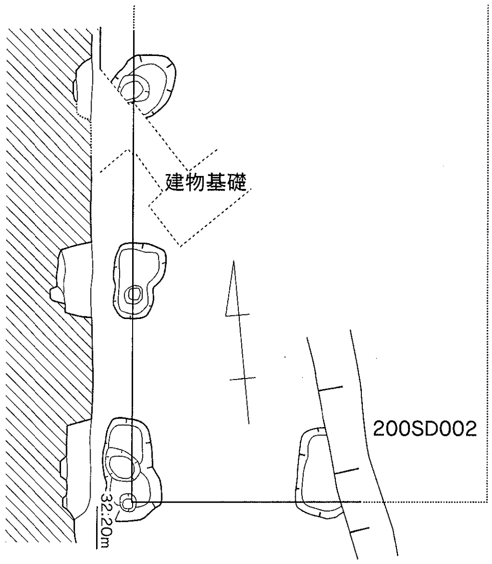


Fig.10　SB389実測図（1/60）

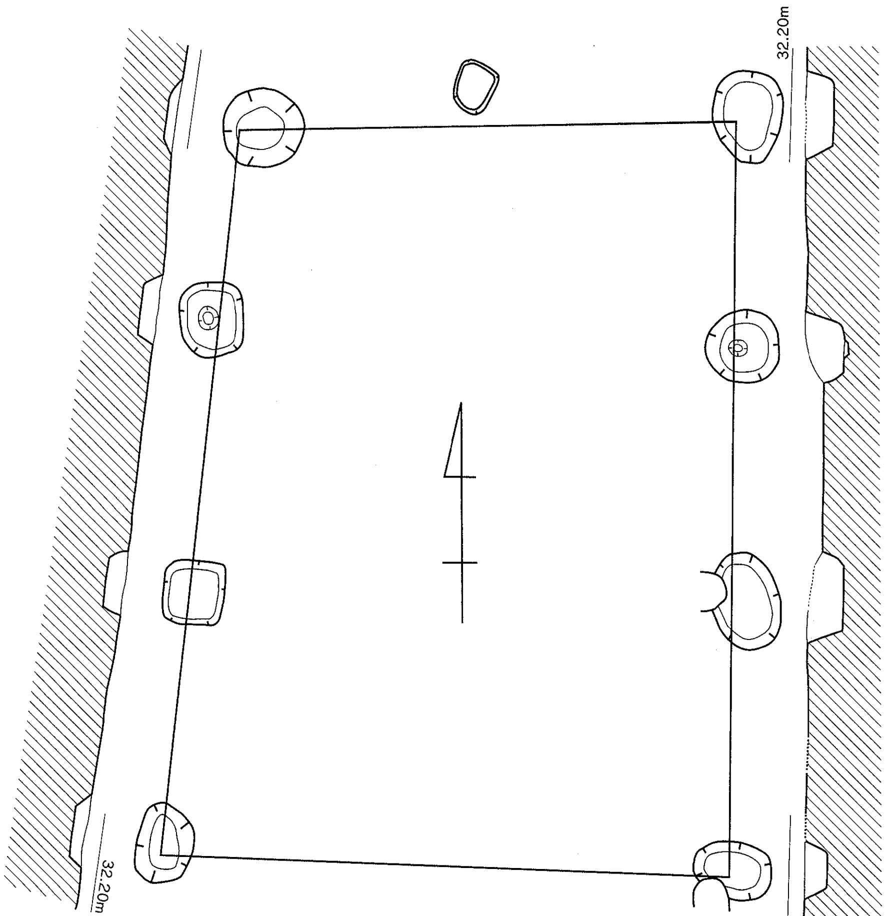


Fig.11 SB392実測図（1/60）

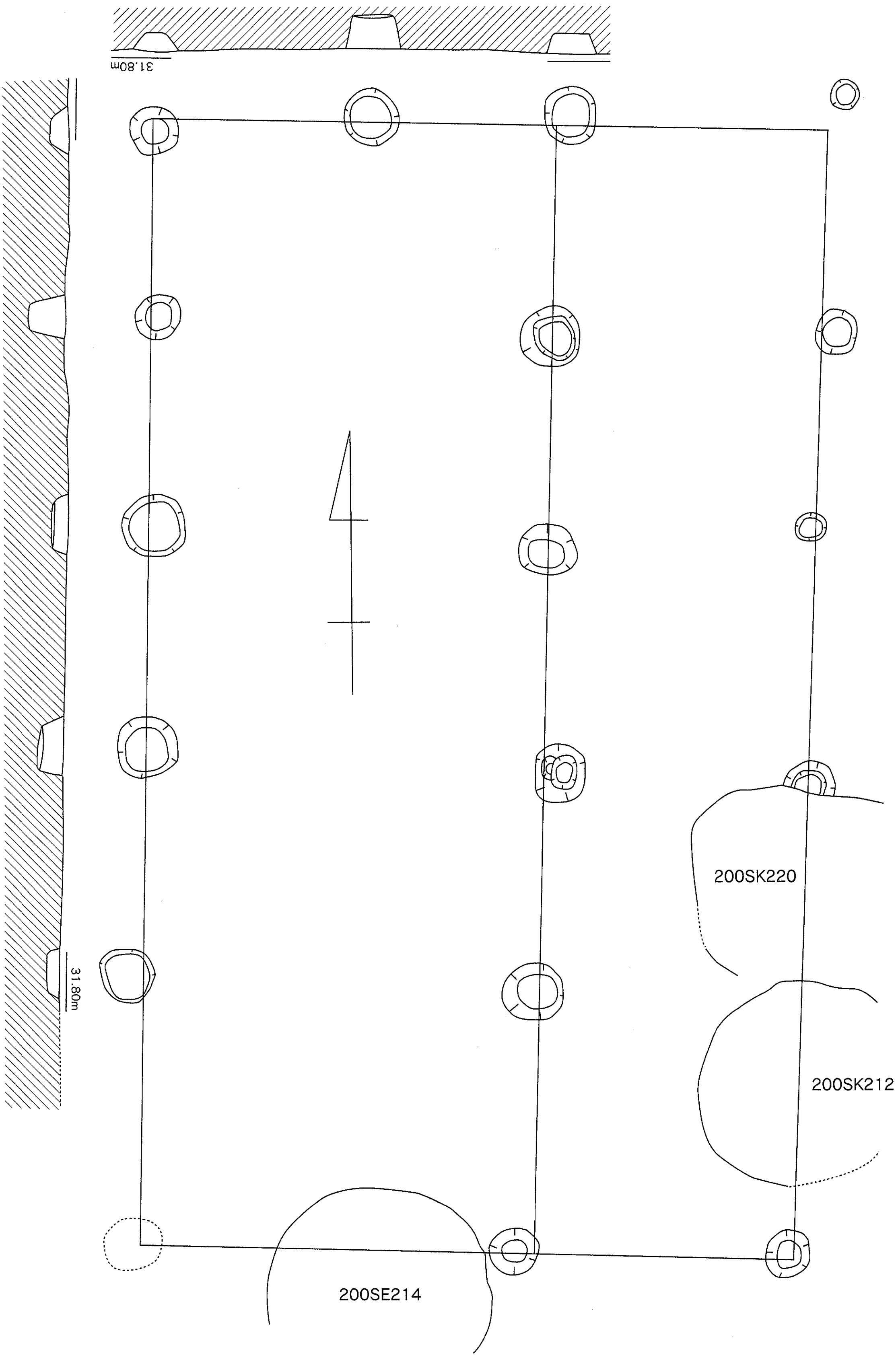


Fig.12　SB390実測図（1/60）

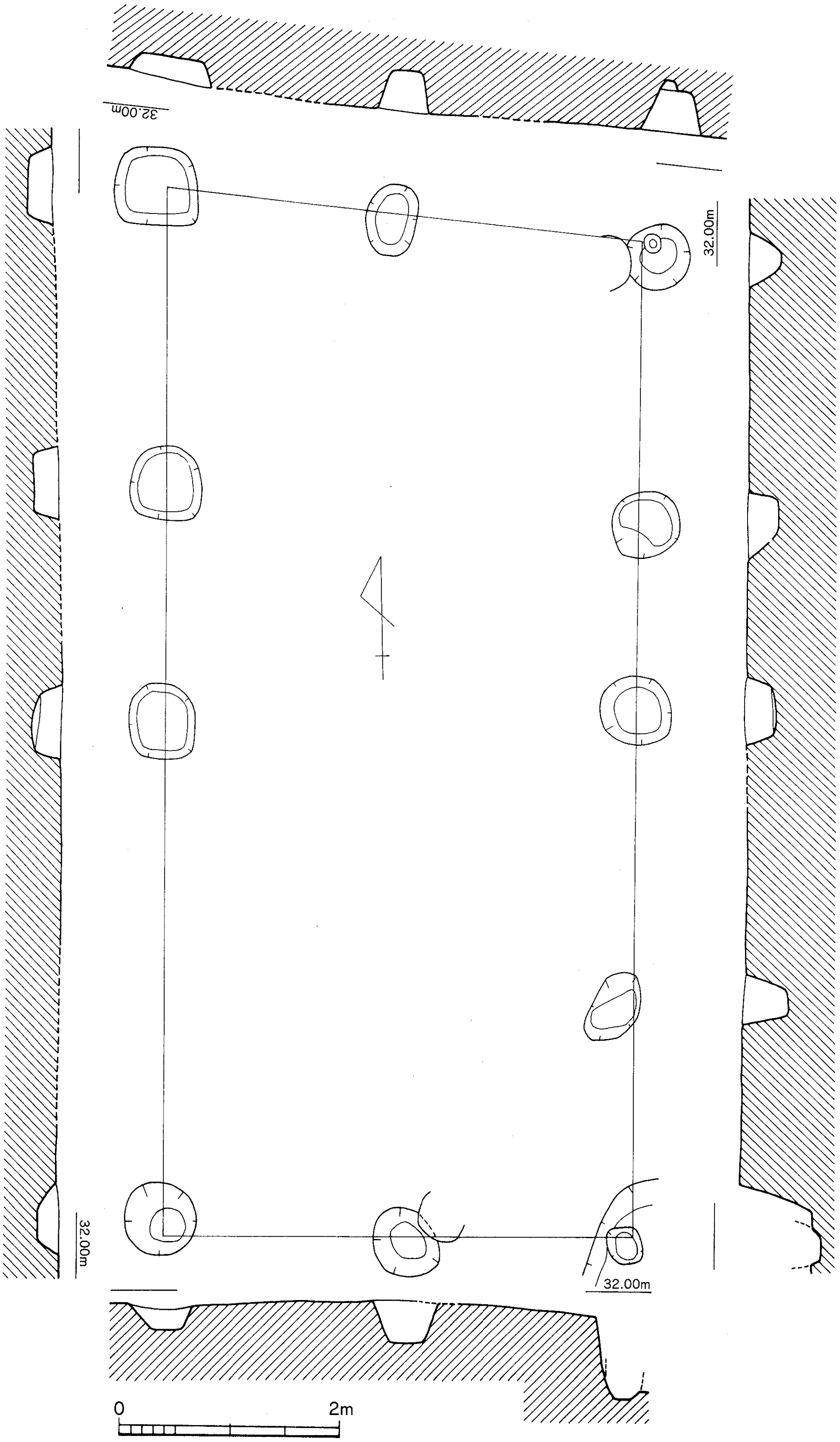


Fig.13 SB391実測図（1/60）

4)SD（溝）

SD001（付図、Fig.14、PL.8・9）

調査区の東端を南北に直進する溝で、奈良時代の朱雀大路西側溝と考えられる。主軸方向はN-0°32′00″-E、上幅1.0m、下幅0.6m、深さ0.5～0.8mである。南側の隣接地に当たる条107次調査、条150次調査において検出されている溝の延長と考えられるが、位置的にはそれらの軸より約1m弱東に偏っている。当初は時期差も想定したが、周辺にそれに繋がる溝が確認されていないため、大路側溝は連続しながらも振れをもっていることが分かる。土層からは掘り直しの痕跡が確認でき、主たる埋没は8世紀後半頃と考えられる。

床面には約12～14mスパンで陸橋状になる箇所がみられ、深さは一定ではない。(Fig.146)このことは側溝の機能を推測する上で興味深い点である。筑紫野市岡田地区遺跡で検出された西海道の側溝の場合もこれと同様であったことや、土層の状況も水成堆積の痕跡(泥炭土,粗砂,アズなど)を示さないことなどなら、冠水時にはある程度の水流はあったであろうが、古代の道路側溝には排水路的な機能はあまり期待できないのではないかと考える。

SD001上層出土遺物（Fig.15、PL.20～22·49・50）

大宰府Ⅷ期の土師器片が確認されている。完全な最終埋没は平安時代中期まで下がるものと考えられる。

032は土師器坏ａである。復元口径11.6㎝、底径6.6㎝、器高4.0㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母、赤褐色粒、微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。底部は平坦をなし、体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部と体部の境目には大きく段を残す。調整はナデを施す。

027は土師器坏ａである。復元口径14.9㎝、底径10.4㎝、器高3.35㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で、灰白色（2.5Y8/2）を呈する。

030は土師器坏ａである。復元口径14.7㎝、底径10.1㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には赤褐色粒や0.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。体部外面下位～底部外面にかけてはケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

031は土師器皿ａである。口径16.0㎝、底径14.4㎝、器高2.55㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒や微量の0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。底部は概ね平坦だが、中央付近に向かってやや丸みを持つ。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデ。底部外面周縁に黒斑が確認できる。

039は土師器高坏である。脚部の一部のみ残存しており、残存高10.2㎝を測る。胎土には赤褐色粒や微粒砂を含む。焼成は良く、外面は橙色（5YR6/8）、内面は黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。調整はナデを施す。

024は須恵器蓋である。復元口径18.4㎝、器高3.3㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、外面は鈍い黄橙色（10YR6/4）～鈍い橙色（7.5YR6/4）、内面は鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。歪みが大きいため、体部と天井部の境は不明瞭で、天井部は丸みをもっている。

026は須恵器壷蓋ａである。残存高2.9㎝の破片資料である。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、暗灰色（N3/）を呈する。

020は須恵器蓋ｃ3ウである。復元口径17.9㎝、器高3.2㎝、撮み径2.2㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成はやや不良で、外面は灰白色（2.5Y7/1）～灰黄色（2.5Y6/2）、内面は灰白色（2.5Y7/1）を呈する。撮みは低い釦状を呈する。

022は須恵器蓋である。復元口径15.6cm、器高1.45cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土は1mm程の砂粒をわずかに含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。体部と天井部の境に強く屈曲し、天井部は平坦面をなす。形状が特徴的であり、当初、坏の可能性も考えたが、口縁が蓋4類の形状を呈するため、蓋として分類した。

019は須恵器蓋ｃ3アである。口径14.1cm、器高3.1cm、撮み径2.3cmを測る。全体の1/3を欠失する。胎土には0.5～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（N5/）を呈する。自然釉付着。撮みは低い擬宝珠状を呈する。

029は須恵器坏ａである。復元口径13.0cm、底径8.7cm、器高3.4cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（5Y5/1）を呈する。

011は須恵器坏ｃである。復元口径13.3cm、器高4.5cm、高台径9.1cmを測る。全体の1/2が残存している。胎土には0.5～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良好で、暗灰色（N3/）を呈する。自然釉付着。

013は須恵器坏ｃである。復元口径12.2cm、器高3.4cm、高台径8.4cmを測る。全体の2/3が残存している。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（7.5Y5/1）を呈する。

010は須恵器坏ｃである。復元口径14.0cm、器高3.95cm、復元高台径9.5cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5mm程の砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、外面は灰色（5N/）、内面は灰白色（N7/）を呈する。

012は須恵器坏ｃである。復元口径13.4cm、器高3.6cm、復元高台径8.2cmを測る。全体の1/3が残存している。胎土には1～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（N6/）を呈する。自然釉付着。

002は須恵器坏ｃである。口縁部を欠失しており、残存高5.0cm、高台径11.75cmを測る。胎土には微砂粒がわずかに含まれる。焼成はやや不良で、オリーブ灰色（2.5CY5/1）を呈する。

637は須恵器坏ｃである。復元口径13.6cm、器高4.1cm、復元高台径8.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微量の0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。高台部は断面方形の小さなものが貼付される。高台内中央付近に墨書が確認でき、「葑」と判読できる。

014は須恵器坏である。口径17.7cm、残存高4.65cmを測る。口縁部～体部の1/2が残存する。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。自然釉付着。体部下半はケズリをそのまま残す。

028は須恵器皿ａである。復元口径18.7cm、底径15.7cm、器高2.65cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微量の0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）を呈する。底部と体部の境目は丸みを持ち、口縁部は強めに外反する。器肉はやや厚い。底部外面はヘラ切り痕跡を残し、それ以外にはナデを施す。

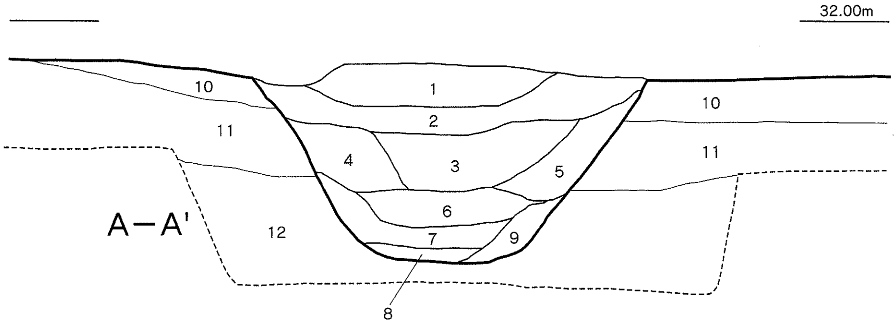
034は須恵器高坏ｂである。坏部と脚裾部を欠失し、残存高10.1cmを測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い褐色（7.5YR5/3）を呈する。

035は須恵器高坏ａである。坏部と脚裾部の1/2を欠失しており、残存高7.05cm、復元裾部径10.4cmを測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y6/1）を呈する。短脚を有し、器壁はやや厚い。裾端部は内側に屈折するエ類に相当するが、つくりは鈍い。

036は須恵器高坏ａである。坏部を欠失しており、残存高7.6cm、裾部径12.3cmを測る。胎土には微量の1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。裾端部は方形を呈し、内面にわずかに凹みが付く。エ類の範疇であるが、端部の三角形は小さい。

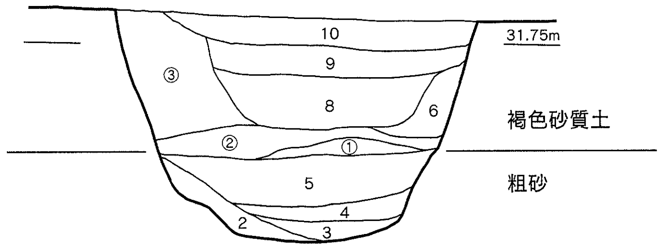
042は須恵器甕である。復元口径14.6cm、残存高7.4cmを測る。口縁部～頸部の1/3と胴部

SD001横断土層断面図

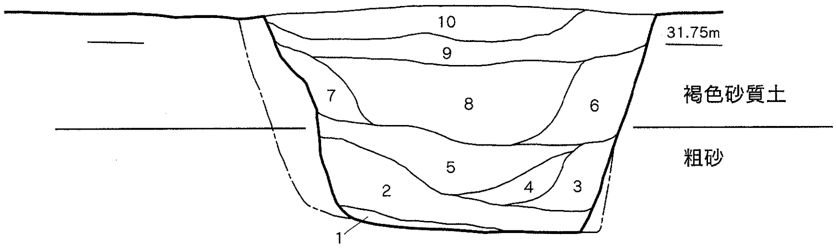


A−A'
1 黒褐色粘質土（10YR2/2）
2 黒褐色砂質土（10YR2/3）
微量の炭化物を含む。
3 黒褐色砂質土（10YR3/1）
微量の炭化物、土器細片を含む
4 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
5 にぶい黄褐色粗砂（10YR4/3）
6 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
7 褐灰色粘質土（10YR4/1）
6層に似る。砂粒を多く含む。
粘性強い。
8 泥炭土（10YR1.7/1）
9 暗褐色土（10YR3/3）
10 黒褐色砂質土（10YR2/2）
11 褐色砂礫（10YR4/4）
12 褐灰色粗砂（10YR4/1）

B−B'

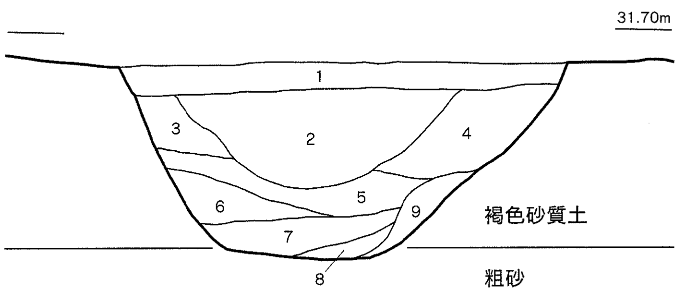


C−C'



B−B'、C−C'
1 明黄褐色粘質土（10YR6/6）
黒色土を含む。
2 暗褐色土（10YR3/3）
下層に遺物を含む。
3 黒褐色微粒砂（7.5YR3/2）
4 黒褐色微粒砂（7.5YR3/1）
5 黒褐色粗砂（7.5YR3/1）
6 褐色砂質土（7.5YR4/3）
微量の鈍い褐色土粒
(7.5YR5/3) を含む。
7 褐灰色土（7.5YR4/1）
鈍い褐色土粒
(7.5YR5/3) を含む。
8 灰褐色粘質土（7.5YR4/2）
上層に遺物を含む。
9 褐灰色土（7.5YR4/2）
硬質。
10 褐灰色土（7.5YR2/1）
砂が部分的に塊状に混じる。
① 黒色土（7.5YR2/1）
② 黒褐色砂質土（7.5YR3/1）
③ 灰褐色土（7.5YR4/2）
上層に比べて不純物が顕著。
黄褐色微粒砂塊を含む。

D−D'



D−D'
1 暗褐色土（10YR3/3）
2 混合土
焼土塊と地山塊が多く混じる。
3 褐灰色土（10YR4/1）
4 茶褐色土（10YR5/3）
5 褐灰色砂質土（10YR4/1）
微量の炭化物粒を含む。
6 黒褐色粘質土（10YR3/2）
7 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）
8 にぶい黄褐色砂（10YR5/3）
9 暗褐色砂（10YR3/3）
砂粒をゴマ塩状に含む。

Fig.14　SD001土層断面図（1/20）

上半の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、外面は灰色（N5/）、内面はオリーブ黒色（5Y3/1）を呈する。胴部は丸みを帯び球状を呈するものと思われ、口縁部で強く外反する。口唇部は玉縁状にやや肥厚させる。調整はナデを施す。

SD001出土遺物（Fig.16、PL.20～22・50）

023は土師器蓋c3エである。復元口径19.2㎝、器高3.9㎝、撮み径2.7㎝を測る。全体の1/3～1/4が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。撮みは宝珠状を呈する。

033は土師器高坏ａである。裾部の2/3のみが残存しており、残存高7.4㎝、裾部径13.2㎝を測る。胎土には微量の雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。短脚のものと思われ、裾端部は内側に屈折するエ類に相当する。

040は土師器甕である。破片資料で、残存高12.8㎝を測る。胎土には微量の雲母や0.5～1.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い赤褐色（5YR5/4）～黒褐色（5YR3/1）、内面は鈍い赤褐色（5YR5/4）を呈する。胴部はあまり張りがなく、口縁部のみ大きく外反させる。調整は、口縁部はナデ、胴部内面はケズリ、外面はタケハケを施す。

045は土師器甕である。復元口径13.7㎝、胴部最大径13.0㎝、器高10.25㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。胴部は球状を呈し、口縁部は肥厚し弱く外反する。調整は摩滅により不明瞭である。

616は黒色土器で、器種は不明である。底部のみが残存しており、残存高2.5㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黒色（5Y2/1）を呈する。高台部？は外側に強く屈曲しながら外反し、全体的な器形は不明である。見込みのみヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

025は須恵器壷蓋ａである。復元口径15.0㎝、器高2.95㎝を測る。全体の1/4が残存する。撮みは欠失する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。

018は須恵器蓋ｃ3アである。口径15.4㎝、残存高1.9㎝を測る。口縁部～天井部の2/3と撮みを欠失する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。

017は須恵器蓋ｃ3エである。口径12.55㎝、器高1.6㎝、撮み径1.7㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は暗灰色（N4/）、内面は灰色（N3/）を呈する。撮みは低い釦状を呈する。

016は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径13.7㎝、器高1.5㎝、撮み径1.65㎝を測る。口縁部～天井部の1/4が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は灰色(7.5Y6/1)、内面は灰色（N5/）を呈する。撮みは釦状を呈する。

006は須恵器坏ｃである。口径11.8㎝、器高3.45㎝、復元高台径8.1㎝を測る。口縁部の1/2を欠失する。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で灰色（7.5Y6/1）を呈する。調整はナデを施し、高台内は板状圧痕が残る。

004は須恵器坏ｃである。復元口径12.4㎝、器高3.3㎝、復元高台径7.6㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（N6/）を呈する。

005は須恵器坏ｃである。復元口径12.1㎝、器高3.9㎝、高台径7.45㎝を測る。1/3～1/2を欠失しており、反転して図示した。胎土は精良で、0.5～1㎜の砂粒を含む。焼成は良好で、オリーブ灰色（2.5CY5/1）を呈する。調整は丁寧にナデられており、見込みには重ね焼きの痕跡（?）がみられる。

009は須恵器坏ｃである。復元口径18.6㎝、器高5.8㎝、復元高台径11.15㎝を測る。全体

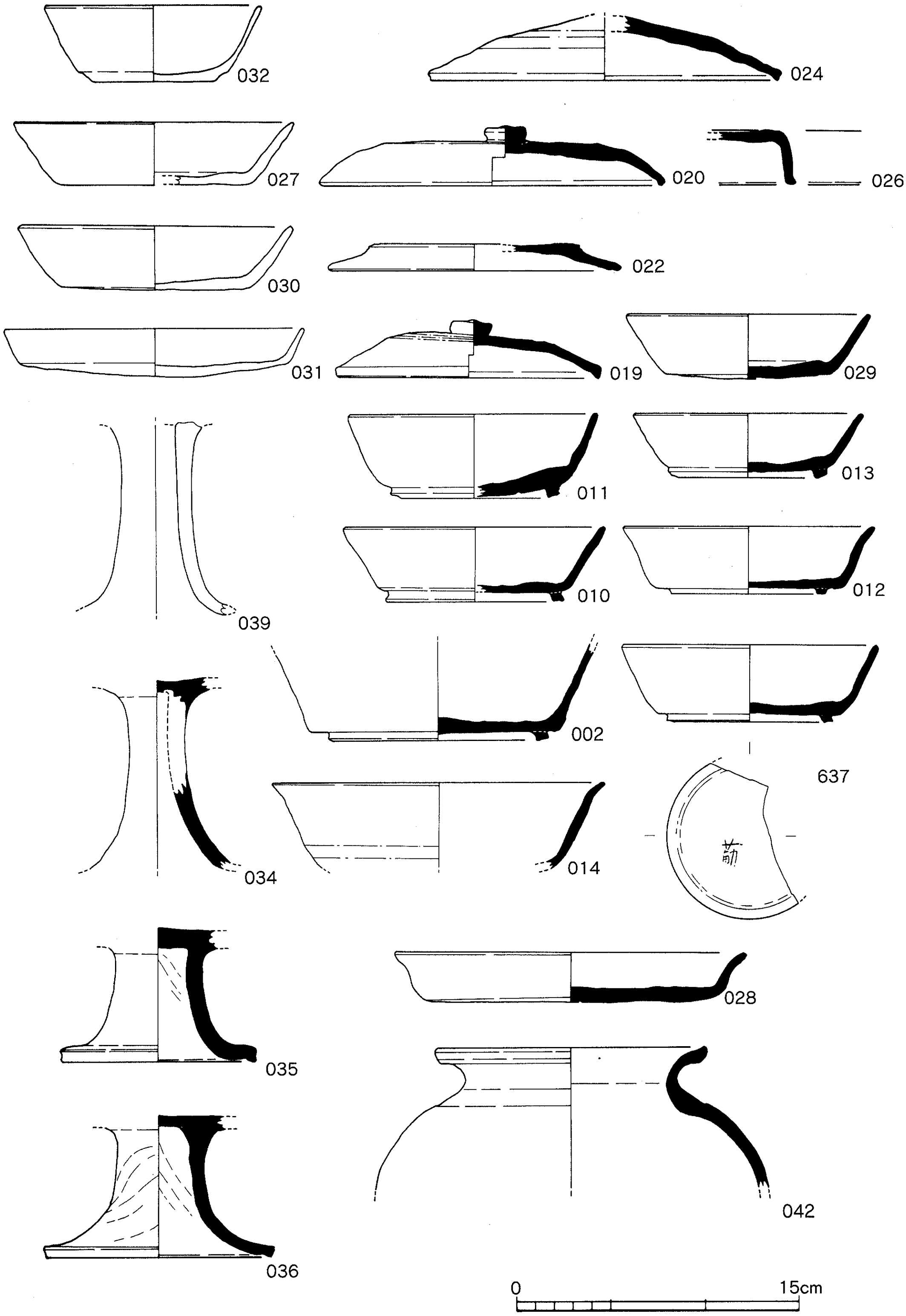


Fig.15　SD001上層出土遺物（1/3）

の1/3が残存する。胎土には0.5㎜程の砂粒を僅かに含む。焼成は良好で、灰色（6N/）を呈する。

008は須恵器坏ｃである。復元口径18.0㎝、器高5.7㎝、復元高台径10.95㎝を測る。口縁部～体部の1/4と底部の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は灰色（N6/）～暗灰色（N3/）、内面は灰色（N6/）を呈する。

001は須恵器坏ｃである。口径17.8㎝、器高5.55㎝、高台径12.0㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には微砂粒を含む。焼成は良好で、灰色（N6/）を呈する。

041は須恵器甕である。口径18.85㎝、残存高5.0㎝を測る。口縁部～頸部の2/3が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は不良で、灰赤色（2.5YR4/2）を呈する。口縁部は大きく外反させ、端部は角張り外方を向く。胴部は推定ではかなり張るものと推測される。調整はナデを施す。

038は須恵器壷である。底部～胴部下半の1/3が残存しており、残存高9.0㎝、復元高台径14.8㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。底部と胴部の境目付近に断面方形の高台部が斜めに貼付される。底部は凹んでいる。調整はナデを施す。

037は須恵器甕ｂである。復元口径20.3㎝、残存高11.7㎝を測る。口縁部の1/3と胴部の一部が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。胴部は球状をなすものが想定され、口縁部で短く外反し、口縁部形状は二重口縁をなす。調整は、頸部以上はナデ、胴部外面はタタキ、内面には青海波の当て具痕が残る。

SD001とSK088との接合資料（Fig.17、PL.20～22）

007は須恵器皿ｃである。復元口径23.0㎝、器高3.85㎝、復元高台径18.1㎝を測る。口縁部～体部の一部と底部の1/3が残存する。胎土には0.5～1㎜の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。

015は須恵器蓋ｃ3ウである。復元口径16.0㎝、器高1.8㎝、撮み径2.6㎝を測る。口縁部の2/3を欠失する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色（5Y7/1）を呈する。撮みは扁平な擬宝珠状を呈する。

003は須恵器坏ａである。口径17.6㎝、底径10.15㎝、残存高3.15㎝を測る。胎土には0.5～1㎜の砂粒を含む。焼成は良好で、オリーブ灰色（2.5CY5/1）を呈する。

179は須恵器皿ａである。破片資料で、復元口径20.4㎝、残存高2.1㎝を測る。胎土には微量の0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（N4/）～暗灰色（N3/）、内面は暗灰色（N3/）を呈する。調整は、ナデを施す。

612は須恵器横瓶である。復元口径6.2㎝、残存高15.2㎝を測る。口縁部～肩部の3/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、外面は黒色（N2/）、内面は暗灰色（N3/）を呈する。胴部は球状を呈するものと思われ、張りが強い。口縁部で外反し、口唇部は玉縁状に小さく肥厚させる。器肉は非常に薄い。調整は、口縁部内外面はナデ、胴部外面はタタキ後にナデ、内面はナデを施す。

430は緑釉陶器の碗または皿である。残存高1.0㎝。貼付の短い輪高台で、ハの字状に外に開く。畳付には小さな凹みがつく。焼成は軟陶で、胎土は白色で気泡が多く、砂っぽいものである。微量の黒色粒を含む。釉は全面施釉で、はっきりとした黄緑色を呈し光沢がある。剥落が著しい。450と近似した形状を呈するが、釉色と胎土に違いがある。胎土はこちらの方が粗い。

695は青白磁であり、器種は不明。破片資料であり、残存高1.2㎝を測る。胎土は純白で精良、釉は光沢があり、透明。細かい貫入が入っている。全面に施釉されており、端部のみ掻

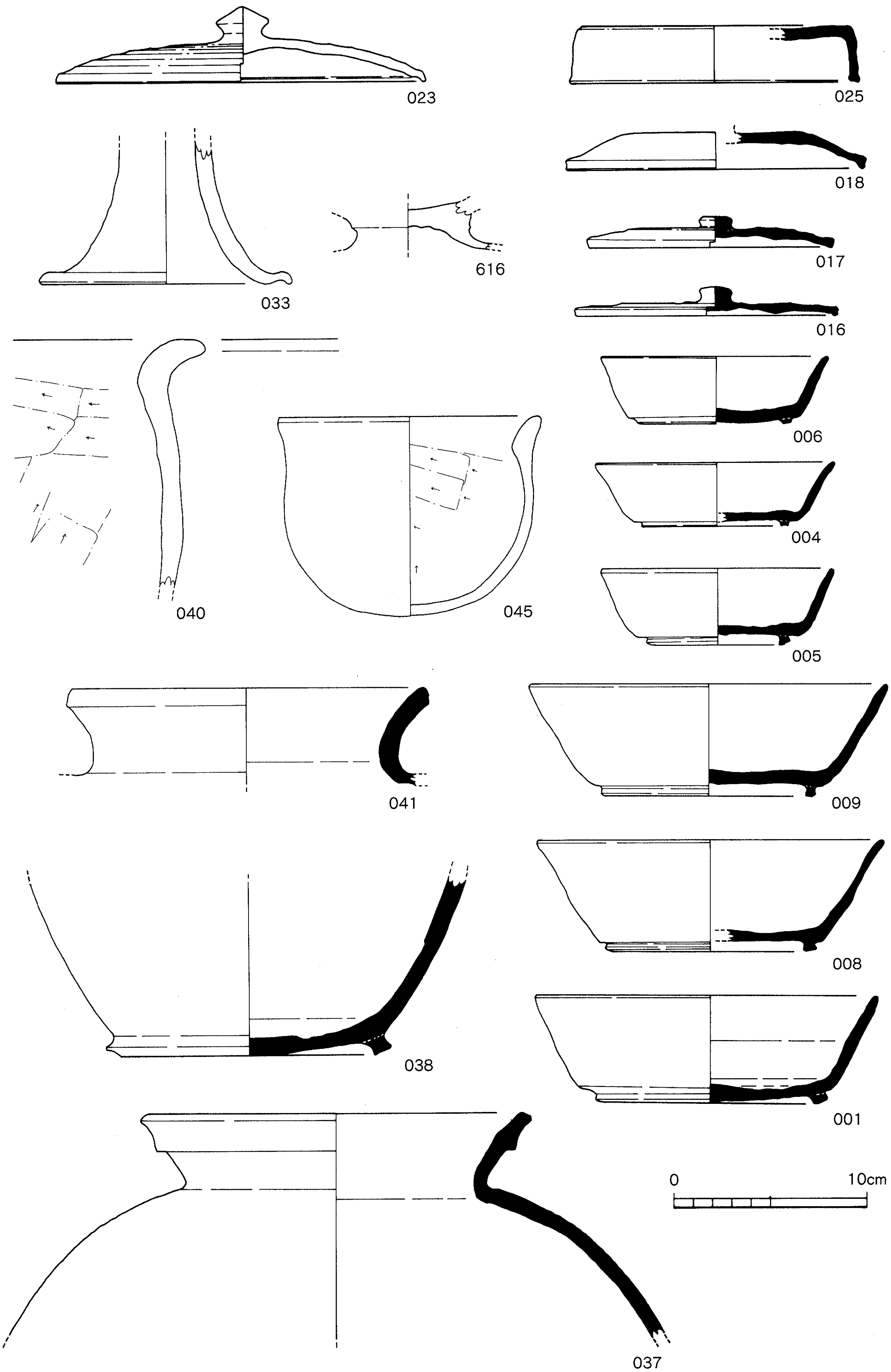


Fig.16　SD001出土遺物（1/3）

き取られている。

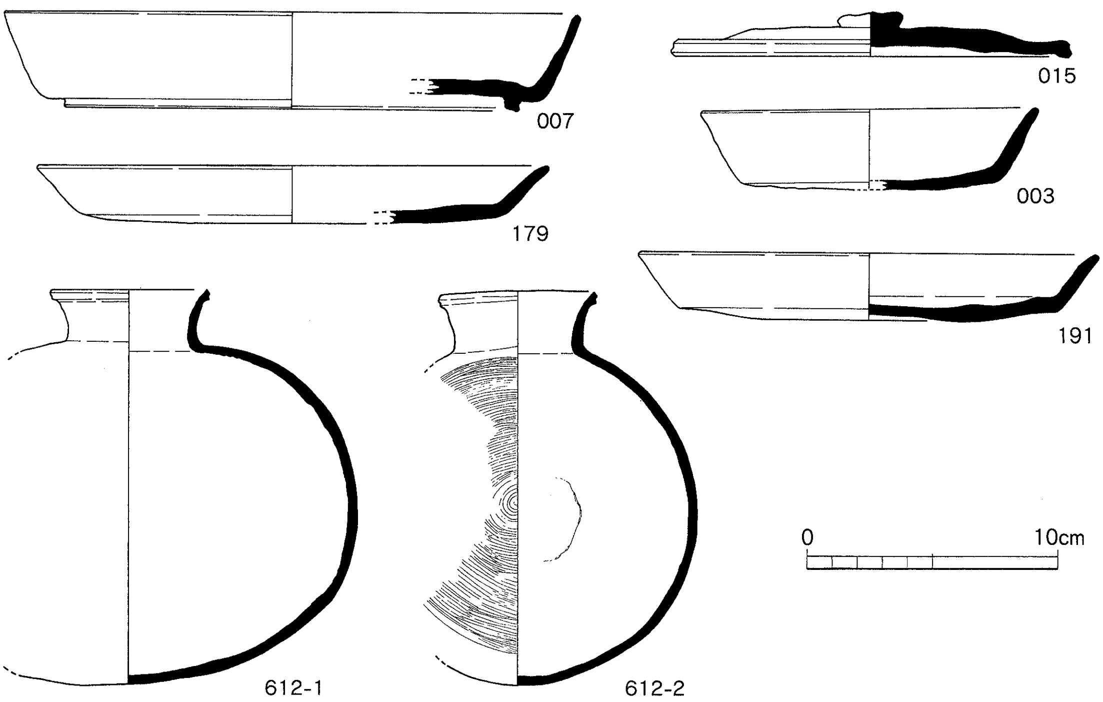


Fig.17　SD001とSK088の接合資料（1/3）

SD002（Fig.18、PL.4･5）

調査区の西端を南北に延びる溝で、北西に向かって折れ曲がる。断面は逆台形状を呈し、上幅2.0m･下幅1.0m･深さ1.0mを測る。主軸は幅があり、SD001より西偏する。遺物が僅少であったため時期は不明確であるが、状況的には南隣する条107次･150次調査で検出された溝に繋がるものと考えられる。布留併行期の在地の高坏脚部が1点出土しているが、混入品である可能性もある。条150次調査では古墳時代の土師器片が混じっていたとのことであるので、時期的には概ね近い。

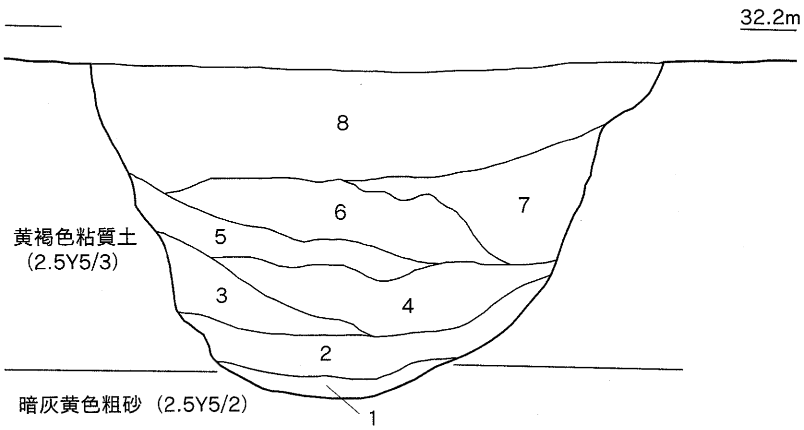
溝自体は黄褐色粘質土層を切り込んで穿たれており、床面付近で暗灰黄色の粗砂に達する。埋土の状況は、水成堆積による灰色砂層、粗砂と黒色土(泥炭土？)が互層をなしており、さらに、最下層は水生堆積によりかなり乱れた状態で、水路的な機能をもっていた可能性を物語る。

SD002出土遺物（Fig.19、PL.22・50）

046が1点出土したのみである。土師器高坏の脚部片で、復元裾部径16.65㎝を測る。長い脚部を有し、裾部は直線的にラッパ状に開く。坏部と脚部下半の2/3を欠失する。焼成は良く、胎土は微量の砂粒を含む。内面は褐灰色、外面は鈍い黄橙色を呈する。調整は摩滅のため不明瞭だが、脚部外面では刷毛目の後にミガキ、裾部内外面では刷毛目が残る。脚部から裾部に変わる付近に、穿孔が1ヶ所ある。坏部が欠失しているため時期は不明確だが、布留段階を下限として考えておきたい。

SD017（付図）

調査区の南東端にある。調査区に接しており肩部しか検出できなかったため、詳細は不明であるが、一応溝として扱った。深さ約20㎝を測り、断面形状は逆台形を呈する。



1	粗砂	黄褐色粘質土塊（2.5Y5/3）を含む。
2	黒色土（10YR2/1）	
3	黒色土（10YR2/1）	
4	黒色泥炭土	6層と似るが、泥炭土の比が高い。
5	混合土（5Y4/1）	灰色系粗砂（5Y4/1）＋泥炭土
6	黒色泥炭土	
7	黒褐色土（10YR3/1）	
8	混合土	黒色粘質土（5Y2/1）＋暗褐色砂質土（7.5YR3/3）

Fig.18　SD002土層断面図（1/20）

SD017出土遺物（Fig.20、PL.22・49）

638は土師器坏ａである。口径13.25cm、底径7.45cm、器高3.3cmを測る。完形品である。胎土には微量の雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。調整は全体にナデを施す。体部外面に逆位で墨書が確認でき、「言」と判読できる。

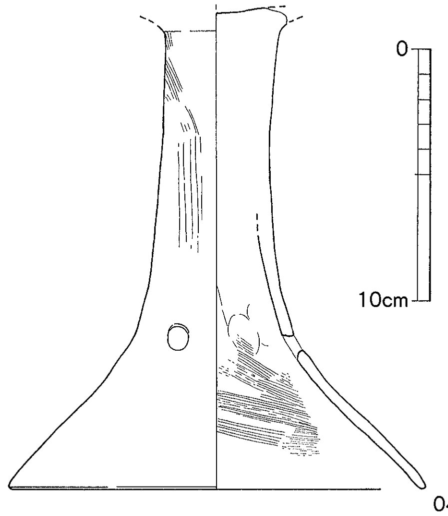


Fig.19　SD002出土遺物（1/3）

SD116（付図）

調査区の南東端に位置し、主軸方位をN－0°3′0″－Eに採り、ほぼ南北に走る。SD001の内側約6ｍ（芯心）を並行している。遺物が出土していないため、時期などの詳細については不明だが、道路上の整地層を切り込んでいることなどから、後出的な状況を想定するのが妥当であろう。断面形状は逆台形状を呈し、幅約0.5ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

SD115・117（付図）

SD115とSD117は本来同一の溝であったとおもわれる。削平により低い部分が残っている。主軸方位をN－0°14′0″－Eに採り、SD001とは軸を異にしている。むしろSD017と軸が近い。両者の距離は3～3.5mである。断面は逆台形状を呈し、幅約0.8m、深さ約0.3ｍを測る。

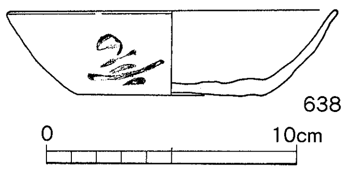


Fig.20　SD017出土遺物（1/3）

SD117出土遺物（Fig.21、PL.36）

614は瓦製品である。瓦を転用した製品で、機能は不明。縦2.7cm、横2.6cm、厚さ2.05cmのほぼ立方体を呈する。胎土には微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。1面のみ布目痕を残すが、他の面は丁寧に整形している。

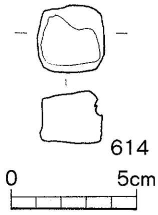


Fig.21 SD117 出土遺物（1/3）

SD218（付図）

調査区東北端に位置する。連続していないが、一応溝と分類した。幅約1.0m、深さ約0.3mを測り、非常に浅い。

SD218出土遺物（Fig.22、PL.38）

327は土師器椀である。復元口径15.2cm、器高6.3cm、高台径8.4cmを測る。底部は完存、口縁部～体部の1/4が残存する。胎土には雲母・1mm程の砂粒を含む。焼成は不良で浅黄橙色（10YR8/3）～褐灰色（10YR6/1）を呈する。体部は緩やかに丸みを帯び、口唇部は丸くおさめる。底部外面も同様に丸みをもち、短く丸い高台部をハの字状に貼付する。摩滅のため調整は不明瞭であるが、見込みに黒斑が確認できる。

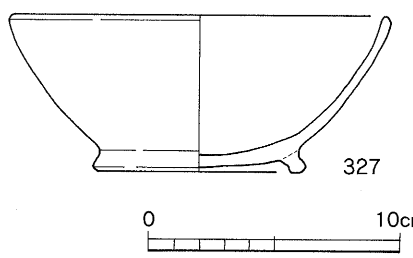


Fig.22　SD218出土遺物（1/3）

5)SE（井戸）

SE012（Fig.23、PL.9）

SD001（朱雀大路西側溝）を切る遺構である。円形のプランを呈し、径1.95～2.0m、深さ1.25mを測る。やや浅い点が気になるが、砂層まで穿たれている点や井戸枠の痕跡が分層できることから、井戸と分類した。

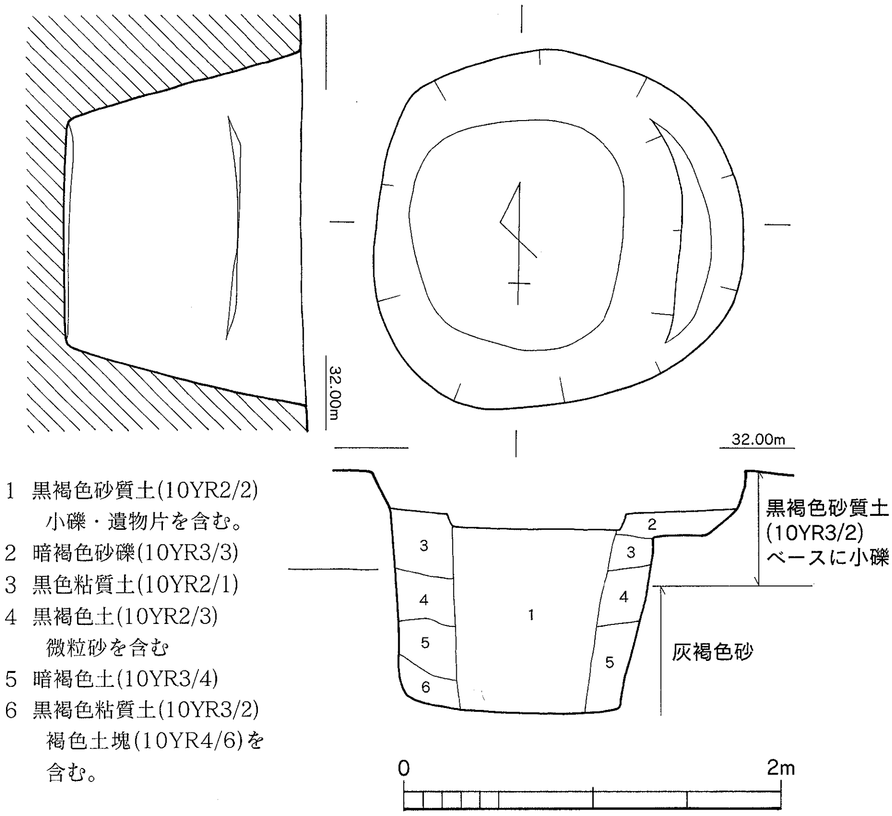


Fig.23　SE012実測図（1/40）

SE012出土遺物 (Fig.24、PL.23・50・51)

073は土師器坏ｄである。復元口径12.2㎝、復元底径7.3㎝、器高3.15㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色(5YR6/6)を呈する。調整はナデを施し、底部外面にはケズリ痕をそのまま残す。

077は土師器坏ａである。復元口径12.6㎝、底径7.1㎝、器高3.7㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には角閃石・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切りで、板状圧痕が残る。それ以外はナデを施す。器肉は薄い。

076は土師器坏ａである。口径11.3㎝、底径6.75㎝、器高3.3㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒・微粒砂から㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

074土師器坏ｄである。復元口径13.2㎝、底径6.4㎝、器高2.85㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。調整は、体部中位以下はヘラケズリ、それ以外はナデを施す。

078は土師器椀である。復元口径13.2㎝、器高6.95㎝、復元高台径8.4㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。体部は丸みを帯び、ハの字状に開いた高台部が貼付される。調整はヨコナデを施す。

084は土師器高坏である。復元口径22.2㎝、残存高2.7㎝を測り、脚部を欠失する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。

083は土師器甕である。復元口径19.4㎝、復元胴部最大径16.6㎝、残存高9.25㎝を測る。口縁部～体部の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。胴部は緩やかに丸みを帯びるが張りは弱く、口縁部は強く直線的に外反する。調整は、胴部内面はケズリ痕をそのまま残し、口縁部内面は横方向の刷

毛目、外面は縦方向の刷毛目を施す。

079は黒色土器A類椀である。復元口径15.4cm、残存高4.6cmを測り、口縁部～体部の1/2が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い赤褐色（5YR5/4）を呈する。体部は丸みを帯びる形状を有し、調整は、体部内面は横方向のミガキ、下位は不定方向のミガキ、体部外面はヨコナデを施す。体部外面には煤が付着している。

080は黒色土器A類椀である。口径15.5cm、器高5.1cm、高台径8.3cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は浅黄橙色（10YR8/4）～橙色（7.5YR7/6）、内面は黒色（10YR2/1）を呈する。形状は直線的に立ち上がる体部形態を有し、底部と体部の境目付近に短い高台部をハの字状に貼付する。調整は、内面は丁寧なヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

082は須恵器壷である。残存高6.4cm、復元高台径15.2cmを測り、高台部のみ1/3が残存する。胎土には微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）を呈する。小片であるため詳細は不明だが、胴部はほぼ直線的に立ち上がるものと推測される。底部と胴部の境目付近に長く外開きの高台部がハの字状に貼付される。端面は方形をなす。調整はナデを施し、内面には煤が付着している。

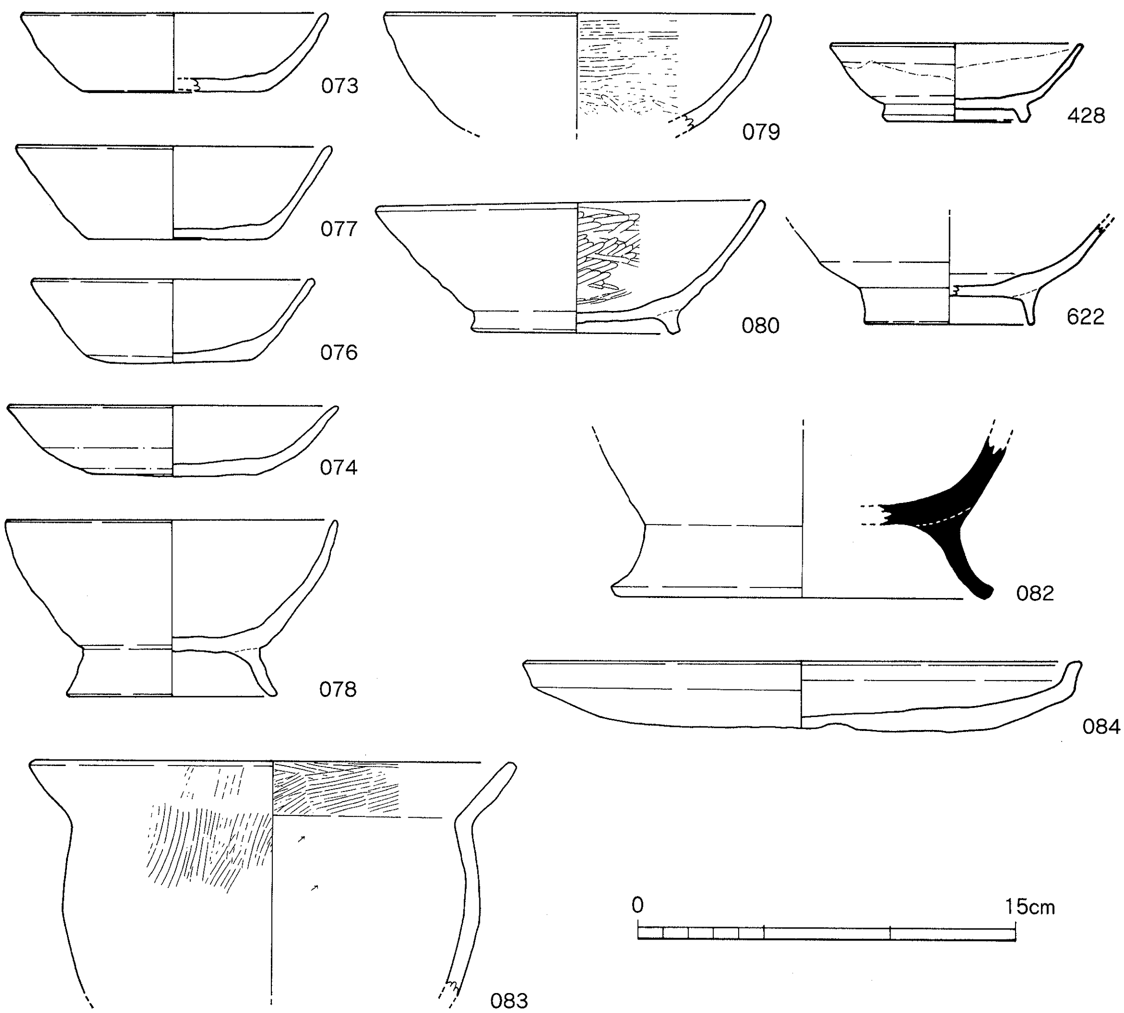


Fig.24　SE012出土遺物（1/3）

622は灰釉陶器の碗である。残存高4.0㎝、高台径6.8㎝。高台～体部中位までの破片で、復元して図示した。胎土は灰色で気泡が多く、白色粒と黒色粒を多く含んでいる。焼成はあまく、内部は生焼けである。高台はやや高めで外に開くもので、見込み部分は一段凹む。体部には中位に弱い屈曲を有し、施釉はなされていない。調整は回転ヨコナデである。

428は灰釉陶器坏である。復元口径10.0㎝、器高3.1㎝、高台径5.8㎝を測る。口縁部を欠失する。猿投産の灰釉陶器で、O53古期に相当する。体部はほぼ直線的で、丸みは下位にある。高台部は丸みを帯びたものがハの字状に付される。胎土は精緻で軟質、色調は灰色を呈する。釉は漬け掛けで体部中位以上のみ施される。

SE026（Fig.25、PL.10）

調査区中央のやや南寄りで検出された大形の井戸である。プランは直径3.8～4.0ｍのほぼ円形を呈し、深さ2.6ｍを測る。井戸の構造は確認できなかったが、素掘りの井戸である可能性がある。土層の状況から、埋没には大きく３単位があり、レンズ状の純堆積を呈する。

SE026出土遺物（Fig.26、PL.23・24・51・52）

130は土師器椀である。体部下半～高台部の1/4が残存し、残存高4.6㎝、高台径9.1㎝を測る。胎土には雲母・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/4）～橙色

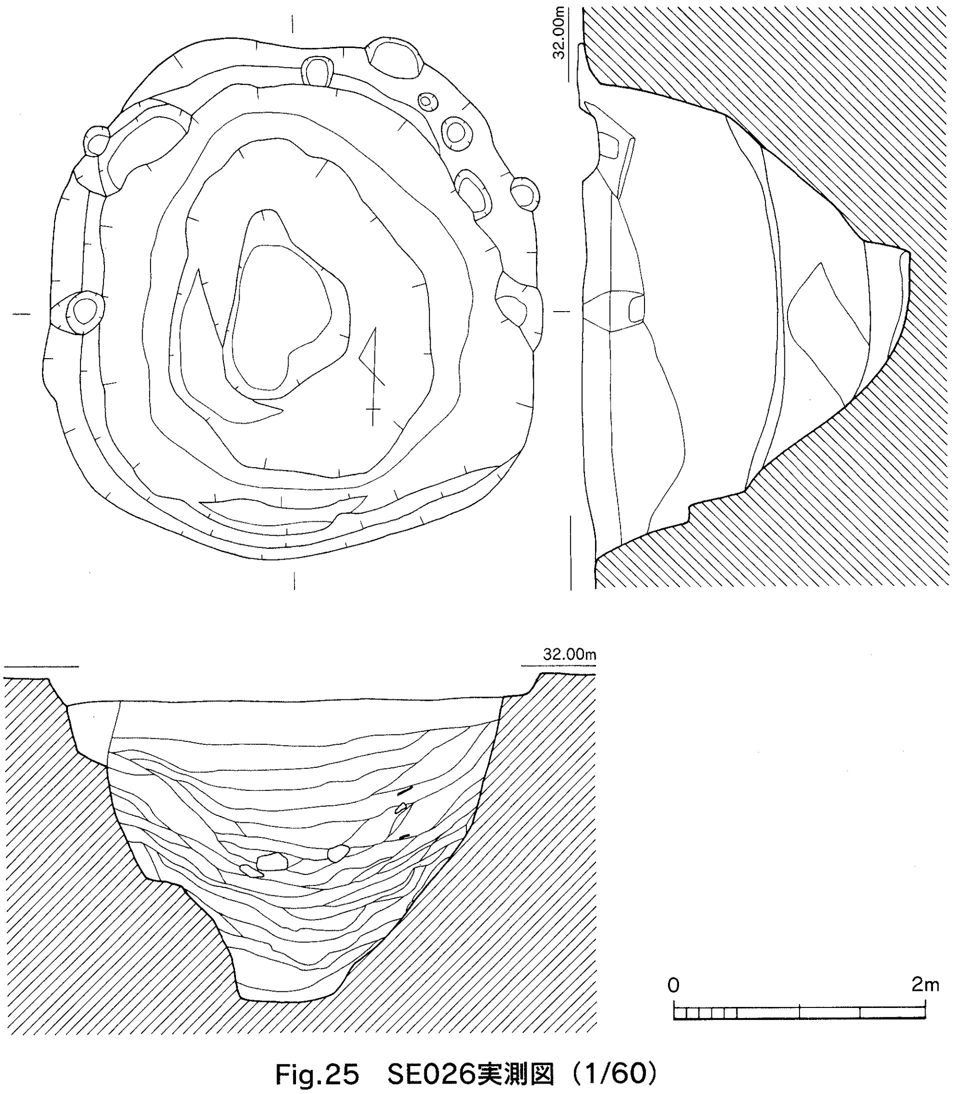


Fig.25　SE026実測図（1/60）

(5YR6/8) を呈する。直線的に立ち上がる体部形態を有し、底部と体部の境目付近に短い高台部がハの字状に貼付される。端面は丸みを帯びる。調整はナデを施す。

129は土師器皿ａである。復元口径17.6cm、復元底径14.0cm、器高2.25cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色 (5YR7/6) を呈する。底部は平坦だが底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、体部はそのまま丸みを持つ。調整は、体部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部内外面はナデの後に回転ヘラミガキを施す。

131は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径14.0cm、残存高1.7cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～4mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色 (N6/) を呈する。天井部は低いが丸みを帯びる。口縁部は小さいがしっかりとした三角形状を呈し、イ類に該当する。調整はナデを施す。撮み部は欠失する。

138は須恵器蓋ａ4である。復元口径14.0cm、器高1.5cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色 (10Y4/1) を呈する。天井部は低く平坦をなし、体部との境目は明瞭である。口縁部のつくりは丸みを持ち鈍くなる。調整はナデを施す。

133は須恵器坏ａである。復元口径13.4cm、復元底径9.4cm、器高3.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂から1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色 (5Y6/1) を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが、体部下位に丸みを有し、体部は直線的に立ち上がる。底部は歪みが大きい。調整はナデを施す。

134は須恵器坏ｃである。復元口径14.1cm、器高4.75cm、復元高台径8.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色 (2.5Y6/1) を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、そのやや内側に断面方形の小さな高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

136は須恵器坏ｃである。復元口径16.9cm、器高5.05cm、復元高台径11.1を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色 (10Y6/1) を呈する。底部と体部の境目付近に断面方形の高台部が貼付され、畳付は斜めになる。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

139は瓦器？椀である。破片資料であり、残存高1.8cm、復元高台径6.8cmを測る。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は不良で、灰白色 (7.5Y7/1) を呈する。小片であるため詳細は不明だが、丸みを帯びる体部形態を有するものと思われる。見込みはわずかに凹んでいる。高台部は丸みを帯び、小さな断面三角形状のものを貼付する。調整は摩滅により不明瞭である。

598は須恵器壷ｃである。破片資料であり、残存高5.0cmを測る。恐らくは壷と思われるが小片であるため、図面の傾き・位置は不確実である。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色 (N4/)、内面は灰色 (N6/) を呈する。胴部には断面方形の突帯が貼付され、その上に耳部が貼付される。耳部は縦に引き出された不整形をなす。

132は白磁小皿II－1aである。復元口径10.5cm、器高3.1cm、高台径4.5cmを測る。低くて厚い高台部を有し、端面はやや外側を向く。体部下位はやや丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部は弱く外反する。体部中位には段が2ヶ所にある。胎土は灰白色で硬質、微量の黒色粒を含む。釉は半透明で厚く施され、貫入が多い。体部下半以下は露胎となる。口縁部内面は釉が厚く溜り状になる。

696は白磁碗Ⅳ－2a類？である。体部が欠失しており、残存高3.4cm、高台径6.4cmを測る。見込み周縁には沈線状の段が入り、高台部は断面逆台形の形状を呈する。高台内の削りが粗

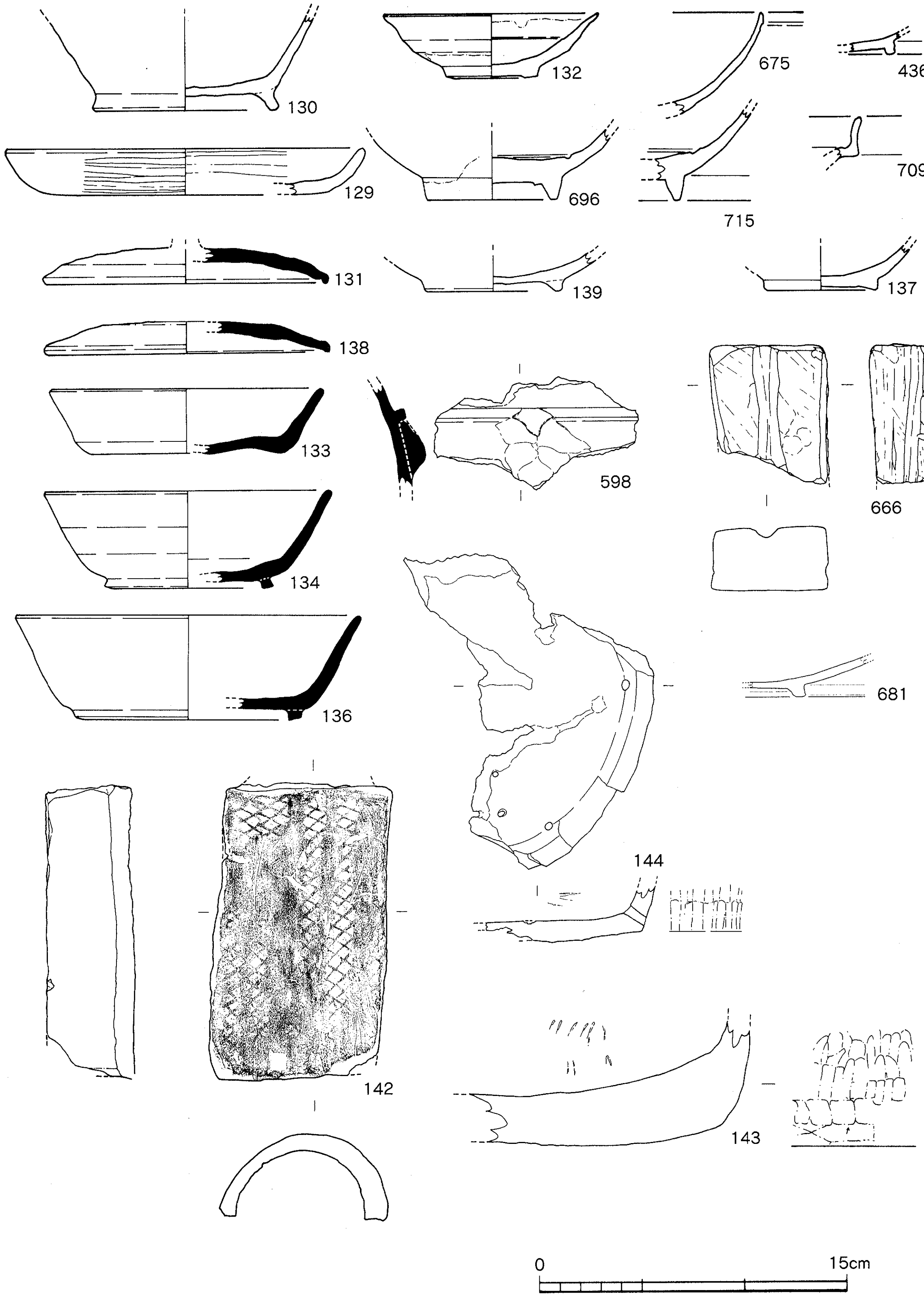


Fig.26　SE026出土遺物（1/3）

く、痕跡をそのまま残す。胎土は淡灰色を呈し、気泡があり粗い。黒色粒を多く含む。器表面の荒れは質の悪さに起因していると思われる。釉は透明釉を厚く施し、器表面は気泡や凹凸が多く見られる。高台部のみ露胎となる。

715は白磁碗Ⅴ類である。高台部のみの破片資料であり、残存高4.4cmを測る。見込み周縁に沈線状の段を有し、高台部は低い逆台形状を呈する。胎土には微量の黒色粒を含み、気泡が見られ、粗い。灰色を呈する。釉は乳白色を呈し、高台脇以下は露胎となる。器表面には気泡が多く、凹凸が顕著である。

681は磁州窯系白釉陶器皿の底部片である。残存高2.0cm。胎土は乳白色で不純物が多く、気泡が認められる。釉下には化粧を施している。釉は光沢がある透明釉でムラがあり、細かい貫入が多い。畳付のみが露胎となり、楕円形の目跡が1ヶ所に残っている。

709は青磁壷である。残存高2.2cm、立ち上がり高2.0cmを測る。盤口壷の口縁部で、初期高麗である。胎土は灰白色で緻密、釉は青みを帯びた緑色を呈する。

137は灰釉陶器の碗（山茶碗）である。残存高2.2cm、高台径5.4cm。底部は糸切り痕を残し、断面三角形状の鈍く低い高台を貼り付けている。胎土は灰白色で精良、焼成は良好である。体部の調整はヨコナデで、釉は体部内外面と高台まで施釉される。見込みは磨られている。12世紀の猿投産とのご教示を齋藤孝正氏よりいただいた。

666は砥石である。下端部のほとんどを欠失する。形状は扁平な長方体を呈するものと思われる。石材は砂岩である。使用面は4面とも使用している。そのうちの2面には幅0.7～1cm程の溝が刻まれている。

144は滑石製石鍋である。底部のみの破片資料で、残存高5.65cmを測る。底部の器肉は2cm程である。体部は直立して立ち上がり、底部と体部の境目は明瞭である。器肉はほぼ一定である。破片であるため詳細は不明だが、40cm程の底径が推測され、かなり大きなものといえる。ケズリ痕は内面は不明瞭だが、外面は細く短冊状に規則的に施されている。底部と体部の境目に斜めに2ヶ所、それ以外に2ヶ所の4ヶ所に穿孔があるが、性格は不明である。

143は滑石製石鍋である。底部のみの破片資料で、残存高6.1cmを測る。底部の器肉は2.2～3.5cmと厚く、体部は1.2cm程に急激に薄くなる。底部と体部の境目は丸みを帯びる。内外面ともにケズリ痕が残される。単位が非常に細かく、丁寧なつくりであるが単位はまばらである。

142は丸瓦のほぼ完形品である。胎土には1～6mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（10YR8/1）を呈する。残存長28.6cm、幅17.9cm、高さ8.7cm、厚さ2.2cmを測る。端面はヘラにより面取りがなされる。調整はタタキ後にナデを施し、内面には布目痕が残る。内面には煤が付着している。

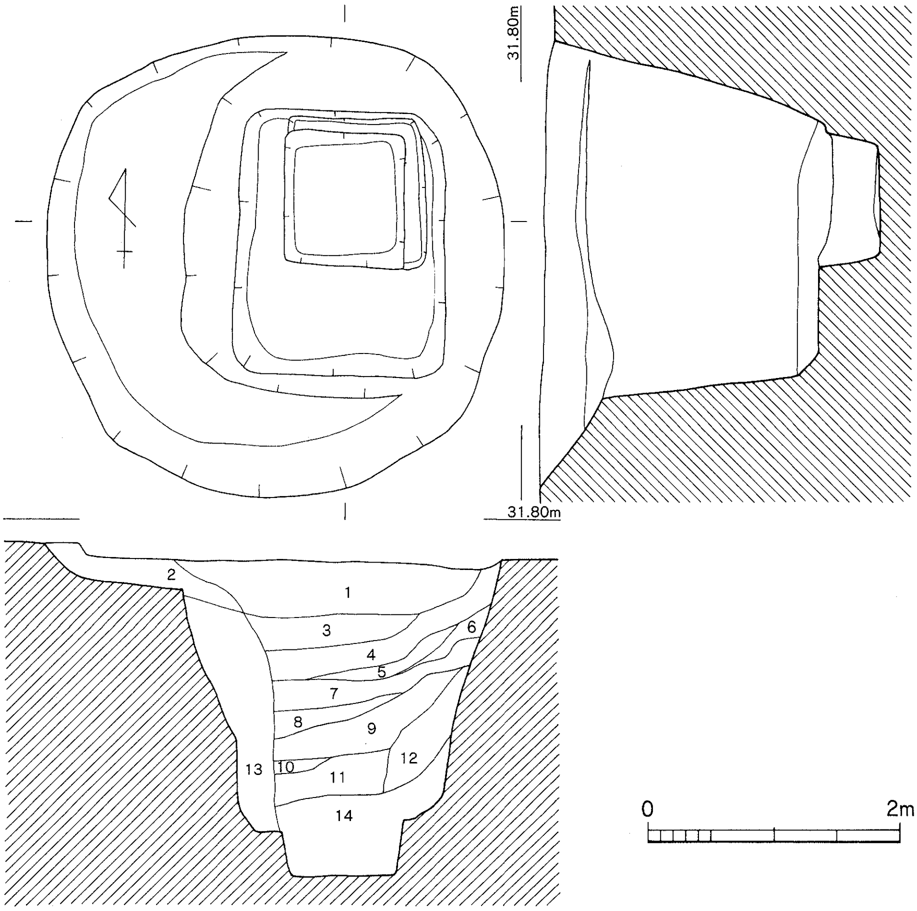
SE026上層出土遺物（Fig.26、PL.52）

675は白磁碗Ⅱ類の体部片である。Ⅱ－1類かと思われる。残存高5.0cm。体部は丸みをもち、口縁部が小さな玉縁状になる。胎土は淡灰色でⅡ類にしては精良で硬質である。釉は乳白色に薄く施釉されており、細かい貫入が入っている。体部下半以下は露胎となる。

SE208（Fig.27、PL.11）

調査区の北東隅に位置し、SD001(朱雀大路西側溝)を切っている。SE012と同様に朱雀大路の変遷を考える上で注目される遺構である。 径3.6m、深さ2.65mを測り、プランは円形を呈する。井戸枠は木組みのものと推測されるが、上半部の土層は大きく乱れており、抜き取られているものと考えられる。床面付近のみ、方形の枠を埋設したと見られる状況が見受けられる。

土層の状況は13層のみが井戸枠の裏込め土と考えられ、粘質土ベースの混合土が充填される。井戸枠は北側に向かって抜き取られていると思われ、14層以外は廃絶時以降の埋没土であると考えられる。



土層番号	色番号	土質	備考
1	10YR3/1	混合土	最終埋没土。微量の焼土、炭化物を含み、遺物と礫が多く混じる。
2	10YR3/1	混合土	黄褐色塊を多く含む。
3	7.5YR2/1	黒色土	
4	10YR1.7/1	黒色土	
5	10YR3/1	黒褐色土	
6	10YR4/1	褐灰色砂質土	
7	10YR1.7/1	混合土	
8		黒色泥炭土	
9	10YR2/2	混合土	軟らかい。
10	10YR4/1	褐灰色砂質土	
11	10YR1.7/1	黒色土	下層（14層）より質が悪い。
12		黒色土	粘質が強く、極めが細かい。
13	10YR3/3	混合土	（10YR3/3）ベースに地山＋（10YR4/1）＋黒色土が混じる。
14		黒色泥炭土	極めが細かく、炭化物を含む。

Fig.27　SE208実測図（1/60）

SE208出土遺物（Fig.28、PL.24・25・49・52・53）

236は土師器坏ａである。底径8.65cm、残存高2.95cmを測る。底部の2/3が残存する。胎土には赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。底部はやや丸みを持ち、体部は直線的に立ち上がる。底部と体部の境目は明瞭である。調整はナデを施す。

237は土師器坏ａである。口径13.3cm、底径8.3cm、器高3.4cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

238は土師器坏ａである。復元口径13.0cm、底径8.0cm、器高3.2cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

240は土師器坏ａである。口径13.0cm、底径7.75cm、器高3.45cmを測る。完形品である。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、体部はやや丸みを帯びながらも直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。体部外面上位に焼成後の二次穿孔が3ヶ所ある。位置は120°ずつ3等分される。口縁部付近に煤の付着が認められる。

229は土師器椀である。全体の1/3が残存しており、残存高3.6cm、復元高台径7.4cmを測る。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。体部は欠失しているが、直線的に立ち上がるものと思われる。見込みは平坦で、高台部は細く短いものがハの字状に貼付される。調整はナデを施す。

230は土師器椀である。復元口径15.7cm、器高5.8cm、復元高台径9.4cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）を呈する。直線的に立ち上がる体部形態を有し、見込みは平坦である。高台部は細長く、ハの字状に貼付される。調整は摩滅により不明瞭である。

239は土師器皿ａである。復元口径13.6cm、復元底径10.0cm、器高1.5cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は丸みを帯び不明瞭である。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。板状圧痕が残る。

234は土師器坏ａである。復元口径14.0cm、底径9.6cm、器高2.3cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微量の赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈する。底部はやや丸みを帯び、体部との境目も不明瞭で、そのまま体部に接続される。口縁部は弱く外反する。調整はナデを施す。

603は土師器壷である。残存高9.9cm、高台径10.7cmを測る。胴部の中位以上を欠失する。胎土には赤褐色粒・1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（5YR6/6）、内面は鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。胴部は直線的に立ち上がり、高台部はやや長めのものがハの字状に開きながら貼付される。端部は外方に弱く引き出す。胴部内面には煤が付着している。

604は土師器小坏？口径8.1cm、底径6.1cm、器高3.9～4.2cmを測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には微量の雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部は平坦で、周縁でやや上がる。体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で垂直に屈折する。調整はナデを施す。

233は土師器甕である。復元口径26.0cm、胴部最大径21.7cm、残存高15.2cmを測る。胴部上位以上の1/4が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）

を呈する。胴部は揺るやかに丸みを帯びて立ち上がり、口縁部で強く直線的に外反する。器肉は薄い。調整は、胴部外面は刷毛目、内面はケズリ後ナデ、口縁部はナデを施す。

227は黒色土器A類椀である。復元口径19.8cm、器高7.0cm、復元高台径9.0cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（7.5Y7/6）、内面は黒色（10Y2/1）を呈する。直線的に立ち上がる体部形状を呈し、見込みは凹む。断面逆台形の小さな高台部が貼付される。調整は、外面はナデ、内面は微細な手持ちヘラミガキを施す。

630は須恵器コップ状製品である。残存高6.05cm、高台径5.35cmを測る。体部下半の1/3が残存する。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。体部はやや膨らみをもちながら直立して立ち上がり、底部と体部の境目付近に断面方形の高台部が貼付される。平城京の事例から推測すると、口縁部は体部からそのまま直立するものと思われる。調整は全体にナデを施す。高台内中央に墨書が確認でき、「㋹」という記号であると判読できる。性格は不明である。

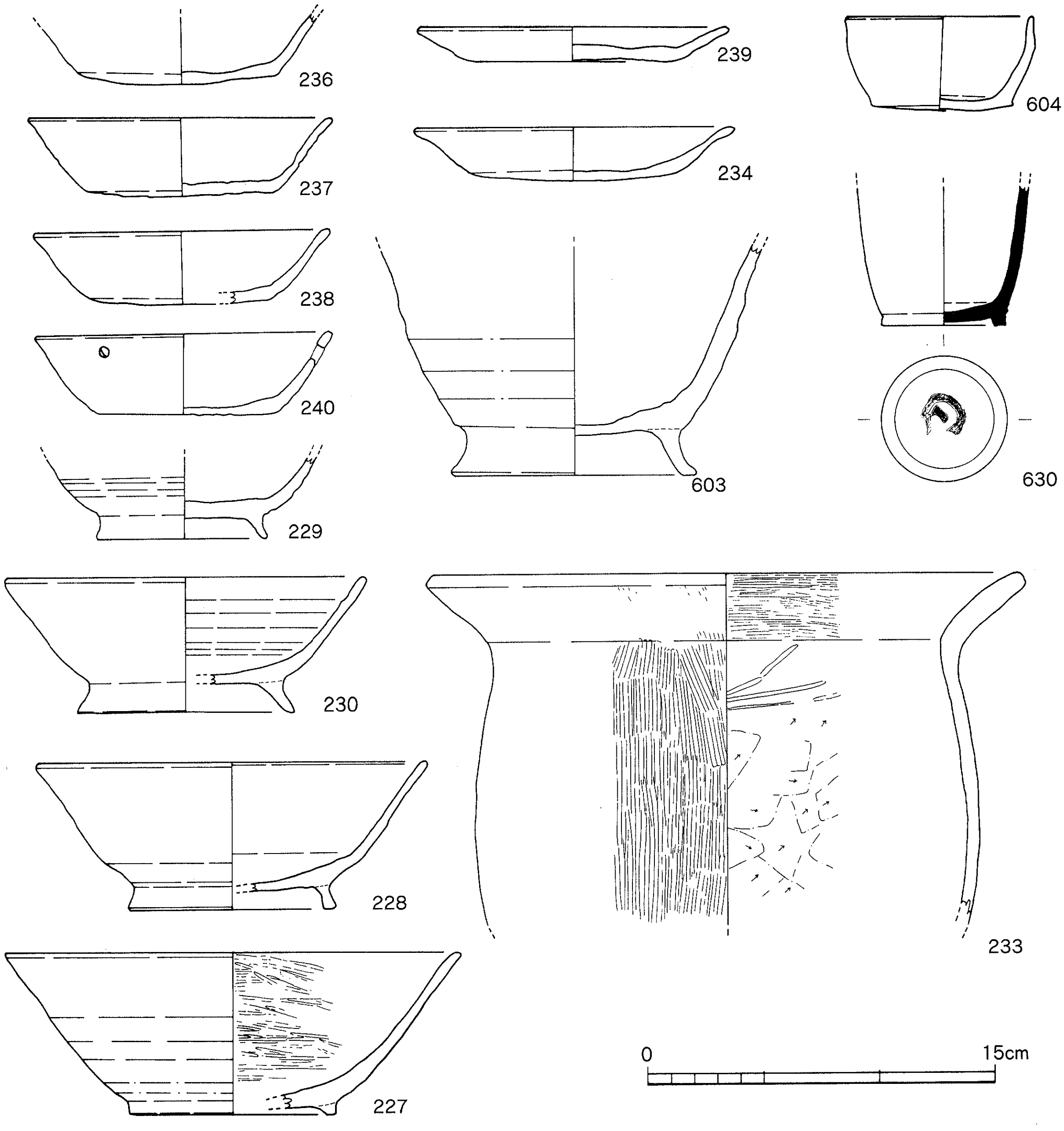
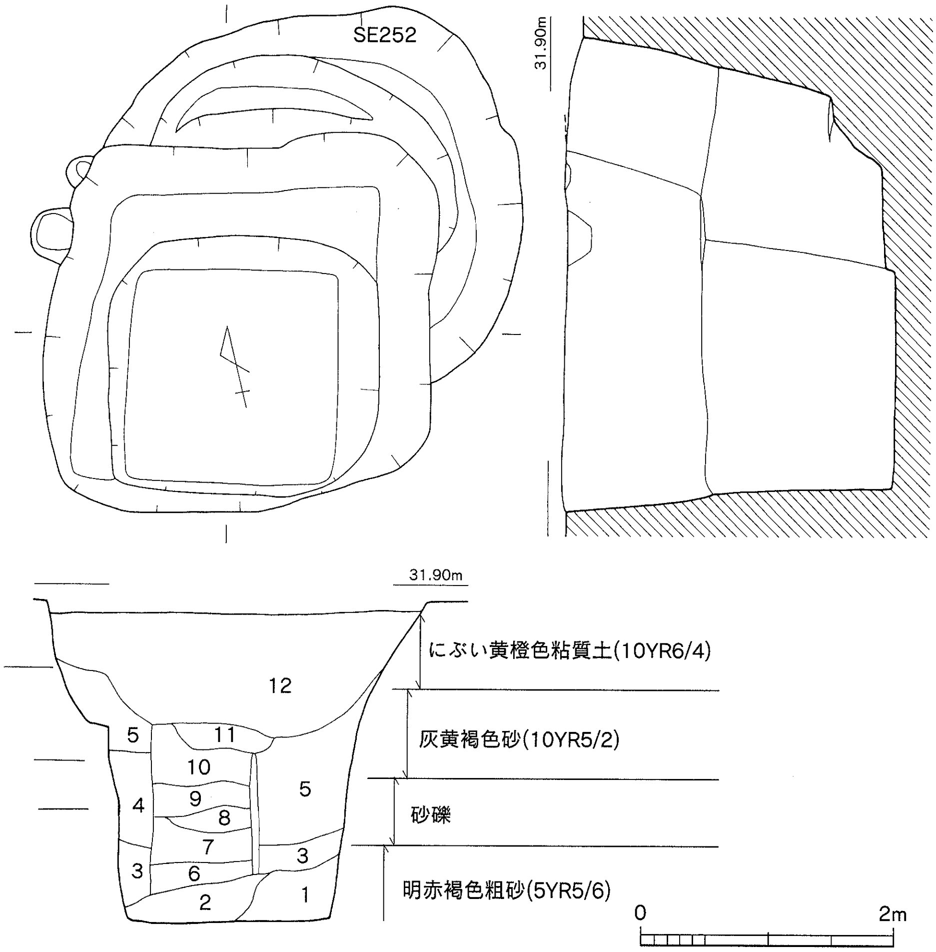


Fig.28　SE208出土遺物（1/3）

SE210（Fig.29、PL.12）

調査区の中央よりやや東側に位置している。SE252を切る。隅丸方形のプランを有し、一辺の径3.0m、深さ2.6mを測る。二段掘り。井戸枠の痕跡を有し、検出面から1.5～1.8mで粗砂層に達している。比較的浅いが井戸と考えて良いと思われる。

層位については、3～5層は、井戸枠の裏込め土で粘質土ベースの混合土が充填されている。2層は泥炭質の黒色粘質土であり、井戸最下層の埋没土であると判断される。最上層の12層は大きな単位で埋まっているが、焼土が多く出土している。井戸枠の抜き取り後の最終埋没土と考えられる。



土層番号	色番号	土質	備考
1	5YR5/3	粗砂	(5YR5/3) 粗砂＋ (10YR5/1) 粗砂
2	10YR3/1	黒色泥炭土	
3		混合土	(10YR4/1) 粘質土＋ (10YR3/2) 砂＋地山粒
4		混合土	(10YR4/6) 粘質土＋ (10YR3/3) 土が5:5
5	10YR2/3	黒褐色土	(10YR2/3) ベースに (10YR4/6) 粒を含む。
6	10YR2/2	黒褐色土	(10YR2/2) ベースに (10YR4/6) 塊を含む。
7	10YR4/1	褐灰色砂質土	
8	10YR4/2	灰黄褐色土	締まりが悪い。
9	10YR3/2	黒褐色砂質土	(10YR3/2) 粘質土ベースに微量の地山粒を含む。
10	10YR3/3	暗褐色土	(10YR3/3) 土ベースに微量の地山粒を含む。
11	10YR3/3	暗褐色土	(10YR3/3) 土ベースに地山塊が混じる。
12	10YR3/3	暗褐色土	(10YR3/3) 土ベースに (10YR5/6) 粒多く混じる。遺物、礫が多い。
13	10YR4/2	微粒砂	

Fig.29　SE210実測図（1/60）

SE210出土遺物（Fig.30、PL.25･26･53）

257は土師器坏ａである。復元口径10.6cm、底径7.0cm、器高3.1cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は屈曲を有し、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

261は土師器皿ａである。復元口径15.6cm、復元底径11.2cm、器高1.85cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～4mm程の砂粒を含む。焼成は良く、黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

262は土師器皿ａである。復元口径17.0cm、復元底径13.3cm、器高1.75cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/8）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はヘラミガキを施す。底部外面には煤が付着している。

260は土師器皿ａである。口径16.7cm、底径13.0cm、器高1.75cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部外面はナデ、外面は回転ヘラミガキを施す。

258は土師器皿ａである。口径16.4cm、底径12.4cm、器高1.95cmを測る。口縁部のみ一部が欠失する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部はやや丸みを帯びるが、体部との境目は明瞭である。体部は直線的に開く。調整はナデを施す。

268は土師器鉢である。口径22.5cm、器高11.0cmを測る。口縁部から胴部にかけて残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。底部～胴部にかけては丸みを帯び、プロポーションは半球形を呈する。口縁部は弱く内傾し、一部分が片口になる。調整はナデを施すが、底部外面はケズリを残す。片口部の周辺は指頭痕を残す。

263は土師器蓋ｂである。復元口径20.0cm、器高2.55cm、撮み径5.0cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。天井部～体部にかけては丸みを帯び、口縁部は丸くおさめる。撮み部は輪状を呈する。調整は、天井部外面はヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

253は土師器坏ｃである。底部のみ残存しており、残存高4.1cm、高台径10.5cmを測る。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に貼付され、丸みを帯びた断面長方形でハの字状になる。体部は直線的に立ち上がる。調整は、体部外面はケズリ痕をそのまま残し、内面はヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

264は須恵器蓋である。復元口径19.0cm、残存高2.25cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。天井部～体部にかけては丸みを帯び、口縁部は小さいがしっかりとした三角形状を呈する。調整は、天井部外面はヘラケズリ、それ以外はナデを施す。

266は須恵器蓋である。復元口径19.6cm、残存高1.75cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。

天井部は平坦をなし、体部との境目は丸みを帯びる。口縁部で弱く屈曲し、裾部は三角形

があまり肥厚せずに内面にわずかな凹みをつける。調整は、天井部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

265は須恵器坏ａである。復元口径12.9cm、復元底径8.7cm、器高3.5cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、白灰色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

254は須恵器坏ｃである。復元口径12.9cm、器高4.65cm、復元高台径7.6cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に貼付され、断面方形を呈する。畳付は外方を向く。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

255は須恵器坏？である。復元口径17.8cm、器高9.4cm、高台径8.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・微粒砂～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は暗灰黄色(2.5Y5/2)、内面は灰色（5Y4/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが丸みを帯び、そこに断面三角形の高台部が貼付される。体部は深く直線的に立ち上がり、口縁部付近で細くなり弱く外反する。調整はナデを施す。

444は緑釉陶器坏である。破片資料であり、残存高2.9cm、高台径6.2cmを測る。白磁Ｉ類の模倣品である。蛇の目高台を呈し、丸みを帯びる体部形態を有する。胎土は軟質であるが精良、釉は白色である。

425は緑釉陶器の皿である。復元口径14.0cm、底径6.6cm、器高1.95cm。京都産洛北型と考えられる。胎土は淡黄褐色で精良。軟陶である。釉は黄緑色を呈し薄く施され、剥落が著しい。全面施釉。濃緑色の点粒が内外面に顕著に認められる。高台径状は円盤状高台で、見込み中央はやや窪む。口縁部は弱く屈曲する。内面には陰刻が施されているが、不明瞭である。調整は器表が荒れているために、口縁付近のナデしか確認できない。1/2～1/3が残存しており、体部以上を復元して図示した。

426は緑釉陶器の碗と思われる。京都産洛北型。残存高1.0cm、高台径5.75cmで、体部以上を欠失する。体部の延びる方向から碗かと思われる。高台は円盤状高台で、高台内はやや凹む。焼成は軟陶、胎土は淡黄褐色で精良である。釉は全面施釉で、淡黄緑色釉を薄く施す。摩滅が激しく、器表の剥落が著しい。調整は内面のみにミガキ痕跡が確認できる。

626は長沙窯系黄釉褐彩陶器水注である。残存高4.2cm、復元径14.2cmを測る。底部の1/4が残存しており、復元して図示した。胴部は直線的に立ち上がり、底部は非常に薄い造りである。底部外面と内面は無釉で、内面と底部外面はナデている。底部外面周縁は、ケズリ痕跡をそのまま残し、釉だれにより部分的に溜まりがある。全体的に釉溜まりが多く、黄釉の発色もあまりよくない。胎土は灰色で精良である。

286は須恵器円面硯である。脚部の破片資料であり、残存高3.0cmを測る。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。小片であるため詳細は不明だが、硯部が接続される箇所に当たる。脚部はハの字状に広がる。

667は砥石である。上端部を欠失する。残存長10.7cm、残存幅7.9cm、厚さ7.1cmを測る。石材は砂岩である。形状は長方体を呈する。使用面は3面である。

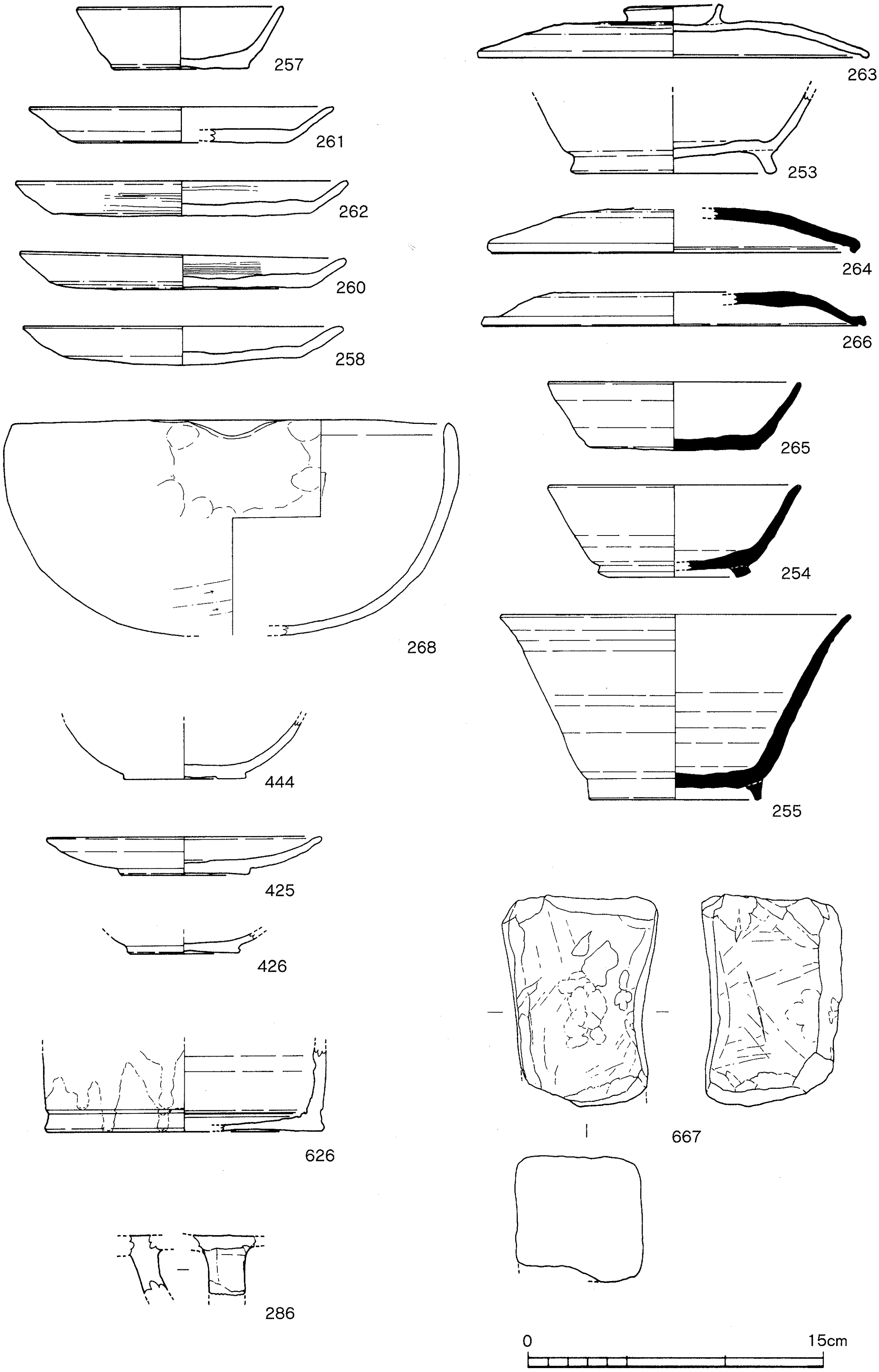
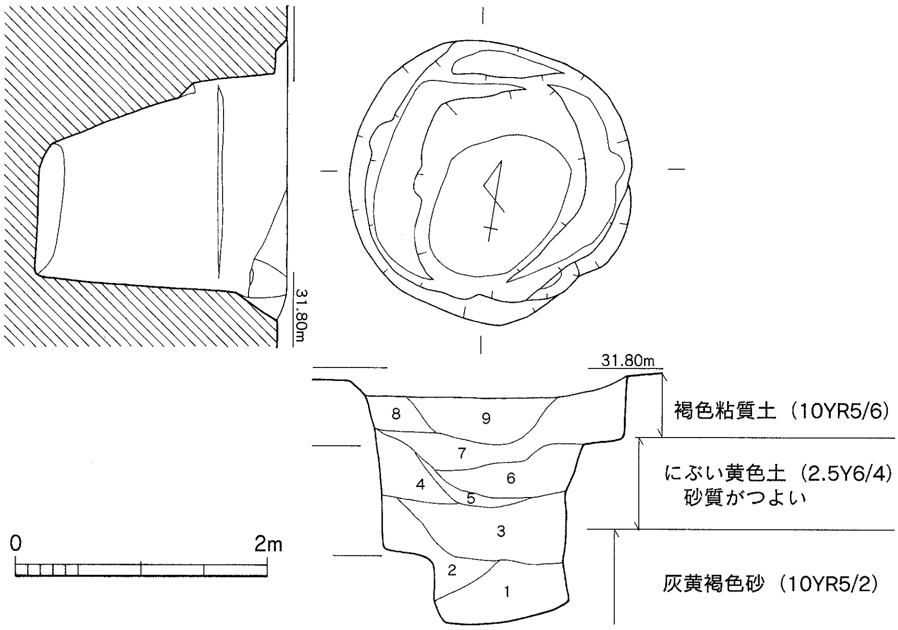


Fig.30　SE210出土遺物（1/3）

SE214（Fig.31、PL.13）

調査区の中央付近に位置している。円形のプランを有し、径2.2m、深さ2.0mを測る。井戸枠の痕跡は確認できなかったが、床面は砂層から－70㎝程穿たれており、小形ながら井戸としての機能は果たしていたものと推測される。遺物に土師器丸底坏、黒色土器B類椀を含むことから、12世紀前後の時期が想定され、他遺構よりも後出する。最下層の1層からは完形品の遺物が多くみられる。



土層番号	色番号	土質	備考
1	10YR1.7/1	黒色泥炭土	完形の遺物を多く含む。
2	10YR2/2	黒褐色粘質土	（10YR5/2）塊が多く混じる。
3		混合土	1層＋（10YR3/3）の混合土。
4	10YR4/1	褐灰色土	
5	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	（10YR5/4）ベースに（10YR2/2）を含む。
6		混合土	（10YR3/3）＋（10YR2/1）の混合土。遺物は微量。
7	10YR2/1	黒色土	
8	10YR3/1	黒褐色砂質土	（10YR5/2）砂塊が混じる。
9	10YR3/1	黒褐色土	土器細片、炭化物を含む。

Fig.31　SE214実測図（1/60）

SE214出土遺物（Fig.32、PL.27･53･54･62）

281は土師器丸底坏である。口径15.85㎝、器高3.2㎝を測る。口縁部の一部のみ欠失する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。器肉はやや厚い。底部外面には板状圧痕が残り、体部内内面にはナデを施す。体部内面には工具痕（ミガキb）が確認できる。

282は土師器丸底坏である。口径15.75㎝、器高3.25㎝を測る。口縁部の一部のみ欠失する。胎土には微粒砂～1.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/2）を呈する。

283は土師器丸底坏である。口径15.4㎝、器高4.05㎝を測る。口縁部の一部のみ欠失する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/2）を呈する。調整はナデを施す。

284は土師器丸底坏である。口径16.2㎝、器高3.5㎝を測る。口縁部の1/3のみ欠失する。胎土には微量の1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。調整は全

体にナデを施しており、口縁部内外面と底部に黒斑が確認できる。

285は土師器丸底坏である。口径15.8cm、器高3.6cmを測る。口縁部と底部の一部のみ欠失する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。体部の張りはやや強い。調整は全体にナデを施し、体部内面に工具痕（ミガキb）が確認できる。

288は土師器丸底坏である。口径14.6cm、器高3.5cmを測る。ほぼ完形である。胎土には雲母・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。体部の張りはやや強い。全体にナデを施すものと思われるが、摩滅により不明瞭である。

280は黒色土器B類椀である。復元口径16.3cm、器高5.8cm、高台径7.05cmを測る。口縁部～体部の3/4を欠失する。胎土には微粒砂～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、黒色（N2/）を呈する。体部は丸みを帯びた形態を有し、短く丸みを帯びた高台部をハの字状に貼付する。器肉は薄い。調整は、高台外面～高台内にかけてナデ、体部内外面は手持ちのヘラミガキを施す。

628は長沙窯系黄釉褐彩陶器水注の胴部片である。残存高4.5cm。明瞭なスタンプにより花文が施文される。胎土は明灰色で、気泡がみられ、やや粗い。釉は外面のみに施釉される。

671は越州窯系青磁小碗Ⅱ－2（d？）類である。残存高2.0cm、底径5.2cm。胎土は灰色で粗質。釉はやや黄色みが強い。体部上半部は欠失しており、反転して復元図示した。体部下半以下は無釉で、内面のみ施釉される。体部外面は指頭によりナデを施し、高台内はやや窪む。

SE214上層出土遺物（Fig.32、PL.27･53･54･62）

440は緑釉陶器の碗である。残存高2.6cm。体部中位以上は欠失する。体部は丸みを持って立ち上がる。高台は貼付の輪高台で、やや小さめの逆三角形状を呈し、端部がやや外側に反る。底部の器肉はやや厚めで、全体的に丸みを帯びる器形である。焼成は軟陶で、胎土は精良で微量の白色粒が含まれる。釉は光沢のある黄緑色の釉を薄く施し、全面施釉である。器表の剥落が著しい。高橋分類碗F類に相当し、防長産かと思われる。

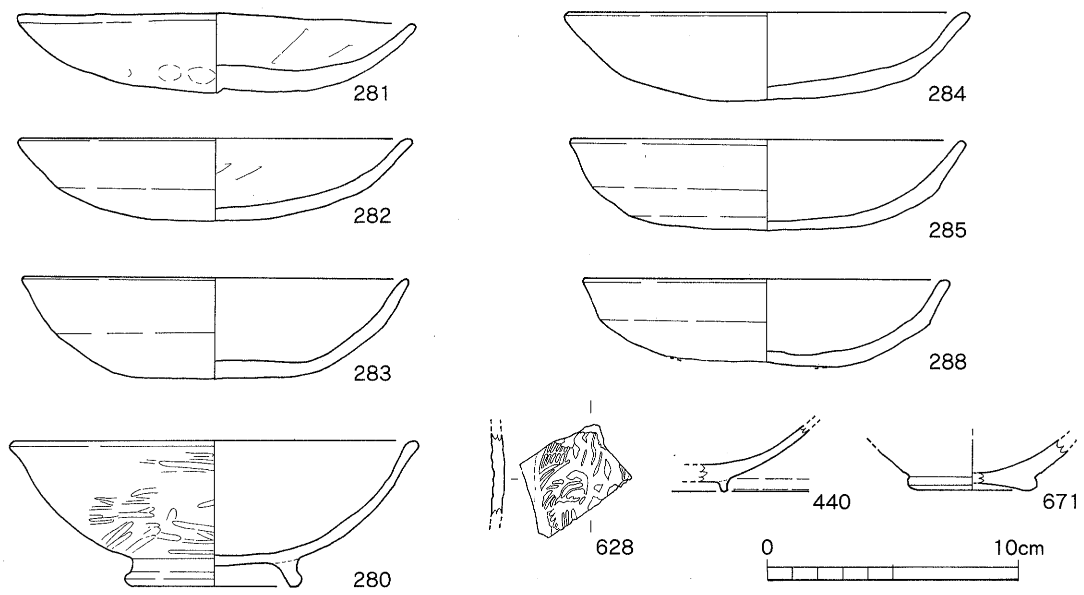
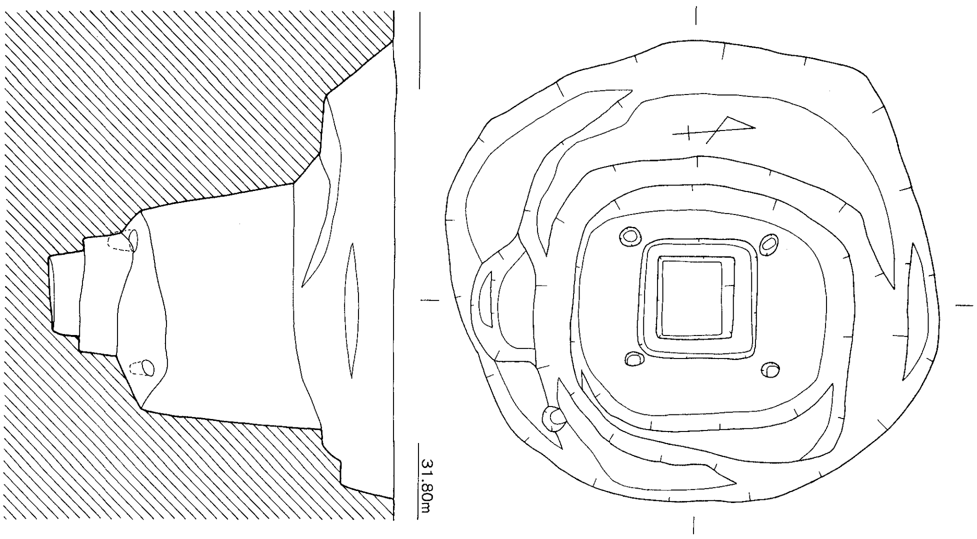
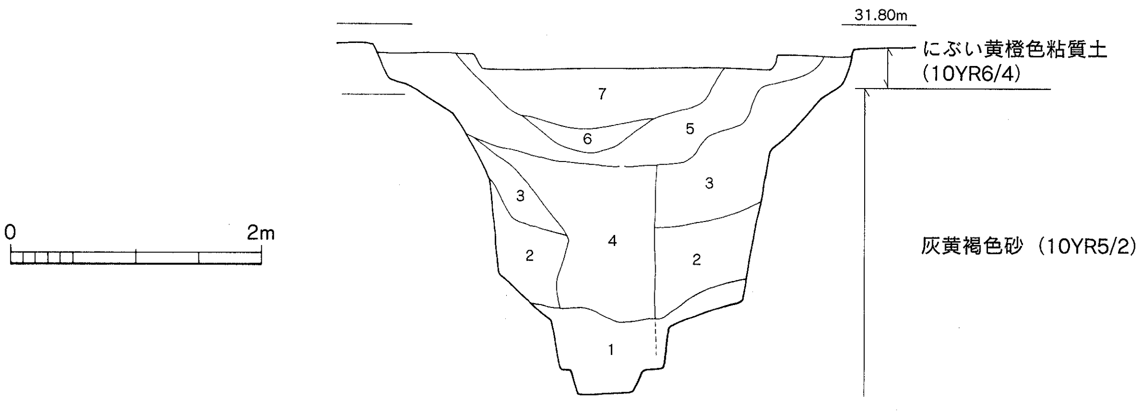


Fig.32　SE214出土遺物（1/3）

SE230（Fig.33、PL.13）

調査区の北端中央付近で検出された井戸である。掘形のプランは円形で、径3.6～3.9m、深さ2.7mを測る。井戸枠の痕跡は一部土層に現れており、2層と3層はその裏込め土であると考えられる。裏込めの状態は、粘質系の土壌が大きな単位で充填されている。南側で層位は大きく乱れており、南側から抜き取られていると思われる。5～7層は廃絶後の埋没土であると考えられ、遺物の殆どはここからの出土である。床面で辺0.9mの方形の痕跡が確認され、それを固定するために四隅に杭の打ち込まれた状況が見られ、井戸枠の大きさが復元できる。また、その内部に辺0.6mの掘り込みがあり、取水口を埋置した際の凹みであると考えられる。最下層の泥炭土（第1層）には、食物残滓などは遺存していなかった。





土層番号	色番号	土質	備考
1	10YR1.7/1	黒色泥炭土	
2	10YR2/3	黒褐色粘質土	粘性強い。遺物、炭化物を多く含む。
3	10YR4/2	灰黄褐色土	(10YR4/2) ベースに (10YR5/3) 粒が多く混じる。
4	10YR3/2	混合土	(10YR3/2) 土＋ (10YR5/3) 粒の混合土。遺物、炭化物を含む。
5	10YR3/2	黒褐色砂質土	炭化物を含む。
6	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土	(10YR5/4) 粘質土ベース。遺物を多く含む。
7	10YR3/2	黒褐色土	遺物を多く含む。

Fig.33　SE230実測図（1/60）

SE230出土遺物（Fig.34、PL.54･55･62）

459は土師器椀である。底部のみが残存しており、残存高2.95㎝、高台径7.95㎝を測る。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。高台部はハの字状に開く細長い形状をなす。欠失しているが、体部の器肉は3㎜程に急激

に薄くなる。摩滅により調整は不明瞭である。

460は土師器椀である。底部のみが残存しており、残存高3.35cm、高台径7.8cmを測る。底部のみが残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、白灰色（2.5Y8/2）を呈する。体部は欠失しているが、直線的に立ち上げるものと思われる。高台部は小さく細長いものがやや外開きに貼付される。摩滅により調整は不明瞭である。

461は土師器椀である。復元口径12.8cm、器高4.9cm、復元高台径7.6cmを測る。直線的な体部形態をもち、細長い外開きの高台を貼り付けた土師器椀で、底部を弱く押し出しており、中島Ⅰ－7類orⅡ類との折衷形態と思われる。型式の下限は、Ⅸ期（10世紀第2四半期～第3四半期）である。焼成は良いが、胎土は粗く、1mm大の白色粒を含む。また、微量の雲母を含む。色は鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。調整は体部内外面～高台をヨコナデ、高台内と見込みは不定方向のヨコナデを施す。

462は土師器坏ｃである。復元口径12.5cm、器高4.8cm、復元高台径7.65cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR6/2）を呈する。体部は弱く丸みをもち、口縁端部でやや外反する。高台部はハの字状に開き、細長い。調整はナデを施す。

463は須恵器坏ａ3である。復元口径14.8cm、復元底径9.5cm、器高3.3cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土は精緻で、焼成はよい。褐灰色（10YR6/1）を呈する。体部と底部の境目は明瞭で、体部の丸みは下位にある。体部は直線的に立ち上がる。底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外にはナデを施す。

694は越州窯系青磁碗Ⅱ－2c類？である。残存高1.3cm。底部外面を若干削り込んでおり、底部外面は露胎となる。釉は緑みが強く、光沢がある。器表にはボツボツが多く、荒れた状態である。焼きはあまく、胎土は茶色みがかっている。

679は越州窯系青磁碗Ⅰ－1a類である。小片のため詳細は不明であるが、残存高2.4cmを測る。蛇の目高台を呈し、全釉である。畳付の周縁部分に目跡を残し、内面にはない。釉は青緑色で光沢があり、発色がよい。胎土はやや粗く気泡が多いが、精良である。

693は越州窯系青磁碗の小片である。高台は蛇の目高台になるものと思われ、碗Ⅰ－1類？であろうか。残存高3.2cm。内外面ともに目跡は確認できない。全釉のⅠ－1a類になるものと考えられるが、小片であるため詳細は不明である。釉は光沢あり、緑みが強い。胎土は灰色で、精良である。

691は越州窯系青磁大碗Ⅰ－2ウ類である。破片資料であり、残存高4.1cmを測る。高台は輪高台の形状を示す。復元はできなかったが、大きさから大碗と判断した。釉は青緑色だが、光沢はなく黄色みがやや強い。内面には楕円形の目跡が残っており、体部下半以下は露胎となる。胎土は灰色で精良である。

680は越州窯系青磁碗Ⅰ－1a類である。残存高2.3cm、高台径5.3cmを測る。全釉のⅠ－1a類であるが、釉が黄緑色で貫入が多く、発色はあまりよくない。胎土は灰白色で精緻、目跡は高台畳付の周縁部に6ヶ所認められる。見込みは使用によるものか、摩滅している。

710は越州窯系青磁碗Ⅱ－2c類である。復元底径7.4cm、残存高1.6cmを測る。高台部のみの破片資料である。高台径状は円盤状高台をなす。胎土は灰色で黒色粒を多く含む。釉は光沢のあるくすんだ黄色で、外面は無釉。化粧土を有する。外面は不明瞭だが、内面には細長い白色の目跡が残る。

682は越州窯系青磁碗Ⅱ－2（ｄ？）である。残存高1.8cm、高台径5.2cmを測る。体部上半以上を欠失する。口縁部を内湾させるⅠ-3類かと思われる。釉は青緑色で光沢がなく、内面のみに施釉されている。外面は露胎。胎土は灰色～暗灰色で、黒色粒が多く含まれている。

体部外面はやや赤みがあり、焼きはあまい。高台形状は円盤状高台である。

709は越州窯系青磁碗II－2a類である。復元底径7.1㎝、残存高2.4㎝を測る。底部のみの破片資料である。胎土は灰色を呈し、黒色粒を多く含む。釉はくすんだ黄色で、剥落が著しい。体部外面下位以下は露胎。化粧土を有する。見込みと底部外周に細長い白色の目跡が確認できる。数は不明確だが、6ヶ所になると思われる。高台部は一見蛇の目風に削り、中心付近はそのまま残す。段状の線が入る。

716は越州窯系青磁合子である。受け部のみの破片資料であり、残存高2.5㎝を測る。丸みを帯びる体部形態を有し、受け部で屈曲し、細く立ち上がる。胎土は粗く、焼きがあまい。釉は淡緑色を呈するが、発色が悪く光沢がない。

690は越州窯系青磁の水注か壷の破片である。残存高1.1㎝。内外面ともに施釉されており、釉は青緑色を呈する。内面のみ光沢がある。胎土は灰茶色で精緻である。691は越州窯系青磁大碗Ｉ－2ウ類である。残存高4.1㎝。高台は輪高台の形状を示す。破片資料のため復元はできなかったが、大きさから大碗と判断した。釉は青緑色だが、光沢はなく黄色みがやや強い。内面には楕円形の目跡が残っており、体部下半以下は露胎となる。胎土は灰色で精良である。

692は越州窯系青磁香炉の胴部～脚部の破片である。釉は全釉で、緑みが強く光沢がある。胎土も灰色で精良である。

688は越州窯系青磁碗Ｉ－2オ類である。畳付に目跡がある。復元口径17.5㎝、復元器高6.5㎝、復元高台径7.4㎝を測る。体部は直線的に立ち上がり、高台は細くて低い。釉は全釉で青緑色を呈し、畳付のみが露胎となる。胎土は灰色で精緻である。口縁部には輪花、体部外面には縦ヘラ押圧線がある。資料は体部と高台部の2点からなっているが、明らかに同一個体であり、一部高台脇に接合箇所が認められたので、図上で復元した。

707は緑釉陶器（京都産洛西型）輪花碗である。口縁部のみの破片資料であり、残存高2.6㎝を測る。胎土は灰色で精緻である。焼成は硬陶。施釉は薄く、半光沢の灰緑色を呈する。

442は緑釉陶器稜皿である。体部上半のみの破片資料であり、残存高1.7㎝を測る。外面に屈曲、内面に段がついており、立ち上がりが浅いことから稜皿と判断した。焼成は硬陶で、胎土は灰褐色で精良、微量の白色粒を含む。釉は残存部位には全て施釉され、光沢がある淡黄緑色を呈する。産地は不明だが、猿投ではK14-1型式に出現する可能性が指摘されている。

684は白磁碗II類である。底部のみの破片資料であり、残存高2.6㎝、高台径5.9㎝を測る。丸みを帯びる形態を有し、断面逆台形の高台部が削り出されている。釉は光沢がなく、やや黄色みがかかる。胎土は灰色で非常に硬い。部分的に赤色化した部分がみられる。他のII類に比して胎土が精良であると思われる。

711は灰釉陶器碗？である。残存高1.5㎝、復元高台径7.2㎝を測る。高台部のみの破片資料である。胎土は灰色を呈し、精良である。高台部は断面三角形状の貼付高台で、端部は丸い。施釉は見込み以外と思われる。白色を呈し、一部畳付まで釉が垂れる。見込みは擦痕がありつるつるしており、磨られている。墨痕が確認できることから、硯に転用されたものと思われる。

678は越州窯系青磁碗Ｉ－5類である。残存高2.6㎝、復元高台径9.0㎝を測る。高台以下は露胎となる。釉は体部外面と内面に施釉され、光沢はあるもののくすんでやや発色が悪い。胎土は灰色で、硬質だが微量の白色粒を含んでいる。露胎部分は赤みを帯び、見込みと畳付に目跡が残る。

421は石帯（丸鞆）である。蛇紋岩を素材とする丸鞆である。やや黒みが強い。縦長3.1㎝、幅4.2㎝、厚さ0.6㎝を測る。上端部を一部欠くがほぼ完形品である。柄穴は3ヶ所に穿孔されており、裏面は研磨痕をそのまま残す。全体的に遺存状況は悪い。

718は石製品であるが、機能は不明である。上端部をわずかに欠失するが、ほぼ完形である。石材は滑石である。機能は不明。扁平な楕円形を呈し、残存長9.0cm、幅6.2cm、厚さ2.0cmを測る。

SE230最終埋没土出土遺物（Fig.34）

464は須恵器坏ｃである。復元口径13.6cm、器高3.7cm、復元高台径9.5cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に貼付され、小さな断面方形を呈する。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

653は須恵器蓋？である。破片資料であり、残存高0.95cmを測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。内面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

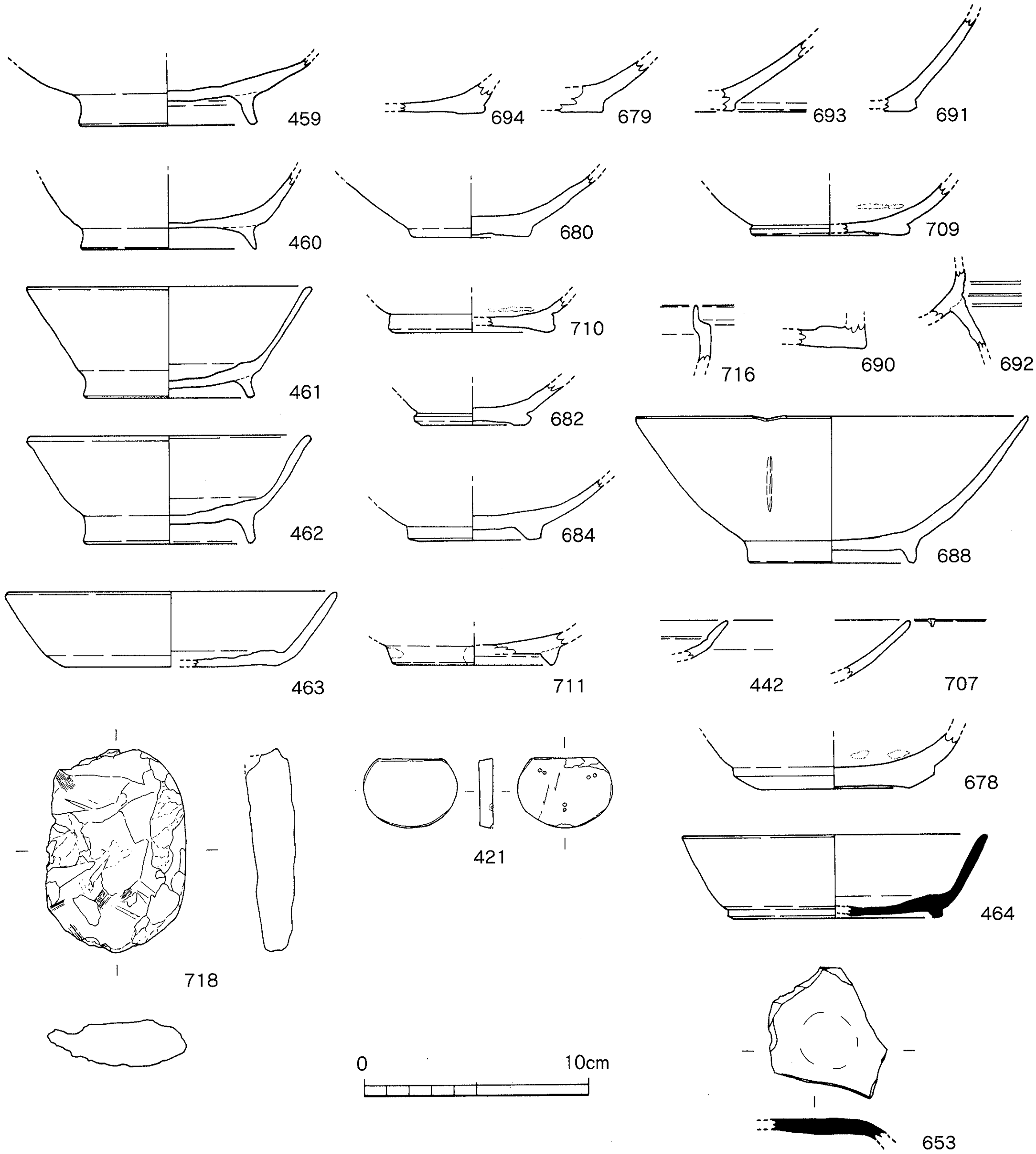


Fig.34　SE230出土遺物（1/3）

SE231（Fig.35）

調査区の北端中央付近で検出された。SE230に切られている。円形のプランを有し、大きさはSE230とほぼ同等で、径3m程度であるが、深さは浅い。井戸に分類するのは躊躇されたが、形状等からみて井戸と判断した。調査区境界にあるため、プランの半分しか掘削できなかった。

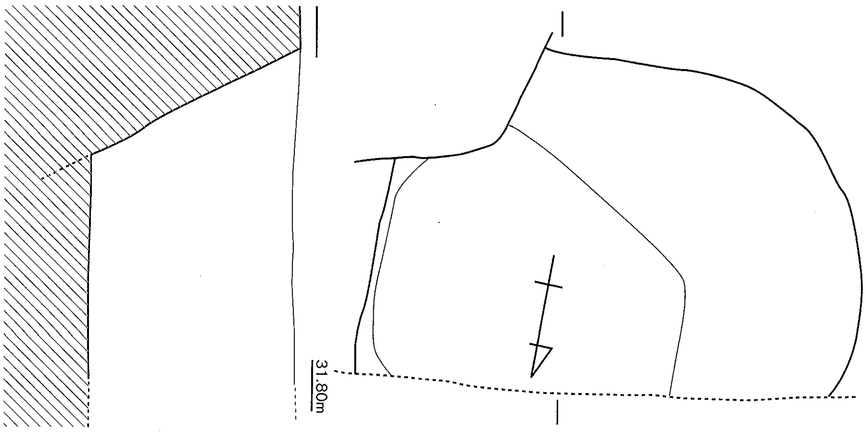


Fig.35　SE231実測図（1/30）

SE251（Fig.36、PL.14）

調査区の西北端に位置する井戸である。円形のプランを有し、径3.45～3.5m、深さ2.8mを測る。調査区の境界に位置しているために、作業の安全上、半分しか掘削ができなかった。下半分では方形のプランに変わり、井戸枠が設置されたものと考えられる。

SE251出土遺物（Fig.37、PL.55）

490は土師器坏ａである。復元口径12.6㎝、底径7.5㎝、器高3.6㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。体部はほぼ直立するが、口縁部で弱く外反する。調整はナデを施す。

485は土師器坏ａである。復元口径11.8㎝、復元底径8.0㎝、残存高3.7㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/3）～鈍い橙色（5YR7/4）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部はやや丸みをもつ。全体にナデを施している。

487は土師器皿ａである。復元口径17.4㎝、復元底径13.5㎝、残存高1.8㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/8）～浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。調整はヨコナデを施すが、底部外面はケズリ

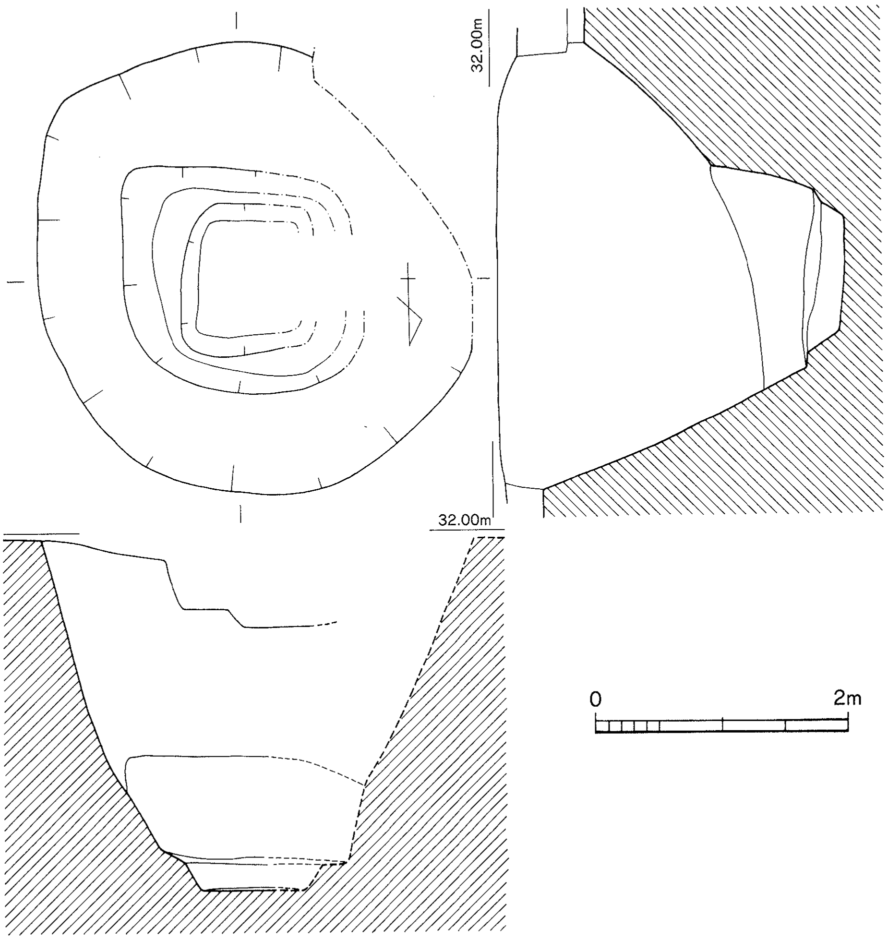


Fig.36　SE251実測図（1/60）

痕をそのまま残す。

491は須恵器蓋ｂである。残存高2.5㎝、復元撮み径5.6㎝を測る。天井部のみが1/4残存する。胎土には1～3㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、橙色（5YR6/6）を呈する。

484は須恵器円面硯である。脚部の破片であり、残存高3.65㎝を測る。下方でやや外側に開き、四隅は面取りをしている。胎土には微粒砂を含み、焼成はよい。灰色（N5/）を呈する。

450は緑釉陶器の碗である。残存高1.4㎝を測り、体部以上を欠失する破片である。体部の立ち上がり具合から碗と判断した。防長産と思われる。高台は貼付の輪高台で、ハの字状に開きやや高い。畳付には弱い段がつく。焼成は軟陶で、胎土は精良。釉は透明釉に近く、やや黄緑色を呈する。釉層は薄く、摩滅が著しいために器表の剥落が著しい。全面施釉。防長産の高橋分類D類かと思われる。431の高台形状と近似している。

428は緑釉陶器の碗である。残存高3.6㎝。口縁部外面に沈線がある。口縁部はやや外反し、引き出したときに沈線状になっている。調整は内外面ともに回転ヨコナデを施す。焼成は軟陶で、胎土は淡黄褐色を呈する。気泡が多く、質は不良である。体部上半の破片であり詳細は不明だが、釉というか化粧掛けのような白色の被膜がみられる。

714は緑釉陶器（京都産洛西型）碗？である。高台部のみの破片資料であり、残存高1.4㎝

を測る。胎土は灰色で精良。焼成は硬陶である。釉は全面施釉で、薄く施される。半光沢で透明釉に近い。体部は欠失しているが、丸みを帯びる形状であると思われる。高台部は断面逆台形を呈し、端面を内側に斜めに削る。

449は緑釉陶器（防長産）坏である。復元口径12.4cm、器高3.9cm、復元高台径7.0cmを測る。防長産古期の緑釉陶器である。丸みを帯びる体部形態を有し、口縁部は端反りになる。端部は丸みを帯びる。高台部は丸みを帯びた断面長方形を呈する。軟陶で器表が剥落している。

665は石製品である。機能は不明。断面が楕円形で、身部は細長い形状を呈する。下端部を欠失する。残存長8.05cm、幅3.75cm、厚さ2.7cmを測る。

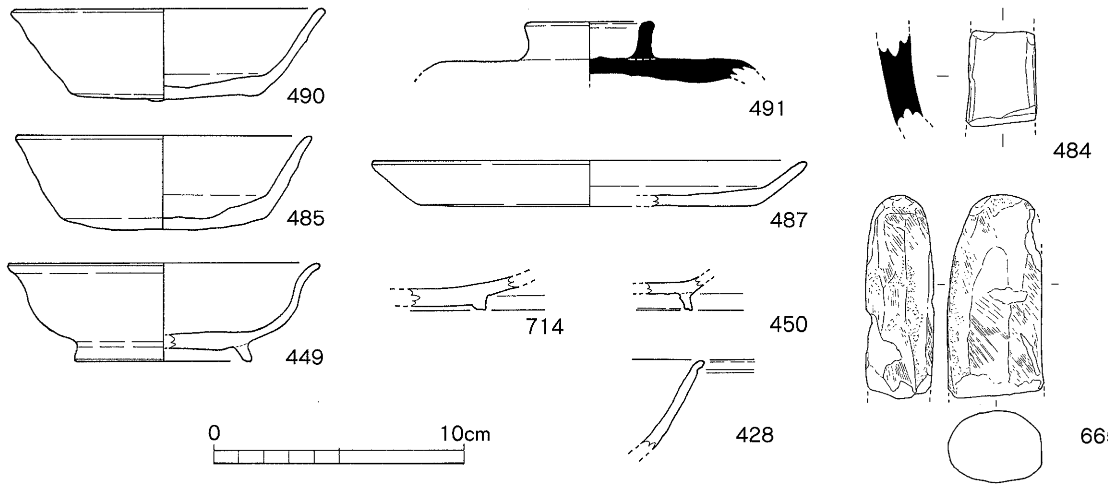


Fig.37　SE251出土遺物（1/3）

SE252（Fig.38）

調査区の中央よりやや東に位置し、SE210に切られる。プランは円形を呈し、径3.0～3.4m、深さ約2.5mを測る。SE210によって大部分が消失しているため詳細は不明だが、通常の井戸は上場と取水口の径比が大きく断面逆台形を呈するものが多いのに対し、壁体は急に立ち上がっている。

SE252出土遺物（Fig.39、PL.56）

498は土師器坏ｄである。口径10.4cm、底径5.25cm、器高2.75cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/4）～橙色（7.5YR7/6）を呈する。調整は、底部外面はケズリをそのまま残し、体部内面はナデ、体部外面は回転ヘラミガキを施す。

493は須恵器坏ａである。口径12.8cm、底径8.25cm、器高3.55cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～4mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

706は須恵器蓋ｃ3エである。復元口径15.8cm、残存高1.0cmを測る。全体の1/3が残存する。撮み部は欠失する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は三角形を呈するがあまり肥厚せず小さい。

494は須恵器皿ａである。復元口径13.4cm、復元底径10.9cm、器高1.6cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部は平坦で体部との境目は明瞭だが、やや丸みを帯びる。体部は直線的である。調整はナデを施す。

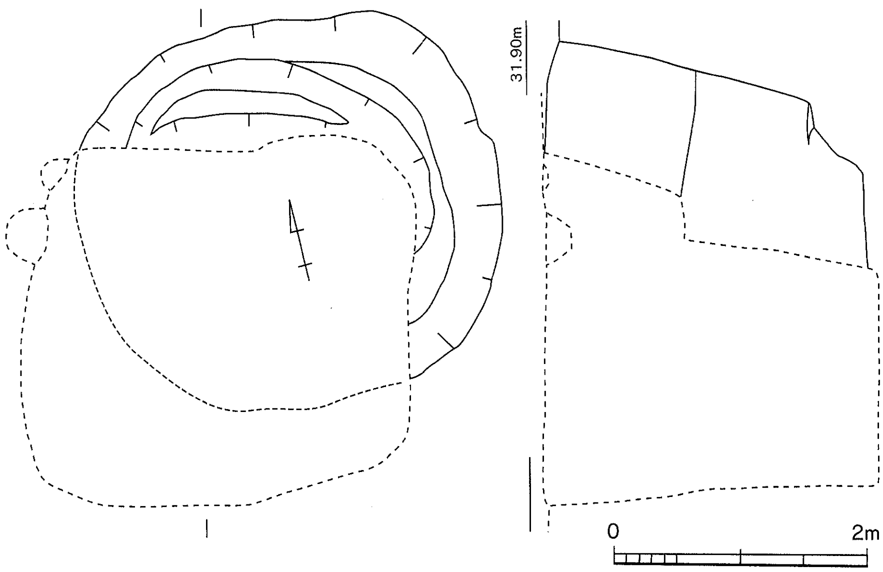


Fig.38　SE252実測図（1/60）

656は須恵器坏or皿である。破片資料であり、残存高1.05㎝を測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部外面周縁に墨書が確認できる。2本の線が書かれているが、判読はできなかった。

655は土師器坏ｄ？である。破片資料であり、残存高0.9㎝を測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。内外面ともにヘラミガキを施す。底部外面中央に墨書が確認されているが、判読はできなかった。

664は砥石である。完形品で、残存長7.7㎝、残存幅6.5㎝、厚さ4.3㎝を測る。元々長方体状を呈していたものと思われるが、よく使われており三角形状に変形している。使用面は4面である。石材は砂岩である。

SE252最終埋没土出土遺物（Fig.40）

496は土師器椀である。復元口径15.4㎝、器高5.8㎝、復元高台径10.3㎝を測る。丸みを帯びる体部形態を有し、口縁端部はわずかに外反する。細長く短いやや外開きの高台を貼付る。中島Ⅲ－１類かと思われる。型式の下限はⅨ期（10世紀第2四半期～第3四半期）である。胎土は微量の1㎜大の白色粒が含まれ、色は灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。焼成は良いが、全体的に摩滅が著しく、調整は不明瞭である。

492は須恵器坏c3である。残存高4.0㎝、高台径9.4を測る。体部上半を欠失する。胎土には不純物が多く、細かい白色粒を多く含む。焼成は不良で、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。体部と底部の境目は明瞭で、その7㎜程内側に断面長方形の低い高台部が貼付される。端面外側を弱く跳ねる。体部は直線的に立ち上がる。

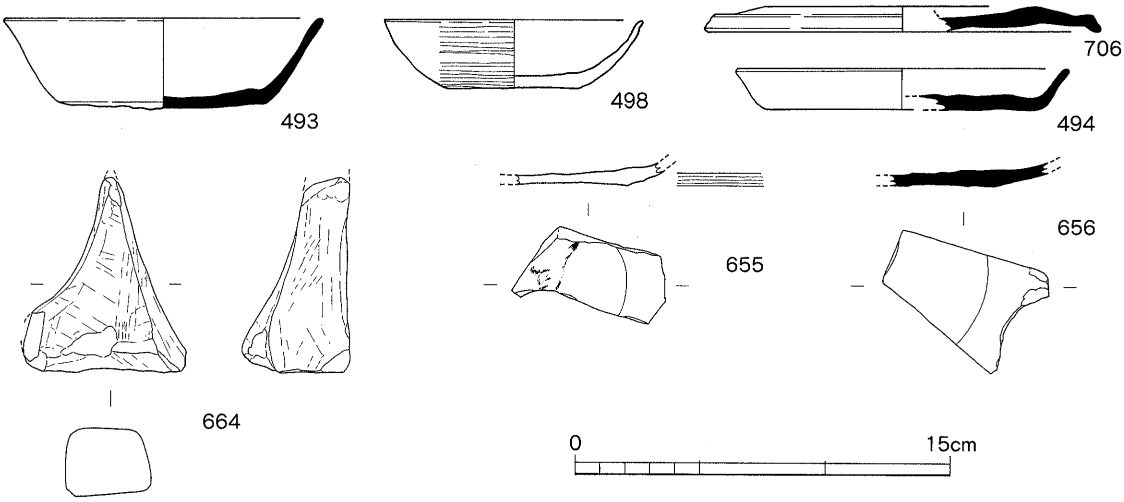


Fig.39　SE252出土遺物（1/3）

SE254（Fig.41）

調査区の北端に位置する円形の土坑である。SK256、SK255を切っている。調査区の境界にあるため、一部掘削ができなかった。径3.1m、深さ1.0mを測る。

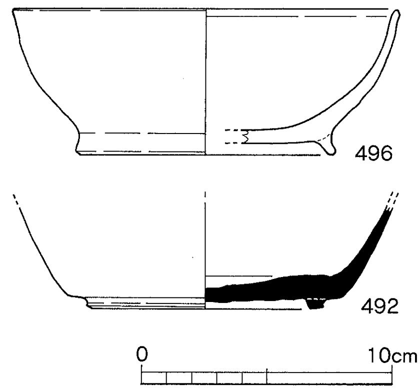


Fig.40　SE252最終埋没土出土遺物（1/3）

SE254出土遺物（Fig.42、PL.45･49･56）

519は土師器丸底坏である。復元口径15.15㎝、底径3.65㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・1㎜程の砂粒を含む。焼成はやや不良で、灰白色（2.5Y8/2）を呈する。調整は摩滅により不明瞭である。

517は平瓦である。胎土には微量の2～5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。3残存長5.6㎝、残存幅12.65㎝、厚さ1.8㎝を測る。表面は布目痕、裏面にはタタキが残る。端面の処理は行っていない。外面に「佐」の文字がスタンプされる。

686は白磁碗XI類である。体部中位のみの破片資料であるので、詳細は不明である。胎土は白色で精緻、釉は透明で光沢がある。

687は越州窯系青磁碗Ⅰ－1a類である。底部の破片資料で、残存高2.0㎝を測る。高台形状は蛇の目高台。胎土は灰白色で微量の黒色粒を含む。質はよい。釉は光沢があり黄色みが強い。内面には貫入が多くみられる。全釉で畳付には白色の目跡が1ヶ所に残る。

685は越州窯系青磁水注である。把手部のみの破片資料で、残存高1.9㎝を測る。平たく伸ばしたものに櫛状の筋を3本入れたもので、把手の造りとしては退化形態を示している。釉は暗緑色で光沢はあまりなく、釉ののりも悪い。胎土は灰白色で精良だが、微量の黒色粒が含まれる。

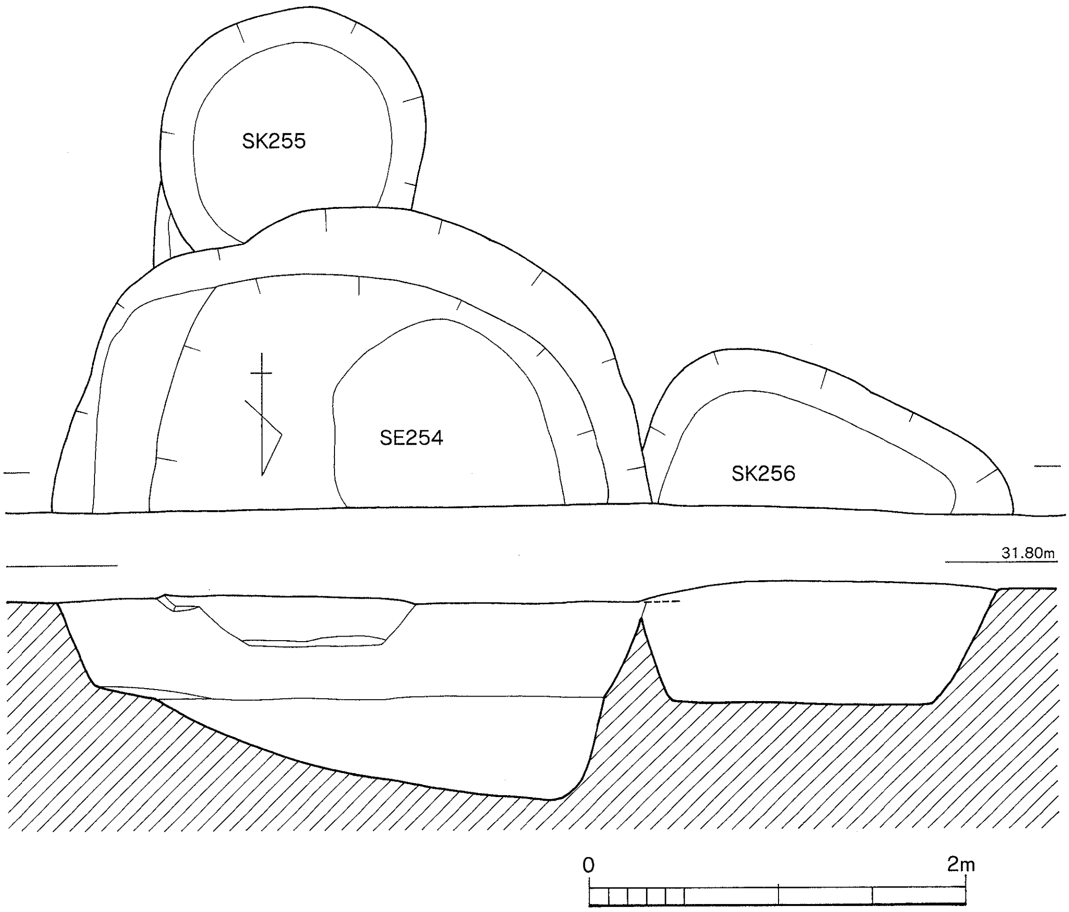


Fig.41　SE254実測図（1/40）

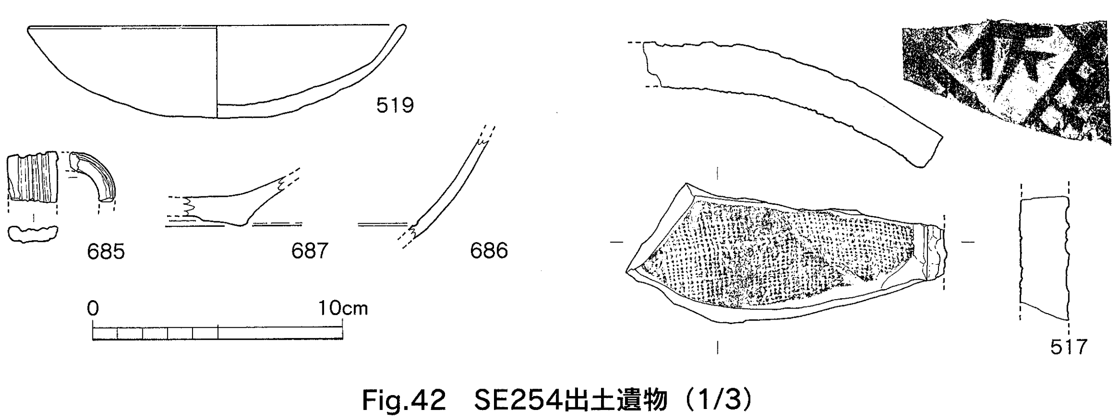


Fig.42　SE254出土遺物（1/3）

6)SF（道路）

層位の状況（東側セクション）（Fig.43、PL.15）

本調査地点のなかで最も遺存状況の良かった道路南端（調査区の南東端）において土層の堆積状況を確認した。セクション図はFig.43に示す。それぞれの層位の所見をまとめてみると、以下のようになる。

４層　整地層。SD001東側の朱雀大路周辺エリアに残る整地層。

５層　遺構検出時の汚れた覆土。

10層　整地層の下部より切り込んでおり、路面の凹凸を充填する。痕跡D（142頁参照）。

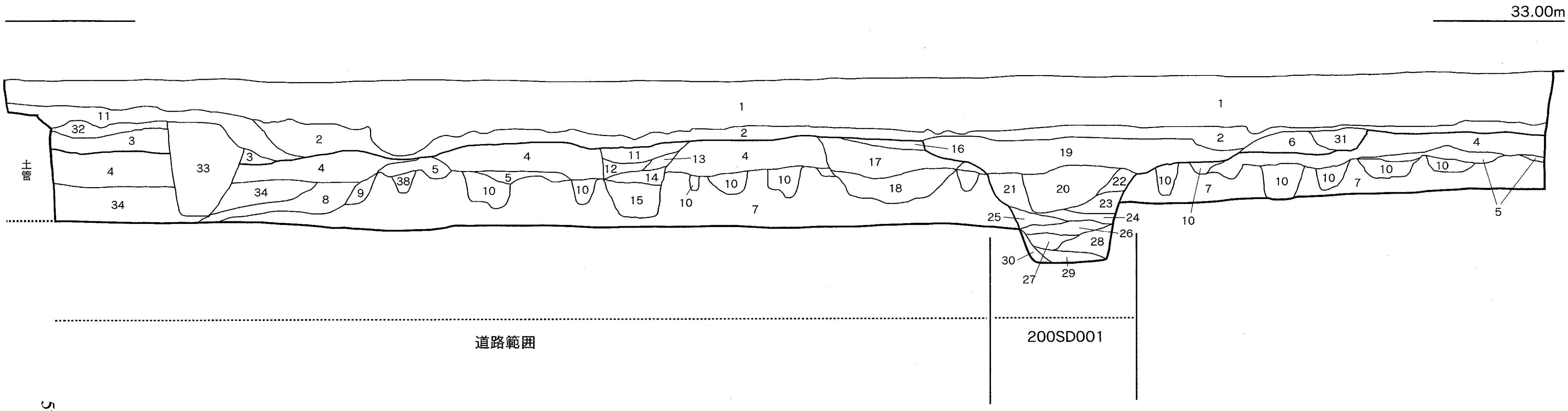
７層　地山。

SD001（道路側溝）と道路の関係について（Fig.43）

SD001は4層の整地層より切り込んでいると考えられ、流水部は断面逆台形を呈し、その上部は大きくラッパ状に開く。整地は道路部分の外側まで行われており、整地が施される時期と道路の施工の時期については明確にし難いが、大きな時間差はないように思われる。

路面の状況について（Fig.44、PL.16）

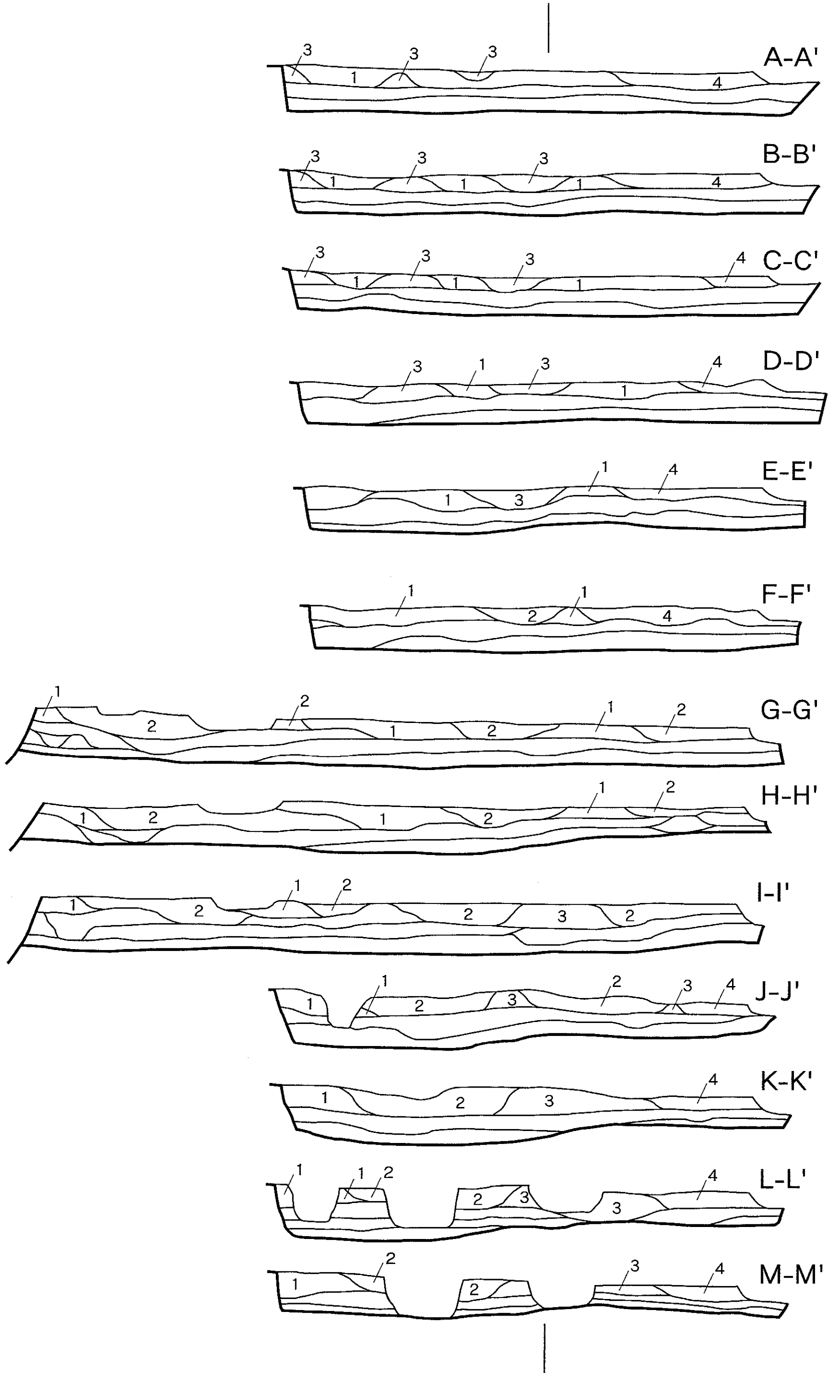
本調査地点では、攪乱が調査区東端の道路部分に集中していたこともあって、貴重な路面情報のほとんどが失われてしまっている。唯一、確認ができたのは南東端の一部分のみである。第Ⅳ章の3)に詳細に述べているのでここでは記述しないが、局地的な施工なのか、削平により消失しているのかは確認できなかった。

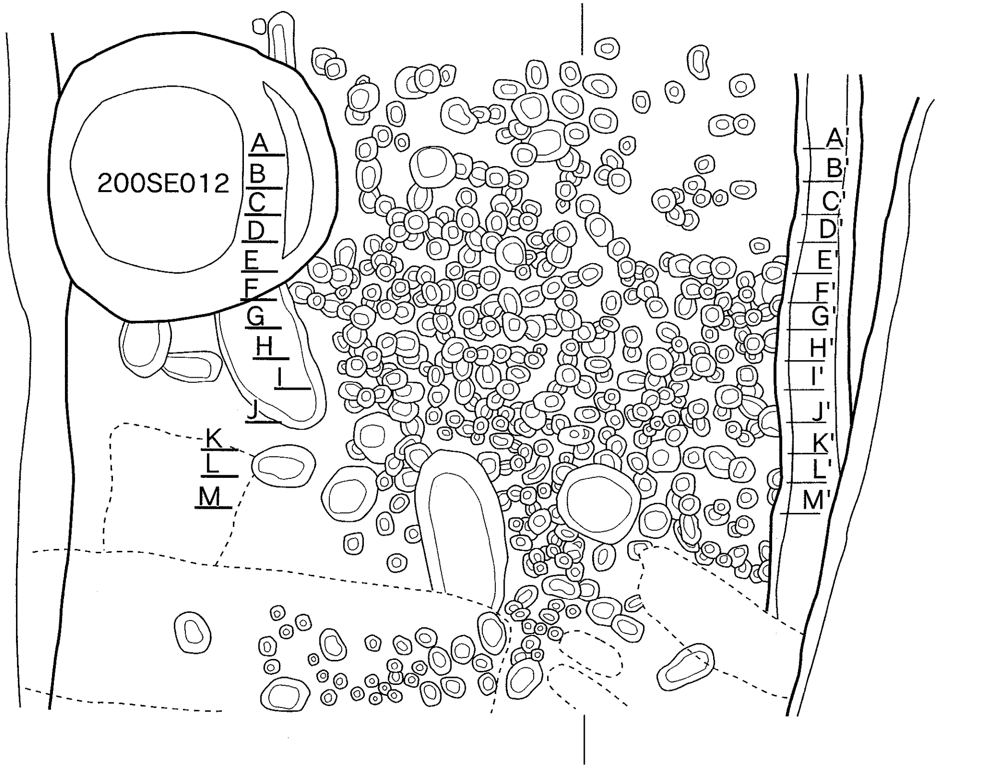


土層所見

1 真砂	客土
2 暗褐色土（10YR3/3）	砂粒、炭化物、焼土粒を多く含む。
3 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）	
4 黒褐色砂質土（10YR3/2）	微量の微粒砂を含む。炭化物粒、遺物細片、0.5～1cmの小礫を多く含む。締まりがよい。整地層か？
5 鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	遺物小片、炭化物粒を多く含む。遺構検出時の汚れた覆土。
6 灰黄褐色粘質土（10YR4/3）	極めが細かい。
7 褐色粘質土（10YR4/4）	地山。上層：褐色粘質土（10YR4/4）、下層：褐灰色粗砂（10YR4/1）。
8 褐灰色土（7.5YR4/1）	遺物、炭化物粒を含む。
9 混合土	
10 混合土	灰黄褐色土（10YR4/2）+鈍い黄褐色粘質土（10YR5/4）塊の混合土。
11 灰褐色砂質土（7.5YR4/2）	締まりが悪く、不純物が多い。
12 黒褐色砂質土（10YR3/2）	４層に似るが、締まりが悪い。
13 混合土	黒褐色砂質土（10YR3/2） 12層+褐色粘質土（10YR4/4）塊の混合土。
14 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）	
15 灰黄褐色砂（10YR4/2）	
16 黒褐色砂質土（10YR3/1）	炭化物粒を多く含む。
17 混合土	黒褐色砂質土（10YR3/1）16層+黄褐色粘質土（10YR５/６）塊の混合土。
18 混合土	
19 褐灰色砂質土（7.5YR4/1）	SD001の最終埋没土。土器細片、炭化物粒を多く含む。
20 黒色砂質土（7.5YR2/1）	土器細片、炭化物粒を含む。
21 混合土	灰褐色砂質土（7.5YR4/2）＋黄褐色土粒
22 21層と同一。	
23 褐灰色砂質土（7.5YR4/1）	遺物小片、炭化物粒を含む。
24 褐灰色砂質土（7.5YR4/1）	上層より粘性強い。締まりよい。
25 灰褐色土（10YR5/2）	締まりよい。
26 黒色系粗砂（7.5YR2/1）	
27 褐灰色砂（10YR4/1）	28層より粗い。
28 褐灰色砂（10YR4/1）	
29 混合土	褐色粗砂（10YR4/3）＋鈍い赤褐色粗砂（2.5YR4/3）の混合土。地山が混じる。
30 混合土	茶色系の強い褐色砂質土。
32 混合土	攪乱の埋土。
33 黒褐色土（10YR3/１）	遺物小片、炭化物粒を含む。締まりが悪い。
34 混合土	
35 暗褐色土（10YR3/3）	

Fig.43　SF南壁横断土層断面図（1/30）





1 黒褐色砂質土（10YR3/2）
ベースに
汚れた黄褐色微粒砂（10YR4/3）

2 汚れた黄褐色土（10YR5/4）
＋暗褐色粘質土（10YR3/3）の
混合土

3 黒褐色砂質土（10YR3/2）
ベースに小礫が混じる

4 汚れた黄褐色土（10YR5/4）に
白色砂粒を多く含む

Fig.44　道路痕跡実測図および道路路面の横断土層断面図（1/20）

7)SI（竪穴住居）

SI233（Fig.45、PL.19）

本調査地点で唯一の竪穴住居跡である。3.5×3.8mを測る方形を呈する。深さが10～20㎝と浅く、著しく削平を受けているものと考えられる。西壁に竈を有しており、焼土の範囲が確認されたが、遺存状況が悪く断面観察では復元ができなかった。四隅に60～70㎝程度の円形の窪み状を呈するピットがあるのみで、主柱穴は確認されていない。遺物が僅少でいずれも小片であり、時期は決定しがたいが、床面付近から須恵器蓋磨滅片が出土しており、概ね7世紀末～8世紀初頭の年代を考えておきたい。

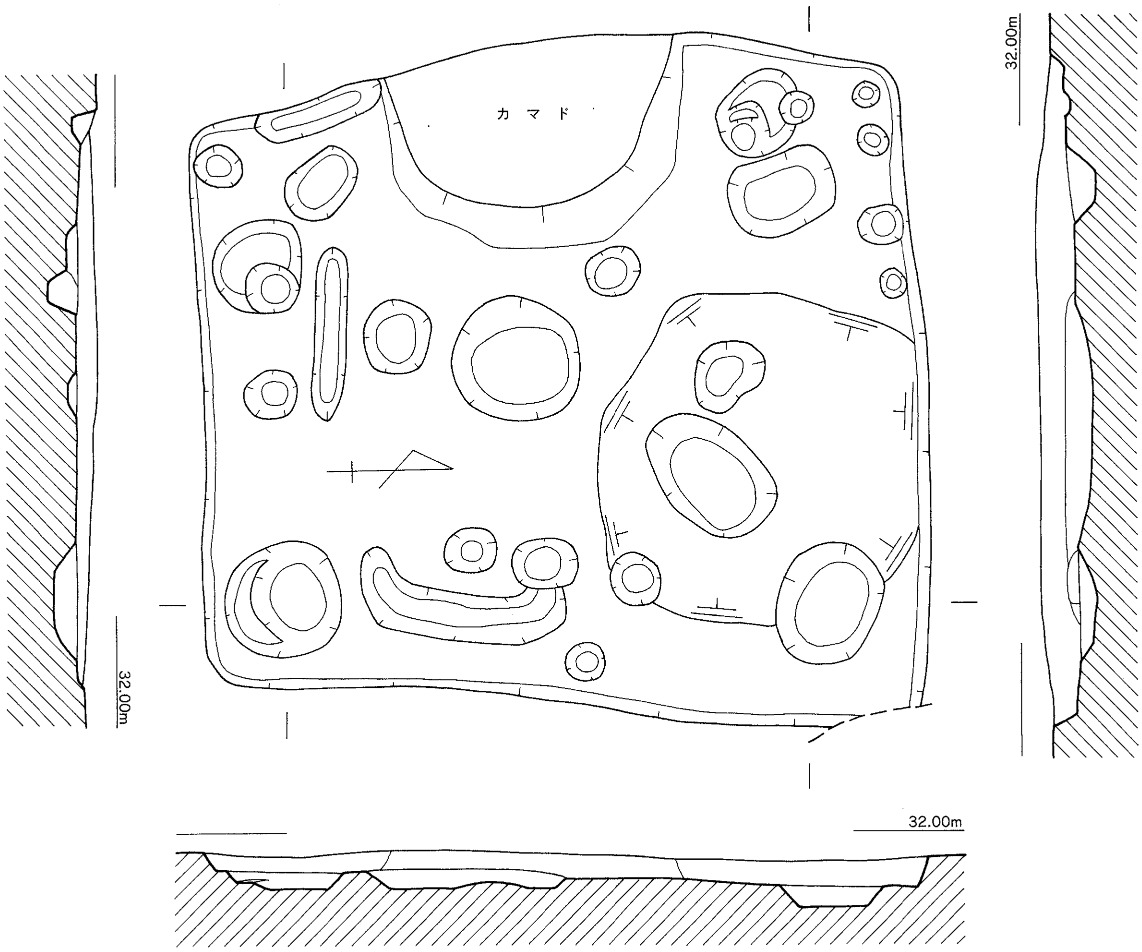


Fig.45　SI233実測図（1/40）

7)－1小形竪穴住居

SI022（Fig.46、PL.17）

SI023、SI024、SI154、SI213、SI391と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東よりで検出された。隅丸長方形のプランを有し、長径1.5+αm、短径1.6m、深さ0.5mを測る。攪乱により一部破壊されている。床面は中央部分を一段掘り窪めている。壁際の周辺には径10cm程度の小ピットが見られる。

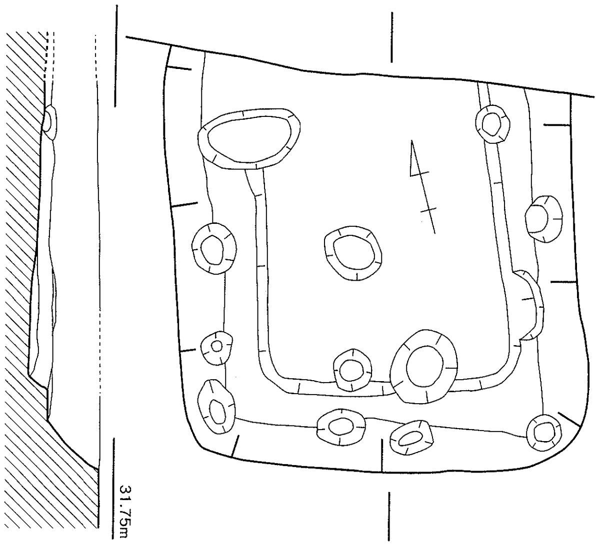


Fig.46　SI022実測図（1/30）

SI022出土遺物（Fig.47、PL.28・49）

095は土師器坏ａである。口径14.5cm、底径8.3cm、器高2.95cmを測る。口縁部を一部欠失するが、ほぼ完形品である。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）～黄橙色（7.5YR7/8）を呈する。底部と体部の境目は不明瞭で、体部は下位に丸みを帯び直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

100は土師器坏ａである。復元口径14.0cm、底径8.3cm、器高3.0cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部は丸みを帯び、底部と体部の境目は不明瞭。体部も丸みを帯びる。調整は、底部～体部外面は雑な回転ヘラミガキ、内面はナデを施す。口縁部内面には煤が付着し、灯明芯も確認でき、灯明器として使用されたものと思われる。

639は土師器坏ｄである。復元口径17.2cm、底径8.1cm、器高3.55cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微量の雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を

呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施している。底部外面周縁と口縁部外面に複数の墨書が確認できるが、判読はできなかった。

618は土師器小皿ａである。復元底径3.0㎝、残存高0.9㎝を測る。底部のみが1/2残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部はヘラ切り痕を残し、それ以外はナデを施す。

102は須恵器坏ａである。復元口径11.4㎝、復元底径7.2㎝、器高2.35㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

096は土師器皿ａである。復元口径18.0㎝、底径15.0㎝、器高2.4㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部はやや丸みを帯びる。調整は摩滅により不明瞭である。

097は土師器皿ａである。復元口径18.0㎝、復元底径14.5㎝、器高1.9㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を施し、口縁部付近には煤が付着する。

098は土師器皿ａである。口径17.9㎝、底径14.4㎝、器高2.2㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部はやや丸みを帯びる。調整はナデを施す。

099は土師器皿ａである。口径16.7㎝、底径13.0㎝、器高1.55㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部には中位に段を有する。器形には歪みが大きい。
調整は、底部外面はナデ、体部内外面は回転ヘラミガキを施す。

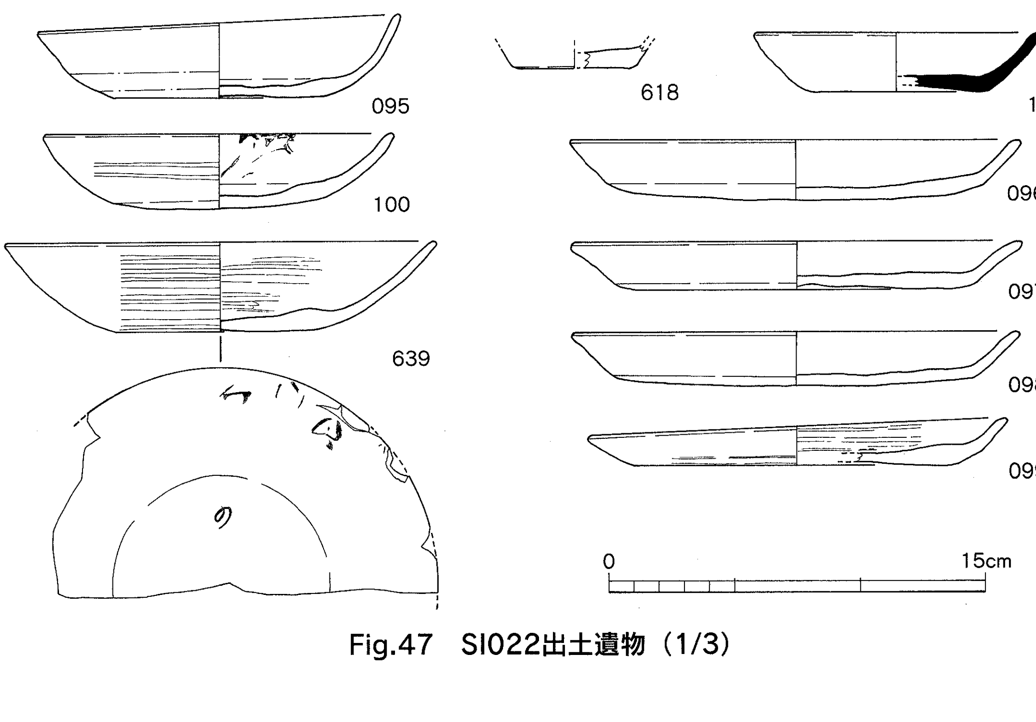


Fig.47　SI022出土遺物（1/3）

SI023（Fig.48、PL.17･49）

SI022、SI024、SI154、SI213、SI391と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東より

で検出された。概ね東西に軸を採る。長径3.0m、短径2.2m、深さ0.35mを測り、プランは隅丸長方形を呈する。床面は概ねフラットであるが、径20～30cm前後の小ピットが床面全域にみられる。建物構造に関係があるのかは不明であるが、柱穴は基本的に伴わない。南側の2ヶ所の隅に浅いピットが一つずつあり、これは上屋に関係する可能性はある。

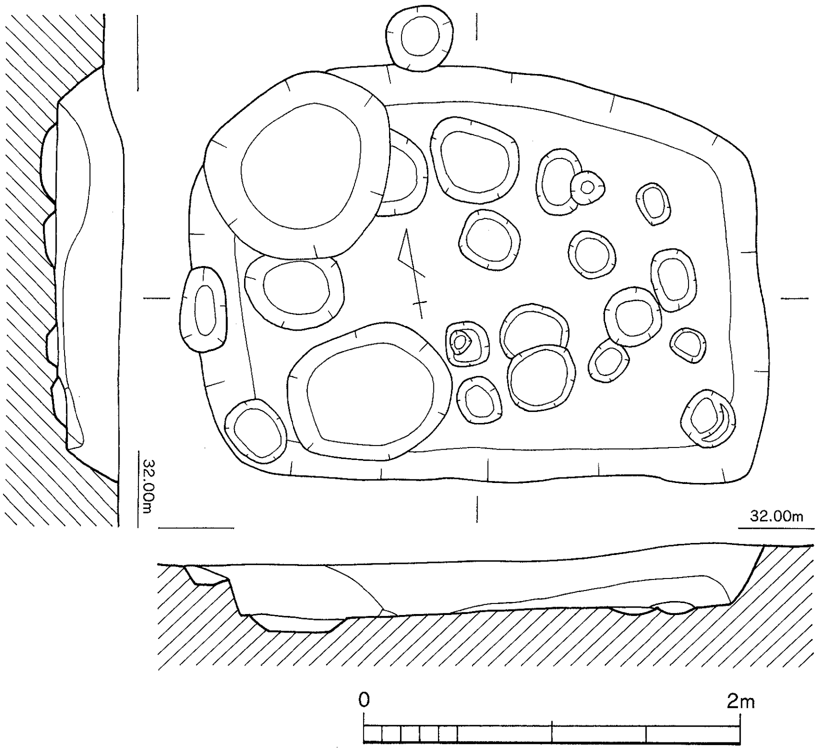


Fig.48　SI023実測図（1/40）

SI023出土遺物（Fig.49、PL.29・30）

122は土師器坏aである。復元口径13.05cm、底径8.35cm、器高3.5cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが段を有する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸みを帯び外側に肥厚する。調整はナデを施す。体部内面には煤が付着しており、灯明器として使用されたものと考えられる。

123は土師器坏aである。口径13.35cm、底径8.75cm、器高3.6cmを測る。口縁部を一部欠失するもののほぼ完形品である。胎土には雲母・赤褐色粒・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部はやや丸みを帯び、底部と体部の境目は不明瞭だが、体部は直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。内面には黒斑が確認できる。

121は土師器坏aである。復元口径13.35cm、底径8.2cm、器高3.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部はやや丸みを帯びながらもほぼ直線的に立ち上がる。調整はナデを施し、底部外面には板状圧痕が残る。

124は土師器坏aである。口径13.0cm、底径6.9cm、器高3.7cmを測る。口縁部の1/2を欠失する。胎土には雲母・赤褐色粒・1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。底部は平坦をなし、体部下位に一段屈曲を有し、体部中位にやや丸みを持ちながらほぼ直線的に立ち上がる。調整はナデを施し、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残す。板状圧痕がある。口縁部内外面は煤が付着している。

641は土師器坏aである。口径13.35cm、底径7.2cm、器高3.35cmを測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には微量の雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を

呈する。底径は小さく、体部は直線的に立ち上がる。底部外面中央に墨書が確認でき、「全」と考えられる。

118は土師器皿ａである。口径14.0㎝、底径11.5㎝、器高1.8㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、そこから一段屈曲して体部は短く立ち上がる。底部はやや丸みを帯びる。調整はナデを施す。

119は土師器皿ａである。復元口径17.2㎝、復元底径13.6㎝、器高1.8㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒。微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に大きく開く。調整は、底部外面はナデ、体部内外面は雑な回転ヘラミガキを施す。

120は土師器蓋ｂである。復元口径13.8㎝、器高3.7㎝、撮み径6.0㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/8）を呈する。天井部は狭いがほぼ平坦をなし、体部との境目付近に輪状撮みが貼付される。撮み部は長く外開きになる。体部は直線的に延び、端面は丸くおさめる。調整はナデを施す。

126は土師器薬壷？である。破片資料であり、残存高3.45㎝を測る。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で内側に鈍く屈折している。調整はナデを施す。

108は土師器椀である。復元口径17.3㎝、残存高6.05㎝を測る。口縁部～体部にかけて1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は不良で、橙色（5YR6/6）を呈する。直線的に立ち上がる体部形状を呈し、口縁部を小さく肥厚させる。見込みは深い。調整はナデを施す。内面には煤が付着している。

116は土師器椀である。口径17.35㎝、器高6.65㎝、高台径10.05㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。体部はやや直線的だが外反ぎみに立ち上がり、短い高台部が貼付される。畳付は水平になる。調整はナデを施し、口縁部外面には黒斑が残る。

114は土師器甕である。口径17.1㎝、胴部最大径16.3㎝、残存高11.75㎝を測る。口縁部～胴部の7/8が残存する。胎土には雲母・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、橙色（5YR6/8）を呈する。胴部の張りは弱く、口縁部に向かってほぼ直線的に立ち上がる。口唇部外面のみを弱く外側に引き出している。調整は、胴部外面は刷毛目後にナデ、内面はヘラケズリ後一部にナデ、口縁部はナデを施す。

125は黒色土器A類椀？である。復元口径16.25㎝、器高5.4㎝、高台径6.35㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。概して底径は小さく、口径は大きく漏斗状に開く体部形態を有し、口縁部付近で弱く外反する。底部と体部の境目付近に断面長方形の端部を弱く外に引き出す高台部が貼付される。端面は水平である。全体的に器肉が薄く、つくりは丁寧である。調整は、体部内面は丁寧な手持ちヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

103は須恵器坏ａである。口径13.55㎝、底径8.4㎝、器高4.1㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色（2.5Y8/2）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。器形の歪みが大きい。調整はナデを施す。

106は須恵器坏ａである。復元口径13.2㎝、復元底径7.0㎝、器高3.75㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には微量の微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。底

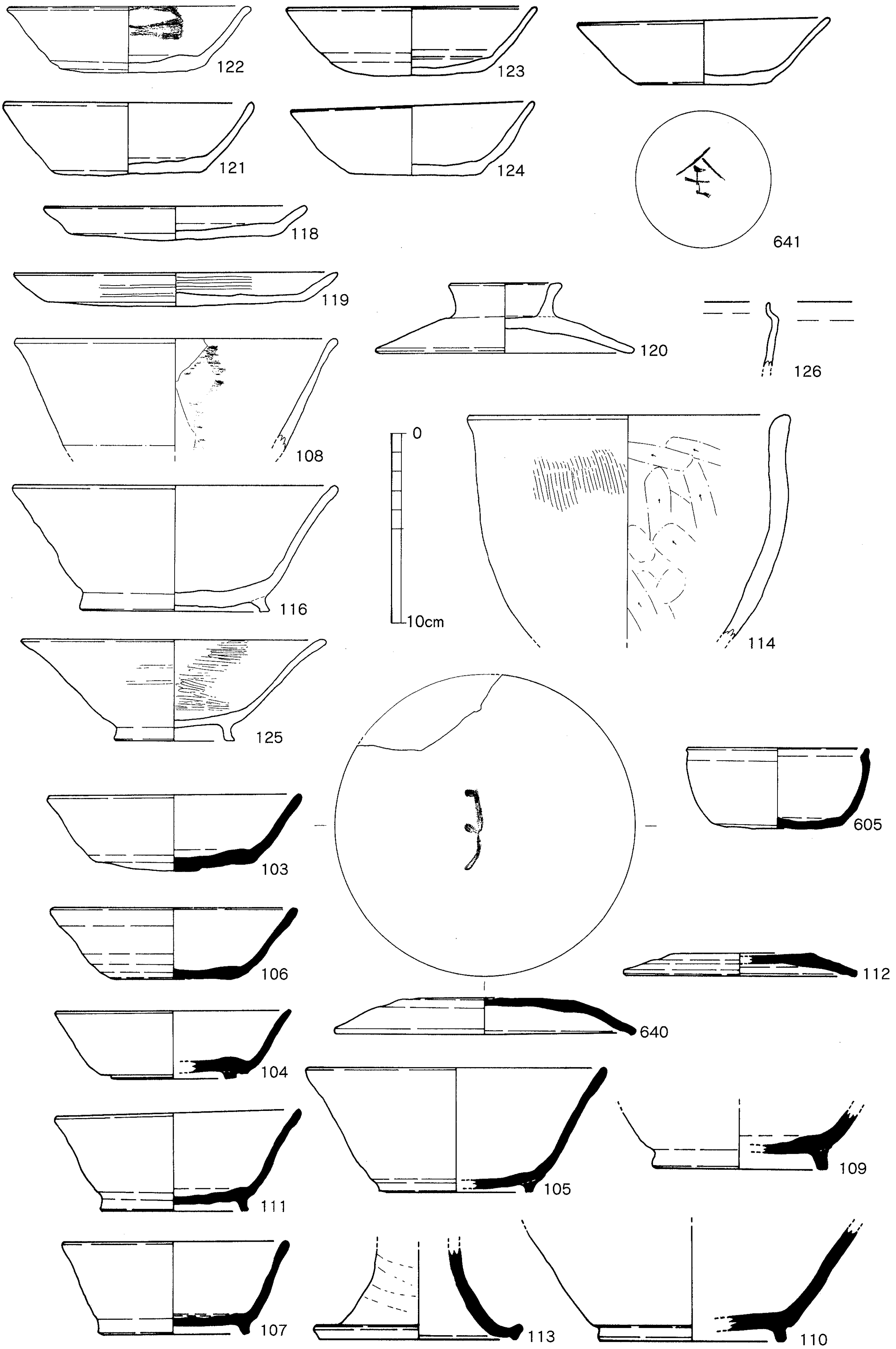


Fig.49　SI023出土遺物（1/3）

部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

104は須恵器坏ｃである。復元口径12.6cm、器高3.55cm、復元高台径6.7cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N6/）～暗灰色（N3/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから5mm程内側に断面逆台形の扁平な高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

111は須恵器坏ｃである。復元口径13.15cm、器高5.25cm、復元高台径7.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。底部と体部の境目付近より3mm程内側に断面長方形の小さな高台部を貼付する。体部はほぼ直線的に立ち上がるが、下位に弱い丸みを有し、上位でやや外反する。調整はナデを施す。器肉は3mm程と非常に薄い。

107は須恵器坏ｃである。口径12.05cm、器高4.95cm、高台径8.0cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。底部と体部の境目付近に断面逆台形の短い高台部が貼付される。体部はそこから直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

105は須恵器坏ｃである。復元口径16.0cm、器高6.65cm、復元高台径8.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、その付近に断面逆台形の小さな高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

110は須恵器坏ｃである。高台部が2/3と体部の一部が残存しており、残存高6.15cm、復元高台径10.0cmを測る。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目付近にやや丸みを帯びた小さな高台が貼付される。体部はそこから直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

109は須恵器坏ｃである。底部のみ2/3が残存しており、残存高3.2cm、高台径9.3cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目付近に断面長方形の高台部が貼付される。高台内はケズリ痕を残すが、それ以外にはナデを施す。

640は須恵器蓋ａ4である。口径16.0cm、器高1.95cmを測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は丸みを帯びつくりが鈍い。調整は全体にナデを施す。天井部外面に墨書が確認でき、数字の「3」のような記号が記されている。意味は不明。

112は須恵器蓋ａ4である。口径12.4cm、器高1.2cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。天井部は低く平坦で、体部との境目は明瞭。口縁端部は三角形が肥厚せず、そのままおさめる。調整はナデを施す。

605は須恵器小鉢？である。口径6.6cm、底径6.6cm、器高4.25cmを測る。口縁部の一部を欠失する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y4/1）を呈する。底部は平底で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁付近で弱く内湾し端部で短く外反させる。調整はヨコナデを施す。

113は須恵器高坏である。脚部下半が残存しており、残存高4.75cm、裾部径10.5cmを測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。形状から短脚のものと推測される。裾部

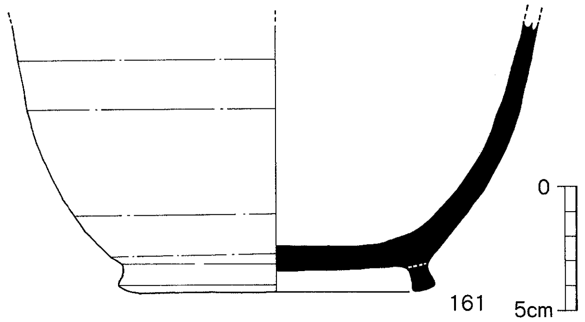


Fig.50　SI023とPit169の接合資料（1/3）

形状はエ類と思われるが、端部は上下2方向に肥厚している。鈍化しており、やや丸い。

SI023とPit169の接合資料（Fig.50、PL.30）

161は須恵器壷である。胴部下半以下が残存しており、残存高10.7㎝、高台径12.6㎝を測る。胎土には0.5㎜以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。胴部は緩やかに丸みを帯び、底部と胴部の境目付近に断面方形の高台部が貼付される。調整は、胴部外面はケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。Pit-169との接合資料である。

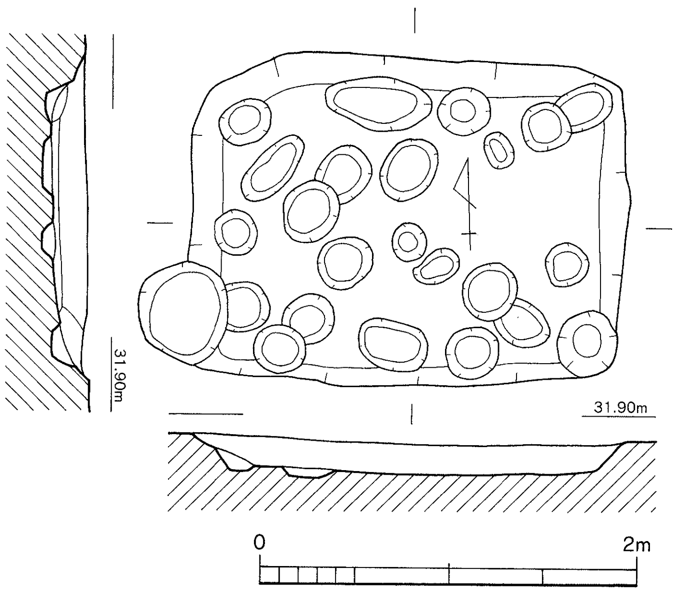


Fig.51　SI024実測図（1/40）

SI024（Fig.51、PL.18）

SI022、SI023、SI154、SI213、SI391と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東よりで検出された。長径2.3ｍ、短径1.7ｍ、深さ0.2ｍを測り、隅丸長方形のプランを呈する。床面はフラットだが、小ピットが床面全体に見られる点はSX023の所見と類似しており、機能を推測する上で興味深い。基本的に柱穴を伴わない点も同様である。

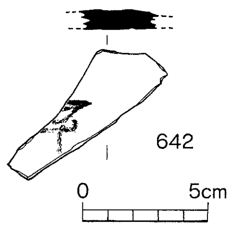


Fig.52　SI024出土遺物（1/3）

SI024出土遺物（Fig.52、PL.28）

642は須恵器坏？である。破片資料であり、残存高0.75㎝を測る。底部片と思われる。胎土には0.5～3㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部外面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

SI154（Fig.53）

SI022、SI023、SI024、I213、SI391と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東よりで検出された。

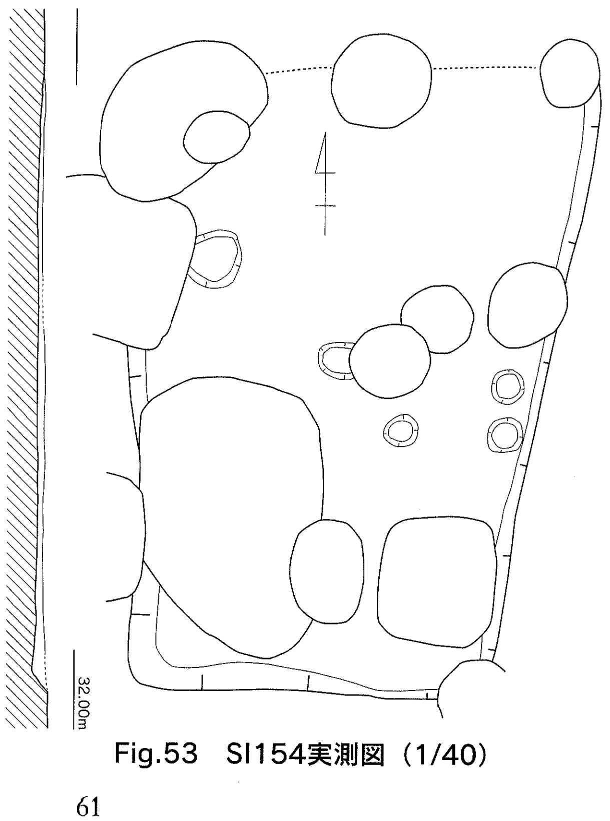


Fig.53　SI154実測図（1/40）

SI209（Fig.54）

やや楕円の隅丸長方形のプランを呈し、長径2.2ｍ、短径1.6ｍ、深さ0.3ｍを測る。床面は概ねフラットである。上場の四隅に径10㎝程度の小ピットを4個配しており、上屋構造に関係するものであると考えられる。また、埋土の堆積は単一層の正層堆積で、床面の硬化や竈などの付帯施設は確認されなかった。

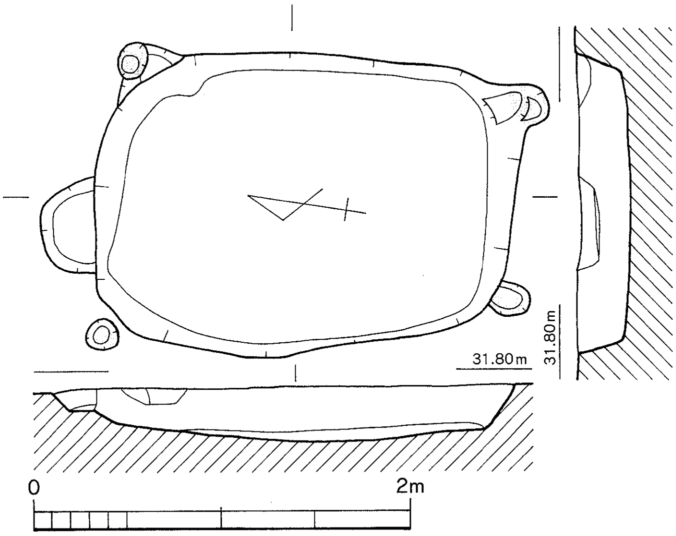


Fig.54　SI209実測図（1/40）

SI209出土遺物（Fig.55）

269は土師器椀である。底部～体部の一部が残存しており、残存高3.1㎝、高台径8.1㎝を測る。胎土には赤褐色粒・微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）～橙色（7.5YR7/6）を呈する。底部は丸みを帯び、見込みはやや凹む。高台部は丸みを帯びる。調整はナデを施す。内面には煤が付着している。

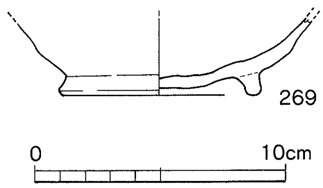


Fig.55　SI209出土遺物（1/3）

SI213（Fig.56、PL.18）

SI022、SI023、SI024、SI154、SI391と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東よりで検出された。調査区の中央付近に位置している。隅丸長方形のプランを有し、長径2.3ｍ、短径1.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。主柱穴を4つ持っており、径25～35㎝、柱痕径20㎝、深さ20㎝である。

SI213出土遺物（Fig.57、PL.30）

276は土師器坏ｃである。口径12.35㎝、器高3.95㎝、高台径8.25㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから3㎜程内側に断面方形の小さな高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整は摩滅により不明瞭である。

277は土師器坏ａである。口径13.7㎝、底径9.4㎝、器高3.95㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、体部下位にはケズリ痕を残し、それ以外にはナデを施す。

278は土師器坏ａである。口径13.9㎝、底径9.95㎝、器高3.9㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だがやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

279は土師器坏ａである。口径13.45㎝、底径10.5㎝、器高3.25㎝を測る。口縁部の1/4を欠失する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だがやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。体部外面に黒斑が認められる。

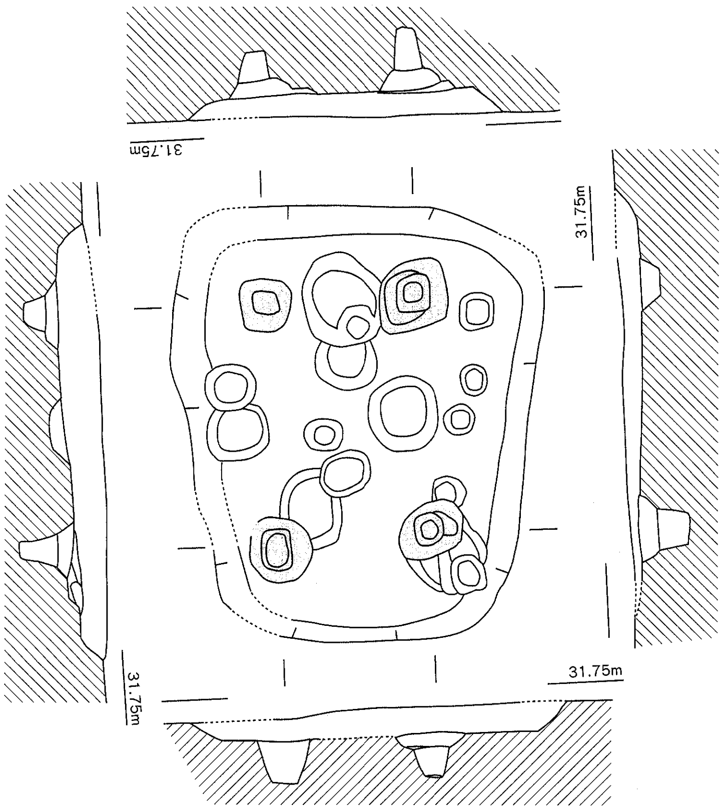


Fig.56　SI213実測図（1/40）

274は須恵器坏ｃである。復元口径12.4㎝、器高4.25㎝、高台径7.5㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから5㎜程内側に断面方形の高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がり、見込みはやや凹む。調整はナデを施す。

275は須恵器坏ｃである。復元口径14.5㎝、器高4.75㎝、復元高台径9.2㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから1㎝程内側に断面偏方形の高台部が貼付される。畳付は外方を向く。体部下位に丸みを有し、中位から直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

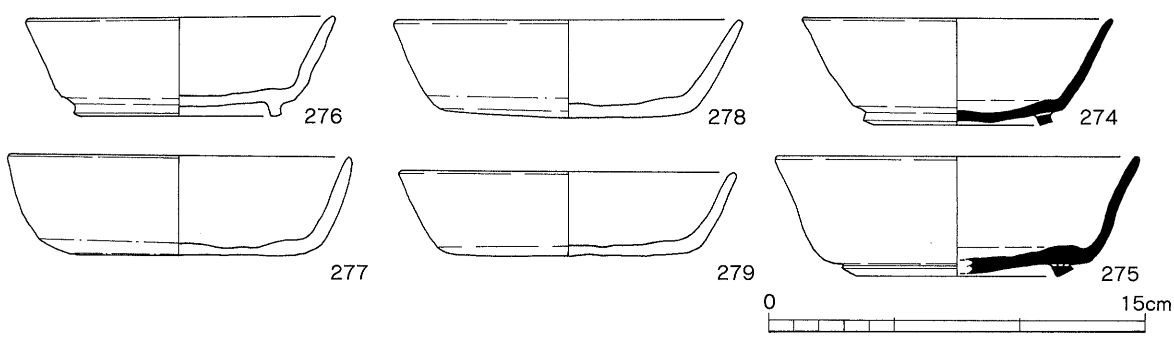


Fig.57　SI213出土遺物（1/3）

SI237（Fig.58、PL.19）

東西に軸を採る。隅丸長方形のプランを有し、長径1.9m、短径1.45m、深さ0.4mを測る。床面はフラットである。遺構の周辺には11個の径10cm程度の小ピットが、概ね円形の配置をとりながらランダムに並んでいる。床面の硬化や竈などの付帯施設は確認されなかったが、南東隅で被熱箇所が認められ、壁面まで3～5cmの厚さで焼土層が見られ、移動式竈が設置されていた可能性が考えられる。

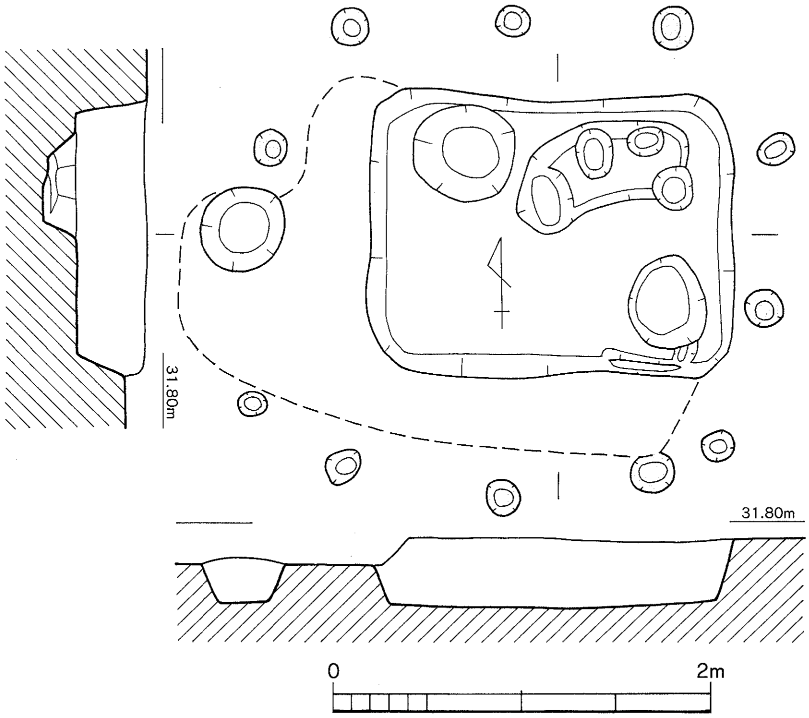


Fig.58　SI237実測図（1/40）

SI237出土遺物（Fig.59）

654は須恵器坏or皿である。破片資料であり、残存高0.6cmを測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。墨書が確認できるが、判読はできなかった。

480は土師器高坏ｂである。残存高11.6cm、復元裾部径12.4cmを測る。坏底部の一部と脚部が残存する。脚部は長脚のもので、脚部下位で内側に弱く屈折する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）～明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。摩滅が著しいため、調整は不明。

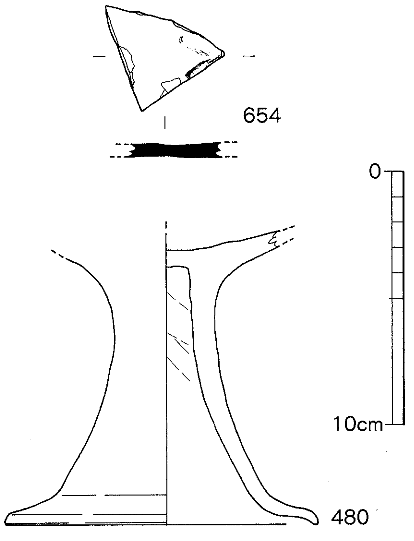


Fig.59　SI237出土遺物（1/3）

SI398（Fig.60）

SI022、SI023、SI024、SI154、SI213と同一の群と考えられ、調査区中央のやや東よりで検出された。隅丸長方形のプランを呈し、長径1.8m、短径1.25m、深さ0.05～0.1mを測る。非常に遺存状況が悪い。床面はフラットで、基本的に柱穴を伴わないが、周辺にあるピットが上屋構造に関係してくる可能性はある。

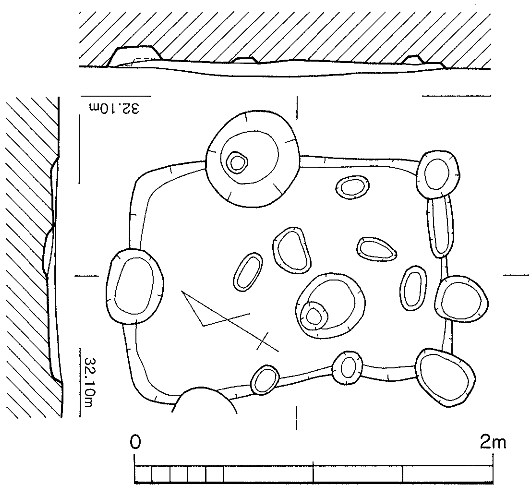


Fig.60　SI391実測図（1/40）

8)SK（土坑）

SK005（Fig.61）

調査時は墳墓の可能性も考慮したが、堆積土層や遺物の出土状況などから土坑として分類した。プランは隅丸長方形を呈する。長径2.1m、短径0.8m、深さ0.2～0.35mを測る。

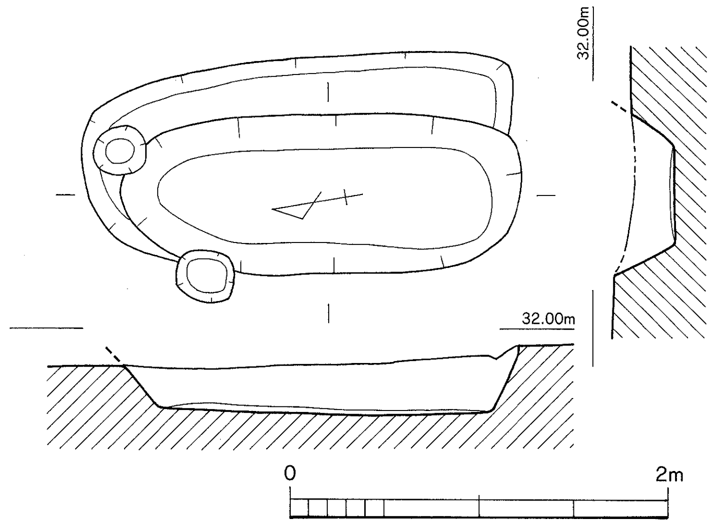


Fig.61　SK005実測図（1/40）

SK005出土遺物（Fig.62、PL.31）

059は土師器坏ｄである。復元口径13.6cm、底径7.9cm、器高3.0cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。体部は直線的な形状を呈するが、底径が小さく、さらに全体的なプロポーションから坏ｄに分類した。調整はナデを施す。

060は土師器皿ａである。復元口径15.4cm、底径12.8cm、器高2.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微量の雲母を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。底部はやや丸みを帯び、体部との境目は不明瞭である。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

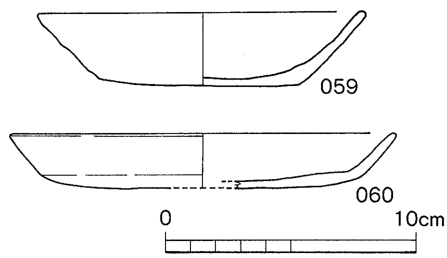


Fig.62　SK005出土遺物（1/3）

SK006（Fig.63）

調査区中央付近の南側に位置する土坑である。調査区の境界にあるため、半分しか掘削できなかった。プランは1.6～1.7mの隅丸方形を呈し、深さは0.5mを測る。

SK007（Fig.64）

調査区中央付近の南側に位置する土坑である。直径1.5mの円形を呈し、床面には長楕円形の掘り込みがある。深さは0.5mを測る。中央付近の掘り込みの深さは約0.2m程である。基本的に同一遺構であると考えられるが、性格は不明である。

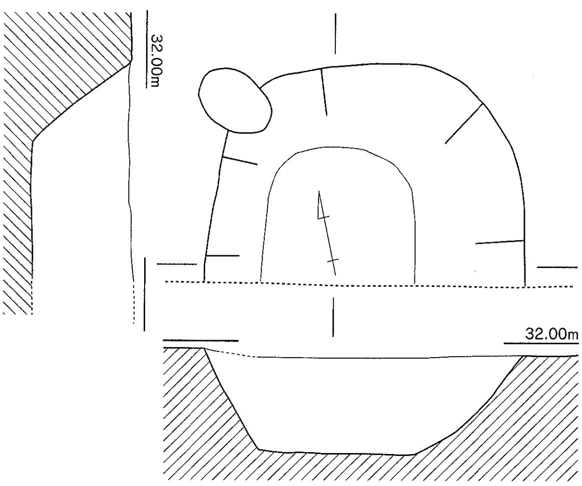


Fig.63　SK006実測図（1/40）

SK008（Fig.65）

調査区中央付近に位置する楕円形の土坑である。長径3.7ｍ、短径2.2ｍ、深さ0.65～0.8ｍを測り、比較的大きなもので、遺物は小片が多くみられる。主軸はほぼ東西を向いている。

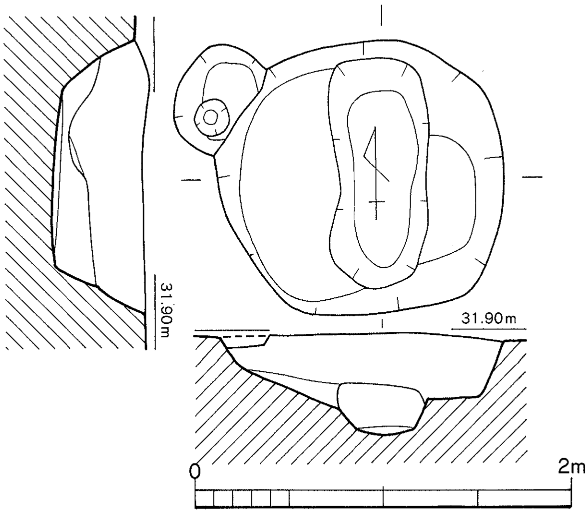


Fig.64　SK007実測図（1/40）

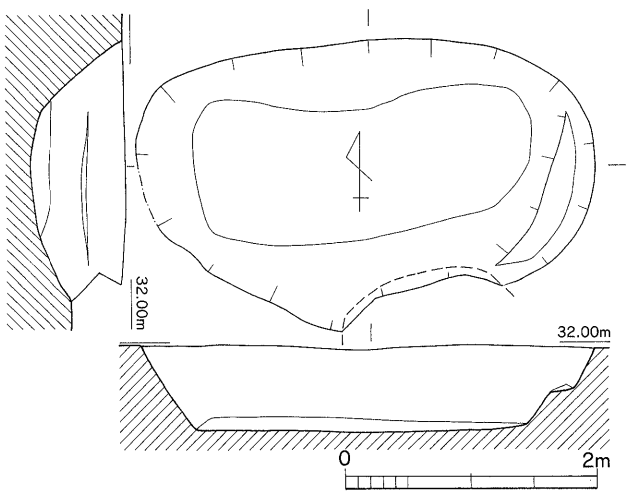


Fig.65　SK008実測図（1/60）

SK008出土遺物（Fig.66、PL.31）

065は土師器？坏ａである。復元口径13.95㎝、底径9.8㎝、器高3.25㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は摩滅により不明瞭である。

068は土師器坏ｄである。復元口径14.6㎝、底径8.0㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂から㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、体部内外面は雑な回転ヘラミガキを施す。

632は須恵器蓋ｃ4である。復元口径14.3㎝、器高1.75㎝、撮み径1.7㎝を測る。口縁部のみ1/6を欠失する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部はあまり肥厚せず丸みを帯びる。撮みは低い釦状を呈する。天井部はケズリ痕跡をそのまま残す。

064は須恵器坏ｃである。復元口径13.85㎝、器高3.8㎝、高台径8.1㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから1㎝程内側に断面方形の小さな高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

063は須恵器壷である。底部～胴部が1/2残存しており、残存高6.05㎝、復元高台径10.0㎝を測る。胎土には微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。高台部はやや細長く畳付外面を弱く引き出す。底部と体部の境目付近に貼付される。

062は須恵器壷である。底部のみが1/2残存しており、残存高4.15㎝、復元高台径12.0㎝を測る。胎土には微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。高台部は断面方形で、底部と胴部の境目付近に貼付される。内底部には墨痕が確認できる。

066は須恵器皿ａである。復元口径24.2㎝、底径15.7㎝、器高4.1㎝を測る。全体の3/4が

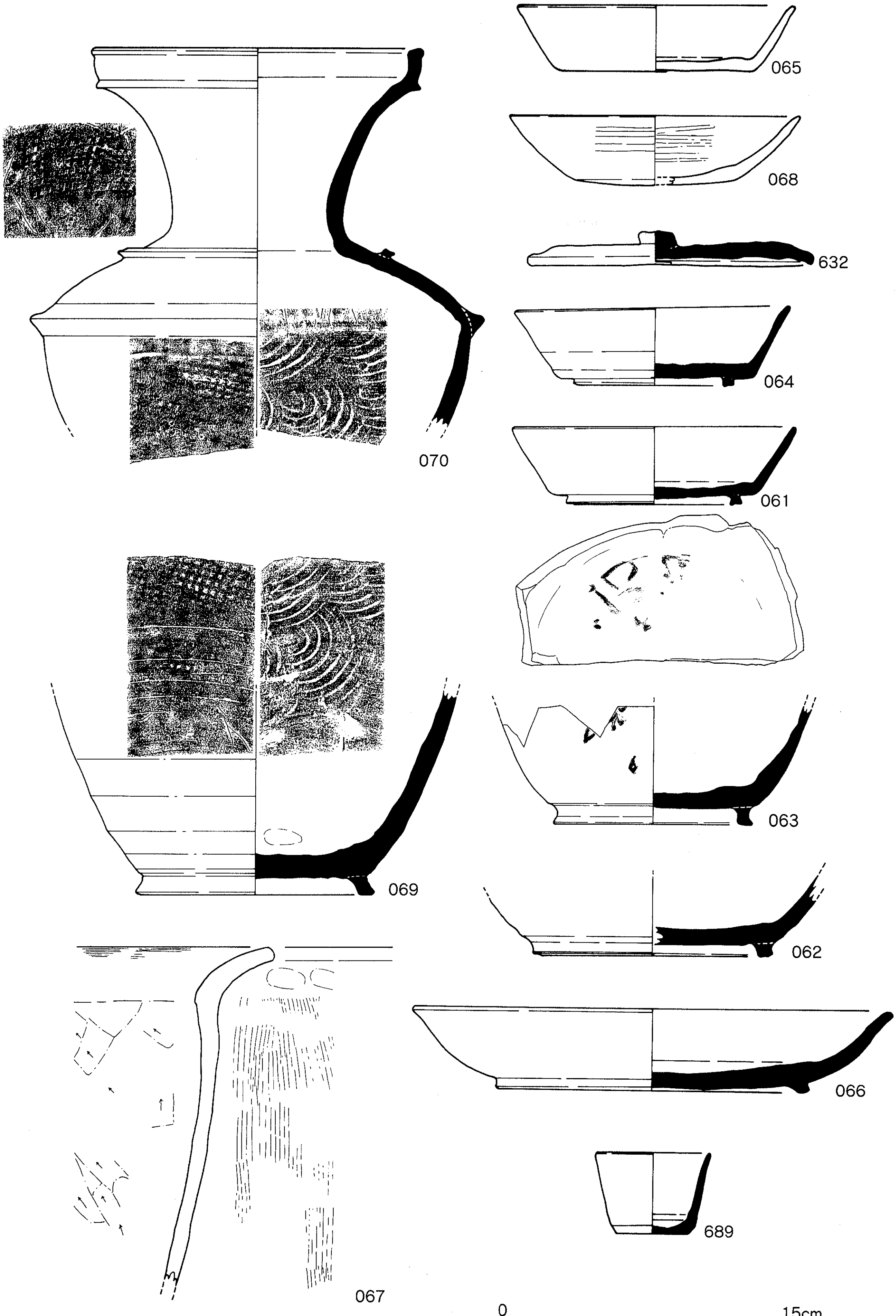


Fig.66　SK008出土遺物（1/3）

残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は不良で、白灰色（5Y7/1）～灰色（5Y5/1）を呈する。底部と底部の境目は丸みを帯び、その付近に短く小さい高台部がハの字状に貼付される。丸みは体部中位にあり、器肉はやや厚い。

689は須恵器の枡状製品である。復元口径5.8cm、底径3.6cm、器高4.1cm。丁寧なナデによって仕上げられている。

061は須恵器坏ｃである。復元口径14.3cm、器高3.95cm、復元高台径8.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、その6mm程内側に小さな方形の高台が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。

070は須恵器壷ｅである。復元口径16.7cm、復元胴部最大径22.9cm、残存高18.9cm、頸部径8.6cmを測る。胴部～頸部と口縁部の1/4が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い赤褐色（2.5YR4/4）～黄灰色（2.5Y5/1）、内面は暗灰黄色（2.5Y5/1）を呈する。胴部形状は算盤玉状を呈し、胴部中位（断面三角形状）と上位（断面三角形～方形状）の2ヶ所に突帯が付される。口縁部は二重口縁を呈し、端部は丸くおさめる。口縁部～頸部内外面と胴部外面にナデを施し、胴部の一部に格子状タタキの痕跡が残る。胴部内面は青海波の当て具痕が残る。

069は須恵器壺である。体部上半以上を欠失しており、残存高10.3cm、復元高台径12.0cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良好で、外面は褐色（7.5YR4/3）～黄灰色（2.5Y6/1）、内面は暗黄灰色（2.5Y5/2）を呈する。調整は、外面は高台部のみナデ、体部中位はタタキ、高台脇と高台内はケズリを残す。内面は体部に青海波の当て具痕、底部に指頭圧痕を残す。

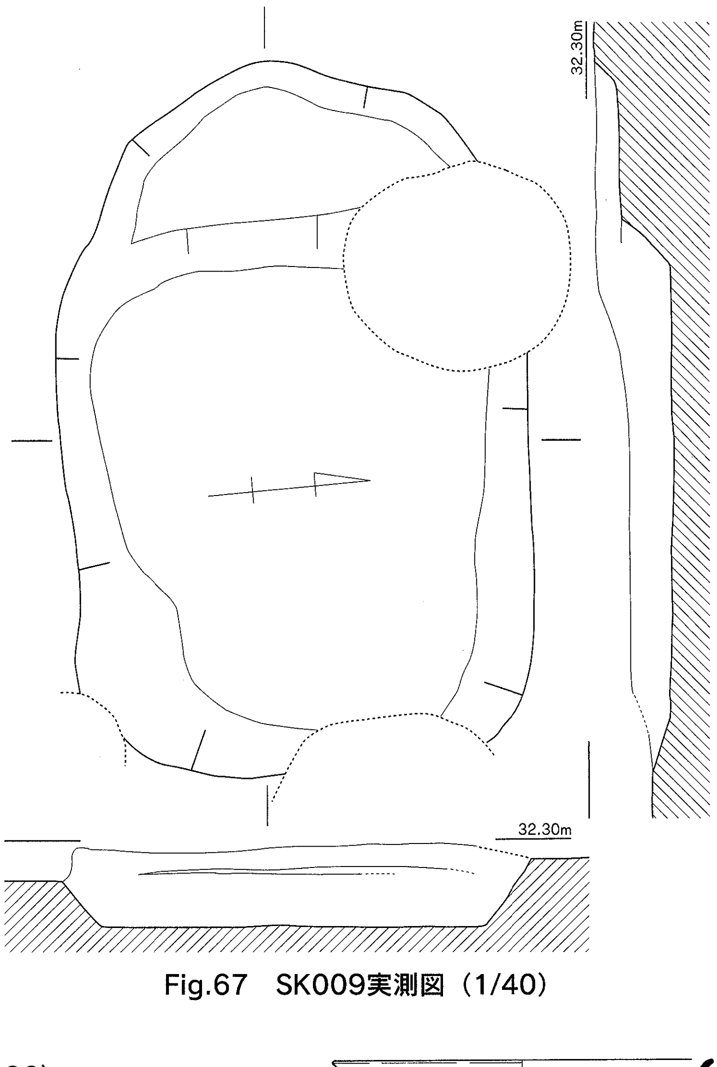


Fig.67　SK009実測図（1/40）

SK009（Fig.67）

調査区の南西端で検出された大形の土坑である。長径3.8m、短径2.5m、深さ0.5mを測り、プランは楕円形である。

SK009出土遺物（Fig.68、PL.32）

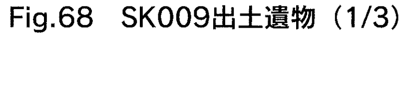


Fig.68　SK009出土遺物（1/3）

072は須恵器坏ｃである。復元口径15.2cm、器高3.3cm、復元高台径9.9cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は

良く、灰色（5Y6/1）を呈する。形状は器高が低く、皿に近い。底部と体部の境目は丸みを帯び、そこから1cm程内側に断面方形の高台部が貼付される。口縁部は弱く外反する。調整はナデを施す。

SK010（Fig.69）

調査区の南西端で一部分が検出された。土坑として扱っているが、堀方が深く井戸の可能性がある。調査範囲が限定されるため、詳細は不明である。

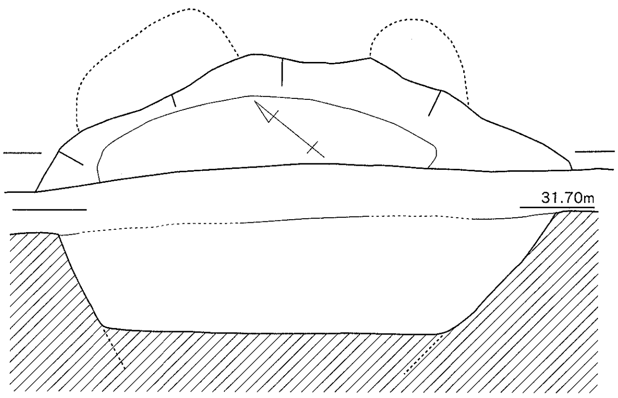


Fig.69　SK010実測図（1/40）

SK010出土遺物（Fig.70、PL.32）

071は須恵器坏cである。復元口径15.7cm、器高5.8cm、復元高台径8.9cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから1cm程内側に断面方形で丸みを帯びた高台部を貼付する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。調整はナデを施す。

252は土師器甕である。復元口径18.0cm、胴部最大径16.3cm、残存高8.2cmを測る。口縁部～胴部にかけて1/3が残存する。胎土には雲母・角閃石・微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（2.5YR5/8）～橙色（5YR6/8）を呈する。胴部は弱く丸みを帯び、口縁部を強く肥厚させて外反する。調整は、胴部外面は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。

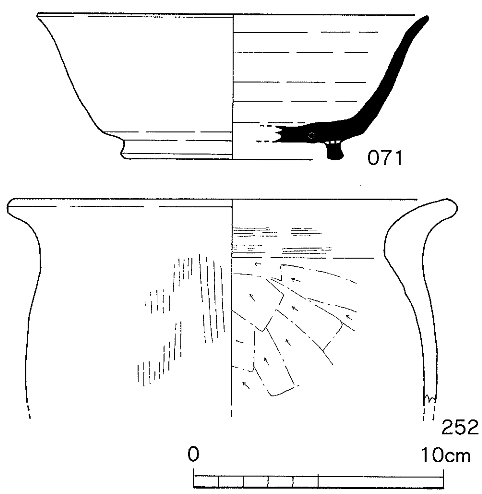


Fig.70　SK010出土遺物（1/3）

SK027（Fig.71）

楕円形に近い隅丸三角形状のプランを呈する土坑で、長径2.8m、短径1.95m、深さ0.3mを測る。床面は概ねフラットだが、東側が幾分かテラス状になる。

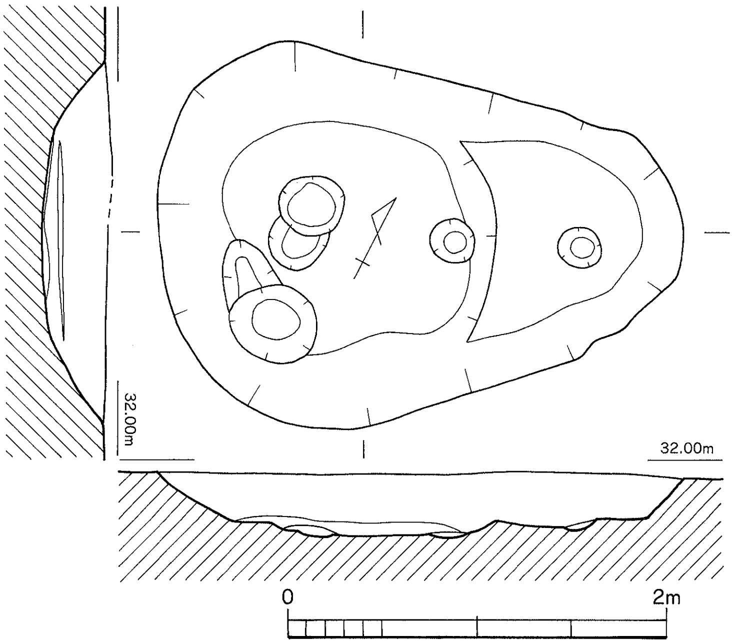


Fig.71　SK027実測図（1/40）

SK027出土遺物（Fig.72、PL.32）

145は土師器坏ａである。復元口径13.2㎝、復元底径9.5㎝、器高3.35㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微量の赤褐色粒を含む。焼成はやや不良で、橙色（5YR7/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが、体部下位で丸みを持つ。体部は直線的。調整は摩滅により不明瞭である。

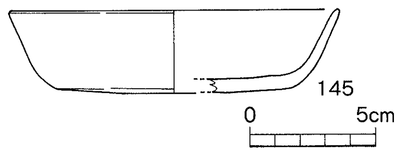


Fig.72　SK027出土遺物（1/3）

SK028（Fig.73）

調査区の中央付近やや東寄りに位置する楕円形プランの土坑である。長径1.75m、短径0.85m、深さ0.15mを測る。

SK028出土遺物（Fig.74）

643は須恵器蓋である。破片資料であり、残存高1.2㎝を測る。胎土には微量の微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y5/1）を呈する。天井部外面に墨書が確認できる。「川」のように3本の線が見えるが、判読はできなかった。

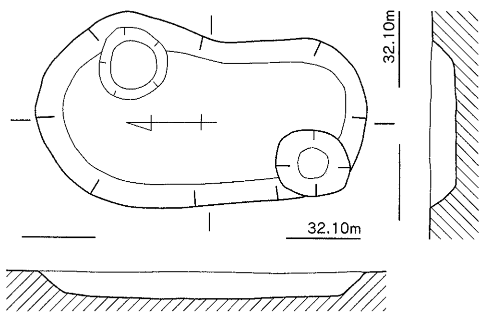


Fig.73　SK028実測図（1/40）

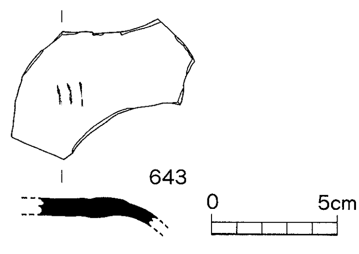


Fig.74　SK028出土遺物（1/3）

SK029（Fig.75）

SK030を切る。楕円形プランを呈するものと解されるが、建物基礎の攪乱により北側半分を破壊されている。長径1.7m、短径0.5m＋α（復元約1.0m）、深さ0.5mを測り、床面はフラットである。

SK029出土遺物（Fig.76、PL.32）

146は土師器坏aである。復元口径12.1㎝、復元底径8.8㎝、器高3.9㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5㎜以下の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。底部はやや丸みを帯び、底部と体部に境目に一段屈曲を有する。体部はほぼ直線的に立ち上がるが、中位に緩やかに丸みを持つ。調整はナデを施す。口縁部内面～体部外面にかけて煤が付着している。

601は鞴羽口である。胎土には0.5～1㎜程の砂粒・3㎜程の小石を多く含む。焼成は良く、外面は灰色、内面は鈍い黄橙色（10YR6/3）を呈する。調整は外面のみナデを施し、内面は未調整。残存長は5.5×4.6㎝を測る。

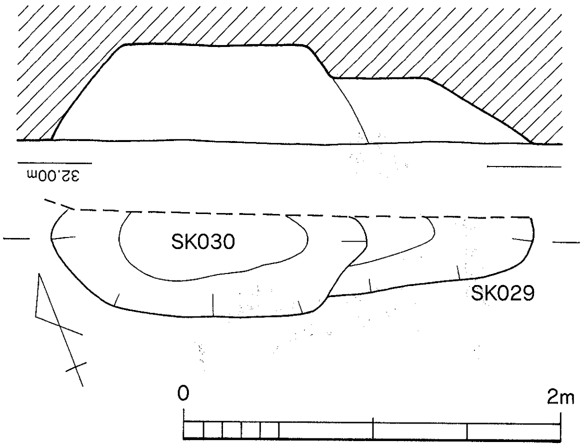


Fig.75　SK029･SK030実測図（1/40）

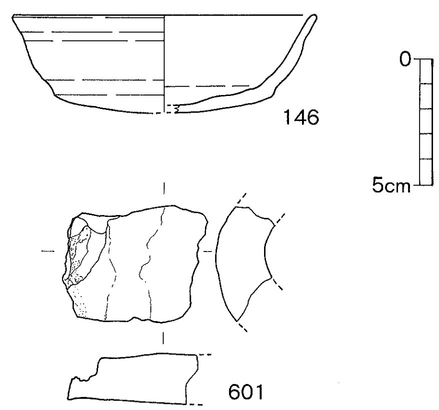


Fig.76　SK029出土遺物（1/3）

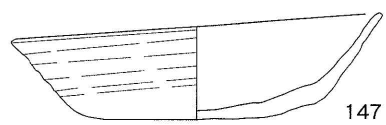


Fig.77　SK030出土遺物（1/3）

SK030（Fig.75）

SK029に切られている。SK029と同様に北側半分が攪乱されており、さらにSK029に切られているために全体の1/4程度しか遺存していない。深さは0.35mを測る。

SK030出土遺物（Fig.77）

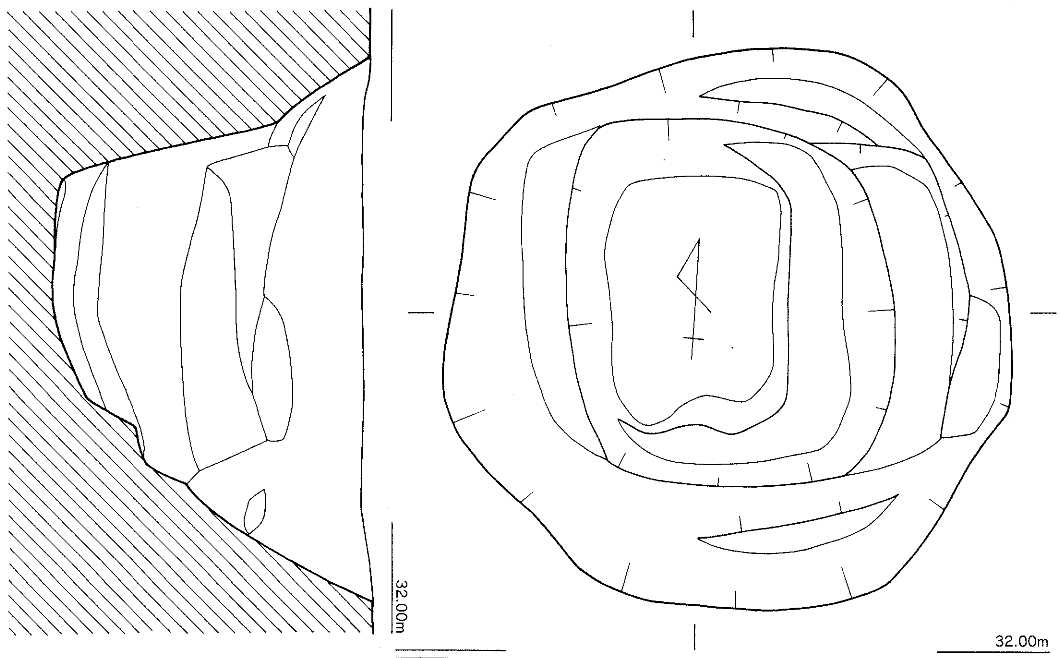
147は土師器坏aである。口径14.8㎝、底径9.35㎝、器高3.7㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。口縁部内面と体部外面に煤が付着している。

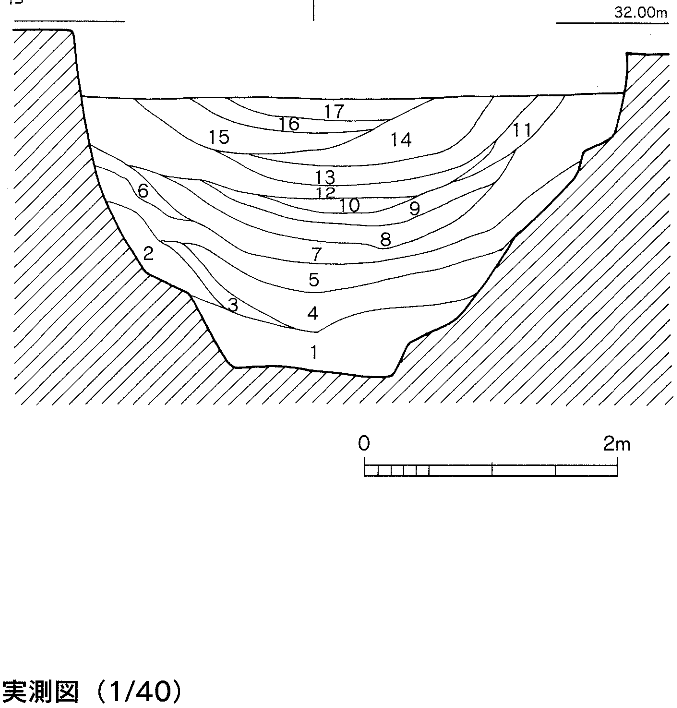
SK088（Fig.78、PL.14）

円形（隅丸八角形状）のプランを持ち、径3.0m、深さ1.65mを測る。当初、井戸と考えて調査していたが、土層の堆積状況や床面が地山の黄褐色粘質土下にある砂層・粗砂層に達していない点、井戸枠の痕跡が確認されていない点などから土坑と分類した。土層の堆積はレンズ状の純堆積を呈し、上層付近に遺物が多くみられる。土層の堆積はレンズ状の純堆積を呈し、上層付近に遺物が多くみられる。

SK088出土遺物（土師器など）（Fig.79、PL.32～35）

206は土師器蓋ｃ3エである。口径20.1㎝、器高2.4㎝、撮み径2.25㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。天井部は低く平坦で、体部は丸みを持つ。口縁部は三角形があまり肥厚せず、内面にわずかに凹みをつける。撮みは低い釦状を呈する。調整は、撮み部以外はヘラミガキを施す。





土層番号	色番号	土質	備考
1	10YR3/1	粘質土	(10YR5/6)塊多く混じる。
2	10YR5/4	粘質土	くすんだ土。黒色土が部分的に混じる。
3	10YR3/2	粘質土	(10YR5/4)塊含む。部分的に砂の塊が混在する。
4	10YR2/3	粘質土	(10YR1.7/1)、(10YR5/6)塊混じる。締まりよく、不均一に混じる。
5	10YR2/3	粘質土	4層に似るが、(10YR5/6)塊は少なく、所々に砂が層状に堆積する。
6	10YR4/2	粘質土	2層と似る。
7	10YR3/2	粘質土	
8	10YR2/1	粘質土	(10YR5/2～5/3)塊を含む。
9	10YR4/2	混合土	(10YR4/2)ベースに(10YR5/4)塊＋焼土塊が混じる。
10	10YR3/2	混合土	砂礫が混じる。
11	10YR5/1	粘質土	(10YR5/1)ベースに(10YR3/3)塊＋焼土塊が混じる。
12	10YR4/1		(10YR4/1)ベースに微量の焼土塊＋炭化物を含む。
13	10YR4/2	粘質土	締まりよく、極めが細かい。
14	10YR5/6	混合土	(10YR5/6)ベースに(10YR5/1)＋(10YR4/4)塊が混じる。灰層あり。
15	10YR3/2	砂質土	微量の(10YR6/6)粒、砂粒を含む。
16		混合土	砂ベースに微量の(10YR5/4)粒を含む。
17	10YR3/2	粘質土	

Fig.78　SK088実測図（1/40）

183は土師器坏ｄである。復元口径17.0cm、復元底径8.6cm、器高3.7cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には赤褐色粒・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。調整は内外面ともに回転ヘラミガキを施すが、底部外面はケズリ痕をそのまま残す。

184は土師器坏ｄである。復元口径16.8cm、復元底径8.3cm、残存高3.7cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施す。

182は土師器坏ｄである。口径19.1cm、底径8.75cm、器高3.9cmを測る。全体の4/5が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。調整は内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施す。

172は土師器坏ｃである。復元口径17.6cm、器高6.75cm、復元高台径11.4cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、その付近に断面長方形の小さな高台部が貼付される。畳付部は丸い。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施すが、高台脇のみケズリ痕をそのまま残す。

173は土師器高坏ｂである。坏部を欠失しており、残存高12.7cm、復元裾部径13.7cmを測る。胎土には角閃石・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。裾部形状は下方に三角形状に折り返しており、エ類に該当するが、端面は丸みを帯びる。調整はナデを施す。

213は製塩土器である。復元口径13.2cm、器高6.1cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い橙色（7.5YR7/4）、内面は橙色（7.5YR7/6）を呈する。形状は逆三角形状を呈するが、体部中位で屈折し、そこから大きく外方に開く。調整は、外面はナデ、内面は布目痕が残る。外面には指頭圧痕が顕著に残る。

214は製塩土器である。復元口径13.3cm、残存高6.1cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈する。形状は逆三角形状を呈するが、体部中位で屈折し、そこから外方に開く。調整は、外面はナデ、内面は布目痕が残る。外面上半には指頭圧痕が残る。

215は製塩土器である。残存高5.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は淡橙色（5YR8/4）。内面は橙色（5YR7/6）を呈する。形状は逆三角形状を呈する。摩滅が著しく、調整は不明である。

151は土師器甕である。復元口径29.5cm、胴部最大径24.2cm、残存高21.7cmを測る。口縁部～胴部の1/3が残存する。胎土には雲母・0.5～3mm程の砂粒を多く含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/4）～橙色（7.5YR7/6）を呈する。胴部は緩やかに丸みを持ち、口縁部で強く外反する。調整は、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。内外面ともに煤が付着している。

156は土師器甕である。口径15.9cm、胴部最大径13.35cm、器高11.7cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には0.5～3mm程の砂粒を多く含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。胴部形状は概ね球状を呈するが、体部は直線的で、口縁部の折り返しも弱い。調整は、胴部外面は刷毛目の後にナデ、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。

158は土師器甕である。復元口径19.2cm、胴部最大径16.0cm、残存高6.6cmを測る。口縁部～胴部上半にかけて1/3が残存する。胎土には雲母・0.5～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。胴部の張りは弱く、胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は直線的に外反している。調整は、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。

160は土師器甕である。復元口径25.5cm、胴部最大径23.0cm、残存高14.4cmを測る。口縁

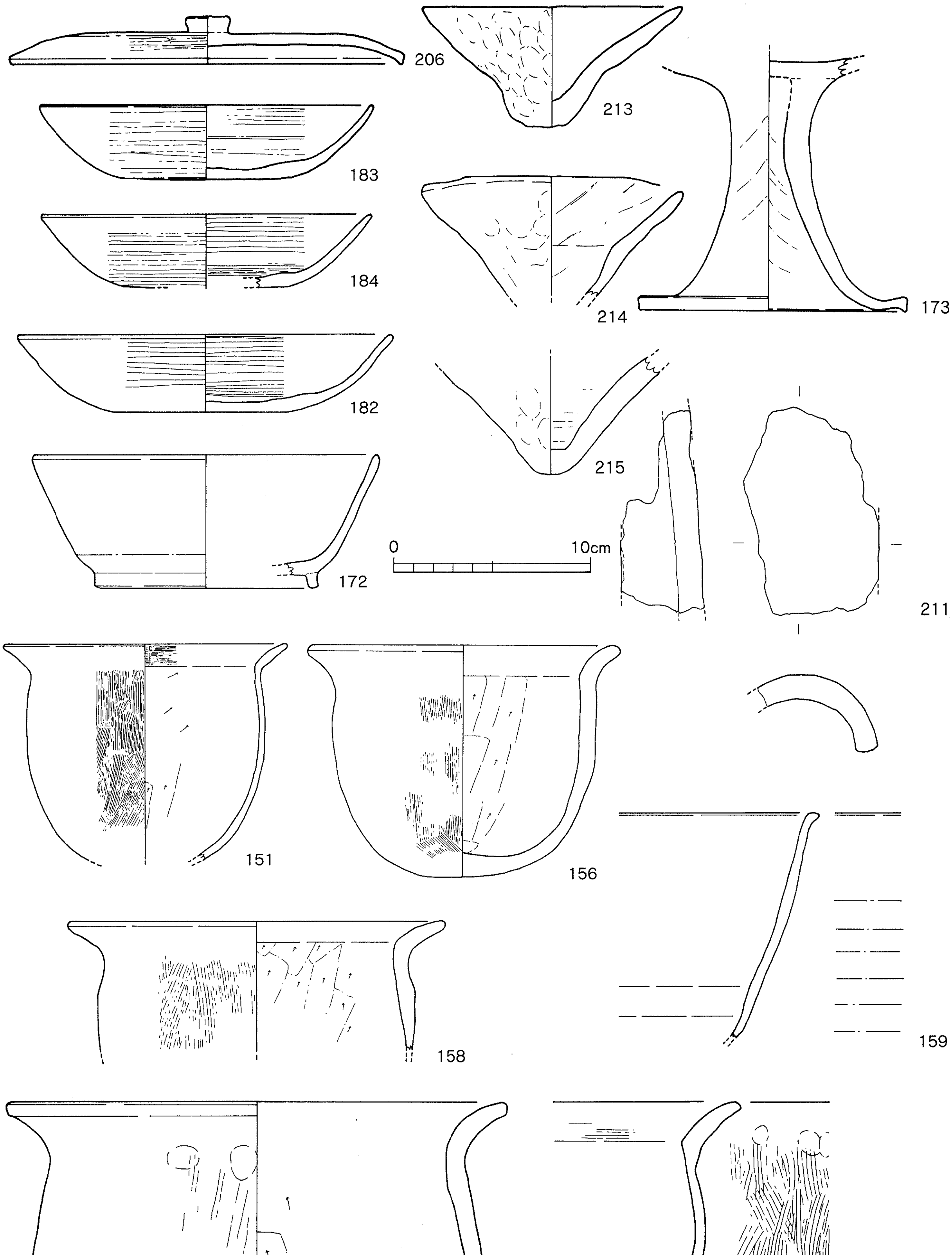


Fig.79　SK088出土遺物（土師器など）（1/3）

部～胴部にかけて1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い黄橙色（10YR7/3）、内面は鈍い黄橙色（10YR5/3）を呈する。胴部の張りは弱く直線的で、口縁部は大きく外反する。調整は、口縁部内外面はナデ、胴部外面は刷毛目、内面はケズリ痕を残す。

149は土師器甕である。全体の1/4が残存しており、残存高13.0㎝を測る。胎土には雲母・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。胴部は概ね球状を呈するものと思われ、口縁部で強く外反する。調整は、胴部外面は刷毛目、それ以外はナデを施す。

159は土師器鉢ｂである。口縁部～胴部にかけて1/6が残存しており、残存高11.4㎝を測る。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）を呈する。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯び外側をわずかに肥厚させる。調整は、体部外面はケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。器肉はやや薄い。

211は丸瓦である。破片資料で、残存長20.9㎝、高さ8.45㎝、残存幅13.6㎝、厚さ2.8㎝を測る。胎土には1～4㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（10YR8/1）を呈する。調整は、外面はタタキ後ナデ、内面は布目痕を残す。側端面は面取りしているが、形状は不明。

SK088出土遺物（須恵器）（Fig.80、PL.32～35）

190は須恵器坏ａである。復元口径13.2㎝、復元底径9.6㎝、器高3.25㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

196は須恵器坏ａである。口径14.2㎝、底径8.75㎝、器高3.1㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

178は須恵器坏ａである。復元口径13.2㎝、底径10.4㎝、器高3.4㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は不良で、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

198は須恵器坏ａである。復元口径12.6㎝、復元底径9.4㎝、器高3.65㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は不良で、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

199は須恵器坏ａである。口径13.8㎝、底径10.0㎝、器高3.85㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部は平坦だがやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

200は須恵器坏ａである。復元口径13.1㎝、底径9.75㎝、器高4.1㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微細な雲母・0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（5Y8/1～7/1）を呈する。底部はやや丸みを帯び、底部と体部の境目は明瞭である。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。体部外面には煤が付着している。

166は須恵器坏ｃである。復元口径13.2㎝、器高4.15㎝、復元高台径8.5㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。底部と体部の境目より5㎜程内側に断面方形の小さい高台部が貼付される。体部はほぼ直線的だが緩やかに外反する。調整はナデを施す。

168は須恵器坏ｃである。復元口径14.2㎝、器高4.05㎝、高台径8.8㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂・微量の2～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（7.5Y5/1）、内面は灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが丸みを帯び、そこから5㎜程内側に扁平な断面逆台形の高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調

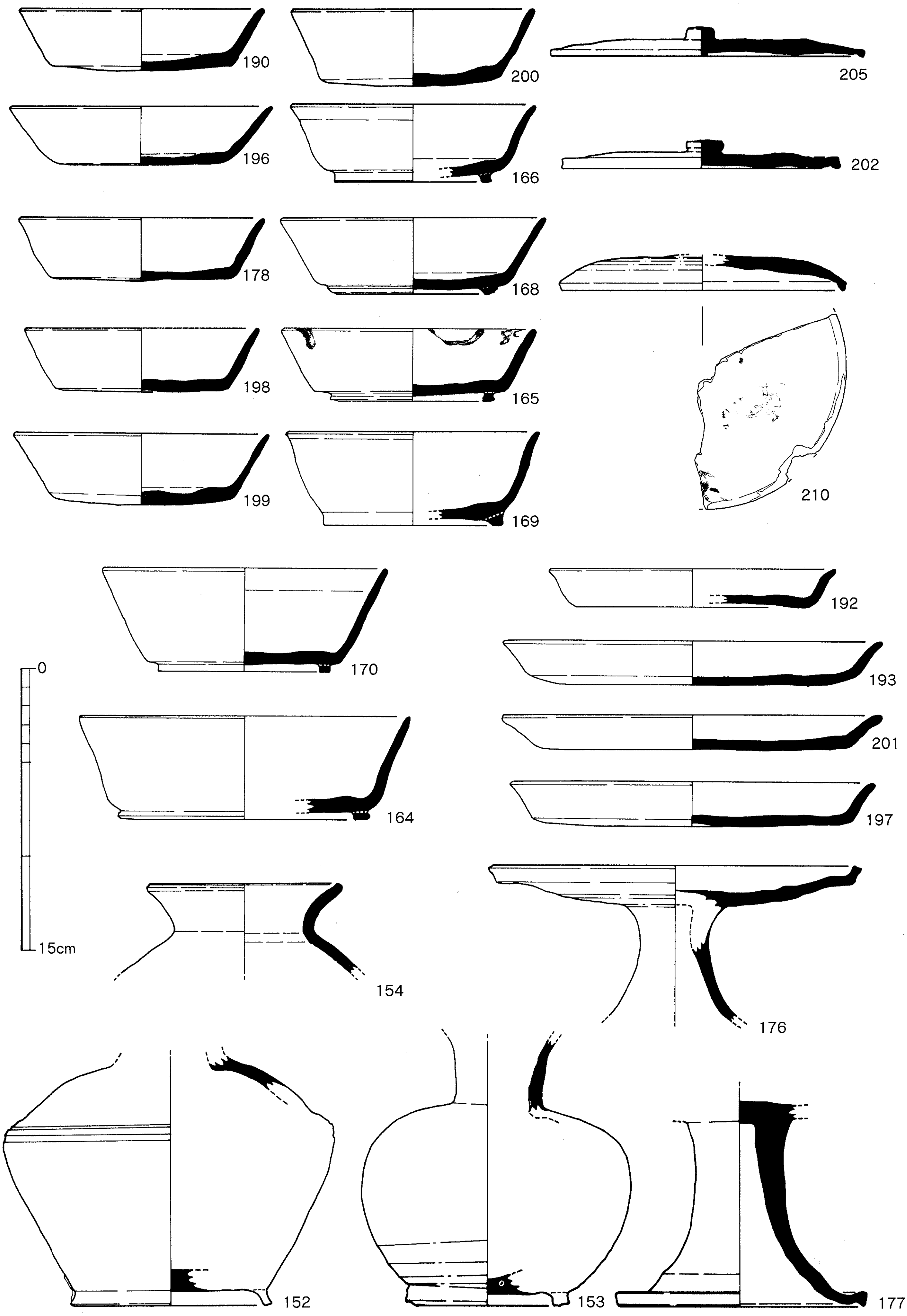


Fig.80　SK088出土遺物（須恵器）（1/3）

整はナデを施す。

165は須恵器坏ｃである。口径13.8㎝、器高3.9㎝、高台径8.9㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰白色（2.5Y8/2）～暗灰黄色（2.5Y5/2)、内面は灰色（5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから5㎜程内側に断面方形の小さな高台が貼付される。端部外面は外方にわずかに張る。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施し、高台内は板状圧痕が残る。口縁部内外面に煤が付着している。

169は須恵器坏ｃである。復元口径13.6㎝、器高5.0㎝、復元高台径9.7㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・0.5㎜以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、断面逆台形状の高台部が貼付される。体部は緩やかに丸みを帯び、口縁部で弱く外反する。調整はナデを施す。

164は須恵器坏ｃである。復元口径17.8㎝、器高5.55㎝、復元高台径13.5㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂から1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。体部下半に丸みを持ち、底部と体部の境目付近に断面長方形の短い高台部が貼付される。体部はほぼ直線的だが体部中位から緩やかに外反する。調整はナデを施す。

205は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径16.8㎝、器高1.55㎝、撮み径1.55㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（N8/）を呈する。天井部は非常に低く平坦をなし、口縁端部は小さいがしっかりとした三角形状を呈する。撮みは小さく低い釦状を呈する。調整はナデを施す。

202は須恵器蓋ｃ3イである。口径14.95㎝、器高1.55㎝、撮み径1.95㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（N7/）を呈する。天井部は非常に低く平坦で、口縁端部は小さいがしっかりとした三角形状を呈する。撮み部は低い釦状をなし、調整はヨコナデを施す。

210は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径15.2㎝、残存高1.9㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（7.5Y7/1）を呈する。天井部は低く全体的に丸みを帯びる。口縁端部は小さいがしっかりとした三角形状をなす。調整は、天井部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。内面に墨痕・擦痕が確認でき、硯として使用されたものと考えられる。

192は須恵器皿ａである。復元口径15.4㎝、復元底径12.6㎝、器高2.0㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。底部は平坦だが中央付近がやや上げ底になる。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、体部は直線的だが口縁部が弱く外反する。調整はナデを施す。

201は須恵器皿ａである。口径20.4㎝、底径17.0㎝、器高1.9㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、体部は弱く外反する。調整はナデを施し、底部外面には板状圧痕が残る。体部外面には煤が付着している。

197は須恵器皿ａである。口径19.6㎝、底径17.1㎝、器高2.4㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には1～2㎜程の砂粒を多く含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

176は須恵器高坏ａである。復元口径20.0㎝、残存高8.3㎝を測る。坏部の1/2と脚裾部を欠失する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。調整はナデを施す。

177は須恵器高坏ｂである。脚部以下が1/3残存しており、残存高10.9㎝、復元裾部径

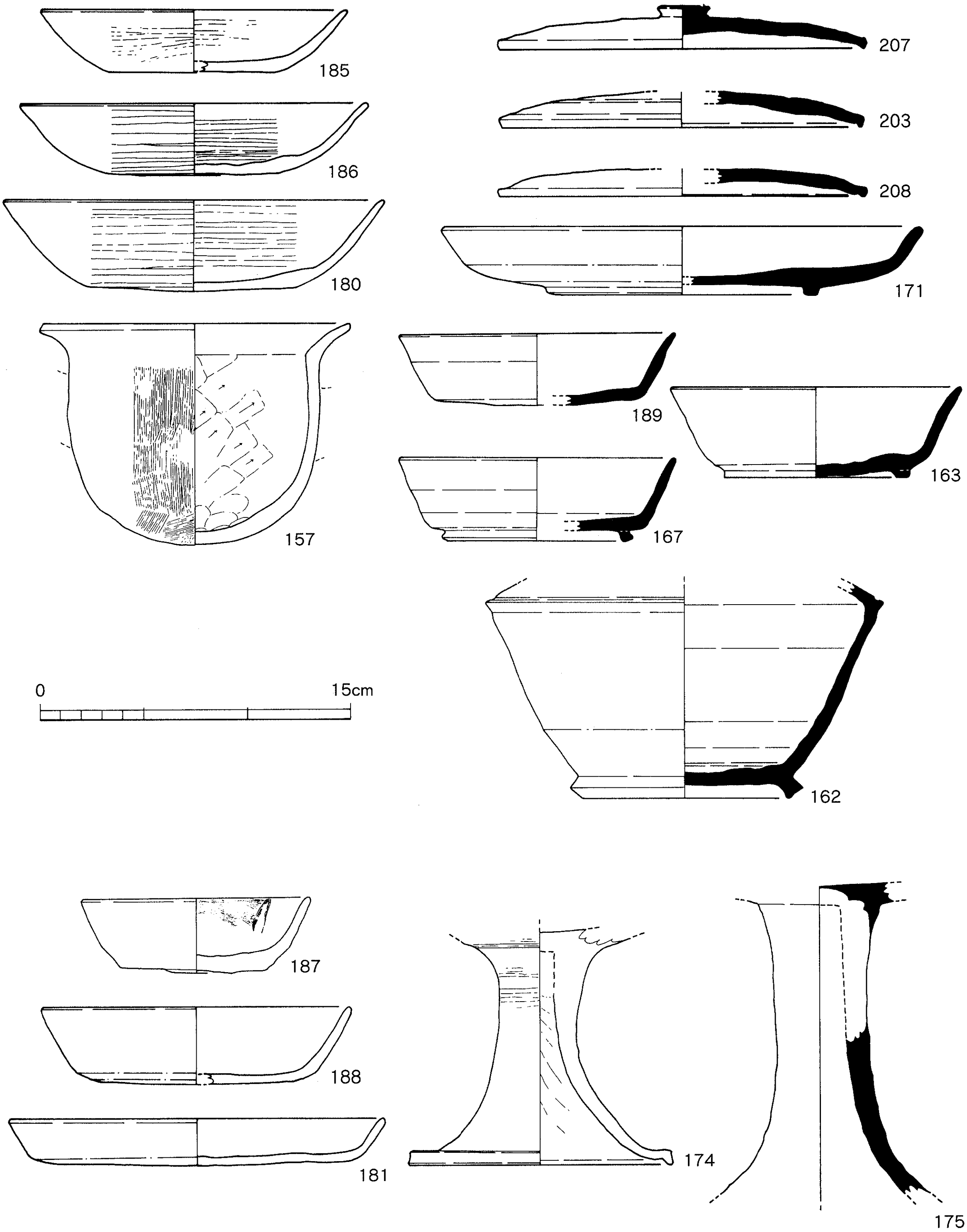


Fig.81　SK088上層・床面出土遺物（1/3）

13.2㎝を測る。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、暗青灰色（5B3/1）を呈する。裾部は三角形状を呈するが、上下に肥厚させている。調整はナデを施す。

154は須恵器甕である。口径21.0㎝、残存高9.7㎝を測る。口縁部～頸部の2/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。肩部は斜めに立ち上がり、口縁部は外方に開く。口唇部は丸みを帯びる。

152は須恵器壷bである。胴部最大径17.8㎝、残存高13.3㎝、高台径10.8㎝を測る。胴部のみが残存し、頸部以上は欠失する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰白色（2.5Y7/1）～暗赤褐色（2.5YR3/4)、内面は黒褐色（7.5YR3/2）を呈する。算盤玉状の体部形状を呈し、底部と胴部の境目付近に短い断面長方形の高台を貼付する。胴部の最大径付近には沈線が2条巡る。調整は、胴部外面はヘラケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

153は須恵器壷である。胴部最大径14.5㎝、残存高14.2㎝、高台径8.8㎝、頸部径4.6㎝を測る。頸部以上を欠失する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。丸みを帯びる球形の体部形状を呈し、頸部で細くなり、口縁部に向かって外反しながら立ち上がる。底部と体部の境目付近に断面方形の高台部が貼付される。調整は、胴部中位～高台脇まではケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。

SK088上層出土遺物（Fig.81、PL.33～35）

185は土師器坏dである。復元口径14.8㎝、復元底径8.4㎝、器高3.0㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色(5YR5/8）を呈する。底径はやや大きいが、プロポーションから坏dに分類した。調整は摩滅により不明瞭だが、ヘラミガキが施されている。

186は土師器坏dである。復元口径16.8㎝、復元底径8.3㎝、器高3.4㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色(5YR7/8）を呈する。調整は内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施す。

180は土師器坏dである。復元口径18.4㎝、復元底径10.1㎝、器高4.4㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。調整は内外面ともに回転ヘラミガキを施す。

157は土師器甕（把手付）である。口径15.0㎝、胴部最大径12.1㎝、器高10.6㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を多く含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。胴部は球状を呈し、口縁部をシャープに外反させる。器肉はやや薄い。調整は、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリ、口縁部はナデを施す。内底部には指頭圧痕が残る。

207は須恵器蓋c4である。復元口径17.8㎝、器高2.1㎝、撮み径2.4㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。天井部は低く全体的に丸みを帯びる。口縁端部は丸みを持ち、つくりは鈍い。撮み部は低い釦状を呈する。調整はナデを施す。

203は須恵器蓋である。復元口径17.6㎝、残存高1.7㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微量の0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。天井部は低く全体的に丸みを帯びる。撮み部の有無は不明で、口縁端部は小さいがしっかりとした三角形状を呈する。調整はナデを施す。

208は須恵器蓋である。復元口径17.8㎝、残存高1.3㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y7/1）を呈する。天井部は低く全体的に丸みを帯びる。口縁端部は三角形があまり肥厚せず、内面にわずかに凹みをつける。形状は

エ類に相当する。調整はナデを施す。

171は土師器皿ａである。復元口径23.2㎝、底径13.0㎝、器高3.3㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）～明赤褐色（10YR7/6）を呈する。底部～体部にかけては丸みを持ち、体部中位に段を有し、口縁部は短く立ち上がる。高台部は断面方形の扁平なものが貼付される。調整は、体部下半～高台内はケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。

189は須恵器坏ａである。復元口径13.4㎝、復元底径9.9㎝、器高3.45㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で弱く外反する。調整はナデを施す。

167は須恵器坏ｃである。復元口径13.4㎝、器高4.05㎝、復元高台径9.2㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから5㎜程内側に断面方形の小さな高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

163は須恵器坏ｃである。復元口径14.0㎝、器高4.3㎝、高台径8.9㎝を測る。全体の1/2が欠失する。胎土には0.5㎜以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（7.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目よりやや内側に断面長方形の扁平な高台部が貼付され、体部下位に丸みを持ち、そこからほぼ直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

162は須恵器壺ｂである。復元胴部最大径15.15㎝、残存高10.2㎝、高台径11.2㎝を測る。肩部以上を欠失する。胎土には0.5㎜以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。胴部は算盤玉状をなし、胴径最大部には断面三角形の突帯が貼付される。高台部は底部と胴部の境目付近にハの字状に貼付され、断面方形を呈する。調整は胴部下位にはケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。胴部外面にヘラ記号が確認できる。

SK088床面出土遺物（Fig.81、PL.33・34）

187は土師器坏ａである。口径11.1㎝、底径7.0㎝、器高3.6㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）～橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部下位に段を有し直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切り痕をそのまま残す。口縁部内面には煤が付着しており、灯明芯が確認できることから、灯明器として使用されたものと思われる。

188は土師器坏ａである。復元口径15.0㎝、復元底径11.5㎝、器高3.7㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

181は土師器皿ａである。口径18.25㎝、底径15.85㎝、器高2.3㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭だが丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施すが、底部外面はケズリ痕をそのまま残す。

174は土師器高坏ｂである。坏部と脚裾部の3/4を欠失しており、残存高11.5㎝、復元裾部径12.8㎝を測る。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）～明赤褐色（5YR5/8）を呈する。裾端部は内側に鋭く屈折し、三角形状を呈する。調整はナデを施す。

175は須恵器高坏ｂである。裾部以外の脚部のみ残存しており、残存高14.7㎝を測る。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。調整はナデを施す。

SK089（Fig.82）

調査区の北端中央付近で検出された。やや歪んだ楕円形プランを呈し、長径4.0ｍ、短径2.5m、深さ0.6～0.7mを測る。

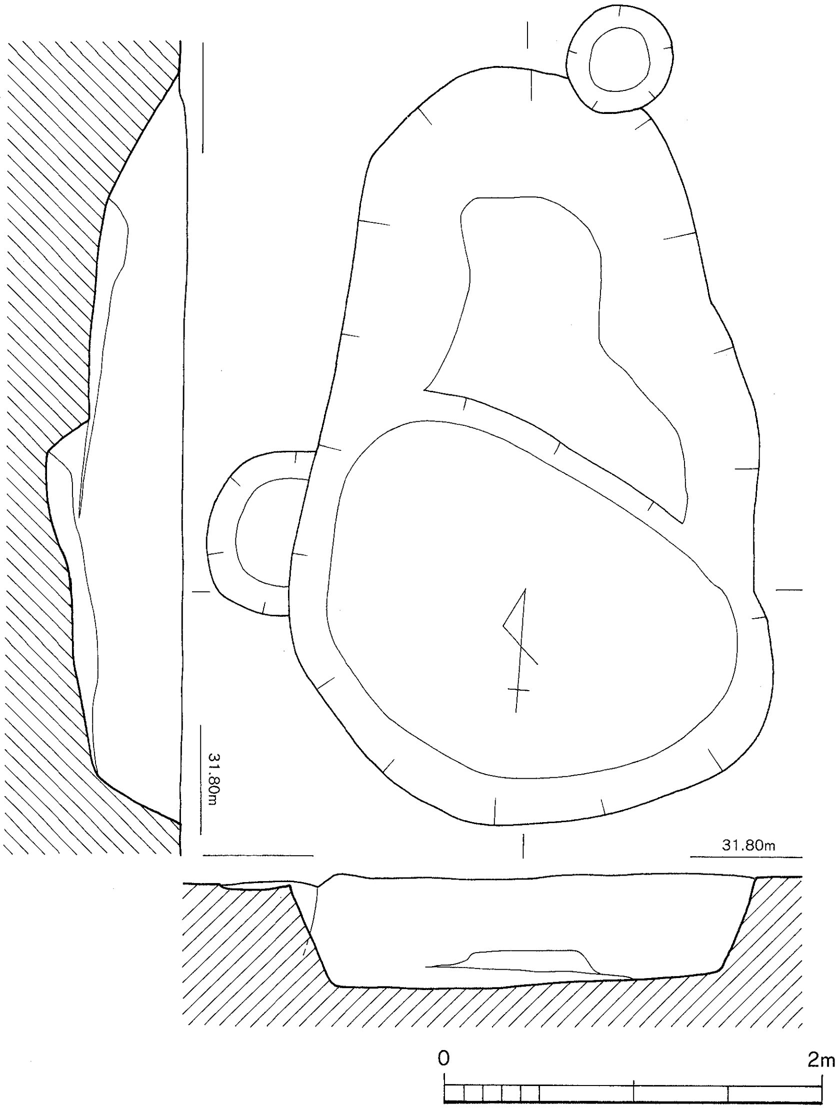


Fig.82　SK089実測図（1/40）

SK089出土遺物（Fig.83、PL.36）

663は磨石である。扁平な円形を呈し、約半分を欠失する。残存長9.95㎝、残存幅7.45㎝、厚さ7.0㎝を測る。石材は砂岩である。両面には部分的に煤が付着した箇所があり、内部は赤変している。

SK114（Fig.84）

調査区の南西端に位置する。建物基礎に破壊されている。円形プランを呈し、径約1.3m、深さ0.3mを測る。

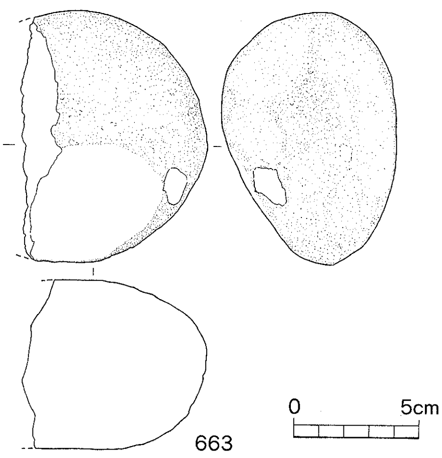


Fig.83　SK089出土遺物（1/3）

SK114出土遺物（Fig.85、PL.36）

216は須恵器高坏ａである。口径22.0㎝、器高7.35㎝、裾部径10.8㎝を測る。ほぼ完形品である。胎土には微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。脚部は短脚で、裾部は三角形状を呈するが上下に細く肥厚する。調整は、坏部外面のみケズリ痕跡を残し、それ以外はナデを施す。

217は須恵器壷である。復元口径15.0㎝、胴部最大径20.0㎝、残存高13.45㎝を測る。口縁部～胴部上半の1/2が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。胴部はあまり丸みを帯びず、肩部で急に内傾し、口縁部で外反する。口縁部は丸みを帯びて若干肥厚する。調整は、胴部内外面はタタキ後ナデ、口縁部はナデを施す。

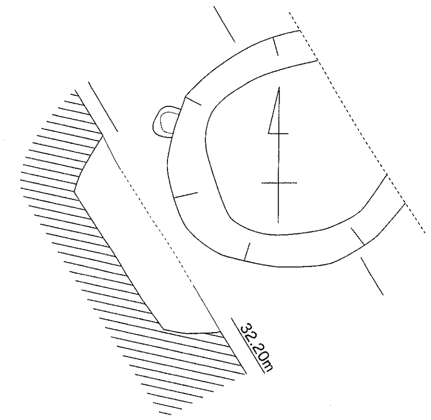


Fig.84　SK114実測図（1/40）

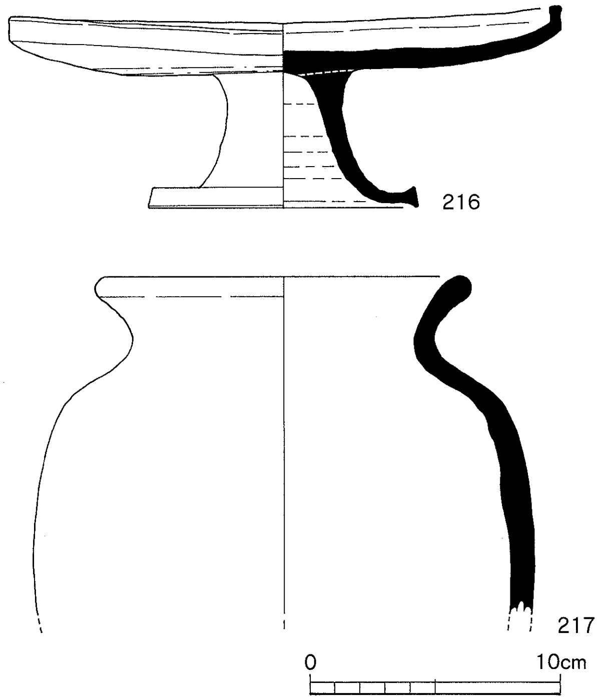


Fig.85　SK114出土遺物（1/3）

SK145（Fig.86）

調査区の南側に接する土坑で、南側半分は調査区外に当たる。プランはほぼ円形を呈し、径2.8m、深さ0.1mを測る。中央やや西より付近で溝状に凹む箇所がみられ、断面は逆三角形状を呈する。別の遺構の可能性もあるが、調査時には確認できなかった。

SK145出土遺物（Fig.87、PL.36）

218は須恵器蓋c3ウである。口径14.8cm、器高2.2cm、撮み径2.65cmを測る。全体の6/7が残存する。胎土には雲母・微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰色（7.5Y7/1）を呈する。天井部は低く平坦で、天井部と体部の境目は明瞭である。三角形は大きいが端部が不明瞭で、撮み部は低い擬宝珠状を呈する。調整は天井部にケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。

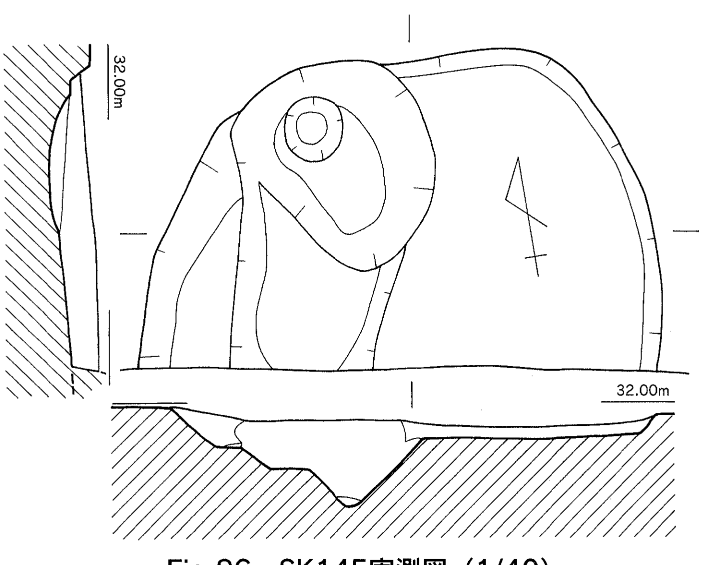


Fig.86　SK145実測図（1/40）

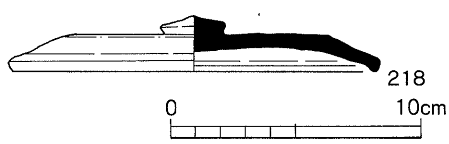


Fig.87　SK145出土遺物（1/3）

SK153（Fig.88）

攪乱に接しており、一部が削平されている。楕円形を呈し、長径2.35＋αｍ、短径1.4ｍ、深さ0.2ｍを測り、床面中央付近はやや凹んでいる。

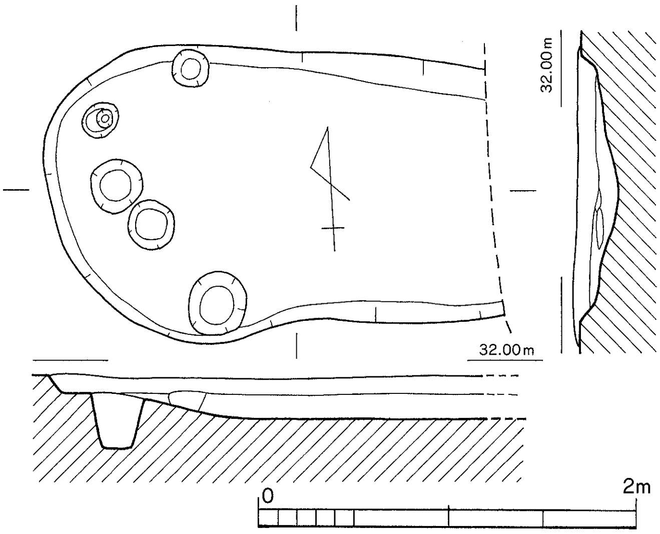


Fig.88　SK153実測図（1/40）

SK153出土遺物（Fig.89、PL.36）

219は土師器坏ａである。復元口径12.0㎝、底径7.0㎝、器高4.2㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には微細な雲母・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（10YR8/2）を呈する。底部はやや丸みを帯び、底部と体部の境目は明瞭で段を有し、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

220は黒色土器A類椀である。復元口径12.4㎝、器高4.35㎝、高台径6.65㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰白色（10YR8/2）を呈する。底部はやや丸みを持ち、見込みはやや凹む。直線的な体部形状を有し、断面逆台形の高台部が貼付される。体部の器肉は薄い。調整は外面はナデ、内面はヘラミガキを施すが、摩滅により不明瞭である。

222は黒色土器？甕である。破片資料であり、残存高10.9㎝を測る。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、黒色（N2/）を呈する。胴部は丸みを帯びるが、張りは弱く、口縁部の外反も短く小さい。調整は、内面はヘラミガキ、外面はナデを施す。外面には煤が付着している。

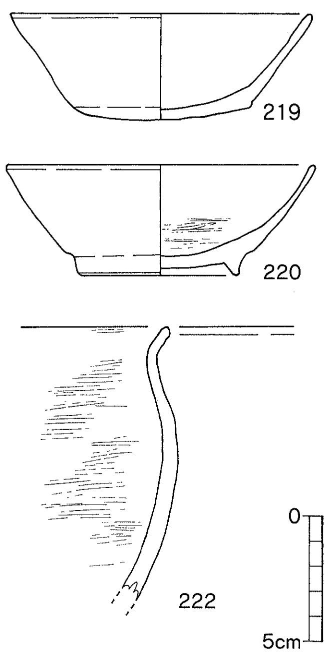


Fig.89　SK153出土遺物（1/3）

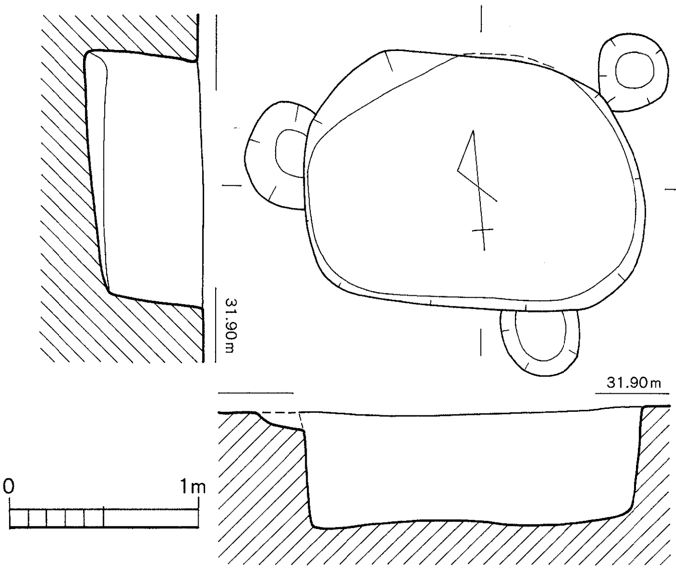
SK211（Fig.90）

東西に軸を持つ隅丸長方形の土坑で、長径1.8ｍ、短径1.5ｍ、深さ0.55～0.6ｍを測り、床面はフラットである。

SK211出土遺物（Fig.91、PL.36）

271は須恵器蓋である。復元口径15.4㎝、残存高1.35㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には0.5～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y6/1）を呈する。天井部は平坦をなし、体部との境目は明瞭である。口縁部は三角形があまり肥厚せず、内面にわずかな凹みをつける。調整はナデを施す。

272は土師器坏ｄである。復元口径17.0㎝、復元底径8.2㎝、器高3.9㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外は回転ヘラミガキを施す。内面に比して外面のミガキは雑である。



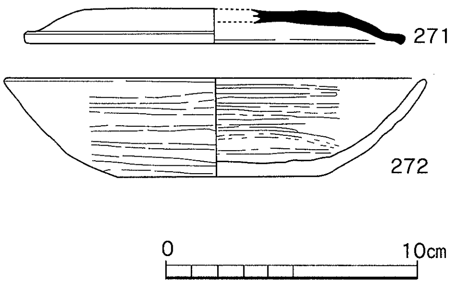


Fig.91　SK211出土遺物（1/3）

Fig.90　SK211実測図（1/40）

SK215（Fig.92）

南北に軸を採る楕円形プランの土坑である。長径3.0m、短径2.1m、深さ0.55mを測り、床面はフラットで、壁面は緩やかに立ち上がる。

SK215出土遺物（Fig.93、PL.36～38・49・59）

322は土師器坏ａである。復元口径12.4㎝、復元底径7.0㎝、器高4.0㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は不良で、灰白色（5Y8/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

645は土師器坏である。復元口径12.8㎝、残存高3.0㎝を測る。口縁部の1/4が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。体部外面に墨書が確認でき、「卅」と判読できる。

307は土師器坏ｄである。復元口径14.4㎝、底径7.4㎝、器高3.7㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部のみ器肉が厚い。調整は、底部外面はケズリ痕を残し、見込みはナデ、体部内外面は回転ヘラミガキを施しているものと思われるが、摩滅により不明瞭である。

302は土師器坏ａ？である。底径7.3㎝、残存高2.7㎝を測る。底部のみが残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、直線的に立ち上がるが体部中位で屈折する。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外は回転ヘラミガキを施していると思われるが摩滅により不明瞭である。

301は土師器坏ａである。復元口径14.0㎝、復元底径7.2㎝、器高3.2㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はヘラ切り痕を残し、体部内外面は密な回転ヘラミガキを施す。

304は土師器坏ｄである。復元口径13.65㎝、底径7.1㎝、器高3.6㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1～1.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部内外面は雑な回転ヘラミガキを施す。口縁部外面には黒斑が確認できる。

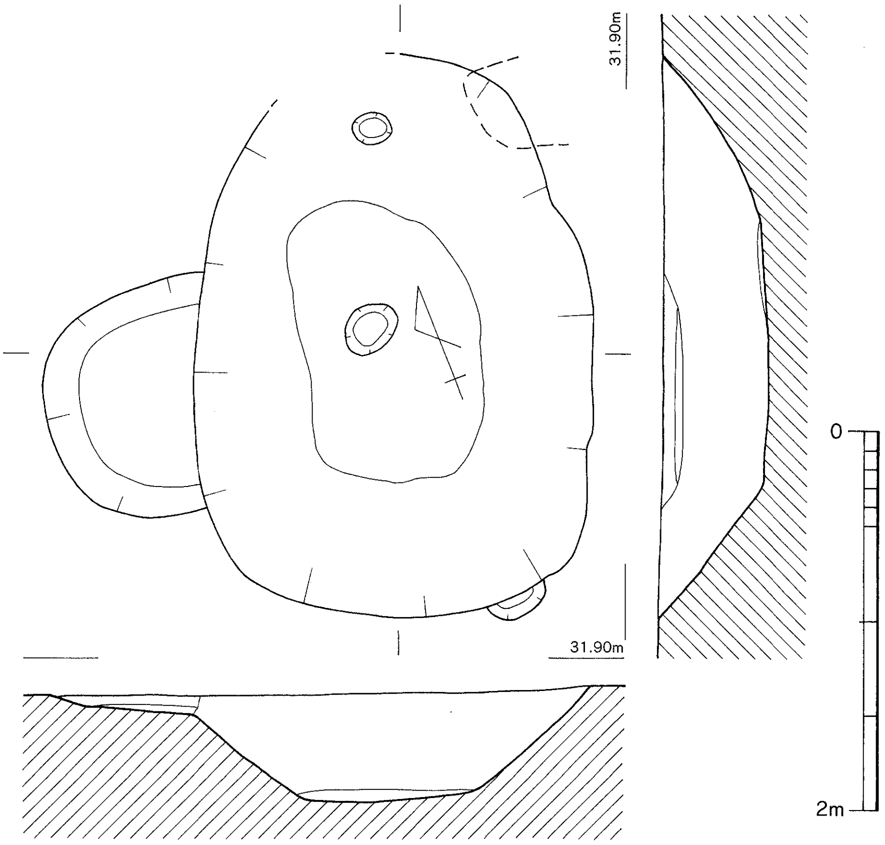


Fig.92　SK215実測図（1/40）

306は土師器坏ｄである。口径13.8㎝、底径7.15㎝、器高3.6㎝を測る。ほぼ完形である。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。調整は、底部はケズリ痕をそのまま残し、体部外面には雑な、内面には密な回転ヘラミガキを施す。

309は土師器坏ｄである。復元口径14.3㎝、底径8.05㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部内外面は回転ヘラミガキが施される。

303は土師器坏ｄである。復元口径17.5㎝、復元底径8.8㎝、残存高3.85㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部内外面は雑な回転ヘラミガキを施す。口縁部外面には煤が付着している。　299は土師器椀である。復元口径18.3㎝、器高6.8㎝、復元高台径11.1㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に貼付され、断面逆台形を呈する。直線的に立ち上がる体部形状を有し、見込みはやや凹む。器肉はやや厚い。調整は、体部内外面にヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

310は土師器皿ａである。復元口径17.3㎝、復元底径13.4㎝、器高1.6㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/6）を呈する。底部と体部の境目は若干丸みを帯び、体部は直線的。底部外面のみケズリ痕を残すが、それ以外は回転ヘラケズリを施す。

298は土師器甕である。復元口径29.4㎝、残存高8.0㎝を測る。口縁部～胴部の1/2が残存

する。胎土には赤褐色粒・1～2.5cm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。胴部はあまり膨らまずに直線的に立ち上がり、口縁部を屈曲させる。内面の屈曲部は明瞭ではない。調整は、体部外面は刷毛目、内面はケズリ、口縁部内外面はヨコナデを施す。外面には煤が付着している。

297は土師器壷である。口径22.65cm、胴部最大径23.8cm、器高17.95cm、高台径12.10cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/8）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近にハの字状に貼付される。形状は端面長方形を呈する。胴部は外方に直線的に立ち上がり、上部で内傾し、口縁部で弱く外反する。口径と胴径はほぼ同一である。口縁部～胴部内外面にヘラミガキ、高台部はナデを施し、高台内はケズリ痕を残す。

646は土師器坏or皿である。破片資料であり、残存高0.6cmを測る。胎土には微量の雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）を呈する。底部外面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

325は須恵器蓋ｃ4である。口径18.55cm、器高3.6cm、摘み径2.3cmを測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には0.5～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1～N5/）を呈する。全体的に丸みを帯び、口縁端部は三角形状をなさずに丸くおさめる。撮み部は低い釦状を呈する。調整はナデを施す。

321は須恵器蓋ｃ3アである。復元口径16.0cm、器高2.8cm、撮み径1.7cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。天井部は平坦をなし、口縁部は弱く屈曲し大きくしっかりとした三角形状を呈する。内面には稜がつく。撮み部は低く小さな釦状をなす。調整はナデを施す。

324は須恵器蓋ｃ4である。復元口径14.8cm、残存高1.8cmを測る。口縁部～天井部の1/3が残存する。撮み部は欠失する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）～鈍い褐色（7.5YR6/3）を呈する。天井部は平坦で、全体的に丸みを帯びる。口縁部は三角形が肥厚せずはっきりとしない。調整はナデを施す。

312は須恵器坏ａである。復元口径13.0cm、復元底径8.2cm、残存高3.4cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

318は須恵器坏ｃである。復元口径14.0cm、器高4.1cm、高台径8.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微量の微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（7.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、その1cm程内側に低く小さな高台部を貼付する。体部は直線的に立ち上がり、弱く外反する。調整はナデを施す。

314は須恵器皿ａである。復元口径16.2cm、器高2.1cmを測る。胎土には微粒砂を含み、器肉はやや厚い。焼成は良く、灰白色（7.5Y7/1）を呈する。

299は、土師器坏ｃである。やや器高が高く、口径18.2cm、器高6.5cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、断面方形の短い高台が貼付される。焼成は良く、純い橙色（7.5YR7/4）を呈し、内外面ともにミガキが施される。

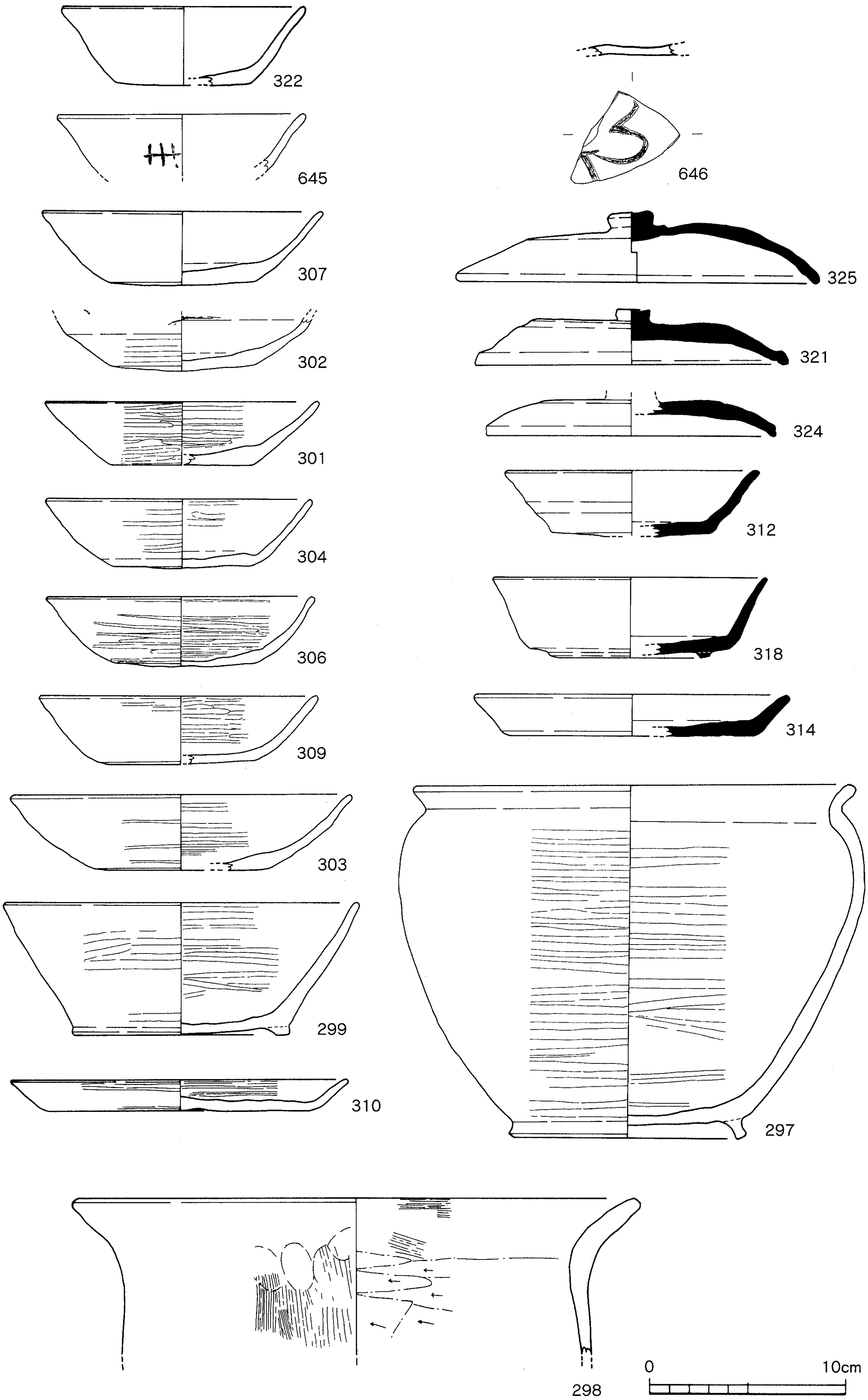


Fig.93　SK215出土遺物（1/3）

SK220（Fig.94）

調査区の中央付近北東寄りに位置する。SB390に切られている。隅丸長方形プランを呈し、長径2.9m、短径1.9m、深さ0.4mを測る。

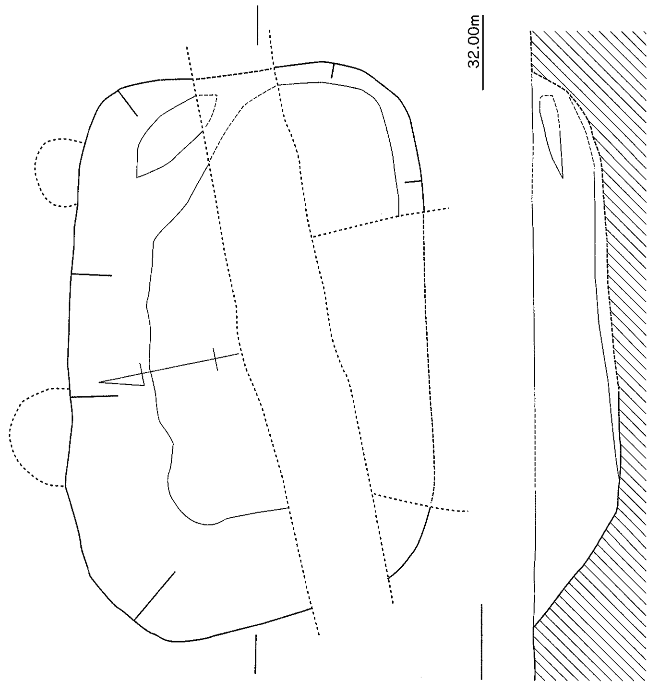


Fig.94　SK220実測図（1/40）

SSK220出土遺物（Fig.95、PL.38）

330は土師器坏ｄである。復元口径15.6cm、底径8.8cm、器高3.9cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い黄橙色（10YR7/3）、内面は橙色（5YR7/8）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、底部外面はケズリ痕を残す。体部外面には黒斑が確認できる。

328は須恵器坏ａである。復元口径13.0cm、復元底径8.45cm、器高3.85cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。器肉は0.6～1cm程と厚いが、口縁部付近で急に薄くなる。調整はナデを施す。

329は須恵器坏ｃである。復元口径14.6cm、器高4.55cm、復元高台径10.05cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。底部は中央付近でやや凹み、高台畳付部とほぼ水平になる。底部と体部の境目は明瞭で、そこから5mm程内側に断面方形の高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

668は砥石である。完形品で、残存長11.8cm、残存幅6.8cm、厚さ5.35cmを測る。石材は砂岩である。形状は長方体を呈する。使用面は身部が4面あるうちの2面で、全体を使用している。残りの2面は自然面を残す。

334は軒丸瓦である。瓦当部のみ残存する。胎土には赤褐色粒・0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/2）、黒色（N1.5/）～黄灰色（5Y4/1）を呈する。瓦当径19.0cm、中心厚3.6cmを測る。中房の蓮子数は1＋6、老司II式に該当する。

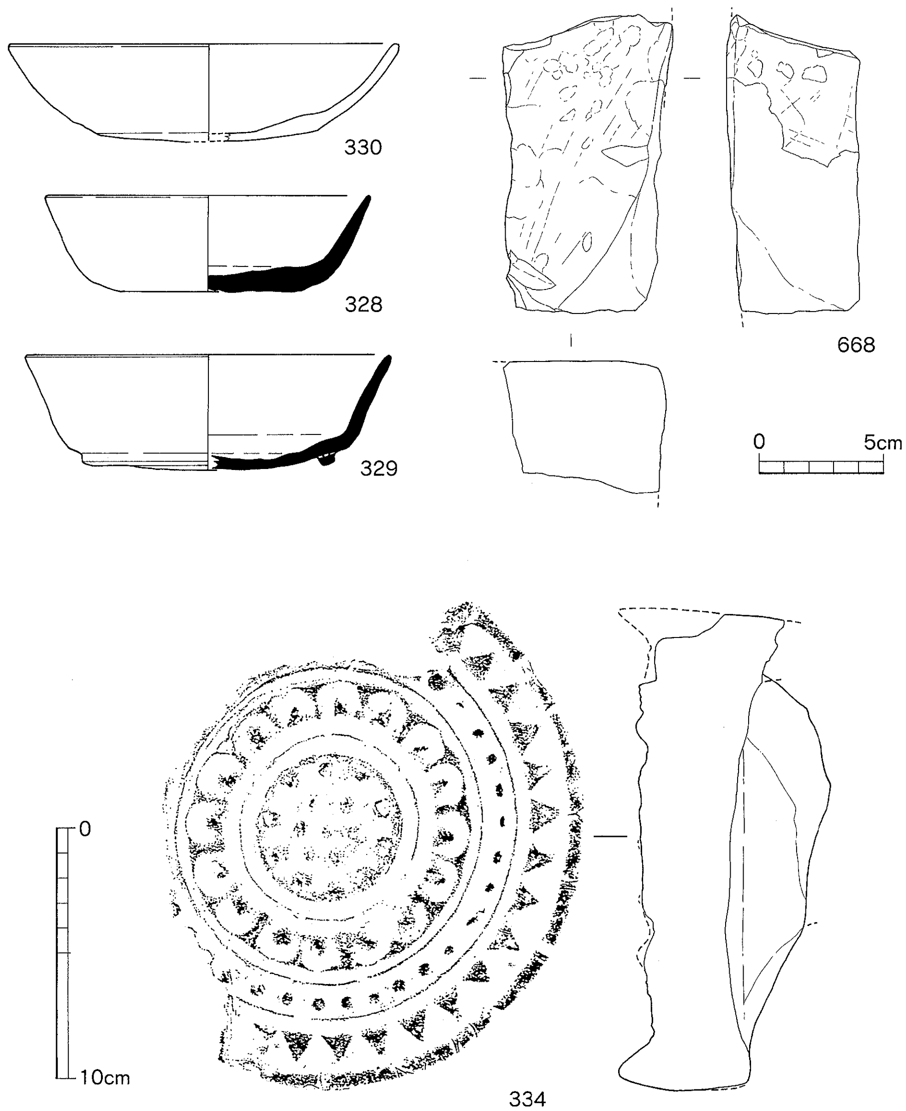


Fig.95　SK220出土遺物（1/3）

SK223（Fig.96）

南北を軸にした隅丸方形の土坑である。長径2.0m、短径1.25m、深さ0.75mを測り、床面はフラットである。

SK223出土遺物（土師器）（Fig.97、PL.38～41・49）

350は土師器蓋である。破片資料であり、残存高2.0cmを測る。胎土には0.5～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。撮みの有無は確認できなかったが、天井部は平坦で低い。口縁形はエ類である。内外面ともにヘラミガキを施している。

349は土師器蓋である。破片資料であり、残存高2.85cmを測る。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。内外面ともに回転ヘラミガキが施されている。口縁部の断面形状は三角形の肥厚部となるがしっかりとしたイ類である。

650は土師器蓋ｂである。復元口径26.1cm、残存高2.7cmを測る。全体の1/3が残存する。

胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。撮み部は欠失するが、接合痕の位置から輪状撮みになると思われる。口縁部はあまり肥厚せず小さい。調整は内外面ともにヘラミガキが施される。天井部外面に墨書が確認できる。

341は土師器坏ａである。復元口径13.8cm、底径10.2cm、器高3.1cmを測る。底部の一部と体部～口縁部にかけて1/4を欠失する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。

649は土師器坏である。復元口径14.0cm、底径8.5cm、器高4.3cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。底部は平底で、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部でわずかに屈曲する。端部は丸みを帯びる。調整は内外面ともに回転ヘラミガキを施している。体部外面中央付近に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

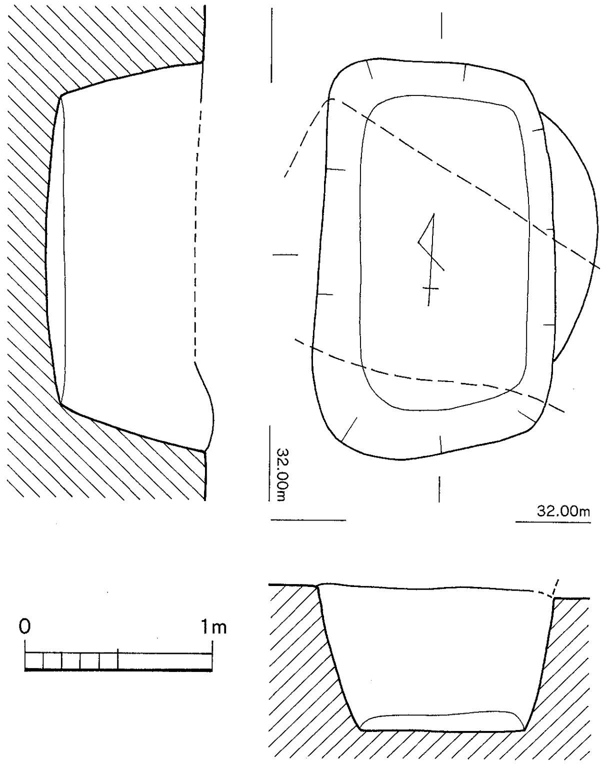


Fig.96　SK223実測図（1/40）

347は土師器坏ｄである。復元口径10.0cm、復元底径5.2cm、器高2.65cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施しており、とくに外面は底部にまで及んでいる。

344は土師器坏ｄである。復元口径13.6cm、底径6.6cm、器高3.05cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には赤褐色粒・1～1.5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキが施される。

348は土師器坏ｄである。復元口径17.8cm、復元底径9.4cm、器高3.7cmを測る。口縁部～体部の一部、底部の1/3が残存する。胎土には雲母・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキが施されている。

346は土師器坏ｃである。復元口径18.4cm、器高5.55cm、高台径9.65cmを測る。口縁部～体部にかけて3/4を欠失する。胎土には雲母・0.5～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキが施されている。高台はやや外側に反った高台が貼付される。

345は土師器皿ａである。復元口径18.6cm、復元底径14.7cm、器高2.15cmを測る。口縁部の一部と体部の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、内面のみミガキが確認される。

343は土師器皿ａである。口径19.05cm、底径15.9cm、器高2.35cmを測る。口縁部の一部が欠失する。胎土には雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）～浅黄色（2.5Y7/3）を呈する。体部は内外面とも回転ヘラミガキが施されるが、底部はケズリ痕跡を残す。全面に赤彩が見られるが全体的に摩滅を受けており、器表の剥落が著しい。

340は土師器皿ａである。復元口径19.4cm、復元底径16.75cm、器高2.05cmを測る。全体

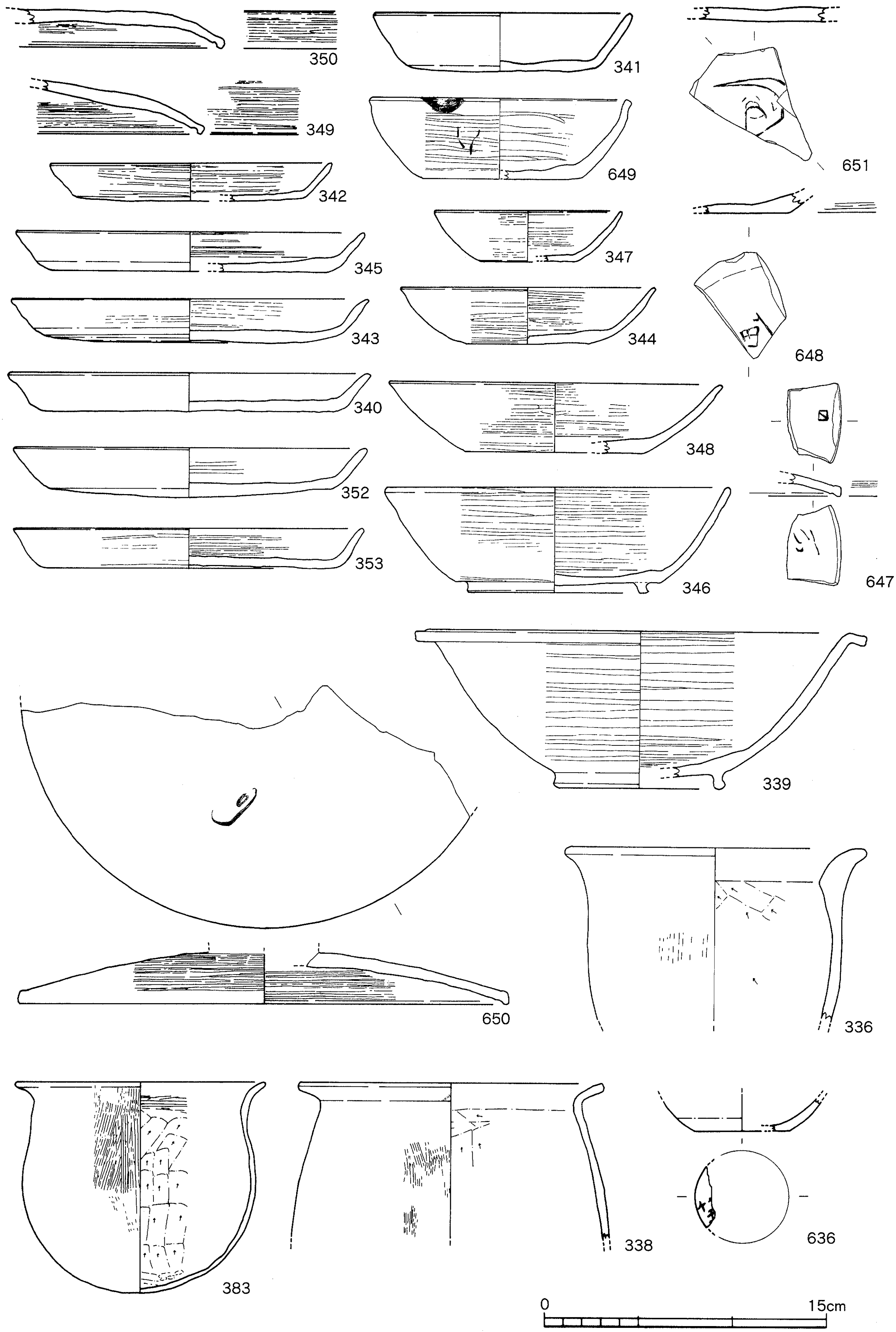


Fig.97　SK223出土遺物（土師器）（1/3）

の1/2が残存する。胎土には雲母・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色(5YR6/8)、内面は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。

352は土師器皿ａである。復元口径18.9㎝、底径15.1㎝、器高2.65㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には微粒砂・2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5Y6/6）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、体部内外面はヘラミガキ、見込みはナデを施し、底部外面はケズリを残す。板状圧痕が残る。内外面ともに煤が付着している。

353は土師器皿ａである。口径18.7㎝、底径15.6㎝、器高2.1㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、体部は内外面ともに回転ヘラミガキを施す。底部外面には煤が付着しており、体部には部分的に赤彩が見られる。

651は土師器坏or皿である。破片資料であり、残存高0.75㎝を測る。胎土には雲母・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。底部外面に墨書が確認できる。内容は不明だが、人物の戯画のようにも見える。

648は土師器坏or皿である。底部の破片資料であり、残存高1.0㎝を測る。胎土には微量の雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、外面は橙色（2.5YR7/8)、内面は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。底部外面中央に墨書が確認できる。意味は不明である。

647は土師器蓋である。破片資料であり、残存高1.0㎝を測る。胎土には微量の雲母・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。口縁の端部形状は肥厚せず小さな三角形状をなし、内面に小さな凹みをつける。端面は方形である。口縁部外面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

339は土師器椀？である。復元口径24.0㎝、器高8.3㎝、復元高台径9.1㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色(7.5YR7/6）を呈する。高台部は短く丸みを帯びた高台を貼付し、体部はやや丸みを帯びる。口縁部は強く外反し、鍔状をなす。調整は内外面ともに回転ヘラミガキを粗く施している。

336は土師器小甕ａである。復元口径16.0㎝、残存高9.2㎝を測る。口縁部～胴部にかけて1/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色(2.5Y6/6)、内面は鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。調整は、胴部内面上位はケズリ、下位はナデ、胴部外面は刷毛目、口縁部はナデを施す。口縁部内面には煤が付着する。

338は土師器甕である。復元口径32.6㎝、残存高16.7㎝を測る。全体の1/3～1/4残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒と雲母・赤褐色粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。

636は土師器坏ｄ？である。復元底径5.0㎝、残存高1.75㎝を測る。底部のみの破片である。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部径は小さく、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がっており、体部外面にはミガキが確認できる。底部外面周縁にヘラ描きがあり、「竹子」と読めるが定かではない。

SK223出土遺物（須恵器）（Fig.98、PL.38～41）

382は須恵器蓋ｃ3エである。口径12.5㎝、器高2.1㎝、撮み径2.35㎝を測る。口縁部を一部欠失するが、ほぼ完形。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色(7.5Y7/1）～暗灰色（N3/）を呈する。天井部は低いがやや丸みをもち、口縁部は肥厚せず小さい。撮みは低い釦状を呈し、口径に対してやや大きめのものが貼付される。

375は須恵器蓋ｃ3エである。復元口径12.6㎝、残存高1.6㎝を測る。全体の1/2が残存する。撮みは欠失する。歪みが著しい。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y5/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さく肥厚しない。

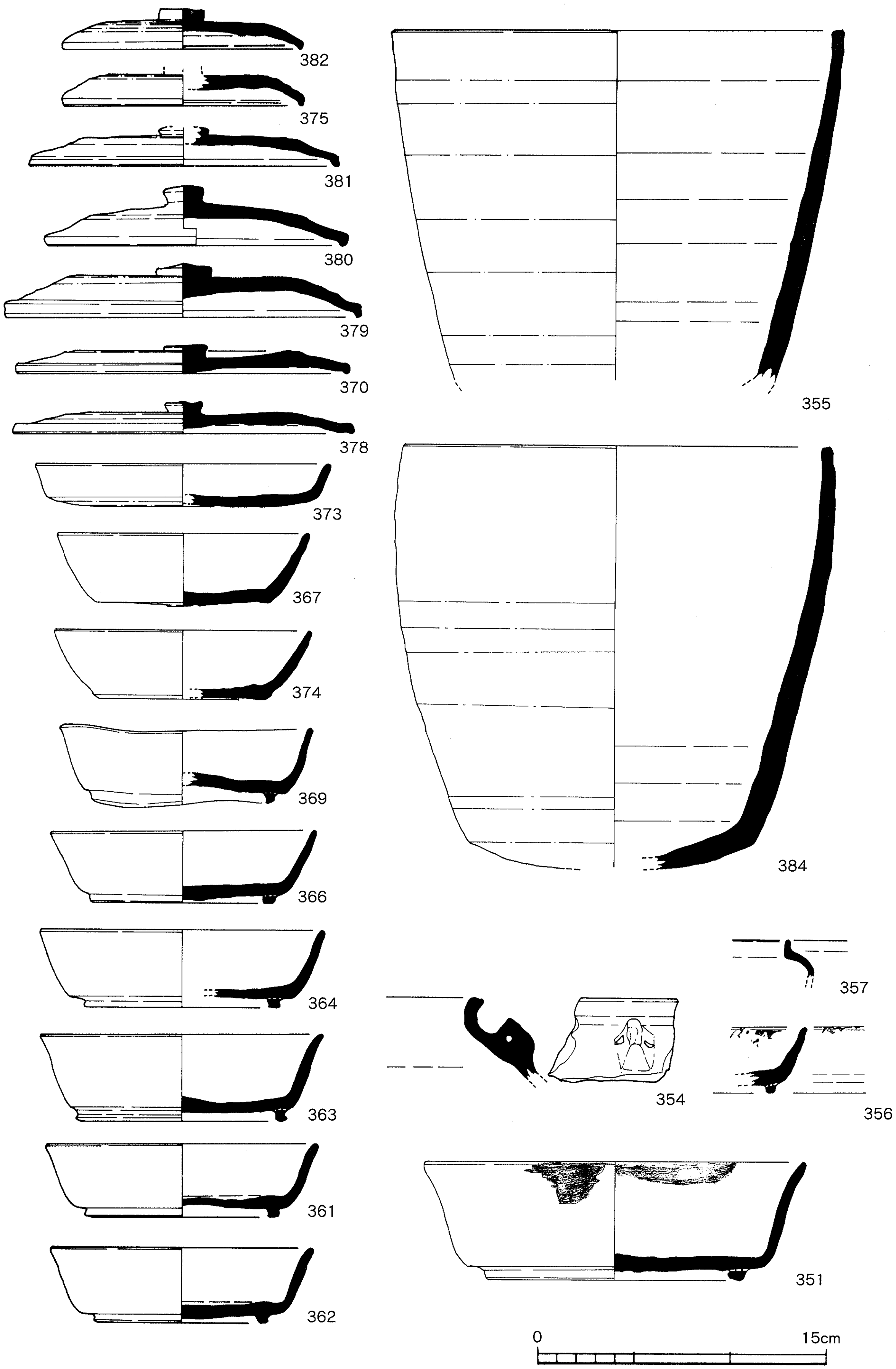


Fig.98　SK223出土遺物（須恵器）（1/3）

381は須恵器蓋ｃ3イである。口径16.2㎝、残存高2.05㎝、撮み径2.6㎝を測る。撮み部から口縁部の一部を欠失する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）～暗灰色（N3/）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さいがしっかりとしている。撮みは擬宝珠状を呈するものと思われる。つくりは丁寧で、器肉は薄い。

380は須恵器蓋ｃ3ウである。口径15.6㎝、器高3.2㎝、撮み径2.1㎝を測る。口縁部と天井部の一部が欠失するのみでほぼ完形。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰色（N5/）～灰白色（5Y7/1）を呈する。天井部はやや丸みを帯び、口縁部は大きい三角形だが端部が丸く不明瞭になる。撮みは丸みを帯びた釦状を呈する。

379は須恵器蓋ｃ3イである。口径18.6㎝、器高2.8㎝、撮み径2.9㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、暗緑灰色（10GY4/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さいがしっかりした三角形。撮みは扁平な乳頭状を呈する。

370は須恵器蓋ｃ4である。復元口径17.4㎝、器高1.45㎝、撮み径2.3㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さく肥厚しない。撮みは低い釦状のものが貼付される。

378は須恵器蓋ｃ4である。復元口径17.8㎝、器高1.65㎝、撮み径1.95㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、暗青灰色（10BG4/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は丸みをもち鈍い。撮みは扁平な乳頭状を呈する。

373は須恵器皿ａである。復元口径15.4㎝、復元底径14.2㎝、器高2.2㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。体部は短く直線的に立ち上がる。

367は須恵器坏ａである。口径13.2㎝、底径9.0㎝、器高3.8㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂～3㎜程の砂粒を含み、粗い。焼成は良好で、灰オリーブ色（5Y6/2）を呈する。体部は緩やかに丸みをもち、口縁部内外面には煤の付着が認められる。

374は須恵器坏ａである。復元口径13.4㎝、底径9.6㎝、器高3.55㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面はオリーブ灰色（2.5GY5/1）、内面は灰色（10Y5/1）を呈する。体部は緩やかに丸みをもち立ち上がる。

369は須恵器坏ｃである。口径13.2㎝、器高4.0㎝、高台径9.5㎝を測る。全体に歪みが大きい。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、底部は平坦をなす。やや内側に小さな高台が貼付され、体部は緩やかに外反する。

366は須恵器坏ｃである。口径13.9㎝、器高3.75㎝、高台径9.55㎝を測る。全体の1/2程が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰色（N51）を呈する。

364は須恵器坏ｃである。復元高台径14.8㎝、器高4.05㎝、高台径10.1㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・0.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。高台部は短い断面方形の高台が貼付される。

363は須恵器坏ｃである。復元口径14.8㎝、器高4.5㎝、高台径11.0㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。高台部はやや外側に跳ねた短い高台を貼付し、体部は緩やかに外反する。

361は須恵器坏ｃである。復元口径14.2㎝、器高3.8㎝、高台径10.05㎝を測る。底部の1/2と体部の1/8が残存する。胎土には微粒砂～0.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色

(N6/) を呈する。底部と体部の境目は不明瞭で丸みを帯び、短い方形の高台が貼付される。

362は須恵器坏ｃである。復元口径13.7㎝、器高3.95㎝、高台径9.1㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は不明瞭で丸みを帯び、短い断面方形の高台が貼付される。

351は須恵器坏ｃである。復元口径20.0㎝、器高6.1㎝、高台径13.5㎝を測る。口縁部～体部の3/4を欠失する。胎土には1～3㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、褐灰色（10YR6/1）を呈する。高台部は低い断面方形の高台がやや内側に付され、体部はやや外反する。口縁部の内外面には煤が付着している。

354は須恵器壷ｃである。破片資料であり、残存高4.3㎝を測る。把手の形状は縦形に短く引き出しており、横方向に4㎜程の孔が開く。口縁部はやや短く、丸みを帯びる。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y6/1）を呈する。口縁端部には煤が付着する。

356は須恵器坏ｃである。破片資料であり、残存高3.4㎝を測る。鈍い断面逆台形の高台を貼付し、器高は低い。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。口縁部内外面に墨痕が確認できる。

357は須恵器薬壷である。破片資料であり、残存高2.05㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y6/1～N4/）を呈する。

355は須恵器鉢ｂである。復元口径16.6㎝、残存高18.1㎝を測る。口縁部～体部の1/3が残存する。底部は欠失。胎土には0.5～1.5㎜程の砂粒を含む。焼成はやや不良で、灰色(N5/)～灰白色(7.5Y6/1)を呈する。口縁部外面よりケズリをそのまま残し、以外はヨコナデを施す。№384とほぼ同一のプロポーションと思われるが、こちらは体部がやや直線的である。

384は須恵器鉢ｂである。復元口径22.25㎝、底径14.75㎝、残存高21.9㎝を測る。体部の1/4、底部の2/3を欠失する。胎土には微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色(2.5Y6/1）を呈する。体部中位以下はケズリを残し、以外はナデによって仕上げられる。体部内面には煤が付着している。器形は鉢ｂの範疇と考えられるが、口縁部～体部にやや丸みをもち、直立ぎみに立ち上がる。また底部は丸底である。

SK224（Fig.99）

調査区中央の北よりに位置する。SB390に切られる。楕円形のプランを呈し、長径2.4m、短径約1.7m、深さ0.6mを測る。

SK224出土遺物（Fig.100）

385は須恵器坏ｃである。復元口径14.6㎝、器高4.7㎝、復元高台径9.6㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い赤褐色（5YR5/3）を呈する。高台部はやや大きめのものが外開きに貼付され、体部は中位で丸みをもつ。

386は土師器蓋ａ1である。口径17.2㎝、

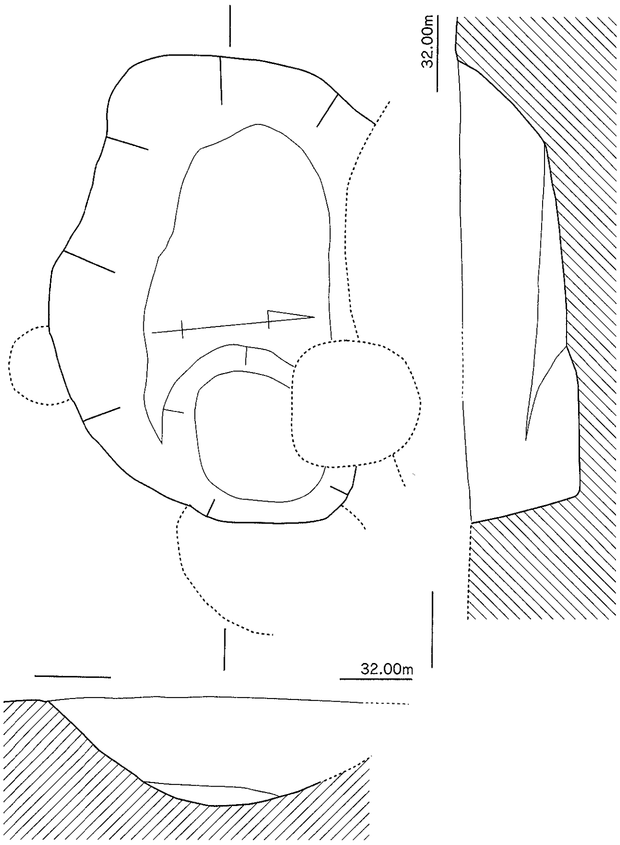


Fig.99　SK224実測図（1/40）

器高4.2cm、撮み径2.05cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微細な雲母粒・赤褐色粒・1～2mm程の砂粒・5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y7/2）～鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。天井部は高いがやや平坦で、かえりは弱く短い。撮みは宝珠状を呈する。

387は土師器蓋である。破片資料であり、残存高2.75cmを測る。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は黄灰色（2.5Y7/2）、内面は鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。口縁部内面のかえりは弱く小さい。

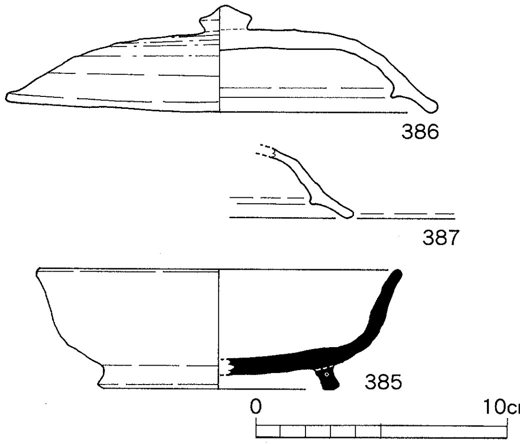


Fig.100　SK224出土遺物（1/3）

SK225（Fig.101）

楕円形プランの浅い土坑である。長径1.8m、径1.3m、深さ0.2mを図り、床面はフラットである。床面には径15～20cmの小穴が7個あるが、性格は不明である。

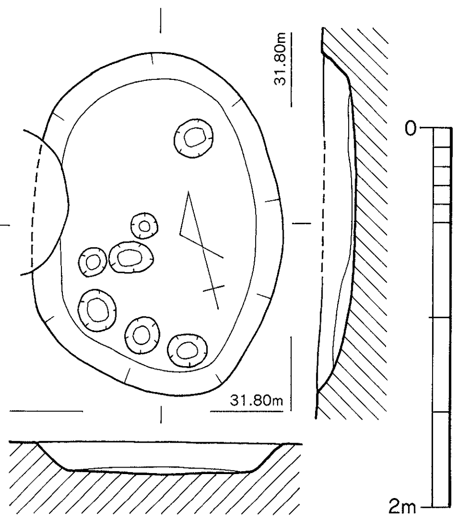


Fig.101　SK225実測図（1/40）

SK226（Fig.102）

やや楕円形ぎみの円形プランの土坑で、長径1.9m、短径1.4m、深さ0.6mを測る。床面は一定ではなく、中央付近に向かって緩やかに凹む。

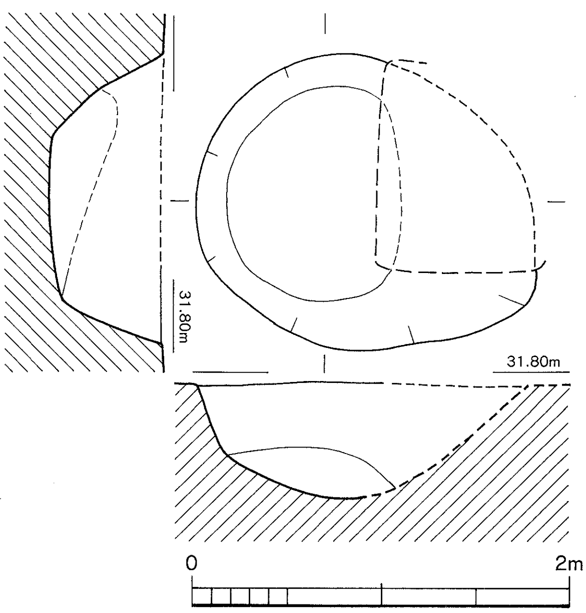


Fig.102　SK226実測図（1/40）

SK226出土遺物（Fig.103、PL.41・42）

388は須恵器坏ａである。復元口径14.2cm、底径8.8cm、器高3.2cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒をわずかに含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y8/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部外面には板状圧痕が残る。口縁部内外面には煤が付着している。

394は須恵器坏ａである。口径12.7cm、底径8.1cm、器高4.2cmを測る。体部の1/2を欠失する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。器形は歪みをもつ。体部は直線的。

395は須恵器皿ａである。復元口径18.4cm、復元底径14.2cm、器高2.3cmを測る。全体の/4が残存する。胎土には微粒砂をわずかに含む。焼成は良く、灰白色（7.5YR7/1）

を呈する。

396は須恵器円面硯である。復元口径20.0㎝、残存高3.7㎝を測る。硯部の1/3が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（N7/）を呈する。脚部は大部分を欠失しており、詳細は不明。硯部は20.6㎝の円盤の1㎝程内側に断面長方形の帯を巡らせる。硯面は全面を使用している。

389は土師器坏dである。口径13.6㎝、底径7.1㎝、器高3.25㎝を測る。完形品。胎土には微細な雲母粒・赤褐色粒・1～2㎜程の砂粒を多く含む。焼成は良く、浅黄橙色（7.5YR8/4～8/6）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、底部外面はケズリをそのまま残し、体部内外面は断続的にヘラミガキを施す。

390は土師器坏dである。口径14.0㎝、底径8.6㎝、器高3.7㎝を測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には微細な雲母粒・赤褐色粒・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。底部外面はケズリをそのまま残し、体部内外面に雑なヘラミガキを施す。体部内面には煤が付着している。

391は土師器坏dである。口径13.0㎝、底径6.0㎝、器高4.0㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には雲母・微粒砂と微量の赤褐色粒・2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）～明赤褐色（5YR5/6）を呈する。底部はケズリをそのまま残すが、体部内外面ともに丁寧に回転ヘラミガキを施す。器表には赤彩が確認できる。

392は土師器坏dである。口径13.8㎝、底径7.9㎝、器高3.25㎝を測る。口縁部の1/4を欠失する。胎土には雲母・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。体部外面中位以下はナデ、それ以外は断続的に雑なヘラミガキを施す。

393は土師器坏dである。復元口径17.4㎝、底径8.9㎝、器高3.7㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には赤褐色粒・0.5～1㎜程の砂粒が多く、微細な雲母粒をわずかに含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を呈する。底部外面はケズリを残し、それ以外はやや雑なヘラミガキを施す。

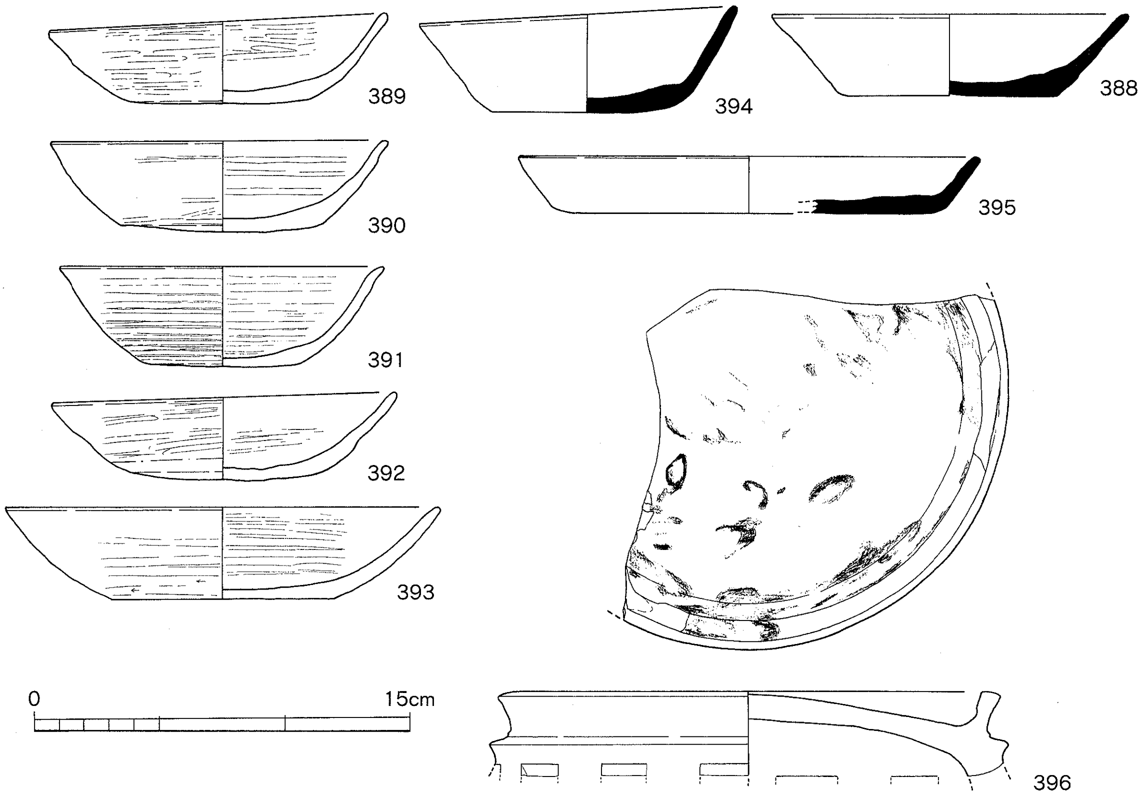


Fig.103　SK226出土遺物（1/3）

SK227（Fig.104）

調査区中央の北寄りに位置する。楕円形プランを呈し、長径2.6m、短軸約1.8m、深さ0.2～0.3mを測る。

SK227出土遺物（Fig.105）

397は須恵器鉢？である。復元口径26.4㎝、底径20.6㎝、胴部最大径26.4㎝、器高15.6㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を多く含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。器形は丸みを帯び底部は平坦で、扁平な甕のような形状である。口縁部は弱く外反し、端部は方形をなす。調整はヨコナデを施している。

SK228（Fig.106）

東西に軸を持つ隅丸長方形の土坑である。長径2.3m、短径1.55m、深さ0.35～0.5mを測り、西側にテラスを持つ。床面はフラットである。

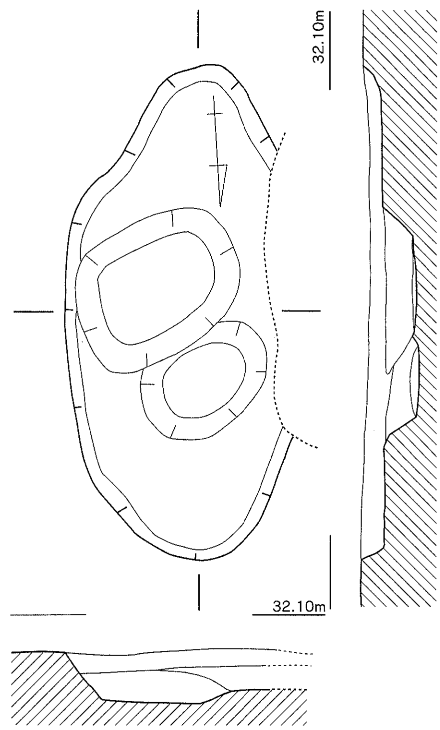


Fig.104　SK227実測図（1/40）

SK228出土遺物（Fig.107、PL.42）

402は土師器小甕ａである。復元口径13.7㎝、胴部最大径16.45㎝、器高16.25㎝を測る。口縁部～頸部にかけて1/4を欠失する。胎土には雲母・0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR6/4）を呈する。胴部は球状をなし、口縁部は強めに外反する。調整は摩滅のため不明瞭である。

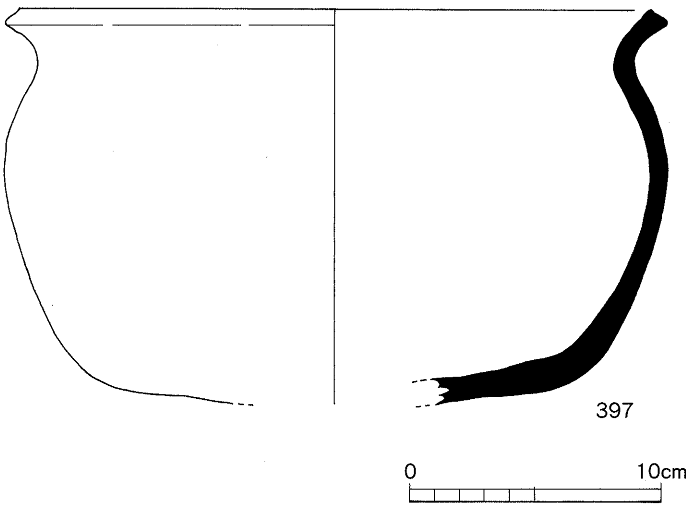


Fig.105　SK227出土遺物（1/3）

399は須恵器蓋である。破片資料であり、残存高1.8㎝を測る。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色(7.5Y5/1）を呈する。天井部は平坦をなし、口縁部にかえりをもつが弱く短い。

400は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径13.8㎝、残存高2.8㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N51）を呈する。天井部はやや丸みを帯び、天井部と体部の境目にはケズリ痕跡を残す。撮みが貼付されたものと思われる。口縁部は小さいがしっかりとした三角形をなす。体部外面～口縁部にかけては煤が付着する。

401は須恵器小甕ａである。頸部以上を欠失しており、復元胴部最大径18.5㎝、残存高16.7㎝を測る。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（N5/）～暗灰色(N3/)、内面は暗灰色（N3/）を呈する。胴部は球状をなし、胴部最大径は胴部上半にある。全体的にいびつである。調整は、外面はタタキの後にナデを施し、内面は青海波当て具痕が

残る。

398は土師器丸底坏である。口径19.8cm、器高3.4cmを測る。磨滅しており、調整は不明。

SK232（Fig.108）

楕円形のプランを呈する土坑で、主軸は南北に向いている。長径2.75m、短径1.95m、深さ0.5～0.7mを図り、床面は概ねフラットだが南側がやや高い。

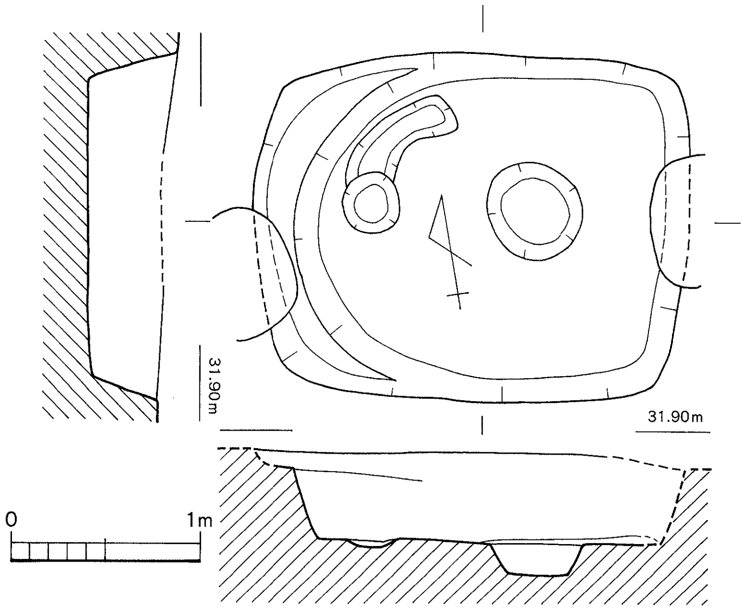


Fig.106　SK228実測図（1/40）

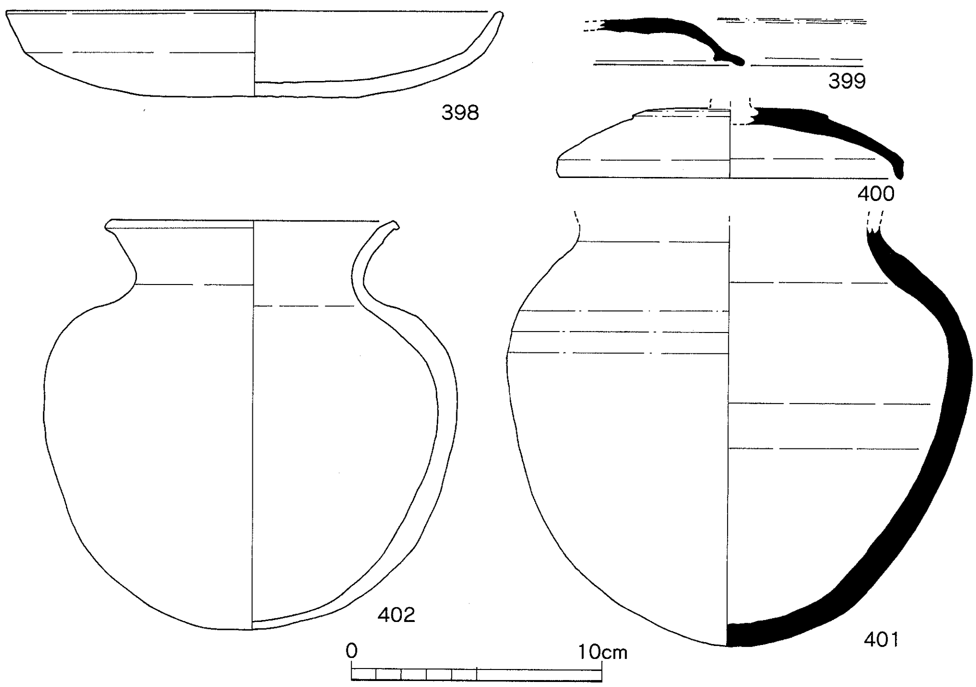


Fig.107　SK228出土遺物（1/3）

SK232出土遺物（Fig.109、PL.43・49）

465は土師器坏ａである。復元口径10.4㎝、復元底径6.9㎝、器高3.2㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。器肉が比較的厚い。調整はナデを施す。

468は土師器皿ａである。復元口径21.0㎝、復元底径16.9㎝、残存高2.9㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び、不明瞭である。調整はナデを施すが、底部外面はケズリ痕をそのまま残す。

457は土師器皿ａである。復元口径21.6cm、復元底径18.3cm、残存高2.5cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/8）を呈する。内外面ともに粗い回転ヘラミガキを施す。

471は須恵器蓋ｃ3エである。復元口径14.8cm、器高2.5cm、撮み径2.0cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微量の白色粒を含み、やや粗い。焼成は良く、灰色（N51）を呈する。天井部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で口縁部はあまり肥厚せず内面にわずかに段をつける。撮み部は低い釦状を呈する。調整は内外面ともにナデを施す。

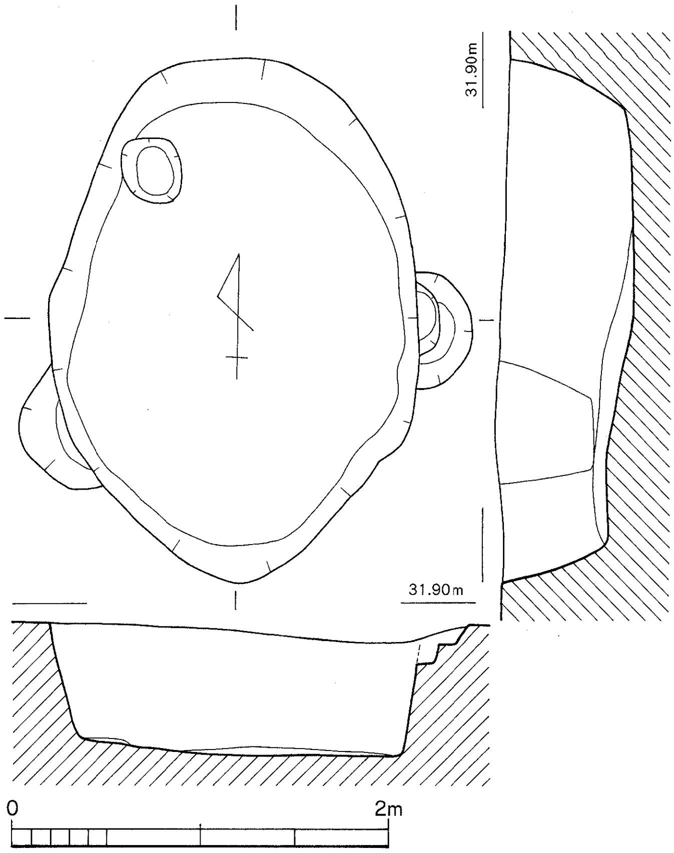


Fig.108　SK232実測図（1/40）

470は須恵器蓋である。復元口径16.0cm、残存高1.6cmを測る。撮み部と天井部の一部を欠失する。胎土は精緻である。焼成は良く、灰色（N51）を呈する。天井部は平坦をなし、体部との境目は明瞭で、口縁部は小さいがしっかりとした三角形状を呈する。形状はイ類に相当する。調整はナデを施すが、天井部外面はケズリ痕をそのまま残す。

472は須恵器蓋ｃ4である。復元口径17.8cm、残存高1.3cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。天井部は丸みを帯びているが低く、口縁部は肥厚せず内面にわずかに凹みをつける。調整はナデを施す。

476は須恵器坏ａである。復元口径14.5cm、底径11.0cm、器高3.65cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。底部は平底で、体部はやや外反しながら立ち上がる。調整は全体にナデを施す。

477は須恵器坏ｃである。口径14.2cm、器高3.75cm、高台径10.85cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、暗灰色（N3/）を呈する。体部と底部の境目は不明瞭で全体的に丸みをもつプロポーションである。高台部は丸みを帯びた小さなものが貼付され、見込みは盛り上っている。

474は須恵器坏ｃである。復元口径15.7cm、残存高4.4cm、高台径10.2cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。体部と底部の境目付近にやや外開きの丸みを帯びた高台が貼付される。体部は中位で屈曲があり、そこからやや外反しながら立ち上がる。調整はナデを施す。

475は須恵器坏ｃである。口径11.8cm、器高4.1cm、高台径6.8cmを測る。口縁部が1/4欠失する。胎土には雲母・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR6/4）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部はやや外反しながら立ち上がる。高台部は扁平な高台が貼付される。

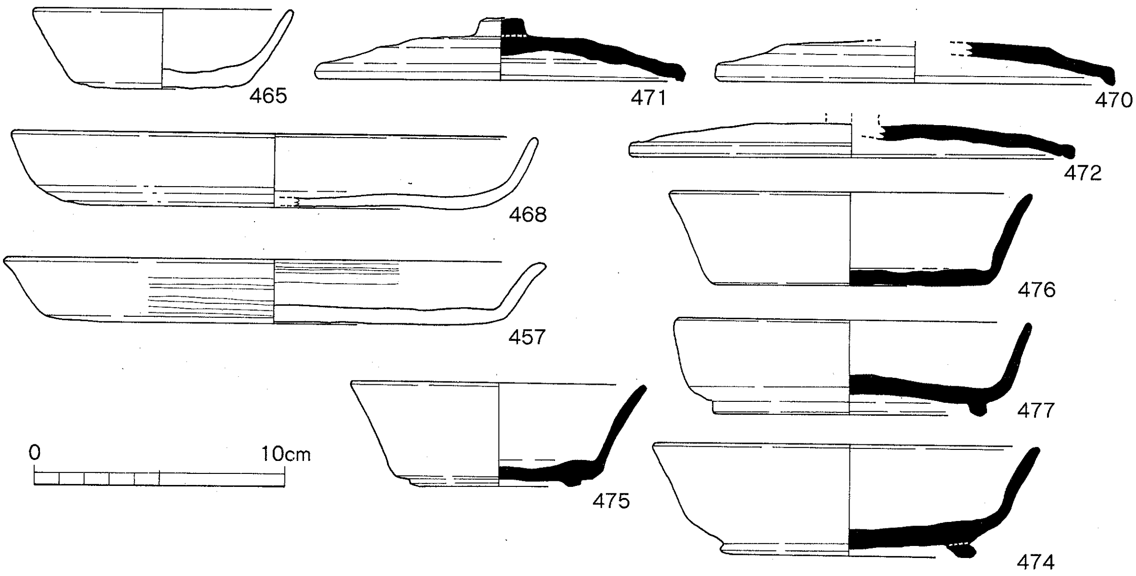


Fig.109　SK232出土遺物（1/3）

SK253（Fig.110、PL.5）

南北方向に主軸を採る楕円形の土坑である。長径2.45m、短径1.5m、深さ0.4～0.6mを測り、床面は概ねフラットだが、南側にテラスをもつ。

SK253出土遺物（Fig.111、PL.44・57・58）

511は土師器坏ａである。復元口径13.6㎝、復元底径8.0㎝、残存高3.9㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。口縁部付近でやや肥厚している。調整はナデを施す。

509は土師器坏ａである。復元口径14.1㎝、底径7.6㎝、器高3.65㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

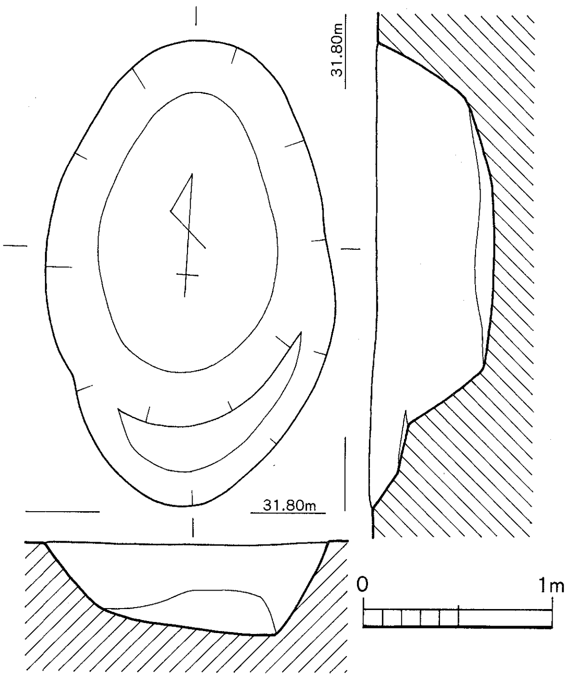


Fig.110　SK253実測図（1/40）

501は土師器坏ａである。口径13.0㎝、底径7.25㎝、器高3.4㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には赤褐色粒・1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）～鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。体部内外面に煤が付着しており、灯明器として使用された可能性がある。

504は土師器坏ａである。口径12.95㎝、底径8.0㎝、器高3.7㎝を測る。完形品である。胎土には赤褐色粒・1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。底部

はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。器肉が薄く、調整は丁寧にナデを施す。底部外面に板状圧痕が残る。

507は土師器坏ａである。復元口径12.7㎝、底径8.0㎝、器高3.25㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR7/6）～浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。体部は直線的に立ち上がるが、中位付近で弱く屈曲する。底部の器肉は薄い。調整は、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。体部外面には赤彩が残る。

506は土師器皿ａである。復元口径14.8㎝、復元底径11.6㎝、器高1.5㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には赤褐色粒・1㎜程の砂粒を含む。調整はナデを施す。

512は土師器椀である。復元口径14.65㎝、器高6.7㎝、高台径8.75㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は不良で、灰白色（10YR8/2）を呈する。体部は直線的な形状を有し、細長い高台部がハの字状に貼付される。調整はヨコナデを施す。

633は土師器椀である。残存高2.4㎝、高台径8.0㎝を測る。高台部が2/3残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。長細い高台部がやや外開きに貼付され、端部は丸みを帯びる。見込みはやや凹んでいる。高台内にヘラ描きにより「田」と思われる文字が刻まれている。

515は黒色土器A類椀である。復元口径18.8㎝、器高6.7㎝、高台径8.4㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（5YR6/8）、内面は黒色（N2/）を呈する。体部は直線的な形態を有し、高台部はやや外開きの逆三角形状をなす。調整は、外面はヨコナデ、内面は丁寧な手持ちヘラミガキを施す。

513は須恵器高坏である。坏部・裾部の1/4を欠失しており、残存高6.7㎝、裾部径11.2㎝を測る。短脚の高坏である。胎土には微粒砂から1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。裾部形状は端部が丸みを帯びつつも弱く屈折しており、エ類に相当するものと思われる。

514は須恵器小壷である。胴部のみ1/2が残存しており、胴部最大径5.8㎝、残存高5.85㎝、頸部径2.8㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。須恵器の小壷と考えられるが、特殊品であろうか。

717は磨石である。完形品である。長さ7.0㎝、幅6.75㎝のほぼ円形で、厚さは5.3㎝を測る。石材は砂岩である。

676は越州窯系青磁大碗Ⅰ－2aである。残存高4.5㎝、底径10.4㎝を測る。当初Ⅰ－5類とも考えたが、高台内を削り込んで僅かに高台を形成している点からⅠ－2類の範疇とした。高台形状は山本信夫氏のウ類に相当する。目跡は内外面にあるが、外面は削り落としているため不明瞭。内面は細長いものが0.5～1㎝間隔で密に残る。胎土はやや粗く、微量の黒色粒が含まれる。釉はやや黄色みが強く、光沢がある。畳付以外は全て施釉されている。

677は越州窯系青磁合子蓋である。残存高4.5㎝を測る。もう1点破片資料があり、同一個体と思われるが、接合はできなかった。釉は口唇部付近のみ掻き取られており、それ以外は内外面に施釉される。釉色はやや黄色みが強く、光沢がある。胎土は暗灰色で精緻である。口唇部には約1㎝間隔で細長い目跡が残っている。

627は長沙窯系黄釉褐彩陶器水注である。胴部の破片資料で、残存高4.2㎝を測る。釉の溜まりの状況から、褐斑の上部に当たるものと思われる。胎土は明灰色でやや粗く、微量の黒色粒を含む。釉は黄釉を外面のみ薄く施釉している。

419は褐釉陶器瓶の胴部片と思われる。外面に菊花文をヘラ描きで施文する。山本信夫氏

のご教示によると、広東系の陶器とのことである。壷の肩部片である。胎土は外面が灰色で、内面が褐色。かなり軟質で、微量の白色粒を含む。釉は暗褐色の釉が薄く施されるが、状態が悪く、剥落が著しい。内面はヨコナデで仕上げられ無釉。

453は緑釉陶器の高台付き皿である。防長産と思われる。残存高2.0㎝。口縁部～体部にかけての小片で、体部の傾きから皿と判断した。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部が短く外反する。焼成は軟陶、胎土は内面のみ暗灰色を呈し、微量の白色粒を含んでいる。釉は光沢のある淡緑色釉で、釉層は薄く、剥落が著しい。口縁部の内面付近には濃緑色の緑斑がみられる。高橋分類のA-2類に相当すると思われる。

454は緑釉陶器の碗または皿である。緑釉陶器の底部の破片で、残存高1.1㎝を測る。小片であるため詳細は不明だが、円盤状高台を呈する。焼成は軟陶で、胎土は淡黄褐色の精良なものを用いている。釉は全面施釉で、黄緑色の釉が薄く施される。摩滅が激しく、器表の剥落が著しい。当初、京都産洛北型のものと考えていたが、斎藤孝正氏よりK90窯式期前半とのご教示をいただいた。

455は緑釉陶器の皿？である。高台部の破片で、同一個体と思われる小片がもう１点あるが接合できなかった。器種は一応、皿に分類しておく。残存高1.4㎝。高台は断面四角形の貼付高台で、高台外面がやや丸みを帯びており、鈍い感じを受ける。焼成は軟陶で、胎土は乳白色で精良なものである。内面には不定方向のミガキが密に施される。釉は黄緑色を呈し、光沢がある。薄く全面に施釉される。斎藤孝正氏に猿投窯K90窯式期とのご教示を頂いた。

631は緑釉陶器の坏である。復元口径14.3㎝、高台径7.0㎝、器高4.5㎝。高台径にて復元して図示した。口径の歪みは、14.3＋0.5㎝の範囲である。高台は小さなケズリ出しの輪高台で、体部は丸みをもつ。見込みはやや窪んでいる。須恵質の硬陶で、全面施釉。高台畳付のみ露胎となる。高台内には僅かにミガキが確認できる。釉は薄い緑色（白色）を呈する。9世紀中頃の資料と考えられる。

708は緑釉陶器（京都産洛西型）椀である。復元口径18.2㎝、残存高4.3㎝を測る。体部中位以下を欠失する。胎土は灰色で精良。焼成は硬陶。釉は内外面に施釉されるが、薄く施されており斑がある。薄い灰緑色を呈し、光沢がある。体部は下位でやや丸みを帯び、直線的に立ち上がる。調整は回転ヨコナデが施されている。他に同一個体と思われる小片が6点あったが、接合はできなかった。

508は土師器坏ａである。口径18.4cm、器高4.0cmを測る。底部はやや丸みを帯びるが、体部は直線的に立ち上がる。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。

500は土師器坏ａである。口径19.2cm、器高4.0cmを測り、器形は508と同様であるが、底部と体部の境目は不明瞭である。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。

503は土師器坏ａである。口径18.4cm、器高3.8cmを測る。直線的な体部形態をもつが、口縁部はやや外反する。焼成は良く、橙色（2.5YR8/4）を呈する。

419は緑釉陶器皿（洛西か？）である。口径15.0cm、器高2.9cm、高台径6.5cmを測る。しっかりとした蛇の目高台を呈し、体部は直線的に開く。口縁部は弱く屈曲する。胎土は灰色で硬質、底部はケズリ、体部内外面と見込みにはミガキが顕著に見られる。見込みには重ね焼きの痕跡がのこる。

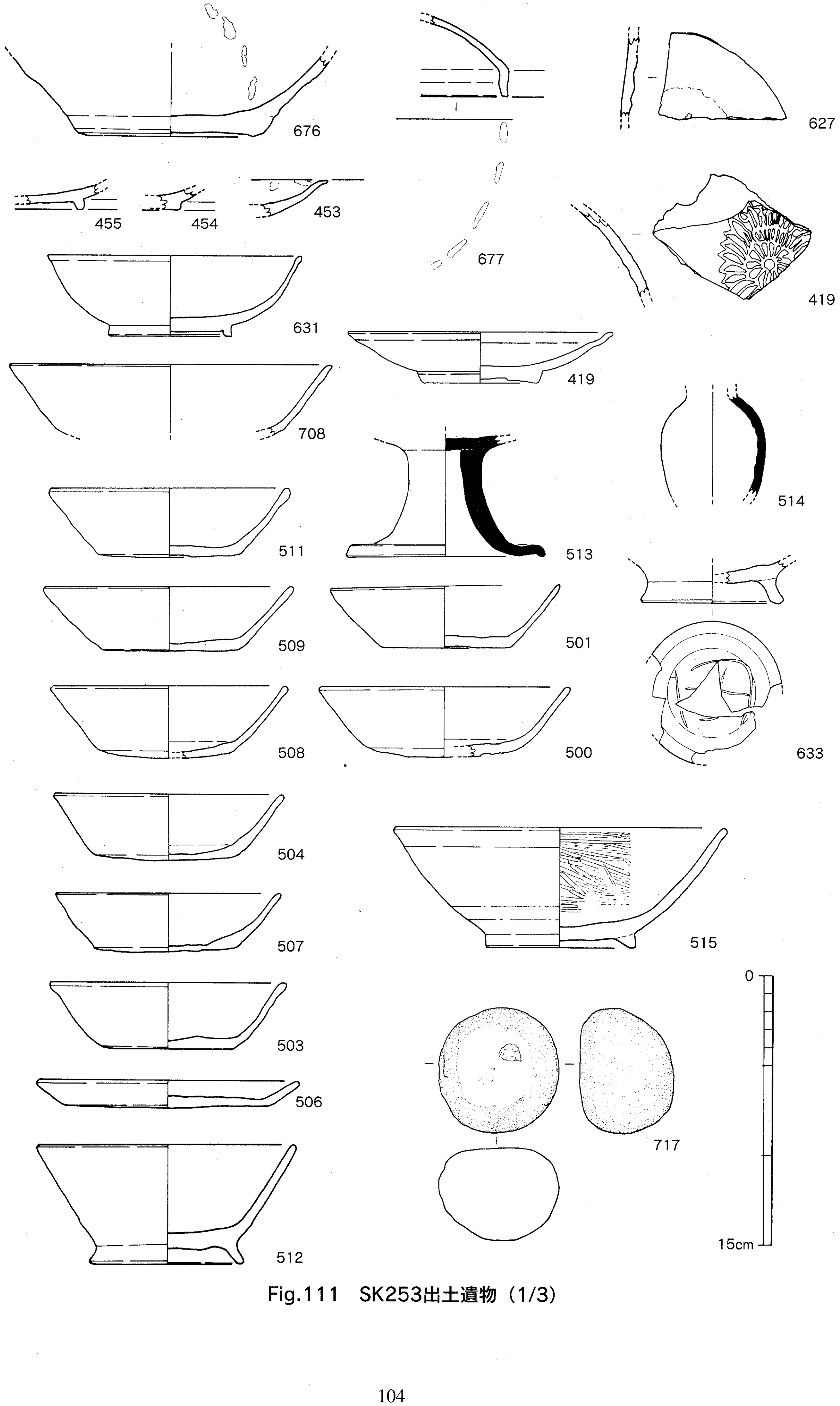


Fig.111　SK253出土遺物（1/3）

SK255（Fig.112）

調査区の北端に位置する円形の土坑である。SK254に切られる。径1.2m、深さ0.4mを測る。

SK255出土遺物（Fig.113、PL.45･59）

521は須恵器壷ｆである。復元底径11.7㎝、残存高20.3㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～1.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い赤褐色（5YR4/3)、内面は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。底部はやや上底ぎみになり、胴部は直線的に立ち上がり、肩部で屈曲する。胴部中位には沈線が2条巡る。調整は全体をなでるが、底部と胴部の境目付近はケズリ痕をそのまま残す。

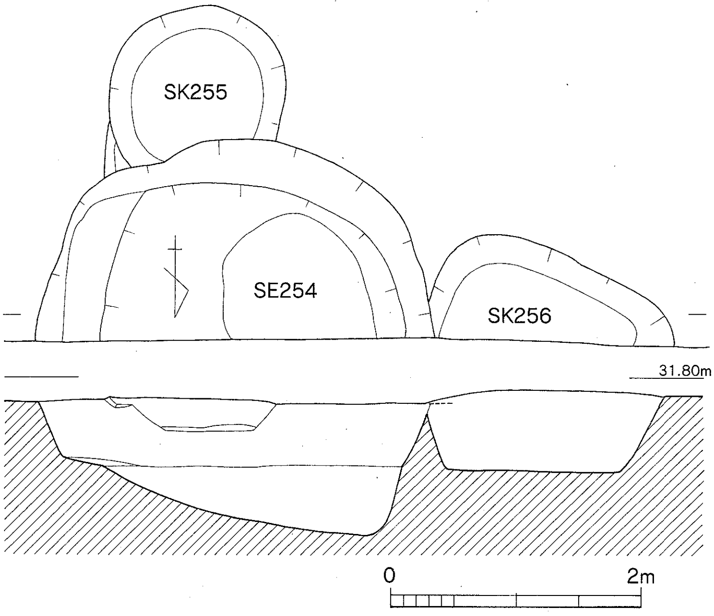


Fig.112　SE254･SK255･SK256実測図（1/60）

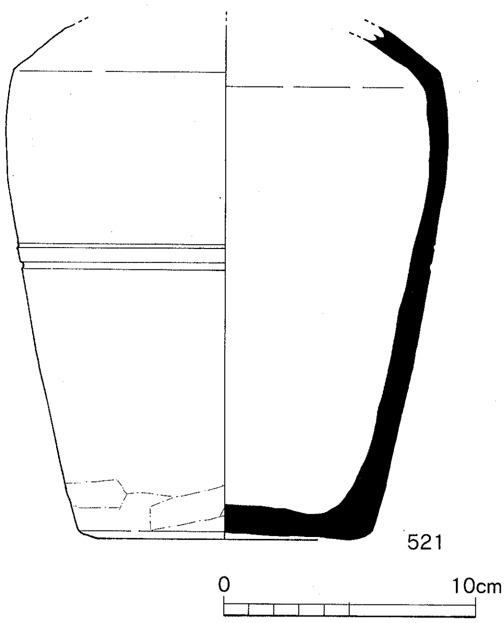


Fig.113　SK255出土遺物（1/3）

SK256（Fig.112）

調査区の北端に位置する円形の土坑である。SK254に切られる。調査区の境界にあるため、一部掘削ができなかった。径1.9m、深さ0.65mを測る。

SK257（Fig.114）

南北に主軸を持つ楕円形プランの土坑である。長径約2.1m、短径1.4m、深さ0.5mを測り、床面は一定ではなく擂り鉢状に凹んでいる。

SK257出土遺物（Fig.115、PL.45）

523は須恵器壷ｆである。復元口径15.05㎝、復元底径11.6㎝、胴部最大径22.6㎝、器高32.1㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（2.5G5/1）～暗灰色（N3/)、内面は暗灰

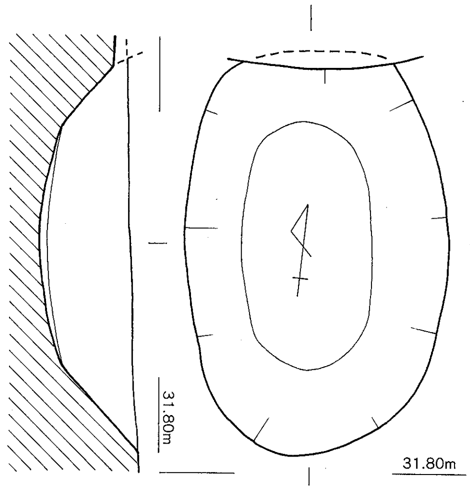


Fig.114　SK257実測図（1/40）

色（N3/）を呈する。底部は平坦で、胴部上位に縦長の耳が2ヶ所に貼付される。口縁部は二重口縁をなし、端部は平坦になる。胴部は丸みを帯び、最大径は中位以上にある。口縁部～頸部は大きく歪んでいる。

525は黒色土器A類椀である。復元口径14.6㎝、器高5.2㎝、高台径8.4㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は浅黄橙色（10YR8/3）、内面は黒色（10YR2/1）を呈する。体部は直線的に立ち上がる形状を呈するが、中位で弱く丸みを帯びる。高台部は丸みを帯びた小さなものが貼付される。調整は、内面は丁寧な手持ちヘラミガキ、それ以外はナデを施す。

522は須恵器甕ａである。復元口径21.8㎝、残存高12.1㎝を測る。胴部下半を欠失する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を多く含む。焼成は良く、灰色（N4/）を呈する。胴部は丸みをもつと思われるが、口縁部は短く外反し端部は小さい玉縁状をなす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はタタキ、内面はナデを施す。

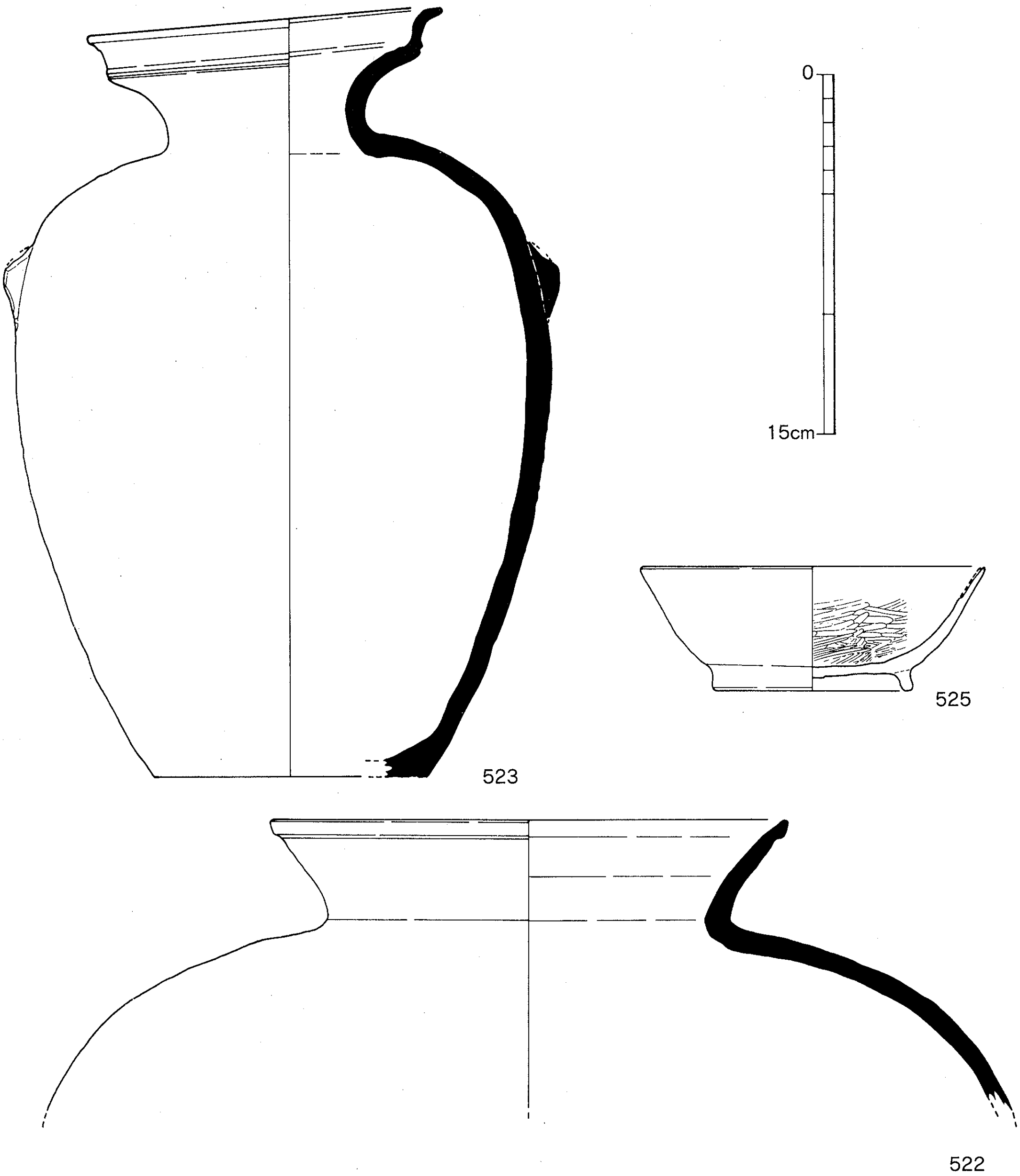


Fig.115　SK257出土遺物（1/3）

SK258（Fig.116）

やや歪んだ隅丸長方形を呈する土坑で、長径2.7m、短径2.2m、深さ0.5mを測る。南側にテラスがつく。

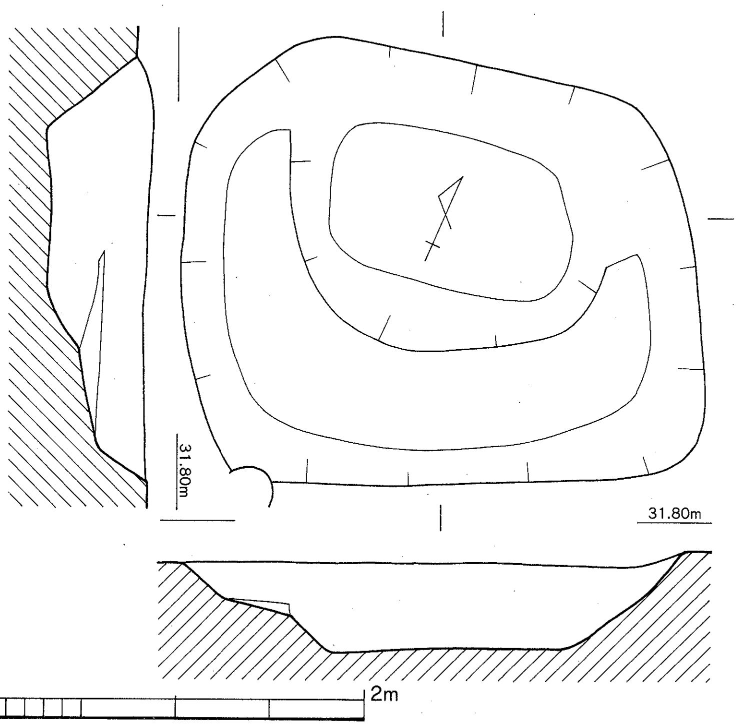


Fig.116　SK258実測図（1/40）

SK258出土遺物（Fig.117、PL.45）

526は土師器皿である。復元口径14.8cm、器高3.0cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、外面は明赤褐色（5YR5/6)、内面は明赤褐色（5YR5/6）～鈍い黄橙色（10YR6/4）を呈する。底部は丸みを帯び、体部は垂直方向に直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

527は土師器皿ｃである。復元口径20.8cm、器高3.0cm、高台径14.2cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は丸みを帯び不明瞭。体部も下半では丸みを帯び、中位以上は直線的に立ち上がる。調整は、体部内外面は回転ヘラミガキ、それ以外はナデを施す。高台内中央に「×」のヘラ記号が確認できる。

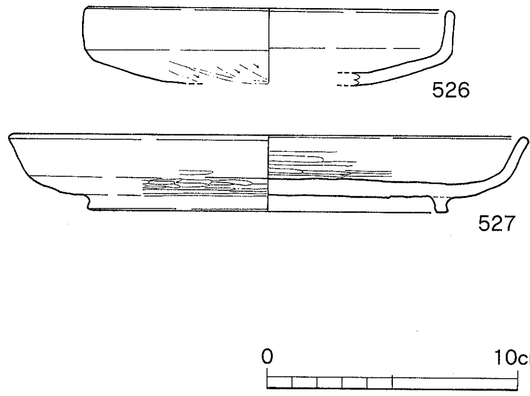


Fig.117　SK258出土遺物（1/3）

SK259（Fig.119）

調査区中央の北寄り、SI233の東に位置する。撹乱に切られる。円形プランを呈し、径1.9m、深さ0.3mを測る。

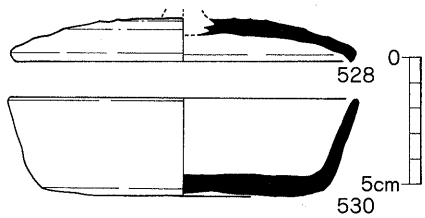


Fig.118　SK259出土遺物（1/3）

SK259出土遺物（Fig.118、PL.45・49）

528は須恵器蓋ｃ4である。復元口径13.4cm、残存高1.7cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y4/1）を呈する。天井部～体部にかけては丸みを帯び、口縁部は三角形があまり肥厚せず、内面にわずかな凹みをつける。調整は、天井部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

530は須恵器坏ａである。復元口径14.0cm、底径11.3cm、器高3.9cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は不良で、外面は灰色（5Y4/1）～灰白色

(2.5Y8/2)、内面は灰白色（2.5Y8/2）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。腰は深い。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

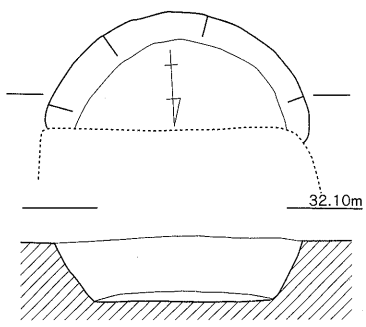


Fig.119　SK259実測図（1/40）

SK298（Fig.120、PL.5）

調査区の中央よりやや北側に位置する廃棄土坑である。楕円形のプランを有し、長径3.1ｍ、短径1.7ｍ、深さ0.45～0.65ｍを測る。床面は概ねフラットである。出土遺物は、8世紀後半のものが多く、遺物のなかには金属製の「権衡器」が1点出土している。層位は暗茶褐色土ベースの単一層である。

SK298出土遺物（土師器など）（Fig.121、PL.46・47・62）

552は土師器蓋ｃ4である。口径14.4㎝、器高3.05㎝、撮み径1.5㎝を測る。口縁部の一部を欠失する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。天井部は丸みを帯び、口縁部はあまり肥厚しない。撮み部は釦状をなす。調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

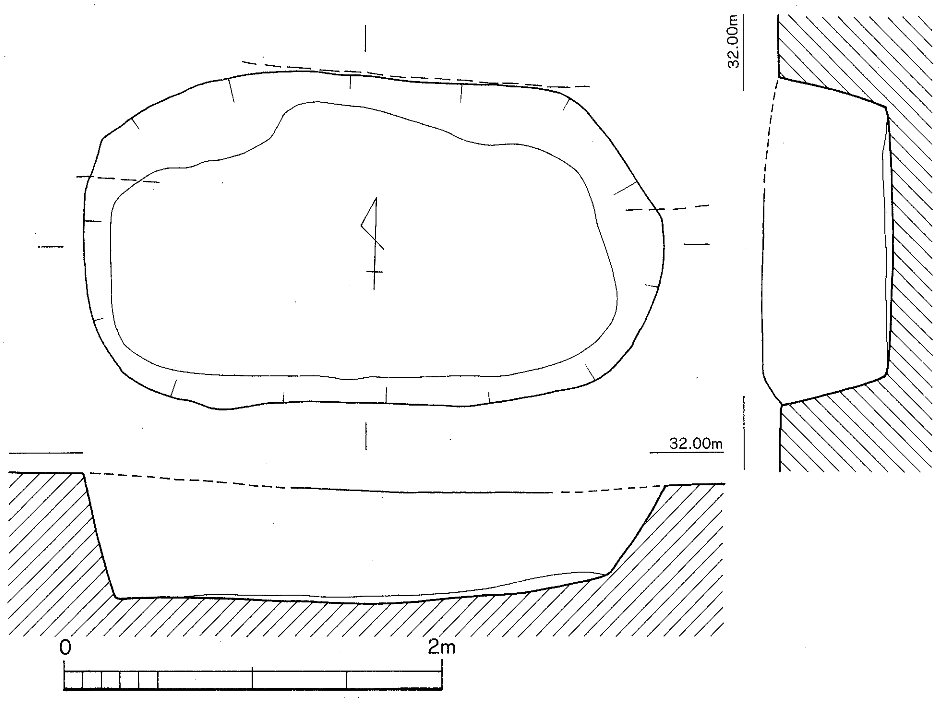


Fig.120　SK298実測図（1/40）

553は土師器蓋ｃ4である。復元口径19.8㎝、器高2.6㎝、撮み径2.1㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は肥厚せず内面にわずかに凹みをつける。調整はナデを施す。撮み部は低い釦状のものを貼付する。

561は土師器坏ａである。口径10.85㎝、底径7.0㎝、器高3.55㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部外面はヘラ切り痕をそのまま残し、それ以外はナデが施される。体部内面～外面中位に煤が付着している。

559は土師器坏ａである。復元口径13.9㎝、底径10.4㎝、器高3.4㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、外面は橙色（7.5YR7/6）、内面は鈍い黄橙色（10YR7/4）を呈する。調整はヨコナデを施し、見込みには煤が付着している。

562は土師器坏ａである。復元口径14.6㎝、復元底径9.6㎝、器高4.15㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（7.5YR7/6）～鈍い黄褐色（10YR5/4）、内面は橙色（7.5YR7/6）を呈する。体部は直線的に立ち上がる。口唇部に煤が付着する。

569は土師器坏ｄである。口径13.95㎝、底径8.05㎝、器高3.1㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/6）を呈する。体部内外面ともに雑なヘラミガキを施す。体部上半～口縁部の内外面に煤が付着しており、灯明器に使用されたものと思われる。

563は土師器の坏ｄ3である。復元口径13.1㎝、底径6.1㎝、器高2.8㎝。胎土は精良で、微量の細かい白色粒を含む。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、体部外面上位は2～3.5㎝の幅で黒っぽくなる。調整は、外面は摩滅により不明瞭だが、内面は雑に磨いている。見込みはナデており、体部下位以下は回転ヘラケズリを施している。

564は土師器の坏d2である。復元口径14.7㎝、底径6.0㎝、器高3.6㎝。体部の一部を欠失しており、復元して図示した。胎土は精良で、微量の白色粒を含む。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。調整は、見込みにもミガキがあると思われるが摩滅により不明瞭である。体部内外と底部外周を丁寧に磨いている。底部と体部の境界以下は回転ヘラケズリを施す。

568は土師器坏ｄである。口径14.5㎝、底径7.7㎝、器高3.3㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、明赤褐色（5YR5/6）を呈する。体部内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキを施す。器表全体に煤が付着している。

567は土師器坏ｄである。復元口径14.45㎝、底径7.5㎝、器高3.7㎝を測る。全体の2/3が残存する。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。底部外面はヘラ切り後にナデを施し、板状圧痕が残る。体部外面はヨコナデ、内面はナデの後に雑なヘラミガキを施す。

560は土師器坏ｄである。復元口径13.9㎝、底径7.8㎝、器高3.55㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。体部内外面ともに回転ヘラミガキが施されるが、外面は中位下半のみ丁寧で、上半と内面は雑に行われる。

557は土師器坏ｄである。復元口径17.3㎝、復元底径9.8㎝、器高2.9㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（5YR6/8）～黒色（2.5Y2/1）、内面は橙色（5YR6/8）を呈する。底部外面はケズリ痕をそのまま残すが、体部内外面は丁寧な回転ヘラミガキが施される。

558は土師器皿ｃである。復元口径24.5㎝、器高3.5㎝、復元高台径16.8㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底

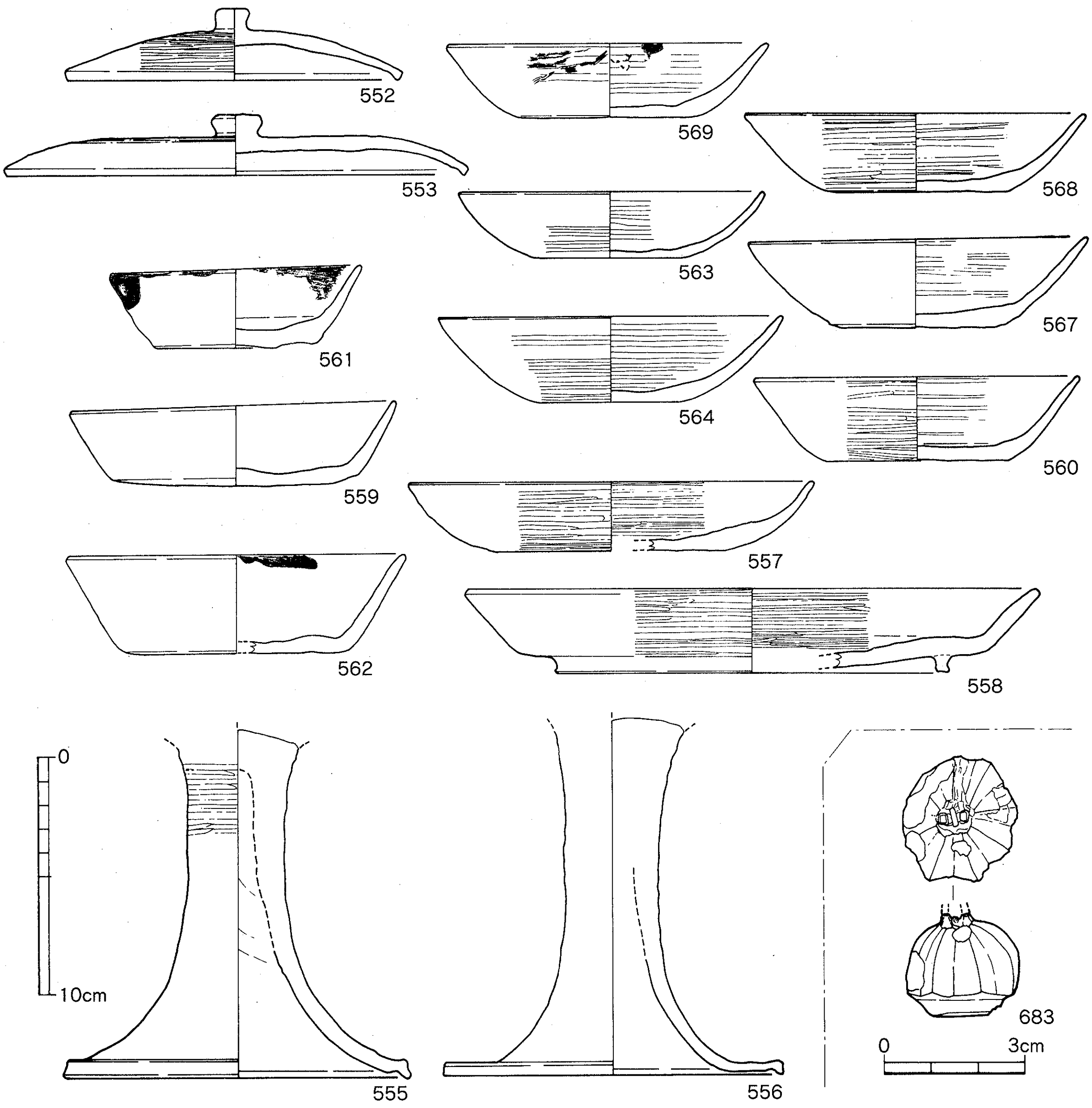


Fig.121　SK298出土遺物（土師器など）（1/3・2/3）

部と体部の境目は丸みを帯び、その1.5cm程内側に断面長方形の高台が貼付される。端部外面は外方に張る。高台内はケズリ痕を残すが、体部内外面ともに丁寧な回転ヘラミガキが施される。

555は土師器高坏ｂである。坏部と脚裾部のほとんどを欠失しており、残存高14.0cm、裾部径12.9cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。長脚のもので、裾部形状は内側に折り返し、三角形状を呈する。調整は、外面は回転ヘラミガキ、内面はナデを施す。

556は土師器高坏ｂである。残存高14.5cm、復元裾部径14.5cmを測る。坏部を欠失する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は橙色（5YR6/8）、内面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。長脚の高坏で、裾部が水平になり、端部を小さい三角形状におさめる。形状はエ類に該当する。

683は金属製の権衡器である。高さ2.2cm、笠部最大径2.5cm、台部径1.8cm、台部高0.4cm、鈕残存高0.1cmを測る。笠部は断面三角形の稜で不均一に8分割される（太宰府市例は6分割）。台部は短い円柱状。鈕は欠失している。天井部には窪みがあり、そこに輪金が接続されているものと考えられる。輪金の間には繊維が付着している（恐らくは紐と思われる）。遺存状況は不良で、土塊が外せないために実測図には歪みがある。地金は未確認。

SK298出土遺物（須恵器）（Fig.122、PL.46・47）

543は須恵器坏ａである。口径13.3cm、底径10.25cm、器高3.6cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には1～4mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

533は須恵器坏ａである。復元口径12.7cm、底径8.8cm、器高3.65cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

534は須恵器坏ａである。復元口径14.2cm、底径10.0cm、器高4.0cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には雲母・微粒砂～2mm程の砂粒を含む。焼成はやや不良で、外面は灰白色（5Y8/1）、内面は灰色（5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

542は須恵器坏ａである。口径13.15cm、底径9.45cm、器高3.9cmを測る。口縁部の一部が欠失する。胎土には微粒砂～3mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。底部はやや丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がる。底部の器肉は厚く、口縁部に向かって先細りになる。調整はナデを施す。体部内面に墨痕が確認できる。

539は須恵器坏ｃである。口径11.2cm、器高3.95cm、高台径7.3cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）を呈する。体部と底部の境目付近に小さく丸みを帯びた高台が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。

540は須恵器坏ｃである。口径12.55cm、器高3.45～3.95cm、高台径7.7cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そのやや内側に断面方形の小さい高台が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。全体的に歪みが大きい。

537は須恵器坏ｃである。復元口径13.0cm、器高3.35cm、復元高台径8.65cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に断面逆台形の小さなものが貼付される。体部は中位以下でやや丸みを帯びる。器肉が4mm程度と薄い。

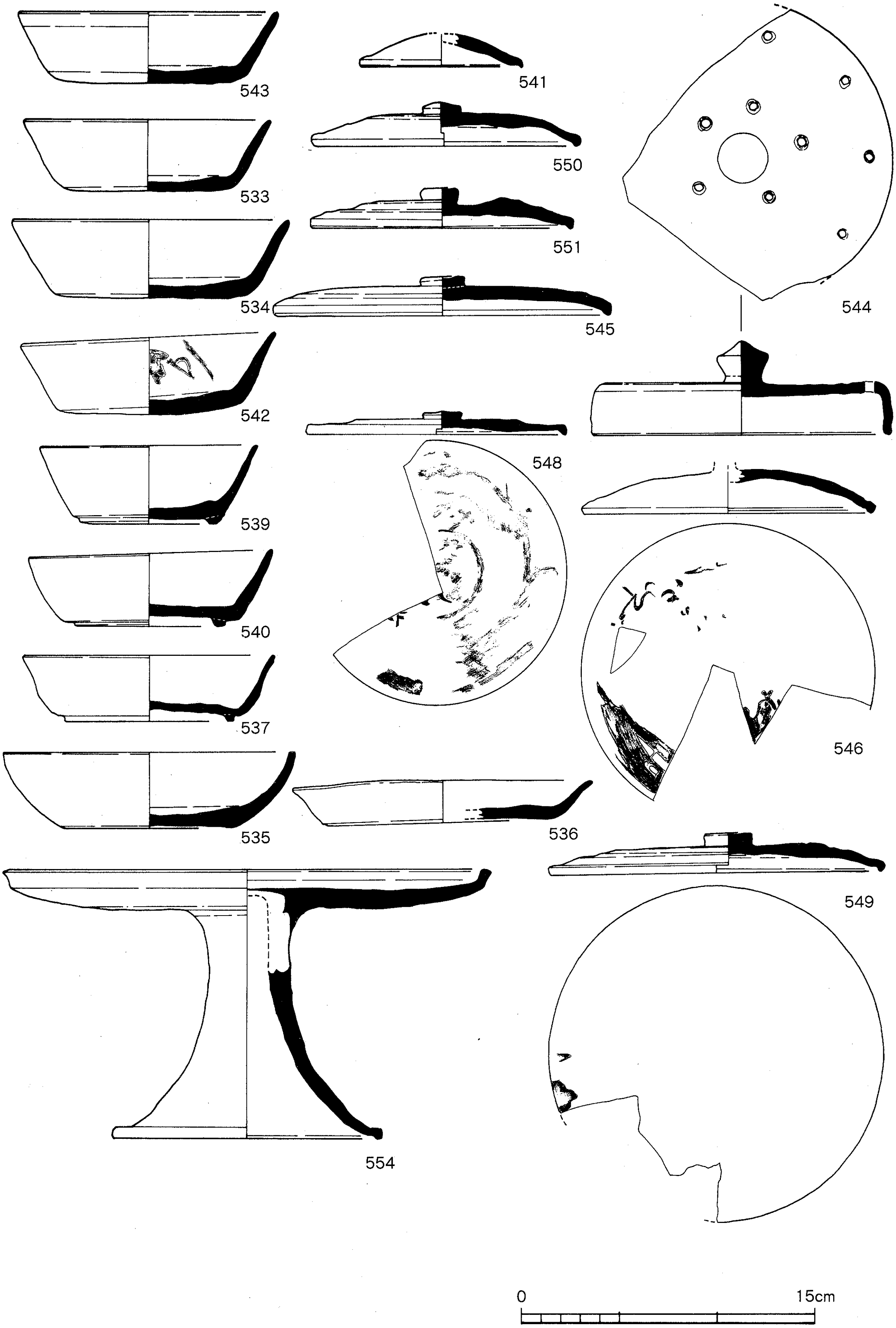


Fig.122　SK298出土遺物（須恵器）（1/3）

535は須恵器坏ａである。復元口径15.0cm、復元底径9.2cm、残存高3.85cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂～mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。形状は土師器の坏ｄのように底径が小さく体部に丸みを帯びるもので、口唇部端面は方形を呈する。調整はナデを施す。

536は須恵器皿ａである。口径15.4cm、底径12.3cm、器高2.1cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。体部は口縁部付近で弱く外反する。調整はナデを施す。口縁部は歪みが著しい。

541は須恵器蓋ａ4である。口径8.4cm、残存高1.65cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には黒色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、外面は自然釉の付着により黒色（N2/）、内面は灰色（N5/）を呈する。天井部は丸みを帯び、口縁部は水平になり端部は短く小さい三角形状を呈する。全体にヨコナデを施す。

550は須恵器蓋ｃ4である。口径13.85cm、器高2.35cm、撮み径2.0cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。天井部は平坦をなし、口縁部は肥厚せず小さく丸みを帯びる。撮み部は扁平な乳頭状を呈する。調整はナデを施す。

551は須恵器蓋ｃ4である。口径13.5cm、器高2.1cm、撮み径2.0cmを測る。全体の1/6が欠失する。胎土には0.5～2mm程の砂粒を多く含む。焼成は良く、暗灰色（N3/）を呈する。天井部は歪みがあるものの、ほぼ平坦をなす。口縁部は肥厚しないが、端部は明瞭に角をもつ。撮み部は扁平な釦状を呈する。

545は須恵器の蓋ｃ3ウである。口径17.3cm、器高2.0cm、撮み径2.8cm。扁平なボタン状の撮みを有し、天井部は低い。端部はにぶい断面三角形状を呈する。胎土は精良で微量の白色粒を含む。色調は褐灰色（10YR6/1）を呈し、焼成は良好。調整は、内外面ともにナデを施している。

544は須恵器蓋ｂである。復元口径15.25cm、器高4.75cm、撮み径2.65cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、暗灰色（N3/）を呈する。撮み部は宝珠状を呈し、天井部には9ヶ所の焼成前穿孔がある。推測すると撮みの周囲に5＋10で配置されるものと思われる。形状から壷蓋と考えられるが、特殊な製品であろう。

548は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径13.5cm、器高1.2cm、撮み径2.0cmを測る。全体の3/4が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、暗灰色（N3/）を呈する。天井部は非常に低く平坦で、ほぼ直線をなす。口縁部は小さいがしっかりとした三角形を。撮み部は低い釦状をなす。天井部内面全面に墨痕・擦痕が確認でき、硯に転用したものと思われる。

546は須恵器蓋ｃ4である。口径15.0cm、残存高2.2cmを測る。全体の2/3が残存する。撮み部は欠失する。胎土には微量の1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）～暗灰色（N3/）を呈する。天井部は丸みを帯び、口縁部は肥厚せず内面にわずかに凹みをつける。天井部～口縁部内面に墨痕・擦痕が確認でき、硯に転用したものと考えられる。

549は須恵器蓋ｃ3ウである。口径17.2cm、器高2.0cm、撮み径2.5cmを測る。全体の4/5が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さく丸みを帯びる。撮み部は低い釦状を呈する。全体的に器肉は薄い。口縁部内面に墨痕が確認されており、硯に転用されたものと考えられる。

554は須恵器高坏ｂである。復元口径25.0cm、器高13.65cm、裾部径13.8cmを測る。坏部の2/3を欠失する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。裾端部の形状はエ類に相当する。

SK358（Fig.123）

調査区の西側で検出された土坑で、建物基礎によって攪乱を受けており、遺存状況は悪い。プランは歪んだ隅丸方形を呈し、径1.8m、深さ0.1～0.15mを測る。床面はフラットである。

SK358出土遺物（Fig.124、PL.45）

576は土師器皿ａである。復元口径14.6cm、復元底径9.6cm、器高1.8cmを測る。全体の1/3が残存する。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄褐色（10YR7/4）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、口縁部は端部で丸くなり、弱く外反する。

575は土師器坏ｄである。復元口径18.2cm、底径8.5cm、器高3.7cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には赤褐色粒・0.5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（2.5Y6/8）を呈する。体部内外面ともにヘラミガキを施していると思われるが、摩滅により不明瞭である。

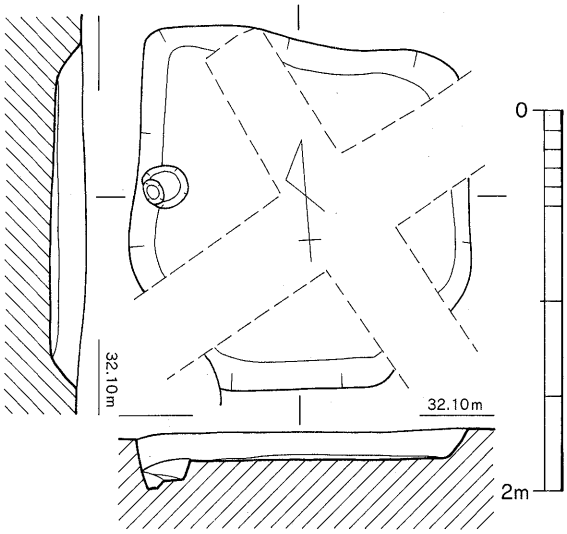


Fig.123　SK358実測図（1/40）

574は土師器坏ｄである。復元口径18.1cm、底径8.75cm、器高4.9cmを測る。全体の1/4が残存する。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（2.5YR6/8）を呈する。摩滅により調整は不明瞭だが、体部内外面ともにミガキが施されている。全体的に器肉は薄い。

579は須恵器蓋ｃ3アである。残存高3.1cm、撮み径2.9cmを測る。全体の1/4が残存する。歪みが大きいために復元はできなかった。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y4/1）を呈する。天井部は平坦で、口縁部は大きくしっかりとした三角形をなす。撮み部は扁平な乳頭状を呈する。調整はナデを施すが、天井部外面はケズリ痕をそのまま残す。

578は須恵器蓋ｃ1である。復元口径15.0cm、器高4.3cm、撮み径2.7cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（5Y5/1～4/1）、内面は灰色（5Y6/1）を呈する。天井部は高く丸みを帯び、低い釦状の撮みが貼付される。口縁部内面にはかえりをもち、端部は口唇部とほぼ水平となる。調整はナデを施すが、天井部外面はケズリ痕をそのまま残す。器肉は厚い所で1cm程あり、厚ぼったい感じを受ける。

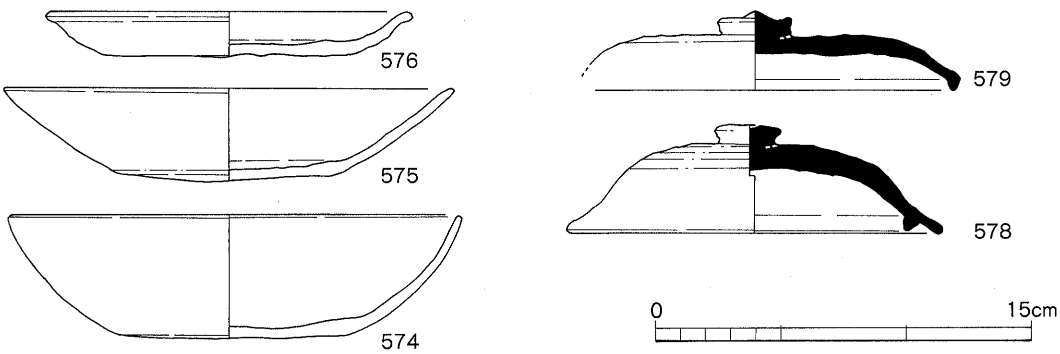


Fig.124　SK358出土遺物（1/3）

SK360（Fig.125）

調査区の西側で検出された土坑である。プランは略円形を呈し、径1.6m、深さ0.55mを測る。

SK360出土遺物（Fig.126、PL.47）

581は須恵器蓋である。復元口径12.2㎝、残存高1.45㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。口縁部は三角形だが、あまり肥厚しない。天井部は平坦で、体部との境目は明瞭である。

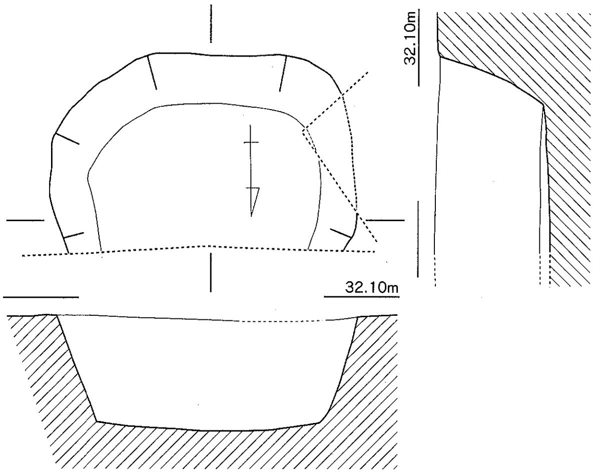


Fig.125　SK360実測図（1/40）

660は土師器蓋ｃ4である。復元口径17.3㎝、残存高2.5㎝を測る。天井部の1/3と撮み部を欠失する。胎土には微量の赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。調整は、天井部～体部にかけて回転ヘラミガキを施している。撮み脇に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

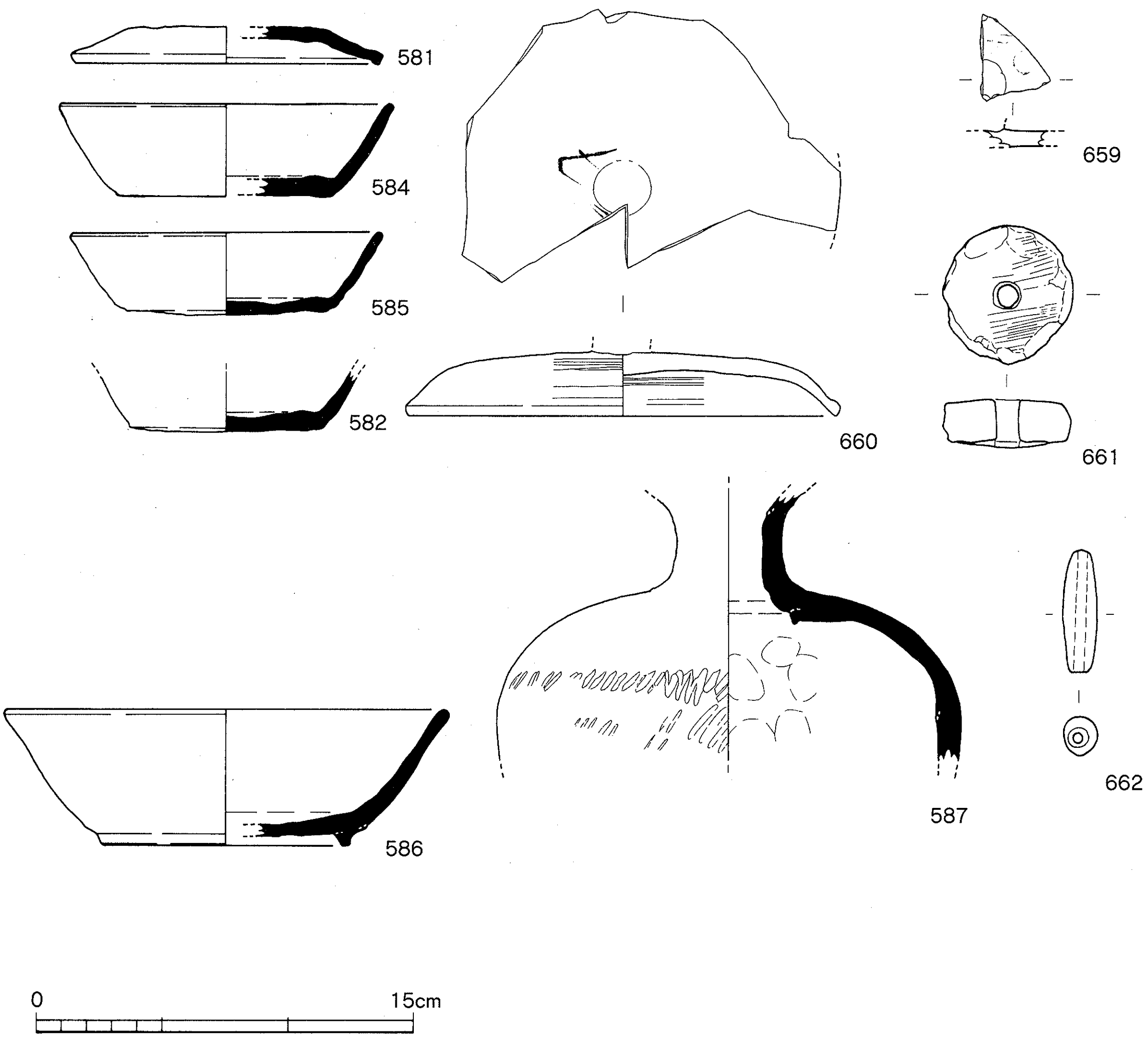


Fig.126　SK360出土遺物（1/3）

584は須恵器坏ａである。復元口径13.3㎝、復元底径8.6㎝、器高3.65㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。調整はナデを施し、底部外面には板状圧痕が残る。

585は須恵器坏ａである。復元口径12.4㎝、底径8.0㎝、器高3.3㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（5Y4/1）を呈する。調整はヨコナデを施し、底部外面はヘラ切り痕をそのまま残す。

582は須恵器坏ａである。底径7.7㎝、残存高2.4㎝を測る。体部中位以上を欠失する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y5/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。底部は平底をなし、ヘラ切りの後に刷毛目？を施す。8～10本の条線が一単位となり、不定方向に施されている。

586は須恵器坏ｃである。復元口径17.7㎝、器高5.35㎝、復元高台径9.9㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。高台部は底部と体部の境目付近に、断面逆台形の小さなものが貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施すが、高台内はヘラ切り痕をそのまま残す。

587は須恵器壷である。胴部最大径18.4㎝、残存高10.6㎝を測る。胴部中位以下と口縁部を欠失する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。胴部は丸みを帯び、頸部で急激に細くなりそのまま直立し、口縁部で外反させるものと思われる。調整は、頸部内外面はヨコナデ、胴部外面は平行タタキ（後に一部ナデ）、内面には指頭圧痕が残る。

659は須恵器蓋ｃである。破片資料であり、残存高0.7㎝を測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰白色（5Y7/1）を呈する。天井部には撮みの接合痕が確認できる。撮み脇には墨書が確認できる。文字と思われるが、判読はできなかった。

661は土製の紡錘車である。完形品で土器の転用品である。径5.15～5.5㎝、厚さ1.9㎝、孔径0.9㎝を測る。胎土には微量の雲母・1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い褐色（7.5YR6/3）を呈する。両面から周縁を打ち欠き、両面を磨って形状を整えている。

662は管状土錘である。完形品で、長さ4.75㎝、幅1.35㎝、孔径0.4㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。

SK375（Fig.127）

隅丸長方形の整ったプランを呈する土坑である。土坑墓の可能性もあったが、調査では確認ができなかったので土坑として分類した。長径2.0ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.4ｍを測り、床面はフラットである。東側にテラスを有し、壁面はほぼ直立して立ち上がる。軸は概ね東西を向いている。

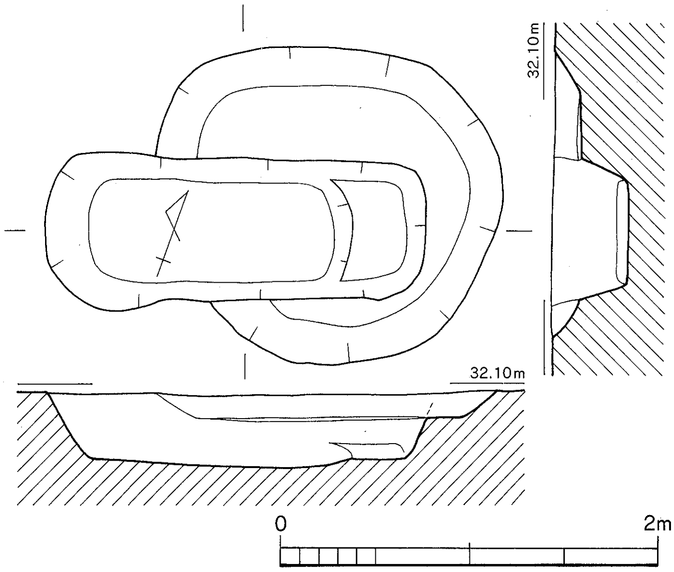


Fig.127　SK375実測図（1/40）

SK393（Fig.128）

円形プランを呈する土坑で、非常に浅い。径1.6～1.7m、深さ0.1mを測り、床面はフラットである。

SK394（Fig.129）

楕円形プランを呈する土坑で、南側を攪乱により破壊されている。長径約2.4m、短径1.8m＋α、深さ0.25mを測り、床面は一定の深さであるが、中央付近が南北に延びる溝状に凹む。深さは10～20㎝であるが、機能については不明である。

SK395（Fig.130）

歪んだ円形プランを呈する土坑である。径約2.0m、深さ0.6mを測り、床面はフラットである。床面の形状はかなり乱れている。

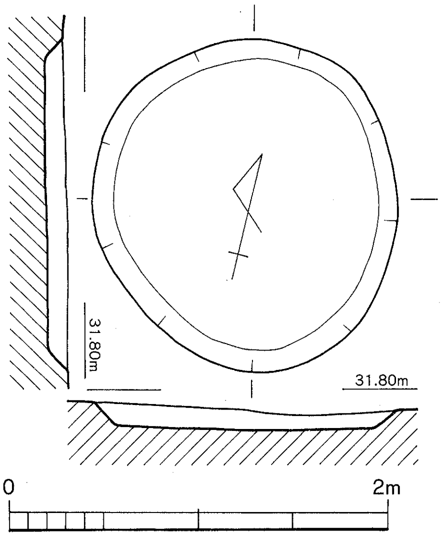


Fig.128　SK393実測図（1/40）

SK396（Fig.131）

調査区の西端に位置する。遺物は出土していない。歪んだ楕円形のプランで、長径3.9m＋α、短径2.8m＋α、深さ0.75mを測る。断面は逆台形状で、床面はフラットである。

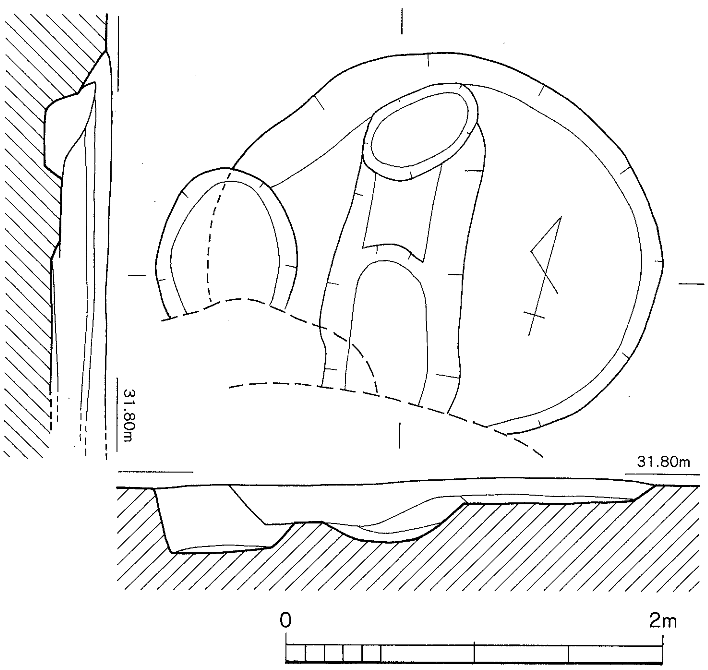


Fig.129　SK394実測図（1/40）

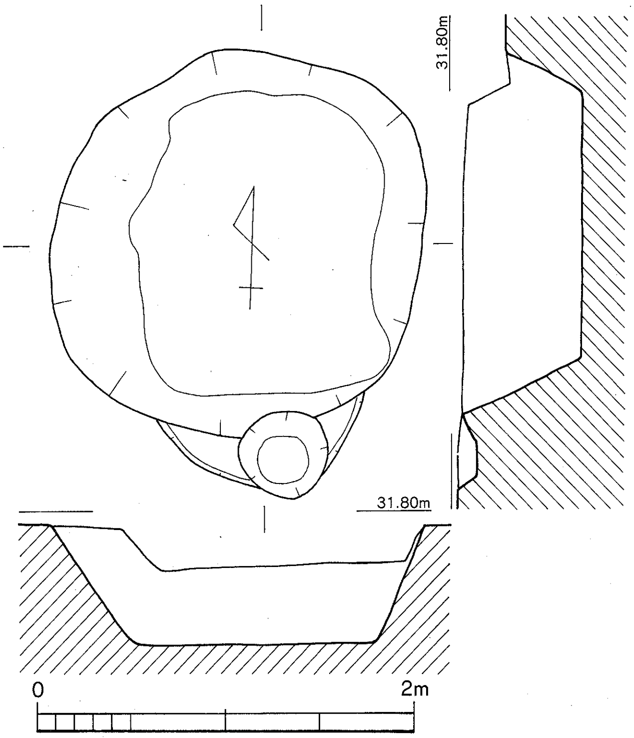


Fig.130　SK395実測図（1/40）

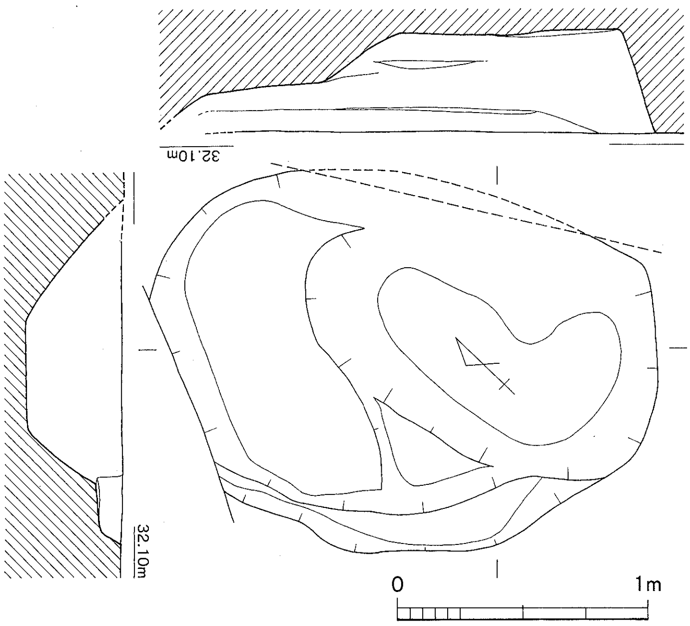


Fig.131　SK396実測図（1/60）

9)SX（性格不明遺構）

SX229（Fig.132、PL.5）

調査区中央付近の北寄りに位置する。SK226、SK227、SK228に切られている。長径6.9m、短径3.0～3.3m、深さ0.35～0.75mを測り、比較的大きな不整楕円形の土坑である。調査時の土層確認では複数の土坑としては認識できなかったが、形状から3基の土坑が切り合っていた可能性がある。SB391との切り合いについては、調査時には確認できずに掘削してしまったので、未確認である。遺物は非常に少ないが擂鉢の小片が出土しており、中世まで下がる可能性がある。

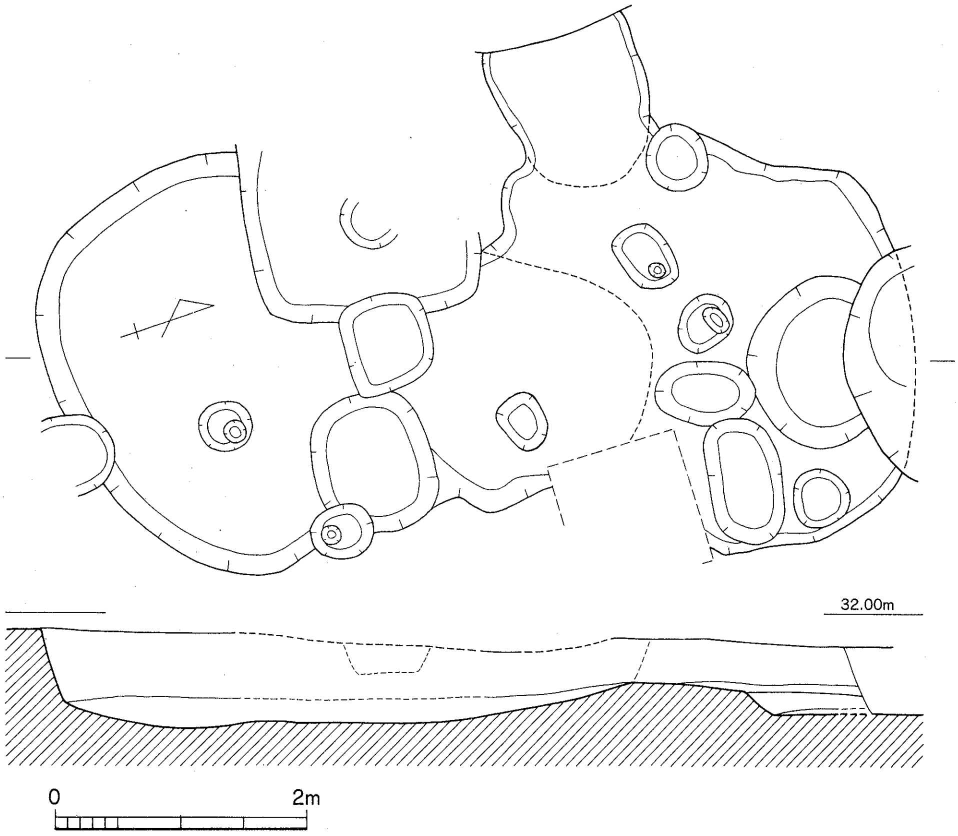


Fig.132　SX229実測図（1/60）

SX229出土遺物（Fig.133、PL.43）

416は土師器蓋である。破片資料であり、残存高1.25cmを測る。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7／4）を呈する。口縁部は丸みを帯び、かえりを有する。かえりは小さいがしっかりとした断面三角形を呈し、口唇部と水平位置に引き出される。

635は土師器坏？である。破片資料であり、残存高3.8cmを測る。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。頭上で復元したため、傾きは不確実である。調整は、体部中位以下はケズリ、それ以外はヨコナデを施す。体部内面にヘラ記号が刻まれる。

409は土師器坏aである。口径12.8cm、底径7.25cm、器高3.95cmを測る。口縁部の1/3を欠失する。胎土には雲母・微粒砂をわずかに含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は丸みをもちながら立ち上がり、2ヶ所に段がある。

405は土師器坏cである。口径14.2cm、器高5.15cm、復元高台径9.4cmを測る。口縁部の

1/2、高台部の2/3を欠失する。胎土には微粒砂～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y8/2）～鈍い褐色（7.5YR6/3）を呈する。体部はやや丸みをもつものの体部中位以上は直線的に立ち上がる。高台部は端部を外側に跳ね上げげた長めのものが貼付される。調整は体部の下位にヘラケズリを残し、体部内面にはヘラミガキ、それ以外はヨコナデが施される。

404は土師器壷である。復元口径9.1cm、胴部最大経20.7cm、器高24.1cmを測る。ほぼ完形である。胎土には赤褐色粒・0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い黄燈色（10YR7/3）を呈する。底部は丸底で小さく、胴部最大径は胴部中位以上にあり、全体的に先細りの感がある。口縁部は直口縁で短く立ち上がる。摩滅により調整は不明瞭。

415は須恵器蓋である。破片資料であり、残存高1.6cmを測る。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。口縁部はかえりを有し、断面三角形で口唇部と水平位置に引き出される。

414は須恵器蓋である。破片資料であり、残存高1.55cmを測る。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、黄灰色（2.5Y6/1）を呈する。小片であるため詳細は不明だが、天井部内面に墨痕が付着している。擦痕は大きく2方向あり、硯に転用したものと思われる。

411は須恵器蓋a1である。口径16.2cm、器高2.45cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂～0.5mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。天井部は丸みを帯び、ナデにより仕上げる。かえりは口唇部とほぼ水平位置までしっかりとしている。

410は須恵器蓋a3イである。口径14.1cm、器高2.5cmを測る。全体の2/3が残存する。胎土には0.5～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。天井部はやや平坦をなし、ケズリ痕跡をそのまま残す。全体的に歪みが大きい。

413は須恵器蓋c3エである。復元口径14.4cm、器高1.2cm、撮み径2.8cmを測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）～オリーブ黒色（7.5Y3/1）を呈する。器高は低く天井部は平坦で、口縁部は肥厚せず短い。撮みは扁平な釦状を呈する。天井部はケズリ痕跡をそのまま残す。

408は須恵器壷？である。底部のみの破片資料であり、底径10.0cm、残存高4.85cmを測る。一応、壷に分類したが鉢・瓶の可能性もある。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い赤褐色（5YR5/3）を呈する。いわゆる「赤焼き」で、肥後系の可能性がある。調整は胴部の下位にはヘラケズリを残し、それ以外はナデを施す。

412は須恵器高坏aである。坏体部と脚部下半を欠失しており、残存高3.8cmを測る。胎土には1～2mm程の砂粒をわずかに含む。焼成は良く、灰色（5Y6/1）を呈する。詳細な形状は不明だが、小高坏aはほぼ8世紀には消滅する器種で、他資料とも合致する。

407は須恵器坏cである。破片資料であり、残存高3.5cmを測る。胎土には0.5mm以下の砂粒を含み、焼成は不良である。淡黄色（2.5Y8/3）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、高台部は小さく丸いものが貼付される。口縁部内外面に煤が付着しており、灯明器として使用されたものと推測される。

403は須恵器平瓶である。口径10.35cm、胴部最大径17.45cm、残存高12.65cm、頸部径5.1cmを測る。口縁部を欠失するが頸部以下は完形。胎土には0.5～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、鈍い橙色（7.5YR7/4）を呈する。器表は「赤焼き」になる。

652は須恵器蓋である。破片資料であり、残存高0.8cmを測る。胎土には0.5mm以下の砂粒を含む。焼成は良く、外面は灰色（N4／）、内面は灰色（7.5Y6/1）を呈する。天井部内面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

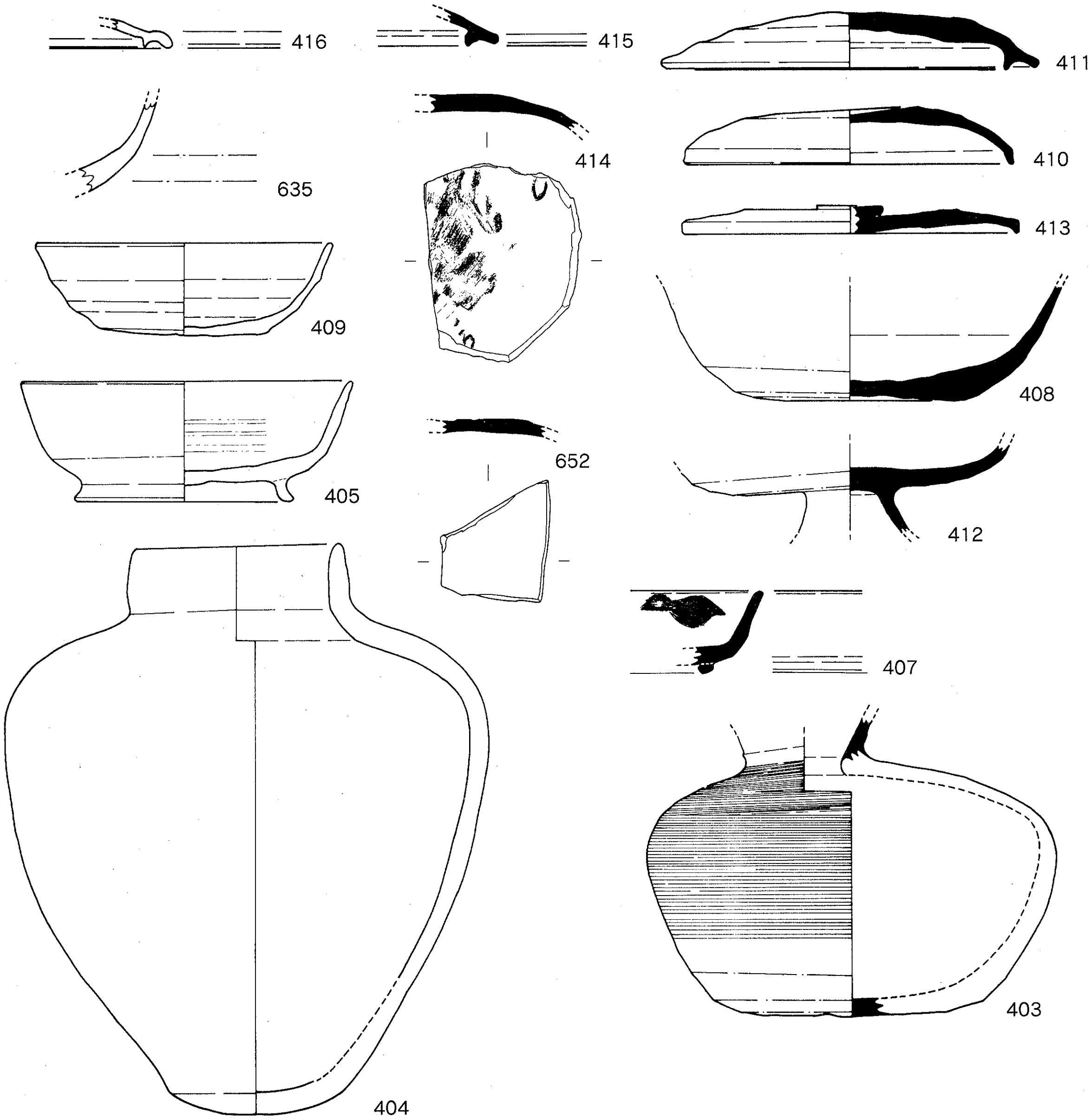


Fig.133　SX229出土遺物（1/3）

10)Pit（ピット）(Fig.138・139・PL48)

Pit011出土遺物（Fig.134）

092は土師器甕である。破片資料であり、残存高8.85㎝を測る。胎土には2～3㎜程の砂粒を多く含む。焼成は良く、鈍い褐色（7.5YR5/4）を呈する。胴部は張りがなく、口縁部は短く弱く外反する。調整は胴部内面のみケズリ痕を残し、それ以外はナデを施す。

Pit025出土遺物（Fig.134、PL.60）

128は黒色土器A類椀である。復元口径16.2㎝、器高5.4㎝、復元口径9.2㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・1～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。直線的に延びる体部形態を有し、底部と体部の境目付近に断面長方形の低い高台部が貼付される。底部はやや丸みを帯び、底部外面中央付近と高台端面はほぼ水平となる。調整は摩滅により不明瞭である。

Pit032出土遺物（Fig.134）

418は須恵器甕ａである。口径22.4㎝、胴部最大径38.65㎝、残存高23.7㎝を測る。口縁部の1/3と胴部下半を欠失する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N5/）を呈する。外面に格子タタキ、内面に青海波の当て具痕が残る。口縁部はヨコナデを施す。口縁部の形状は肥厚せずに同じ厚みをもちキ類に近いが、端面は水平にならない。

Pit140出土遺物（Fig.134）

221は土師器皿ａである。破片資料であり、残存高2.0㎝を測る。胎土には微細な雲母・赤褐色粒・0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR7/6）を呈する。底部は平坦をなし、体部との境目は明瞭、体部は直線的に立ち上がる。調整は摩滅により不明瞭である。

Pit169出土遺物（Fig.134）

225は土師器坏ａである。復元口径12.6㎝、復元底径6.6㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（7.5YR6/6）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は摩滅により不明瞭である。

Pit181出土遺物（Fig.134）

594は鞴羽口である。胎土には1～2.5㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、外面は鈍い黄橙色（10YR7/2）、内面は橙色（5YR6/6）を呈する。調整は外面は工具によるナデ、内面は未調整。残存長13.5×6.0㎝。

Pit193出土遺物（Fig.134）

223は須恵器蓋ｃ3エである。復元口径14.0㎝、器高2.3㎝、撮み径2.4㎝を測る。全体の1/3が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（10Y6/1）を呈する。天井部は平坦で、体部との境目は明瞭である。口縁端部は三角形があまり肥厚せず、内面がわずかに凹む。撮み部は扁平な釦状を呈する。調整は天井部外面のみケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

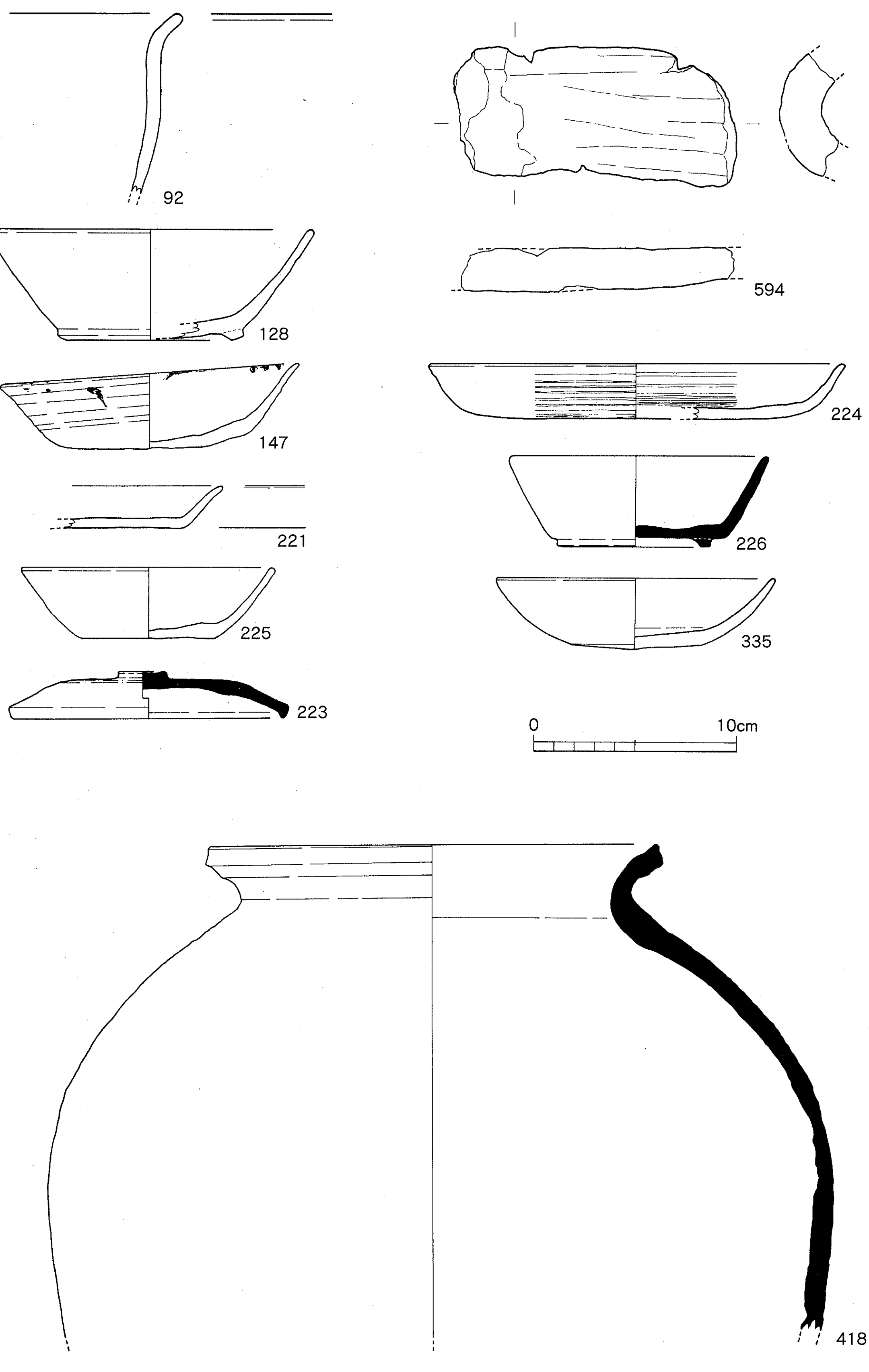


Fig.134　Pit出土遺物その1（1/3）

Pit198出土遺物（Fig.134）

224は土師器皿ａである。復元口径20.6㎝、復元底径17.1㎝、器高2.7㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部は平坦をなすが、底部と体部の境目は丸みを帯び不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、内外面ともに回転ヘラミガキを施す。

644は須恵器坏or皿である。破片資料であり、残存高1.05㎝を測る。胎土には微量の微粒砂を含む。焼成は良く、灰黄色（2.5Y7/2）を呈する。外面に墨書が確認できる。「主」のように見えるが、判読はできなかった。

Pit204出土遺物（Fig.134）

226は須恵器坏ｃである。復元口径12.35㎝、器高4.45㎝、高台径7.6㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には0.5～1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰白色（2.5Y7/1）を呈する。底部と体部の境目は明瞭で、そこから7㎜程内側に断面逆台形の扁平な高台部が貼付される。体部は直線的に立ち上がる。調整はナデを施す。

Pit221出土遺物（Fig.134）

335は土師器坏ｄである。復元口径13.8㎝、底径6.4㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には雲母・赤褐色粒・微粒砂～2㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/6）を呈する。調整は摩滅により不明瞭だが、底部外面はケズリ痕を残す。器肉はやや厚めである。

Pit235出土遺物（Fig.135）

478は須恵器蓋ｃ3イである。復元口径19.0㎝、残存高2.2㎝、撮み径2.0㎝を測る。全体の1/4が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（7.5Y5/1）を呈する。天井部は低く平坦で、口縁部は小さいがしっかりとした三角形をなす。撮み部は小さな擬宝珠状を呈する。

Pit260出土遺物（Fig.135）

531は土師器坏ａである。口径12.6㎝、底径7.8㎝、器高3.5㎝を測る。全体の1/2が残存する。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、鈍い黄橙色（10YR7/3）を呈する。底部と体部の境目は丸みを帯びるが明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。調整は、底部外面はケズリ痕をそのまま残し、それ以外はナデを施す。

Pit295出土遺物（Fig.135）

565は土師器坏ｄである。復元口径14.3㎝、底径6.5㎝、器高3.15㎝を測る。全体の3/4が残存する。胎土には1㎜程の砂粒を含む。焼成は良く、橙色（5YR6/8）を呈する。底部外面はケズリ痕をそのまま残し、体部内外面に丁寧な回転ヘラミガキを施す。体部外面には煤が付着する。

Pit306出土遺物（Fig.135）

658は須恵器蓋？である。破片資料であり、残存高0.6㎝を測る。胎土には微粒砂を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。内面に墨書が確認できるが、判読はできなかった。

Pit385出土遺物（Fig.135）

589は須恵器平瓶である。胴部最大径15.2cm、残存高7.2cmを測る。胴部上位以上を欠失する。胎土には1～2mm程の砂粒を含む。焼成は良く、黒褐色（2.5Y3/1）を呈する。胴部中位以下はヘラケズリ痕を残し、底部外面には1本線のヘラ記号が確認できる。

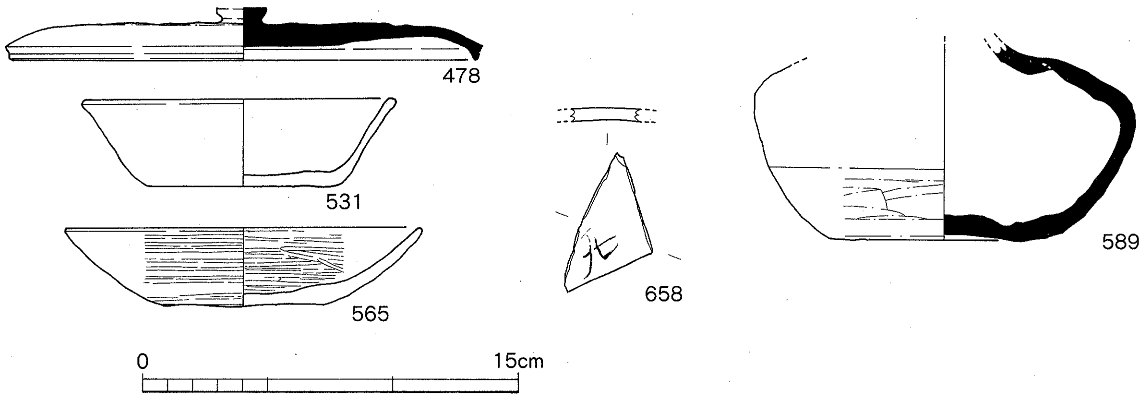


Fig.135　Pit出土遺物その2（1/3）

11)GS（地表面）(Fig.136.PL48)

SE088の付近は一部薄い整地層を剥がしているので、この付近の資料は混入している可能性がある。

573は須恵器壷ｂである。胴部最大径19.6cm、残存高11.75cmを測る。頸部以上と高台部を欠失する。胎土には0.5～1mm程の砂粒を含む。焼成は良く、灰色（N6/）を呈する。

669は磨石（叩き石）である。残存長11.1cm、幅6.05cm、厚さ5.55cmを測る。上端部を欠失する。石材は砂岩である。磨痕は身部中央付近、敲打痕は端部中央付近に確認できる。

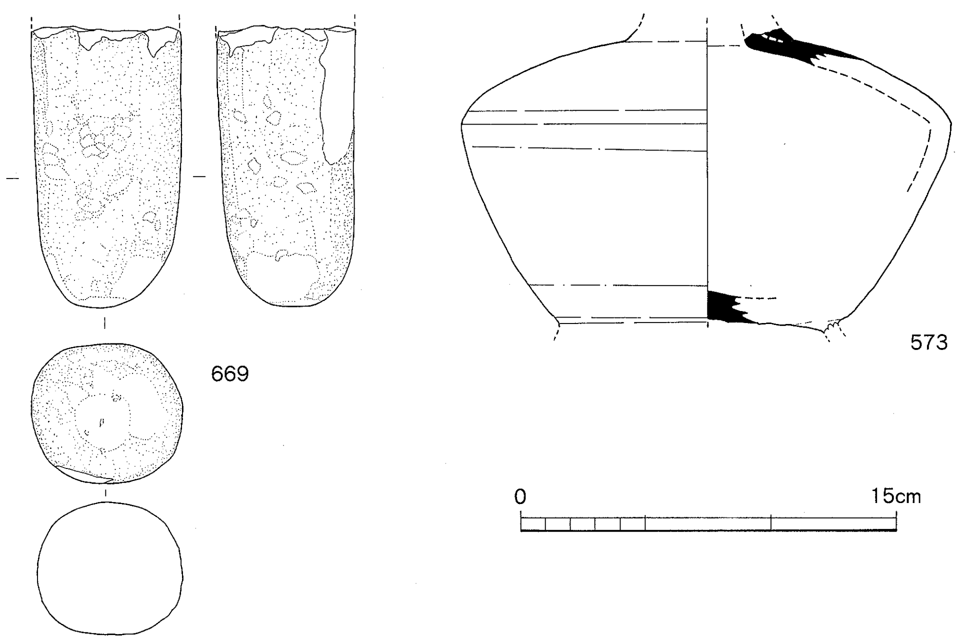


Fig.136　GS出土遺物（1/3）

Ⅳ．まとめ

1)朱雀大路周辺の遺構の変遷について

筑紫野市における朱雀大路[註1]周辺の調査事例は、西側溝エリアが4ヶ所、東側溝エリア1ヶ所の5調査地点である。周辺域の宅地利用の在り方、または朱雀大路本体の遺構変遷、施工方法、条坊の施行原理などについてはマクロ的に論じるには情報が不足しているが、現段階での一定の所見を整理しておきたい。

●宅地利用の所見

本調査地点においては、著しい削平を受けていたにも関わらず、一定量の遺構を把握することができた。それぞれの遺構の概要についてはⅢ章で述べているのでここでは触れないが、遺構の時期は概ね5時期に分けられる。以下にその概要を示す。

Ⅰ期（古墳時代か？朱雀大路西側溝の開削以前）
SD002
Ⅱ期（7世紀末～8世紀初頭）……… 大宰府土器編年Ⅱ～Ⅲ期
SI233、SK358
Ⅲ期（8世紀後半～9世紀中頃）…… 大宰府土器編年Ⅳ～Ⅵ期
SD001、SE088、SK298、SI022、SI023、SI024、SI154、SI209、SI213、SI237、SI398
Ⅳ期（9世紀中頃～）………………… 大宰府土器編年Ⅵ～Ⅸ期
SB338、SB387、SB388、SB389、SB390、SB391、SB392、SE012、SE208、SE210、SE230
Ⅴ期（11世紀～12世紀）…………… 大宰府土器編年ⅩⅠ～ⅩⅢ期
SE026、SE214

大まかに時期変遷をたどってみたが、その変遷を模式化したものがFig.137である。

このエリアにおいて最初に土地利用が確認できるのが、200SD002が開削される時期である。遺物は土師器高坏の脚部（25頁・抽出番号046）が1点のみしか出土していないが、埋土が水成堆積の状況を示していることから、混入品である可能性も高い。200SD002は位置関係や埋土の所見からその南方に延びる107SD030・150SD012に繋がるものと推測されるが、107SD030は朱雀大路西側溝（107SD001）を保全するために完掘しておらず、また双方ともに遺物が出土していないため、時期決定については慎重にならざるを得ない。ただし、本調査地点の南側約70mの付近に位置する150SD012は朱雀大路西側溝と考えられる150SD010に切られており、下限が朱雀大路西側溝（200SD001、107SD001、150SD010）の開削時期以前であることは確認できる。

Ⅱ期については、大宰府土器編年Ⅱ～Ⅲ期に該当する。遺構は竪穴住居1軒があるが、遺構量は極めて少ない。最盛期を向かえるⅣ期に大規模な造成が行われていると思われるのでこの際に該期の遺構が破壊されている可能性もあるが、出土遺物も微量であるため元々遺構が少ないものと考えられる。

Ⅲ期の遺構についてもⅡ期と同様に溝1条、井戸1基、土坑1基と少ないが、遺構量に対して遺物の量は多い。これは他の遺構にも埋没土中に含まれるもので、Ⅳ期の造成時に該期の遺構が一定度破壊されているためと考えられる。ただし、200SI022などの小形竪穴住居のよう

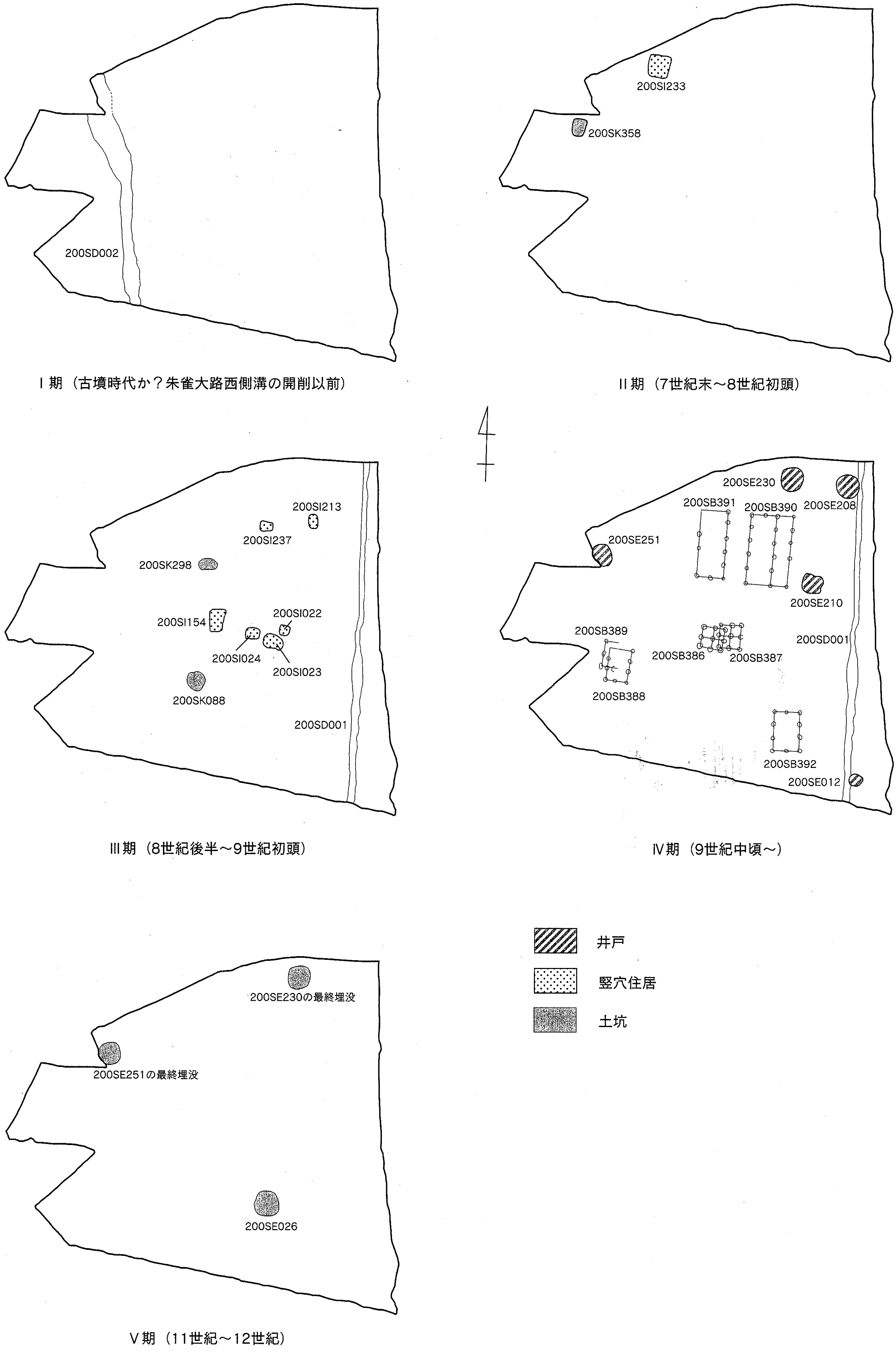


Fig.137　本調査地点における遺構変遷模式図

に深さが比較的浅い遺構も残存状況は悪いものの遺存していることから、元々の遺構量はⅣ期と比べれば少ないということがいえよう。

本調査地点付近が最盛期を向かえるのがⅣ期である。Ⅳ期になると井戸が集中的に掘削されている。条200次だけでも5基、周辺まで含めると12基が穿たれている。それ以外には掘立柱建物が見られ、基本的に切り合い関係がないことや遺物から考えても同時併存とまでは言い難いが極めて近い時期の所産であると推測される。

朱雀大路が奈良時代〜平安時代にかけて縮小し、宅地の領域が道路に張り出していくことは従来から指摘されていたが、本調査地点でも同様の所見であった。200SD001は、大宰府土器編年のⅧ期に最終埋没を向かえており、また井戸が切り込んで来るのが（200SE012・200SE208）遅くとも9世紀中頃の段階であることから考えてもその前後の時期には道路のエリアが緩やかに縮小されているものと考えられる。

Ⅴ期については、井戸2基が見られるのみでこのエリアの利用が衰退していく時期である。朱雀大路西側溝（200SD001）の最終埋没時期とはリンクはしていないので、基本的には連続性はないものと考えられる。

以上のように朱雀大路左郭沿線の遺構の推移を概観したが、左郭の状況はどうだろうか。至近距離に位置する条219次調査（平成13年度調査・未報告）[註2]では、朱雀大路東側溝（219SD004）が検出されているが、その東側に建物群や井戸などの遺構は見あたらず、積極的な土地利用は余りなされていないとの所見が得られている。遺物については、土師器・須恵器・黒色土器A類・越州窯系青磁・緑釉陶器・瓦・円面硯・滑石製品などが出土しており搬入品が多い状況は本調査地点の所見と類似するが、総量はあまり多くない。朱雀大路の遺構変遷については東側溝219SD004内側に最低2条の南北溝が確認されており、道路が縮小されていく過程を追認できる。本調査地点周辺の傾向としては、朱雀大路の東側よりも西側の方が利用状況が高いということができる。この原因究明には未だデータが不足しているが、特に水城を越えた西門ルートが西方よりアクセスしてくること、推定西の市の至近距離でここに向かって開けた位置にあることなどはその原因の一つとして考え得る。今後の発掘調査に期待したい。

註1　現在のところ、中央の南北道路を「朱雀路」、「朱雀大路」と呼んでいた確証はない。しかし、狭川真一氏の指摘にあるように、大宰府の街区に都と同等の法的規制が及んでいたと考えられる点、また大宰府が他の国府とは異なり、中央政府の一部分としての機能を有する存在であった点、さらにはその幅員が大尺で10丈を測り、これは平安京内の大路に匹敵する規模であることなどから、本書中では「朱雀大路」の名称を統一して使用した。

註2　調査担当者草場啓一氏の教示による。本書で示す内容は、所見として重要な成果が得られたため、提示できる範囲に限って限定的に紹介した。正式な調査報告書はいずれ刊行されるが、そのデータならびに所見が本書に優先することは言うまでもない。なお、周辺地の条129次、条107次、条150次、条219次の4ヶ所の調査は現在整理中である。

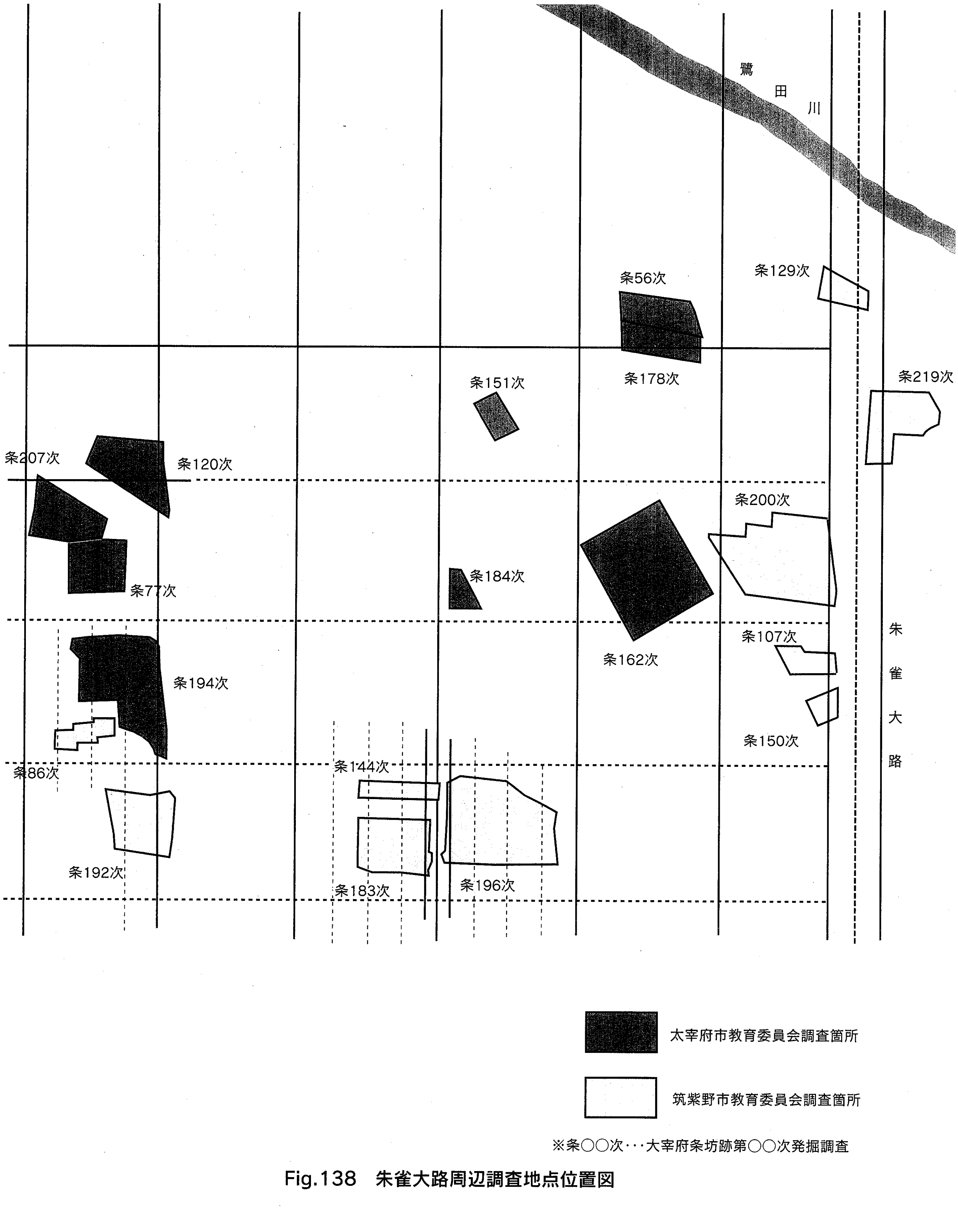


Fig.138　朱雀大路周辺調査地点位置図

2)朱雀大路関連遺構の位置関係と政庁中軸線の振れ

朱雀大路に関連する調査は、筑紫野市教育委員会と太宰府市教育委員会が合計12箇所について行っている。[註1]このうちの筑紫野市分については、5箇所が該当し、西側溝4、東側溝1である。今回は隣接地域において両側溝のデータが得られたので、それぞれの遺構の位置関係と政庁中軸線の振れについて若干の検討を加えておきたい。

●数値データの抽出条件の設定

計算に使用する座標値は、S1/20の測量原図から抽出した。このとき、溝の南北端の上場中心の点を採ることとした。採取された座標値および測点の位置の概念図についてはFig.140に示した。

なお、本報告書で使用される各遺構の距離や軸方向などのデータは、ここで計算したものをそのまま掲載している。

●東側溝の検出事例

64SD140、142SD001、168SD001、179SD010、181SD315、219SD004が該当すると考えている。以下、それぞれの概要を示す。

a）大宰府条坊跡第219次調査SD004（筑紫野市教育委員会）[註2]

筑紫野市においては、東側溝の初例である。数条の南北溝が明瞭に検出されている。従来言われてきた東側溝の推測ラインが219SD004とほぼ一致しており、東側溝と認識した。大宰府政庁中軸線からの垂直距離は、東へ19.504～19.276m（平均値19.390m）である。その内側（西側）に2条の溝が切り合ったり、途切れたりしながら検出されており、朱雀大路の変遷をたどる上で重要な所見である。

また、219SD004を穿つ以前に道路エリアに相当する部分に弱い切り通し状の掘り込みが見られ、これが施工上局地的に行われたものなのか、朱雀大路施工当初の道路形状を示しているのかは、溝の施工時期や最終埋没時期の詳細な検討が必要であろう。

b）大宰府条坊跡第168次調査SD001（太宰府市教育委員会）

平成7年度に調査が行われた。検出された南北溝168SD001は、遅くとも9世紀前半頃には埋没したものと考えられている。大宰府政庁中軸線からの垂直距離は東へ18.992mである。

c）大宰府条坊跡第179次調査SD010（太宰府市教育委員会）

平成8年度に調査が行われた。条181次と隣り合った箇所である。現状では検出された東側溝で最も大宰府政庁に近い位置にある。幅約70cmを測る。179SD010は平安時代後期に埋没したと考えられており、大宰府政庁中軸線からの距離は、東にわずか1.8mしかない。

d）大宰府条坊跡第181次調査SD315（太宰府市教育委員会）

平成8年度に調査が行われた。条179次と隣り合った箇所である。179SD010の東側で検出された181SD310・SD315は、2条が並行して検出された。181SD315は、北端が閉じているが、貫通している181SD310は大宰府政庁中軸線から東へ18.541～18.729m（平均値18.635m）である。隣接する181SD315は、181SD310を切っており、施工当初の東側溝は181SD310であったと解釈されている。

●西側溝の検出事例

133SD010、129SD10、107SD1、150SD1と今回調査の200SD001がそれに該当する。以下、それぞれの概要を示す。

a）大宰府条坊跡第200次調査SD001（筑紫野市教育委員会）

今回の調査地点である。該当遺構としては、調査区の東端で約54mにわたって検出された200SD001である。条107次、条150次の北側隣接地に当たり、それぞれにおいて検出されている推定朱雀大路の西側溝のラインと近似する位置にある。大宰府政庁中軸線からの垂直距離は15.610～15.573m（平均値15.592m）で、主軸方向はN－0°32′00″－Eに採る。規模は上幅1.0m、下幅0.6m、深さ0.5～0.8mである。土層からは掘り直しの痕跡が確認でき、溝の主たる埋没は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。側溝の形状は逆台形状を呈し、溝の床面はフラットではなく陸橋状になる箇所がみられ、深さは必ずしも一定ではない。

b）大宰府条坊跡第107次調査SD001（筑紫野市教育委員会）

店舗建設に伴い、平成3年に調査が行われた。朱雀大路の西側溝と考えられている107SD001は、約24mにわたって検出された。溝の幅は0.8～1.1mで、溝の任意中点で政庁中軸線からの距離は16.002～16.137m（平均値16.070m）である。埋没時期は8世紀後半と考えられる。道路の路面は全体的に削平を受けており、硬化層は残存していなかった。なお、現地には側溝の一部が保存されている。

c）大宰府条坊跡第150次調査SD010（筑紫野市教育委員会）

共同住宅建設に伴い、平成6年に調査が行われた。条107次の南側隣接地に位置し、朱雀大路関連遺構では最南端の調査事例である。調査面積が306㎡と狭いため情報は非常に限定され、約11mを掘削したに過ぎないが、150SD010は、107SD001や200SD001につながるものと考えられ、その調査所見は類似している。政庁中軸線からの距離は、16.070m～15.479m（平均値15.775m）である。また、150SD001などの複数の溝が道路内側から検出されており、朱雀大路の変遷をたどる上で注目される。

なお、150SD010に切られる150SD012については、150SD010の上限を示す遺構として注目していたが、遺物は含まれていなかった。埋土の状況や方向から107SD030、200SD002につながるものと推測されるが、本編とは直接関係がないので、ここでは解説しない。

d）大宰府条坊跡第129次調査SD001（筑紫野市教育委員会）

住宅建設に伴い、平成4年に調査が行われた。調査面積は633㎡で、政庁中軸線が調査区内を通過している。検出遺構の特徴は、規模の大小は別にしても、南北方向の溝や長楕円形の連続土坑が並行して存在していることである。それぞれの関係は不明だが、朱雀大路の変遷やその後の土地利用のあり方を知る上で注意を要すると考えられる。

調査区西端で検出された129SD001は、政庁中軸線から西へ13.868m～14.066m（平均値13.967m）の位置にある。また、調査区東端で検出された129SD029は、幅約5.5m、深さ約0.9mを測る大きなもので、埋没時期は概ね中世まで下るようである。

e）大宰府条坊跡第133次調査SD010（太宰府市教育委員会）

平成4年度に調査が行われた。南北溝2条が検出されており、133SD010は幅約1.2mを測

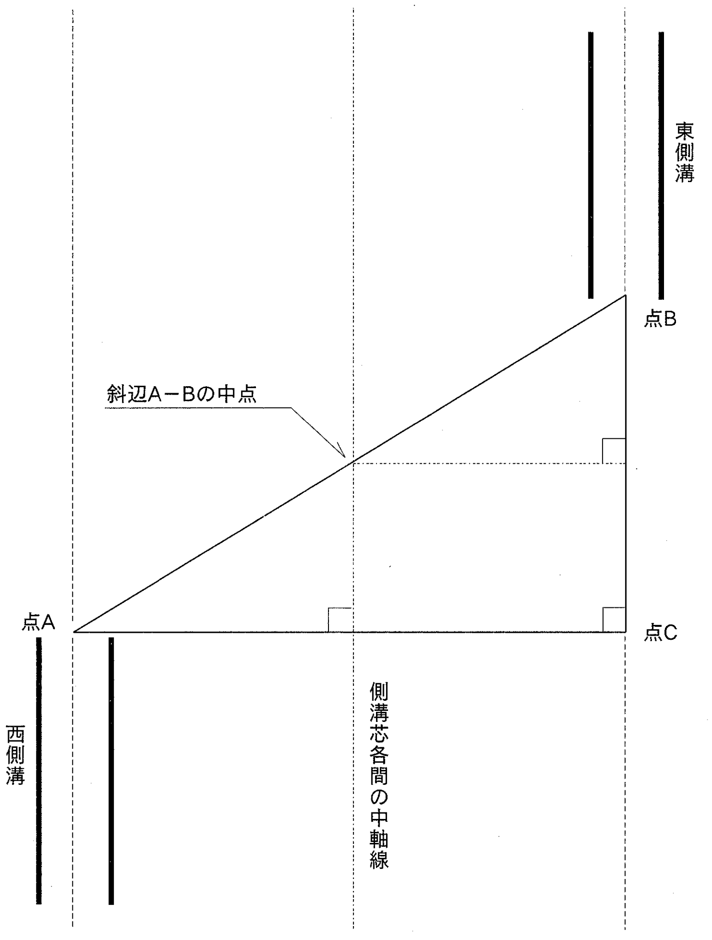
り、遅くとも9世紀前半～中頃には埋没したと見られている。大宰府政庁中軸線からの距離は、西へ17.637～17.846m（平均値17.742m）である（狭川1998）。また、それに並行する133SD015は、11世紀後半～12世紀前半に埋没したもので、政庁中軸線からの距離は西へ13.14～13.28m（平均値13.21m）である。

●朱雀大路中軸線からの側溝の位置関係の検討

これまでの大宰府条坊の復元については、鏡山猛氏による「大宰府条坊跡」[註3]の提唱以来、先学諸氏によって検討がなされている。それらを基に現場からの調査データに基づく検証作業は太宰府市教育委員会ならびに狭川真一氏の研究により明らかにされてきた。近年では井上信正氏により条坊内の宅地割りに論究する成果も発表されている。[註4]これらの場合に、朱雀大路や条坊関連遺構の位置関係の比較は、大宰府政庁南門中点を起点としてその中軸線を基に行われてきた。

東西側溝の計算結果を参照してみると、大宰府条坊跡南側エリア（筑紫野市域）においては溝の主軸にズレを生じ、政庁南門中軸線からの垂直距離にも幅を有していることが分かる。これは、すでに狭川氏によって指摘[註5]されており、政庁中軸線が必ずしも朱雀大路中軸線となっていないことを述べている。東側溝のデータでは北に上るほどその距離が詰まり、西側溝のデータでは南に下るほどその距離が詰まることを示し、朱雀大路中軸線が政庁中軸線より西偏しているとした。氏による計算結果を具体的に述べると、西側溝ではその最も離れた133SD010北端中央と150SD010南端中央のデータからN－0°20′34″－E（文中では「振れA」と呼んでいる）となり、東側溝では181SD310北端中央と168SD001南端中央のデータからN－0°30′30″－Eという振れを持っていたことが分かる。

また、東側溝の歪みについても論究している。西側溝で最も北端で検出された133SD010北端中央を基準点とし、ここから折り返して各東側溝の中点を計算すると、37.875m（181SD310）、38.326m（64SD140北）、37.209m（168SD001）となり、東側溝は真の直線ではないことを示している。座標値に基づいて計算してみると、50cm程度のずれを持ちながらも概ね直進している一条の溝



※点Aと点Bを結んだ斜辺A－B間の中点座標を導き出す。
この中点座標は点A－C間の垂線ラインと同一線上にあり、このラインを中心に点A－C間も等しい。

Fig.139　両側溝間の中点座標関係模式図

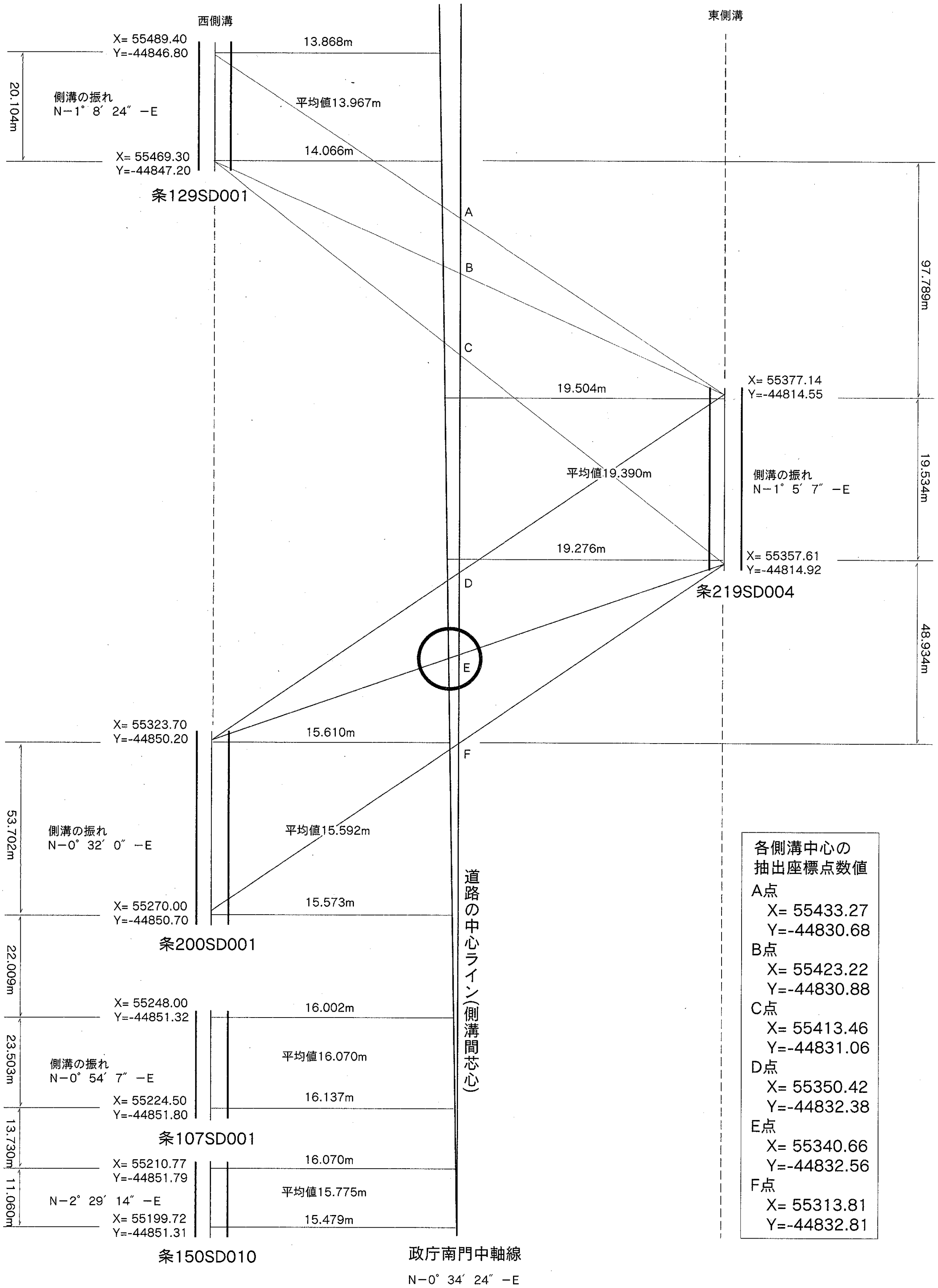
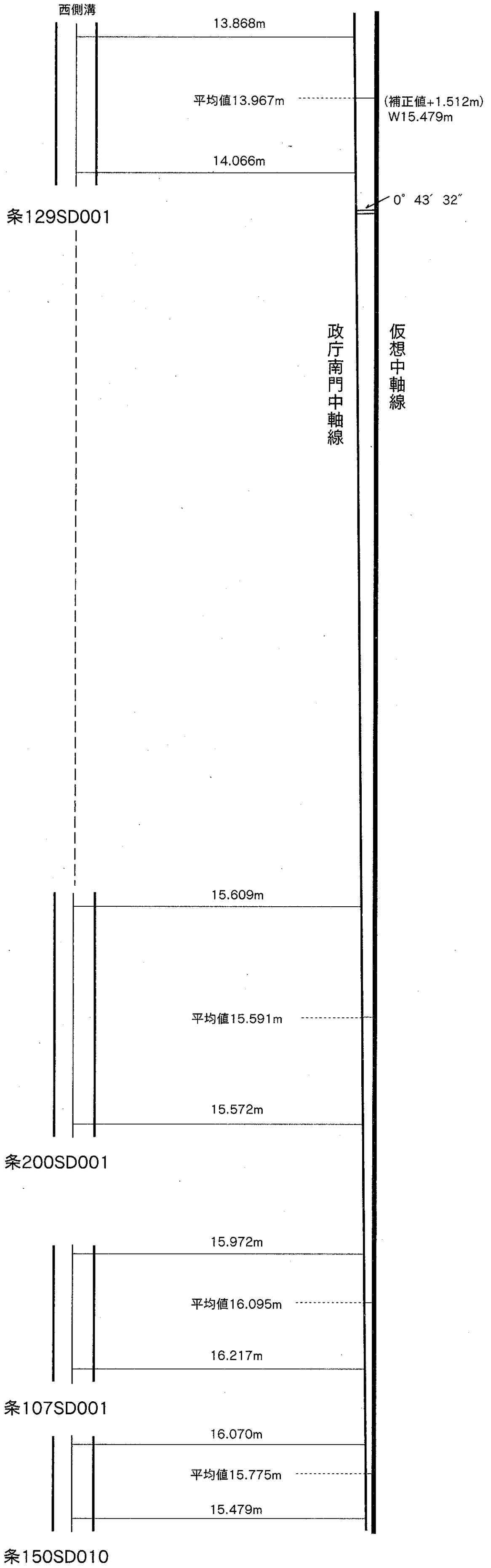


Fig.140　朱雀大路側溝の位置関係模式図



仮設基準点(E点)
X=55340.66 Y=-44832.56

仮想中軸線の各ポイント間の振れ

LINE	∠θ	
E−F	0° 32′ 00″	
D−F	0° 40′ 23″	
C−F	1° 00′ 22″	
B−F	1° 00′ 38″	
A−F	1° 01′ 14″	
D−E	1° 03′ 24″	
C−E	1° 10′ 49″	
B−E	1° 09′ 57″	全体平均値
A−E	1° 09′ 47″	1° 02′ 39″
C−D	1° 11′ 58″	
B−D	1° 10′ 49″	
A−D	1° 10′ 32″	
B−C	1° 03′ 24″	
A−C	1° 05′ 56″	
A−B	1° 08′ 24″	

ピーク階層別集計(→平均値の抽出)

REVEL	LINE	∠θ	AVERAGE
1° 00′	C−F	1° 00′ 22″	1° 04′ 48″
	B−F	1° 00′ 38″	
	A−F	1° 01′ 17″	
	D−E	1° 03′ 24″	
	B−C	1° 03′ 24″	
	A−C	1° 05′ 56″	
	A−B	1° 08′ 24″	
	C−E	1° 09′ 47″	
	B−E	1° 09′ 57″	
1° 10′	A−E	1° 10′ 32″	1° 10′ 58″
	C−D	1° 10′ 49″	
	B−D	1° 10′ 49″	
	A−D	1° 11′ 58″	
TOTAL			1° 06′ 43″

仮想中軸線の振れ

最小値	1° 00′ 22″
最大値	1° 11′ 58″
平均値	1° 06′ 43″

政庁南門中軸線との振れ(更に東偏)

最小値	0° 25′ 58″
最大値	0° 37′ 34″
平均値	0° 28′ 15″

Fig.141　朱雀大路西側溝の振れの関係図

であることが認識できる。

狭川氏はこのような誤差が生じる原因を、これらのデータの算出があくまでも政庁南門を基準にするためであり。大きな誤差の原因はこの基準点の位置に問題のあることを示唆している。

今回は、追加されたデータを基に中軸線についての再検討を行ってみたい。主軸方位を導き出す側溝の調査事例としては当然のことながら対面同士であるに越したことはないが、そのような事例はないので至近距離に位置する条129次・条200次（西側溝）、条219次（東側溝）とを比較し、そこから調査地点周辺における仮想中軸線を導き出すことにした。

まず、対象としたそれら3ヶ所を結んだ斜辺の中点座標を機械的に6点（A～F点）算出した(Fig.139・140)。これを素材としそれぞれ2点ずつの振れを計算した。これによると、最大値が1°11′58″、最小値が0°32′00″（平均値1°2′39″）の数値を示している。値に大きな開きが見られるが、最小値は最南端に位置している条200SD001の溝自体の歪みに起因しているものと考えられる。続いて、計算上の幅を見るために得られた数値の出現頻度を分別してみた（Fig.141）。階層を10′ごとにみると、1°0′以下が2件、1°0′代が9件、10′代が4件となり、ピーク値は1°0′代にあることが分かる。これらの階層別に平均値を計算してみると、1°4′48″～1°10′58″（平均値は1°6′43″）となる。将来的に検出事例が増加することでこの数値は補正がなされるものと思われるが、現段階ではこれを側溝芯々間の中軸線（機械的に計算しているので道路設計軸とは限らない）と認識しておきたい。この場合、計算上の角度の振れによる誤差範囲が0°6′10″の幅を有しているので、仮に水平距離が100m離れた時には垂直距離に0.18mの許容誤差を含むことになる。大宰府条坊南半部関連遺構の位置関係を比較する時に、この範囲内であれば認知してよいものと考えられる。

また、従来位置関係の計算に用いられてきた政庁南門中軸線の振れは0°34′24″であるので、側溝芯々間の仮想中軸線は差し引いて0°28′12″（平均値）さらに東偏しているということになる。この振れは、仮に水平距離が100m離れた時に中軸線からの垂直距離に0.82mのズレを生むことになり、今後とくに政庁南門から離れた地点の遺構を検討する場合に看過できない数値であると思われる。

●条坊関連遺構との比較

筑紫野市域においては、現在のところ左郭の調査事例が多く右郭の事例がほとんどないため、今回はこれを基に朱雀大路仮想中軸線から左郭で検出されている南北軸の条坊関連遺構との比較を行った。検討した遺構は政庁II期に該当すると思われるものを使用した。これを模式化したものがFig.142である。左郭3－4坊間路東側溝（144SD001・196溝S）、同西側溝（144SD048・183SD040）、左郭4坊内区画溝（144SD042・183SD010）、左郭4－5坊区画溝（192SD001）、左郭5坊内区画溝（086SD003）、左郭5坊内区画溝（086SD006）の6遺構が該当遺構として挙げられる。仮想基準点は位置関係が最短距離にあり最も誤差が少ないと考えられる「点E」（Fig.140）を機械的に使用することにした。

これによると、仮想中軸線からの垂直距離の差はそれぞれ0.3m、1.2m、0.2m、1.7m、0.1m、0.5mとなる。この内144SD042は溝の北端で遺構自体が歪んでおり、また192SD001は幅員5～8mの大溝であることから誤差が大きいものと思われ、数値からは除外して考えた方がよいと判断される。残りの4件の数値で考えてみると平均値は0.275mとなりこれらの南北溝は基本的に仮想中軸線と平行であり、割り付けがそれに準じているものと想定ができる。

これまでの考察を整理すると次のようになる。

①朱雀大路の側溝芯々中点による大宰府条坊南半部の仮想中軸線はN−1° 6′ 43″ −E（平均値）の振れを有し、従来の政庁南門中軸線よりも0° 28′ 15″（平均値）さらに東偏する。その適用範囲は今回は検討できなかったが、仮に条129次以南としたい。

②仮想中軸線の数値上の幅は0° 6′ 10″あり、その比較誤差は100m当たり0.18mとなる。

③上記①の場合、最も至近距離にある200SD001北端中点と219SD004南端中点との斜辺の中点を比較のための仮想基準点（点E）とした。座標値はX=55340.66、Y=−44832.56である。

④上記③の仮想基準点を基に行った南北条坊関連遺構との位置関係の比較については、仮想中軸線と平行であり、割り付けがそれに準じているものと想定ができる。

ここで、今後の問題点を整理しておきたい。

1点目は条坊痕跡の認識に関わる問題である。周知の事実であるので今更反復する必要はないが、推定大宰府条坊跡は約2.5km四方に広がる広大な遺跡である。今回の計算結果は大宰府条坊跡の南端に近い推定条坊16〜20条付近のデータによる検討なので、どこまで適用範囲を設定できるかは未定であるが、仮に鷺田川以南とした場合でもその距離は450m程あり、この場合の南北遺構の垂直距離の誤差は3.69mという数値になる。これは、今後条坊の復元を行っていく上で看過できない数値であると考えられる。すでに井上信正氏の指摘にあるように[註6]左右両郭の地割りの設計ラインは道路の中央ラインではないとされている。今回の検討結果は計算作業上の仮想中軸線として道路芯のラインを用いているため、位置関係の検証は複合的に行っていく必要がある。

2点目は東西軸との関係の整理である。現在のところ条坊南部において関連遺構の検出事例がないために前述事項との比較検討は行えないが、いずれ両者を総合的に検証していく必要があろう。

3点目は遺構の位置関係に微細な振れを生じている原因の追及である。条坊関連遺構はミクロ的には振れを生じているもののマクロ的に見ればほぼ直線と考えてよく、条坊の施工に関しての大きな異同はないものと考えられる。ところが、条坊の設計を考える際には問題がある。開削や埋没の時期についても一元的に推移をしているわけではなく、仔細な変化を遂げている。つまり、一概に表面上の現象をもって概数でプランの復元を行うことは非常に危険性を含んでいる。一律の歪みや変化の傾向をデータをもって把握していくことが必要であろう。詳細な情報を複合的に検証していくことで条坊施工の実体が明確になるものと確信する。

註1　東測溝は、条64次、条142次、条168次、条179次、条181次、条220次(以上太宰府市)、条219次(以上筑紫野市)西側溝は、条133次(以上太宰府市)、条129次、条100次、条107次、条150次(以上筑紫野市)が該当地点である。

註2　データは整理の途中であるが、重要な所見が得られたため担当者の了解を得て提示できる範囲に限って紹介した。

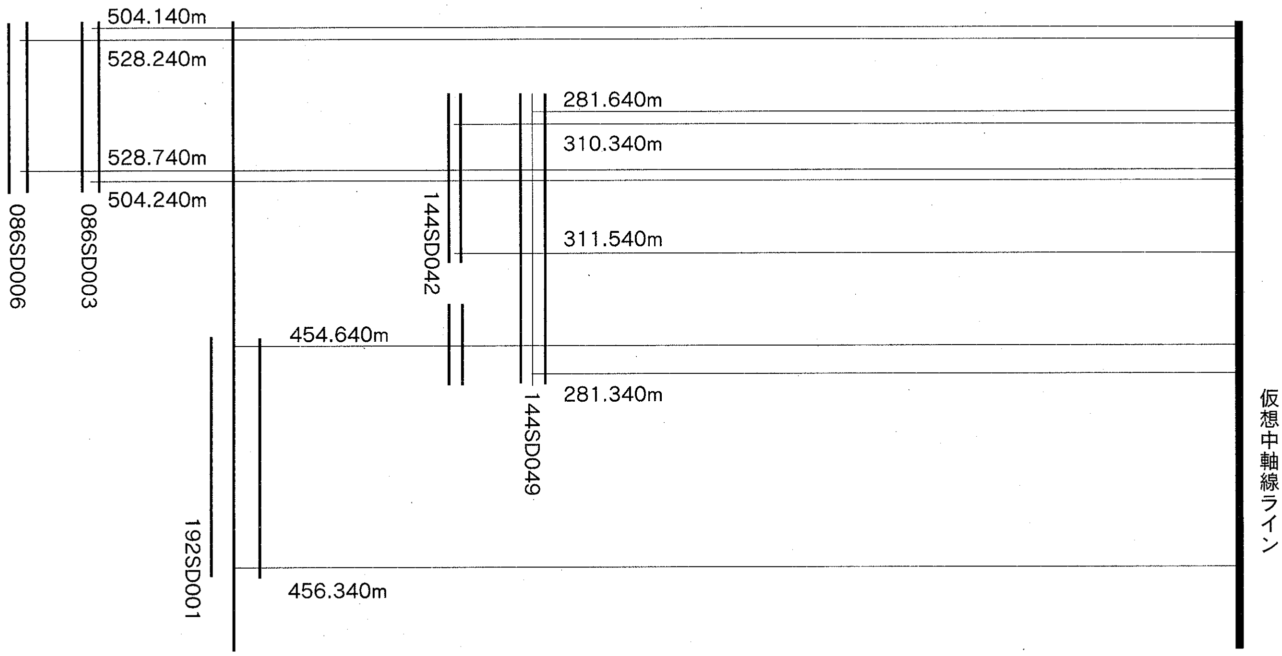
註3　鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房　1968年
研究史については狭川真一「大宰府条坊跡調査研究履歴」『大宰府条坊跡Ｘ—推定大宰府朱雀大路周辺の調査—』太宰府市の文化財第37集　1998年に概要がまとめられている。

註4　井上信正「大宰府条坊の区割りについて」『条里制研究』第13号　1998年

註5　狭川真一「大宰府の朱雀大路」『文化財学論集』　文化財学論集刊行会　1994年
狭川真一『大宰府条坊跡Ｘ－推定大宰府朱雀大路の周辺の調査－』太宰府市の文化財第37集　1998年

註6.　註4に同じ。

※座標計算については、Microsoft Excel2000にて計算書式を作成し、計算履歴をMicrosoft Access2000に保存するようにした。なお、プログラムの作成に当たっては、辻久弘氏㈱東亜建設技術)にご教示を得た。記して謝意を表します。



条防関連南北遺構の座標値一覧表

ポイント		X座標	Y座標
144SD049	北端中央	X=55155.10	Y=-45114.20
	南端中央	X=55145.00	Y=-45113.90
144SD042	北端中央	X=55157.30	Y=-45142.90
	南端中央	X=55144.90	Y=-45144.10
183SD010	南端中央	X=55120.60	Y=-45144.30
192SD001	北端中央	X=55140.40	Y=-45287.20
	南端中央	X=55123.20	Y=-45288.90
086SD003	北端中央	X=55170.30	Y=-45336.70
	南端中央	X=55097.10	Y=-45336.80
086SD006	北端中央	X=55103.00	Y=-45360.80
	南端中央	X=55097.40	Y=-45361.30

仮想中心軸からの垂直距離一覧表

サンプル	垂直距離A	垂直距離B	差し引き
144SD049北端中央―南端中央	281.640m	281.340m	0.3m
144SD042北端中央―南端中央	310.340m	311.540m	1.2m
144SD049北端中央―183SD010南端中央	311.540m	311.740m	0.2m
192SD001北端中央―南端中央	454.640m	456.340m	1.7m
086SD003北端中央―南端中央	504.140m	504.240m	0.1m
086SD006北端中央―南端中央	528.240m	528.740m	0.5m

Fig.142　仮想中軸線から条坊関連遺構の垂直距離関係模式図

3)朱雀大路の築造に関する問題

今回の調査では、奈良時代の推定朱雀大路西側溝（200SD001）を約54ｍ検出した。調査区全体が著しく削平を受けており、当初の路面は遺存していなかったが、検出面を覆っている砂質土を除去すると凹凸に硬化した痕跡が部分的に検出された。

PL.1　山ノ井川口遺跡の凹凸痕跡

この凹凸の痕跡については、岡田地区遺跡[註1]で波板状凹凸痕跡[註2]の下層で検出されている痕跡の状況と類似しており、同遺跡の場合は層位の状況から道路の地業に関わる痕跡であると推測していた。その後、山ノ井川口遺跡（筑後市）の西海道検出事例で同様の痕跡が検出され、5～10㎝程の円形の凹凸が一定範囲に連続している状況が確認された[註3]。所見としては、路盤構築の際の所産である可能性が考えられており、この痕跡が道路の構成パーツであることが認識された。山ノ井川口遺跡の場合は、削平を受けてはいるものの凹凸の分布が波板状に広がっていることが確認され、これは岡田地区遺跡やFig.144に示したように東ノ上遺跡第36次調査（埼玉県所沢市）[註4]で検出された波板状痕跡の床面に検出されている凹凸痕跡との類似性が窺えたため、それらが同一築造作業工程上で形成されたものなのか、または異なった層位に存在し全く別の工程か別の時期に形成されたものなのか、それぞれの相関関係に検討を要するという認識に至った。

本調査地点においては、波板状痕跡が確認されていないためそれらの関係は残念ながら把握することはできなかったが、面的な地業の一端を垣間見ることができたのでその一例として提示しておくこととしたい。

●調査時の確認・記録方法[註5]

調査時点では、この遺構をどのように扱うのか非常に苦慮したが、とりあえず凹凸を全て2次元で図化し[註6]、その上で横断土層を20㎝毎に確認することで、凹凸下部にある土壌の堆積との関係を把握していくことにした。

●結果

本調査地点の凹凸は、径約5㎝程度の棒状の突き棒で叩き締めたような形状だが、そのうち部分的に1～4㎝大の小礫が密集した状態で検出された。また、検出範囲は、全体にある訳ではなく部分的に集中的に施工された状況であるが、10×13ｍ程の範囲で面を形成していることが確認された。

検出された平面図と横断土層はFig.44に示した。これによると、凹凸が円弧を描くように突き込まれているのが理解できる。これを模式化してみると、さらにそのパターンには大・中・小の三つのパターンがみられることが分かる。それぞれの関係については確認ができなかったが、この場合、凹凸内の土壌については、上層覆土の砂質土と同種の土壌である。層の境目は、凹凸をあえて残し、抵抗を持たせてなじみを良くしているものと考えられる。それぞれの土層はお互いに干渉し合うように相対して置かれており、積み土に際して土種を意識していることが窺える。この場合の積み土の方法は、小土塊を帯状に置き、その間を異なった種類の土で充填していくもので、ここでは版築状の構築は認められない。当初、凹凸の痕跡がある面は、地山と認識して調査を進めていたが、後に土層の観察によって土を一層盛っていることが分かった。

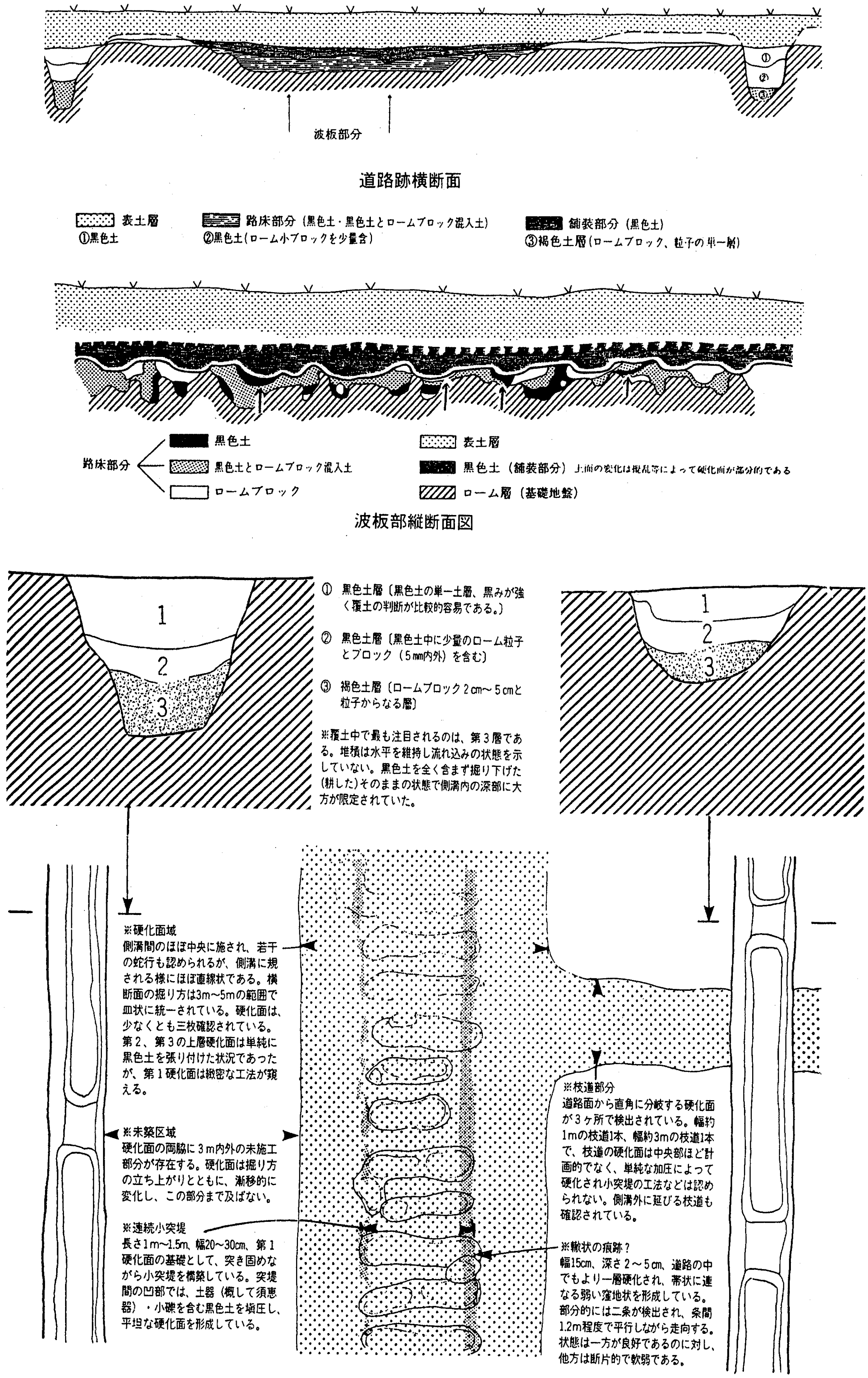


Fig.143　所沢市東の上遺跡の道路遺構（飯田1992より）　※120%拡大

①第1硬化面上に10cm程度の黒色土が認められ、少なくとも2枚の硬化面は確認できた。部分的には数枚に達する所も存在するなど一律でない。9世紀と思われる須恵器片の混入も認められる。硬化面は部分的で、随時補修した感じである。

②小突堤間を充塡する黒色土、これによって平坦化させ、道路面の機能を持たせる。小礫・土器片を意識的に混入させている。8世紀代の遺物が主体である。

③ロームブロックと黒色土の混入土層、上面の突き固め面はロームブロックの使用が目立つ。突堤間は強い塡圧で溝状に窪み、その両端は特に顕著で突き具の痕跡も認められる(径20cm)。連続する溝状の塡圧によって、突堤状に浮き出している。

④地山のローム層の掘り方自体、意図的な凹凸が認められる。上層の小突堤に符号する部分も認められるが、全てでない。

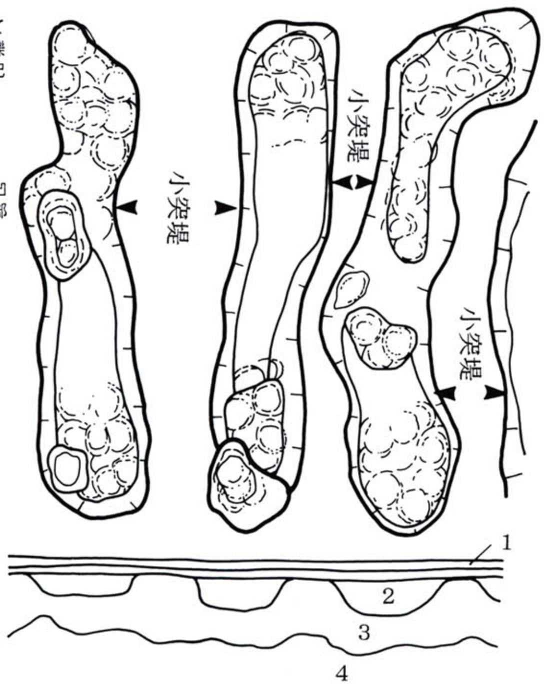
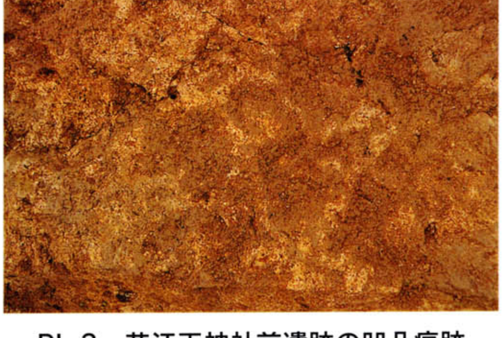


Fig.144　所沢市東の上遺跡の波板状痕跡拡大図（飯田1992より）

さらに、横断土層のデータを基に、土塊の平面分布を模式化してみた。すると、突き込み痕跡の平面分布と土塊の平面分布とが一致した範囲を示していることが確認できた。つまり、このことは両者の工程上の一元性を示すものと考えられる。

また、本調査地点の調査完了後に同様の所見が若江天神社前遺跡(筑紫野市大字若江所在)[註7]で確認されている。同遺跡の場合は時期が不明確ではあるが、12世紀以前のものと考えられる道路跡が約100m検出されている。道路幅は芯々間で6mを測り、両側に側溝をもつ。緩やかに蛇行しながらもほぼ直線に主軸をとる。凹凸痕跡は、地形が丘陵部から下位の自然堤防に変化していく付近に集中的に見られ、また側溝と側溝の間にしか見られない。このことは、道路の築造に関して幅員を強く意識していることが考えられる。調査所見は本調査地点と同様で、上層覆土を少しずつ剥がしていくと検出された。凹凸痕跡の凹部に含まれる土壌は上層覆土と同一のものである。道路部分とその外側では、地山の硬度の違いが顕著に見られ、このことは、二次的な営力による加重を考慮しても不自然で、地業によるものと理解できる。道路部分の土層は薄く層状に剥離し、さらに痕跡層の上面には礫の散布は見られないが、硬化によってカチカチになっている状態である。締め込み痕跡の分布範囲には、地山の上に黄褐色系の土壌が一層乗っており、これは、範囲外には見られない現

PL.2　岡田地区遺跡の凹凸痕跡

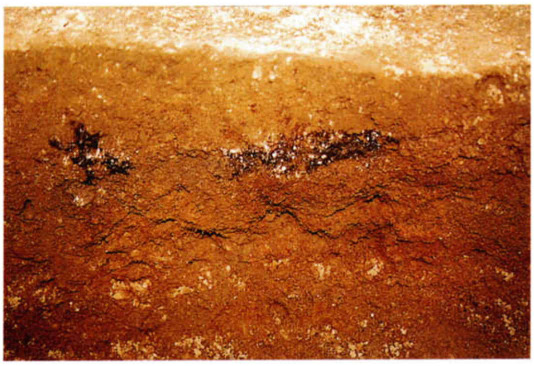


PL.3　若江天神社前遺跡の凹凸痕跡

象である。この粘質土が突き込まれているものと考えられる。この締め込み痕跡は丹念に行われている部分とそうでない部分がみられ、隙間があったり、あるいは締め込みのやり方に違いがみられる。これは、道路の主軸方向では約2.4～2.5mスパンでみられる現象で、作業工程の小単位を示している可能性がある。

所見を整理してみると、凹凸痕跡の時期に関する問題については、その痕跡が含まれる層が道路構築の際の基層であるのか、または道路最終時期の路面であるのか、その時間差を具体的に示す所見は得られていない[註8]。とくに部分的な施工であることから、現段階で凹凸痕跡と波板状痕跡の関係については積極的に論じ得ないのが実状である。しかし、積み土と凹凸痕跡の関係につながりが深いと考えられる点を考慮すれば、いずれかの段階で道路に施された痕跡であるということは理解できる。

PL.4　本調査地点の凹凸痕跡



PL.5　凹凸痕跡土層

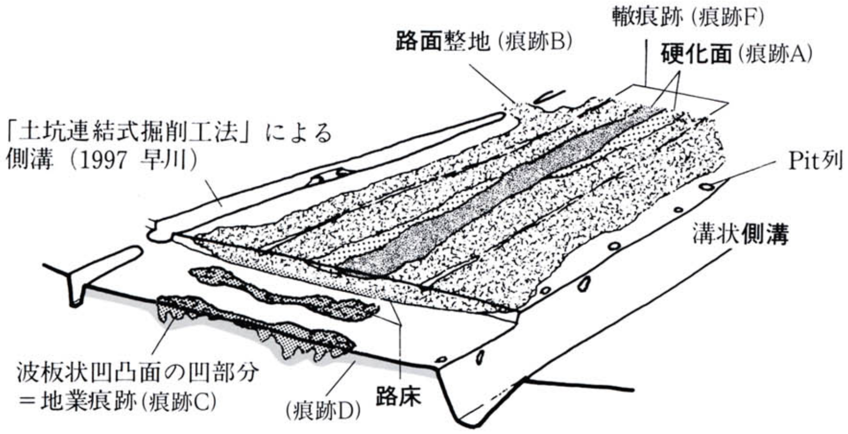


Fig.145　古代日本の計画道路の構造図[註9]（山村2000より転載、加筆）

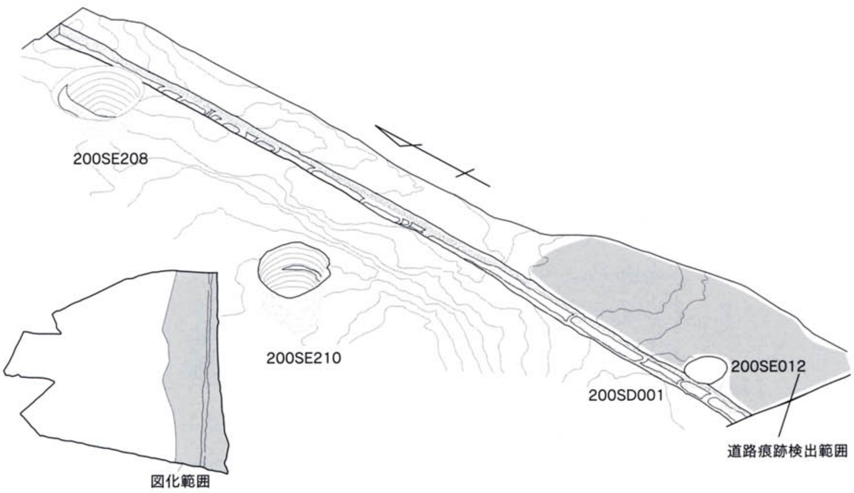


Fig.146　朱雀大路西側溝周辺俯瞰図

参考文献

・北郷泰道「東大寺虹梁と日向－神話化の構造－」『えとのす』32　1987年
・中間研志「道路状遺構」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告13　小郡市所在薬師堂東遺跡の調査』中巻　福岡県教育委員会　1988年
・飯田充晴「埼玉県所沢市東の土遺跡」『日本考古学年報』42　日本考古学協会　1989年
・早川泉「古代道路遺構に残された圧痕～波板状凹凸面の性格について～」『東京考古』第9号　1991年
・重永卓爾「日向国における古代・中世の道路状遺構（基底部にPitを伴う）をめぐる諸問題」『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』　都城市教育委員会　1991年
・飯田充晴「道路築造方法について～埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして」『古代交通研究』第2号　1992年
・山村信榮「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』第68号　1993年
・近江俊秀「古代道路遺構の構造」『文化財学論集』 文化財学論集刊行会　1994年
・近江俊秀「道路遺構の構造－波板状凹凸を中心として－」『古代文化』vol.47－4　1995年
・近江俊秀「古代道路の構造（1）－考古学における道路跡の研究の展開とその成果をめぐって－」『道路』　1996年
・近江俊秀「古代道路の構造（2）－発掘された七道駅路とその構造－」『道路』 1996年
・近江俊秀「古代道路の構造（3）－古代道路構築工法をめぐる諸問題－」『道路』 1996年
・小鹿野亮「まとめ」『岡田地区遺跡群Ⅰ 東遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第51集　1996年
・近江俊秀「古代道路遺構の形態からみたその性格」『古代交通研究』第7号 八木書店　1997年
・近江俊秀「道路跡一覧」『古代交通研究』第7号 八木書店　1997年
・早川泉「古代道路遺構の虚像と実像～東山道武蔵路の調査を通して～」『古代交通研究』第6号　1997年
・小鹿野亮「波板状圧痕について」『岡田地区遺跡群@』筑紫野市文化財調査報告書第56集　1998年
・山村信榮「道路遺構の変遷」『古代交通研究』第10号　2000年
・近江俊秀「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号　2000年
・中山晋「道路遺跡の調査方法」『古代交通研究』第10号　2000年
・小鹿野亮「古代の官道－筑紫野市域における調査－」『筑紫野市史　資料編（上）考古資料』　2001年

註1　筑紫野市教育委員会『岡田地区遺跡群Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第56集　1998年

註2　道路などに伴って波板状に検出される凹凸面のことを意味しており、本義的には「波板状凹凸面」などの名称が適当であろう。ただし、道路跡の調査において凹凸面（締め固め痕跡と考えている）が確認されるケースが多く、混同を避けるために「波板状圧痕」という名称を用いていた。しかし、この種の遺構を総称するために「圧痕」という名称を限定的に用いるのは不適切である。これは、通常用いられている「面」という単語も同様であると考える。このため、「痕跡」という単語に統一することとした。将来的に機能差が確実に分類できた時点で、それに即した名称を付与することとしたい。

※機能差による分別と痕跡(現象による分別)

1)路体の基本構造
路面(表層)→道路の通行面。硬化面=路面ではない。
路床　→路面(表層)を維持するための基礎地業
路盤　→道路自体を維持するために重要な支持層(基盤層)

2)道路に残された痕跡(現象)
痕跡A(硬化面・硬化層)
痕跡B(小礫・砂・バラスなどの散布)
痕跡C(波板状[凹凸]痕跡・波板状凹凸面)
痕跡D(突き込み痕跡・凹凸面)
痕跡E(起耕痕跡)
痕跡F(通行痕跡)
痕跡G(軟弱化痕跡)

註3　小林勇作・上村英士両氏（筑後市教育委員会）のご好意により現場を見学させていただいた。本書に掲

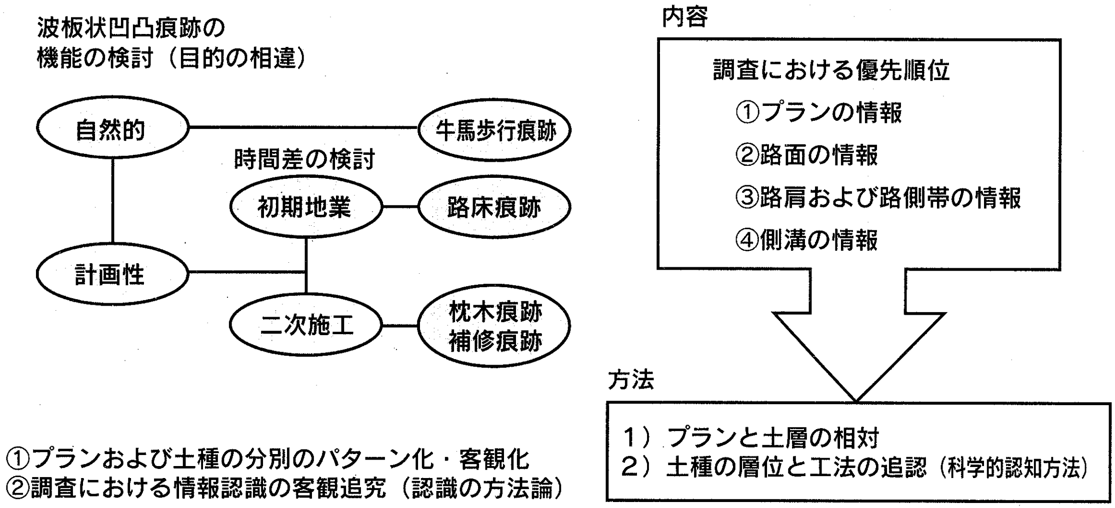
載した写真（PL.1）は、その際に撮影したものを筑後市教育委員会の承諾を得て掲載したものである。なお、小林氏が岡山理科大学において開催された研究会において、その内容の一部を発表されているのでご紹介しておく。

・小林勇作「筑後市における古代官道関連遺跡の道路遺構について－事例報告－」

註4　飯田充晴「道路築造方法について～埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして」『古代交通研究』第2号　1992年

註5　本調査地点の調査時には未刊行であったが、2000年に行われた古代交通研究会第9回大会において、共同研究「道路遺跡へのアプローチ－探す・掘る－」が開催された。考古学側からは近江俊秀・中山晋・山村真榮の各氏が道路遺構の変遷・構造・調査方法について報告が行われた。

註6　平面図を図示したFig.44は、凹凸の切り合いを示すものではないことに留意をして戴きたい。現状では凹凸を形成する小ピットはそれぞれに切り合いがある訳ではなく、覆土についても凹凸面に被っているだけであった。また、検出時の不具合によって掘り過ぎている可能性を含んでいるため、現場においては見えるままをそのまま表現することに努めた。この種の遺構の記録に頭を悩ませた原因はここにある。もし、この遺構が地業に伴う締め固めの痕跡であると仮定するならば、突き込んだ時の微細な起伏をミクロ的に追跡することでその工程の復元が可能なのではないかとも考えていた。しかし、綿密に地業を行えば行う程、その痕跡の確認には困難をきたすであろうし、さらに、道路が使用されて行くサイクル（使用→破損→修復→使用）を考慮すれば、その追認は不可能に近い。また、道路調査における機能推定の関係図を以下に示す。



註7　平成12年、筑紫野市教育委員会調査。未報告。小鹿野(2001)に掲載した（第12～14図、693～695頁）。

註8　Fig.44は報告書刊行前ではあるが、下記文献（第10･11図、691･692頁）に先行して掲載した。

・小鹿野亮「古代の官道－筑紫野市域における調査－」『筑紫野市史資料編(上)考古資料』2001年

註9　下記文献より転載して、加筆した。

・山村信榮「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号　古代交通研究会　2000年

4)掘立柱建物の構成について

●本調査地点の建物構成

今回の調査で検出された掘立柱建物は、側柱建物は2間×3間が3棟、2間×4間が1棟、2間×5間が1棟（東面廂付き）、総柱建物は2間×2間が2棟で合計7棟である。朱雀大路の沿線エリアで、かつ調査面積が2,700㎡と条坊域では広範であったにも関わらず、建て込んだ状況はない。ただし、200SB390と200SB391が並列していることを除けば、200SB386と200SB387、200SB388と200SB389がそれぞれ同位置に建て替えられていることから、一定の「場」を維持しようとしていた、あるいは利用の制約を受けていたものと考えられる。井戸についてもその時間差は別としても、200SB390に切られている200SE214を除く他の7基の位置は掘立柱建物と同一の地割り条件の基に配置されていると考えられる。

●周辺域の建物規格との比較

筑紫野市域における奈良～平安時代の掘立柱建物との比較を行ってみた。今回は、便宜上大宰府条坊跡の内外で分別してみた。[註1]

柱間の出現頻度をプロットしたものが、Fig.147である。これによると、2間×3間ないしは2間×5間のものが標準的な柱間数であることが分かる。特徴的なのはその数で、条坊外では2間×3間のものが29件と爆発的に多く、全体が56件の内の約52%を占めている。なかには梁行が2間でも桁行が8間の長大なもの（御笠地区遺跡AⅠ区SB04）や梁行3間（桁行は3～5間）のもの（御笠地区遺跡AⅠ区SB06・SB08・SB09、岡田地区遺跡SB3・SB9）もあるが少数派であり、これは遺跡の官衙的な性格を考えれば当然であろう。数量の問題は調査例とも関係してくるので一概に論ずるとはできないが、筑紫野市域の大宰府条坊域においてはその一定傾向のなかに取り込まれる状況を示しており、周辺域の状況とも大過はない。柱間については、大宰府条坊内外ともに2間×3～5間が標準的なものと考えてよい。

また、建物の面積について対比してみた結果がFig.148である。大宰府条坊内においては、11～45㎡の範囲で一定量存在しているが、21～25㎡のものが全体35件のうち約29%を占め分布の中心をなし

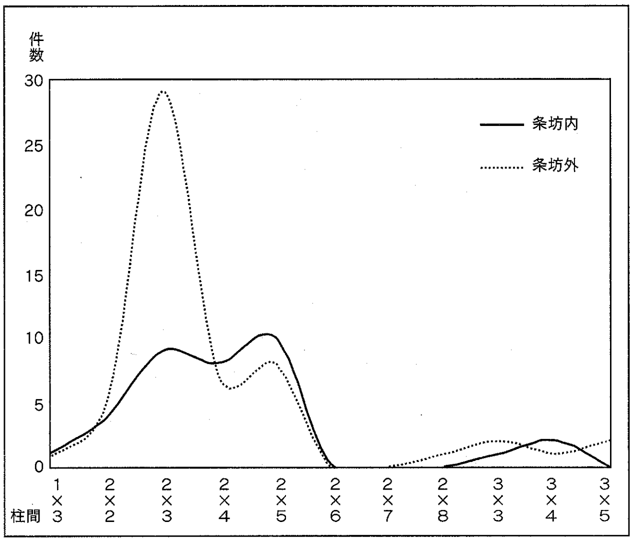


Fig.147　筑紫野市内における間数別出現頻度

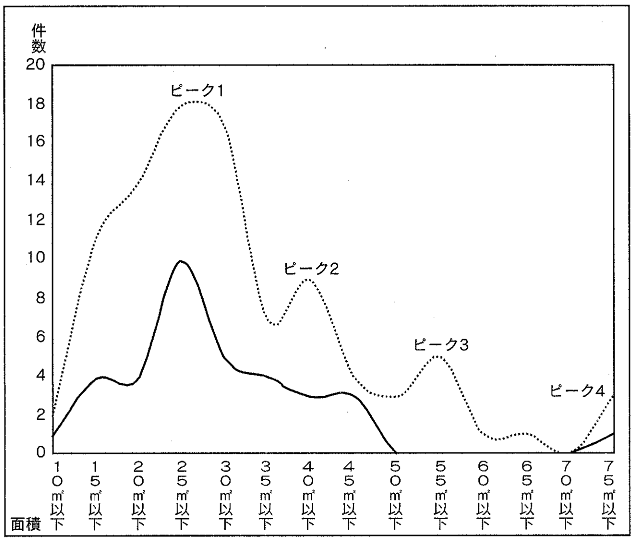


Fig.148　筑紫野市内における面積別出現頻度

ており、一般的な面積であったことが窺える。これに対し筑紫野市域の大宰府条坊外を見てみると、主体は11～30㎡（38件）であるので条坊内とそれほど変化はないが大きくピークが4つあり、36～40㎡（9件）、51～55㎡（5件）、71～75㎡（3件）と定型化された面積が存在していることが分かる。以下にそれぞれの概要を示す。[註2]

ピーク4（71～75㎡）は、御笠地区遺跡SB01、岡田地区遺跡SB1、大宰府条坊跡第200次SB390の3件が該当する。御笠地区遺跡、岡田地区遺跡の両遺跡ともに官衙に想定される遺跡であり、そのなかでも中心的位置（正殿のような）に当たる建物である。建物の性格については それぞれの遺跡の状況判断が必要になるので即断はできないが、この手の建物については周辺エリアを含めて総合的に判断する必要がある。

ピーク3（51～55㎡）は、御笠地区遺跡SB04・SB09、岡田地区遺跡SB34・SB40の4件が該当する。これらの建物は、官衙における中心的な建物とはなり得ないが、それに付随する建物として存在しているものである。所在状況は広域には分布せず局所的な所在状況を示している。

ピーク2（36～40㎡）は、御笠地区遺跡SB08、貝元遺跡建物6、岡田地区遺跡SB4・15、牛島宮崎遺跡A区SB005、大宰府条坊跡第136次SB001の6件が該当する。レベルは、大宰府条坊跡内外において見受けられるが少数派である。ピーク3と2の間には一定量の建物が存在しており、また組み合わせも入り混じった状況が見受けられるので、現段階では両者の分別はしない方が良いかもしれない。むしろ、相対的なものとして区別しておきたい。

ピーク1（11～30㎡）は、大宰府条坊跡内外ともに最も件数があるもので、両者とも同様の傾向を示している。条坊内で23件（条坊内全体の65.7%）、条坊外で38件（条坊外全体の65.5%）の数値を示し条坊内外ともに6割強を占めており、最も一般的なものである。上記の内容を勘案し本調査地点の掘立柱建物について対比してみると、柱間については200SB388、389、392の3棟は2間×3間、200SB390は2間×5間で一般的なものである。一方、総柱建物である200SB386、387は比較対象が少ないため一概にはいえないが、掘り形が隅丸方形で一辺が70～80cmと大きく、筑紫野市域では見られない大きさである。

面積については、朱雀大路に面し道路に対して廂をもつ200SB390が73.92㎡と大きく、先のピーク4に該当している。今のところ、大宰府条坊内（筑紫野市周辺検出分）においてはピーク3以上の建物は確認されておらず、面積的には極めて優位にある建物であるということができる。様々な状況があるので建物の性格については即断するのは避けたいが、大宰府条坊域において最大レベルの大きさの建物が当該エリアに所在し、隣接して総柱建物（200SB386または200SB387）が付随していることは、このエリアの性格を決定する上で興味深い事象である。ただし、条坊内外において同じ尺度での比較ができるのかどうかは疑問が残されるところであり、今後の検討を要する。

註1　対象エリアを広げた分析は『古代交通研究』第12号に発表予定である。

註2　註1の分析では最大面積は大刀洗町下高橋馬屋元遺跡のSB21(153.26m²)で、ピーク値は7ランクに分別できるが、大宰府政庁周辺のデータまで含めるとII期政庁正殿SB010Aは380.48m²(身舎144.54m²)を測り、さらに分別される。

遺跡名	建物No	形式	廂	棟向き	梁行(m)	桁行(m)	梁間	桁間	身舎面積(m²)	総面積(m²)
条086	SB004	側柱	−	東西	4.2	7.8	2	4	32.76	32.76
条086	SB006	側柱	−	南北	3.3	5.3	2	4	17.49	17.49
条086	SB007	側柱	−	南北	2.7	5.1	1	3	13.77	13.77

Tab.1　筑紫野市内の古代の掘立柱建物その1

遺跡名	建物No	形式	廂	棟向き	梁行(m)	桁行(m)	梁間	桁間	身舎面積(m²)	総面積(m²)
条086	SB009	側柱	－	南北	3.8	9.0	2	5	34.20	34.20
条086	SB010	側柱	－	南北	3.9	5.4	2	3	21.06	21.06
条192	SB001	側柱	－	東西	3.2	7.0	2	5	22.40	22.40
条107	SB031	側柱	－	南北	4.9	8.3	2	5	40.67	40.67
条136	SB001	側柱	－	南北	4.5	8.7	2	5	39.15	39.15
条136	SB002	側柱	－	南北	4.5	10.2	2	5	45.90	45.90
条144	SB042	側柱	－	南北	3.6	9.6	2	5	34.56	34.56
条183	SB001	側柱	有	南北	6.3	6.7	3	3	31.49	42.21
条183	SB002	側柱	－	東西	3.9	6.2	2	3	24.18	24.18
条183	SB003	側柱	－	東西	3.3	6.6	2	4	21.78	21.78
条183	SB004	側柱	－	南北	3.6	6.9	2	4	24.84	24.84
条183	SB006	側柱	－	南北	3.0	6.9	2	3	20.70	20.70
条196	建物B	側柱	－	東西	4.5	9.0	3	4	40.50	40.50
条196	建物C	総柱	－	－	3.5	4.2	2	2	14.70	14.70
条196	建物D	側柱	－	東西	4.2	8.0	3	4	33.60	33.60
条196	建物E	側柱	－	南北	3.9	7.5	2	5	29.25	29.25
条196	建物F	側柱	－	南北	3.9	7.7	2	5	30.03	30.03
条196	建物H	総柱	－	－	2.5	3.0	2	2	7.50	7.50
条196	建物I	側柱	－	東西	3.6	4.8	2	3	17.28	17.28
条196	建物J	側柱	－	南北	3.9	6.6	2	4	25.74	25.74
条196	建物K	側柱	－	南北	3.6	6.6	2	3	23.76	23.76
条196	建物M	側柱	－	南北	3.9	6.4	2	4	24.96	24.96
条196	建物N	側柱	－	南北	3.9	6.0	2	3	23.40	23.40
条196	建物O	側柱	－	東西	3.6	7.6	2	4	27.36	27.36
条196	建物P	側柱	－	東西	3.9	7.1	2	4	27.69	27.69
条196	建物Q	側柱	－	南北	3.9	6.0	2	3	23.40	23.40
条200	SB390	側柱	有	南北	3.9	11.2	2	5	43.68	73.92
条200	SB391	側柱	－	南北	4.2	10.6	2	5	44.52	44.52
条200	SB386	総柱	－	方形	3.4	3.4	2	2	11.56	11.56
条200	SB387	総柱	－	方形	3.3	3.6	2	2	11.88	11.88
条200	SB392	側柱	－	東西	4.2	6.2	2	3	26.04	26.04
条200	SB388	側柱	－	南北	3.3	5.2	2	3	17.16	17.16
岡田地区遺跡	SB1	側柱	有	東西	6.6	11.0	2	5	49.50	72.60
岡田地区遺跡	SB2	側柱	－	南北	4.4	11.0	2	5	48.40	48.40
岡田地区遺跡	SB3	側柱	－	南北	5.5	11.5	3	5	63.25	63.25
岡田地区遺跡	SB4	側柱	－	東西	3.9	10.2	2	5	39.78	39.78
岡田地区遺跡	SB5	側柱	－	東西	3.6	5.3	2	3	19.08	19.08
岡田地区遺跡	SB6	側柱	－	南北	3.3	8.0	2	3	26.40	26.40
岡田地区遺跡	SB7	総柱	－	－	5.0	5.6	3	3	28.00	28.00
岡田地区遺跡	SB8	総柱	－	－	3.3	4.0	2	2	13.20	13.20
岡田地区遺跡	SB9	総柱	－	－	6.3	6.9	3	3	43.47	43.47
岡田地区遺跡	SB10	側柱	－	南北	3.6	4.8	2	2	17.28	17.28
岡田地区遺跡	SB11	側柱	－	南北	3.6	7.8	2	4	28.08	28.08
岡田地区遺跡	SB12	側柱	－	東西	3.3	7.2	2	5	23.76	23.76
岡田地区遺跡	SB13	側柱	－	東西	3.4	5.3	2	3	18.02	18.02

Tab.2　筑紫野市内の古代の掘立柱建物その2

遺跡名	建物No	形式	廂	棟向き	梁行(m)	桁行(m)	梁間	桁間	身舎面積(m²)	総面積(m²)
岡田地区遺跡	SB14	側柱	−	東西	3.3	7.2	2	3	23.76	23.76
岡田地区遺跡	SB15	側柱	有	東西	4.2	6.6	2	3	27.72	38.28
岡田地区遺跡	SB16	側柱	−	東西	3.4	8.4	2	4	28.56	28.56
岡田地区遺跡	SB17	側柱	−	東西	3.9	6.8	2	3	26.52	26.52
岡田地区遺跡	SB18	側柱	−	南北	3.5	5.8	2	3	20.30	20.30
岡田地区遺跡	SB19	側柱	−	南北	3.9	5.9	2	3	23.01	23.01
岡田地区遺跡	SB20	側柱	−	南北	3.3	5.8	2	3	19.14	19.14
岡田地区遺跡	SB22	側柱	−	東西	3.8	6.9	2	3	26.22	26.22
岡田地区遺跡	SB23	側柱	−	南北	3.5	7.8	2	4	27.30	27.30
岡田地区遺跡	SB24	総柱	−	南北	4.3	6.2	2	3	26.66	26.66
岡田地区遺跡	SB25	側柱	−	南北	3.0	9.0	2	4	27.00	27.00
岡田地区遺跡	SB26	側柱	−	南北	3.9	7.5	2	3	29.25	29.25
岡田地区遺跡	SB27	側柱	−	東西	3.4	3.4	2	2	11.56	11.56
岡田地区遺跡	SB28	側柱	−	東西	3.3	4.2	2	3	13.86	13.86
岡田地区遺跡	SB29	側柱	−	東西	4.2	7.6	2	3	31.92	31.92
岡田地区遺跡	SB30	側柱	−	東西	3.9	5.5	2	3	21.45	21.45
岡田地区遺跡	SB31	側柱	−	東西	3.3	6.1	2	3	20.13	20.13
岡田地区遺跡	SB32	側柱	−	南北	3.5	6.0	2	3	21.00	21.00
岡田地区遺跡	SB33	側柱	−	東西	3.7	4.2	2	3	15.54	15.54
岡田地区遺跡	SB34	側柱	−	東西	4.8	11.1	2	4	53.28	53.28
岡田地区遺跡	SB35	側柱	−	南北	5.0	11.4	2	5	57.00	57.00
岡田地区遺跡	SB36	側柱	−	南北	3.9	5.8	2	3	22.62	22.62
岡田地区遺跡	SB37	側柱	−	東西	3.6	4.6	2	3	16.56	16.56
岡田地区遺跡	SB38	側柱	−	東西	3.4	3.6	2	2	12.24	12.24
岡田地区遺跡	SB39	側柱	−	東西	4.2	6.7	2	3	28.14	28.14
岡田地区遺跡	SB40	側柱	−	南北	4.8	10.8	2	4	51.84	51.84
岡田地区遺跡	SB41	側柱	−	南北	3.8	8.5	2	4	32.30	32.30
岡田地区遺跡	SB42	側柱	−	南北	3.7	5.1	2	3	18.87	18.87
岡田地区遺跡	SB43	側柱	−	南北	3.7	5.1	2	3	18.87	18.87
岡田地区遺跡	SB44	側柱	−	東西	3.6	6.0	2	3	21.60	21.60
貝元遺跡	建1	側柱	−	南北	4.5	7.8	2	4	35.10	35.10
貝元遺跡	建2	側柱	有	南北	4.0	6.0	2	3	24.00	24.00
貝元遺跡	建4	総柱	−	−	3.3	3.3	2	2	10.89	10.89
貝元遺跡	建5	総柱	−	南北	3.5	4.3	2	3	15.05	15.05
貝元遺跡	建6	側柱	有	東西	4.5	6.0	2	3	27.00	36.00
貝元遺跡	建7	側柱	−	南北	3.0	5.5	1	3	16.50	16.50
貝元遺跡	建9	側柱	−	南北	4.3	5.8	2	3	24.94	24.94
御笠地区遺跡AⅠ区	SB01	側柱	有	南北	7.5	9.9	2	5	29.88	74.25
御笠地区遺跡AⅠ区	SB04	側柱	−	南北	4.4	11.6	2	8	51.04	51.04
御笠地区遺跡AⅠ区	SB06	側柱	−	東西	4.8	10.2	3	5	48.96	48.96
御笠地区遺跡AⅠ区	SB08	側柱	−	東西	4.9	8.1	3	4	39.69	39.69
御笠地区遺跡AⅠ区	SB09	側柱	−	東西	4.9	10.5	3	5	51.45	51.45
御笠地区遺跡AⅠ区	SB10	側柱	−	東西	3.3	4.3	2	3	14.19	14.19
牛島宮崎遺跡A区	SB01	側柱	−	東西	4.1	9.8	2	5	40.18	40.18
牛島宮崎遺跡A区	SB02	側柱	−	東西	4.2	8.7	2	5	36.54	36.54
日焼遺跡2次	建物1	側柱	−	南北	4.8	7.2	3	5	34.56	34.56

Tab.3　筑紫野市内の古代の掘立柱建物その3

5)小形竪穴住居について

筑紫野市域においては、既に岡田地区遺跡の調査[註1]において9基が検出されていた。一辺2m弱の方形プランを有し、4本ないしは6本の柱穴をもつものや無柱穴のものが確認された。性格が不明であるために仮に「小形竪穴遺構」として分類していたが、官道北側のしかも官道に沿ったエリアに数基が群集して検出されること、基本的に切り合いがなく8世紀後半の限られた時期の所産と考えられることなど、極めて限定的な状況を示しており、注目していた。これは、単に一般集落内において竪穴住居の退化形態として掘立柱建物と併存しているのではなく、所在している遺跡が官衙であるという特徴と相まって、特殊な性格が想定されたからである。しかしながら、積極的にこれらの性格を論じるための情報はなく、それ以上の言及はできなかった。

その後、本調査地点において大宰府の朱雀大路沿いに8基を検出しており、前記の条件を補足した形になったため、今回は筑紫野市周辺域における検出事例を紹介して、その傾向を整理しておきたいと考えた。ただし、Tab.4に示したように、市域においては3遺跡で検出されたに止まっており、マクロ的に性格を論じるにはまだ時期尚早である。

なお、名称について、「小形竪穴遺構」という名称は一般的に用いられている「竪穴遺構」と混同しやすく本義的ではないため、将来的に性格が判明した段階で新たな名称を付与することが望ましいと思われる。しかし、今のところ性格付けを行うに足るデータが不足しており、形状的に「竪穴住居」と呼んでいるものと同一であることから、仮に「小形竪穴住居」と呼んでおくこととした。[註2]なお、すでに報告がされているものに関しては、混乱を招く恐れがあるため、報告書に従って記述することとした。

●小形竪穴住居の条件設定（仮）

ここでは、小形竪穴住居と呼ぶものについて条件を整理することにする。以下、その内容を示す。後述するが、現段階では事例がまだ少ないため、ここで提示する内容は作業上の仮分類としたい。将来的に検出事例が増加し、その内容に異同が生じた際にはその時に再度検討することとする。

条件

1)竪穴住居に類する形状を構成パーツとする。ただし、竈などの付帯施設は見られない。例外的に床面が部分的に被熱する場合がある（条200SI237）。

2)単独では所在せず数軒が集まっており、同時期の掘立柱建物と併存する可能性が高い（筑紫野市山家の中島遺跡のような例外もある）。

3)遺跡の主要な計画軸に主軸方向が一致する傾向がある。

4)方形プランで、一辺2m程度、面積は3～4m^2（平均値）の小形のものである。

5)時期が、8世紀後半～9世紀初頭に限定される。

分類

1)形状

- **【Ⅰ類】**方形プランのもの（略方形のものも含む）
- **【Ⅱ類】**長方形プランのもの

2)柱穴の有無。

- **【－1類】**無柱穴のもの
- **【－2類】**床面に柱穴を配するもの（4本、6本、8本）

・【－3類】壁際4隅に柱穴を配するもの

【－a】床面に壁際に沿って配されるもの。

【－b】床面ではなく、掘り方の周縁に配されるもの。a類の亜種と考えられる。

・【4類】掘り方周辺にピットを配するもの

遺跡名	調査地点	遺構名	分類	形状	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	床面積 (m^2)	柱穴数
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX03	Ⅰ－1類	方形	2.40	2.20	0.10	5.26	0
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX04	Ⅰ－2類	方形	2.30	2.30	0.25	5.44	6
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX05	Ⅰ－2類	方形	2.00	2.00	0.30	4.20	4(8)
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX06	Ⅱ－1類	長方形	1.60	1.25	0.35	1.94	0
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX07	Ⅱ－2類	長方形	1.90	1.40	0.10	2.70	4
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX08	Ⅰ－3類	方形	1.65	1.50	0.10	2.64	4
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX09	Ⅰ－1類	略方形	1.40	1.30	0.10	1.82	0
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX10	Ⅰ－1類	方形	1.60	1.60	0.25	2.40	0
中島遺跡	第2地点	第1号住居跡	Ⅰ－3類	方形	2.35	2.30	0.40	5.41	4
岡田地区遺跡群	Ⅰ区	SX11	Ⅰ－3a類	方形	1.60	1.50	0.25	2.42	4
大宰府条坊跡	第200次	SI213	Ⅱ－2類	長方形	2.30	1.80	0.15	4.14	4
大宰府条坊跡	第200次	SI237	Ⅱ－4類	長方形	1.90	1.45	0.40	2.76	(11?)
大宰府条坊跡	第200次	SI209	Ⅱ－3b類	長方形	2.20	1.60	0.30	3.52	4
大宰府条坊跡	第200次	SI022	Ⅱ－1類	長方形	1.50+α	1.60	0.50	2.40+α	0
大宰府条坊跡	第200次	SI023	Ⅱ－1類	長方形	3.00	2.20	0.35	6.60	0
大宰府条坊跡	第200次	SI024	Ⅱ－3a類	長方形	2.30	1.70	0.20	3.91	0
大宰府条坊跡	第200次	SI154	Ⅱ－1類	長方形	3.25	2.20	0.05	7.25	0
大宰府条坊跡	第200次	SI391	Ⅱ－1類	長方形	1.80	1.25	0.10	2.25	0

Tab.4　筑紫野市内の小形竪穴住居

●小形竪穴住居の検出事例

筑紫野市における検出例を集成すると、18件が該当している。その結果はTab.4に示した。検出された遺跡が3調査地点でしかないために限定的にならざるを得ないためこれ以上の言及は避けることとし、特徴的な遺構の所見を明示しておきたい。

本調査地点で検出された200SI237は、長方形のプランを呈し、掘り方周辺の11ヶ所にピットを配する特殊なもので、Ⅱ－4類に該当する。東側隅で被熱箇所が認められ、壁面まで3～5cmの厚さで焼土層が検出されている。即断はできないが、工房などの特殊な性格を想定するか、または移動式竈などの設置を考えておきたい。いずれにせよ、この手の遺構はその構造の軽易さから仮設的な設置状況が窺える。

柴尾俊介氏によると、古代の豊前地域において、6世紀後半代の竪穴住居より7～8世紀のそれの方が面積が少なくなることが指摘されている。竪穴住居の小型化の問題については、和島誠一氏・金井塚良一氏（和島・金井塚1996）が指摘して以来、多くの指摘がなされているが、それについての歴史的評価については研究者によって異なるようである。

立地状況の点で特殊な状況と考えられるものに中島遺跡第2地点の第1号住居跡[註3]がある。中島遺跡は筑紫野市山家にあり、市域の東端に位置している。性格が不明なのは、同時期の遺構が他に見られず単体で存在する為である。報告書の所見では「柱穴は四隅に配される小さなもので、住居跡というよりも他の目的を持った小屋といった方が適切であろう」としてい

るものの、位置づけが困難な事例である。

●今後の検討課題

性格の決定には事例の蓄積を待ちたいが、集落のなかで他の竪穴住居と比べてどのような差があるのか、または官衙遺跡のなかでどのようなレベルに位置づけられるのか、検討課題は多い。

また、近隣の検出状況を確認してみると、隣接する筑後・肥後では同様の事例は見られないとのことであったが[註4]、筑後国府周辺の調査に関して興味を引かれる事例がある。国庁II期の国司館地区において長方形の掘り方を持つ竪穴住居が多く検出され、国庁建設に関わる集団の存在が指摘されている。ただし、本調査地点において9世紀中頃以降の掘立柱建物に先行して存在する「小形竪穴住居」の在り方は類似性が見出されるが、筑紫野市周辺で検出される「小形竪穴住居」とは構造が異なり、集団そのものの内容が不明確であるなかでは結論を出すのは早計ではあるが、もう少しミクロ的な分析が必要になると思われる。

註1　筑紫野市教育委員会『岡田地区遺跡群II』筑紫野市文化財調査報告書第56集　1998年

註2　「竪穴住居」という名称は、その機能が住居だけではないので若干の抵抗があるが、現在のところ「竪穴住居」という名称が慣用的に用いられているため、本書においてはそのまま用いることとした。

註3　筑紫野市教育委員会『八ヶ坪遺跡　大島遺跡　中島遺跡　人形原遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第23集　1990年

註4　白木守（久留米市教育委員会）、赤星雄一・美濃口雅朗（熊本市教育委員会）の各氏にご教示をいただいた。ここに記して謝意を表します。筑後国府周辺の事例については、建物群に先行する国司館II期に築造されており時間的な前後関係が見られるのに対し、本市の状況については出土遺物や位置関係から同時併存の可能性が想定できる。

註5　柴尾俊介「豊前における古代集落の諸問題」『先史学・考古学論究III－白木原和美先生古稀記念献呈論文集－』龍田考古学会　1999年

以下に引用し、文献名を記す。

「和島・金井塚は、国家権力の搾取の強化のために竪穴生活が貧困化したものと考えた。佐々木達夫、宮本長二郎らも、没落農民層や寄人・下人らの住居を想定し、富裕農民層は平地住居に住む姿を想定している（佐々木1974、宮本1987)。

これに対し、竪穴部の周囲に柱を建て、竪穴部を土間として使用し、竪穴外の平地部を居間として使用する構造に変化したため、一見すると竪穴住居が小型化したように見えるけれど、けっして貧困化を示すものではなく、逆に自立化の方向にある、とする高橋一夫などの考えもある（高橋1979)。高橋と同様に竪穴部の外の部分に住居の一部の機能が移った、と考える研究者も多い（桐生1996、篠崎1997)。

桐生直彦によれば、竪穴外の柱穴だけで屋根を支える構造のものと、竪穴内の柱穴と竪穴外の柱穴とを併用する構造のものがある、という。竪穴の外に硬化面がみられる事例もあることから、竪穴部よりも外側の空間が単なる物置的役割だけでなく、日常生活の場としても機能していた、と指摘した。

篠崎譲治は、東京都や茨城県における奈良・平安時代の竪穴住居の外側にみられる柱穴（篠崎の呼び方によれば"竪穴外柱")群と、煙道出口や竈を覆った状態で検出される［粘土層］の存在から、煙道の外側部分に土壁＝竪穴外壁の存在を想定し、それ以外の竪穴部の周囲には草壁の存在を想定する。

一方、相模地域をフィールドとしている大上周三は、竪穴住居が小型化する背景に、竪穴住居と掘立柱建物の共存を考え、そこに階層分化の進行を想定する（大山1996)。

九州においても7～8世紀代の竪穴住居は小型化することが指摘されていた。小田和利は、竪穴部の縮小化に伴い主柱穴が竪穴部外に配置されるようになり、結果として竪穴部の占める割合が減少するだけであって、竪穴部位外の平地部分の面積は増えるので、竪穴住居としての“占有空間”には大差はない、と指摘した（小田1994ｂ)。」

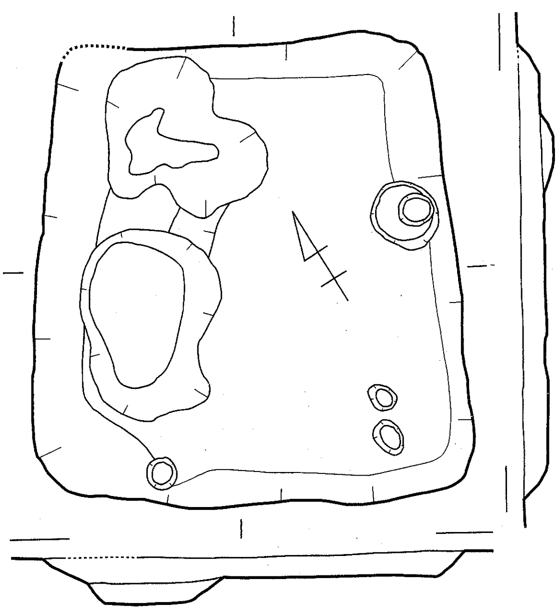
柴尾氏は、山崎遺跡の事例からは「竪穴部の外側を囲むような幅の広い居住空間や物置場の存在は想定できない」とし、同遺跡の「7～8世紀の竪穴住居群は小型化しているけれど、その中で最も小型化している12・13号住居に竈が見られない」ことから、やはり面積が大きくて竈をもつ住居に対して、

相対的にではあるけれど従属的な位置にあるとしている。この問題については、「竪穴部外側空間の利用をすべて否定するものではない。」としながらも、はじめから竪穴住居の小型化一般の問題として議論するのではなく、個別に検討するべきであるという慎重な立場をとっている。

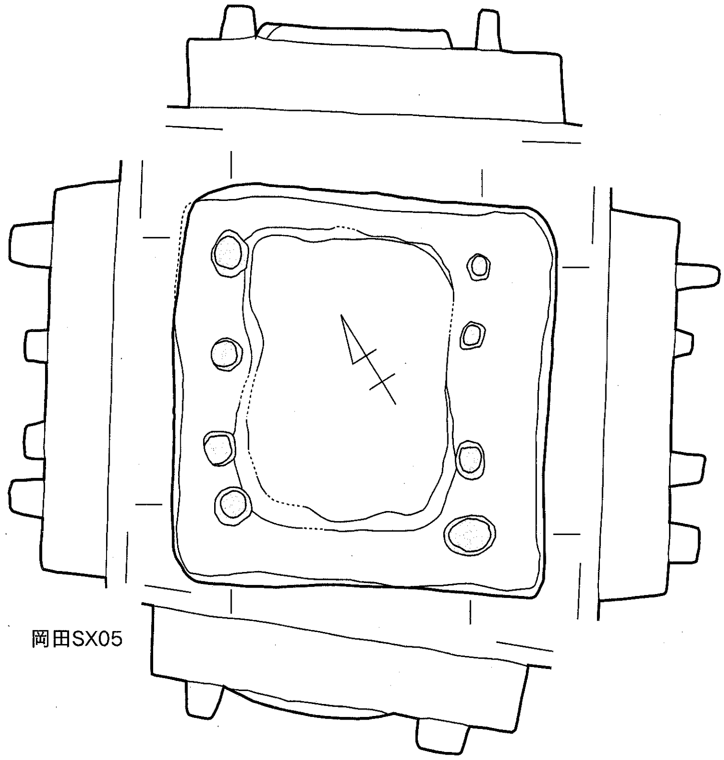
・大上周三「住まいの規模・構成・空間利用の推移」『青山考古』第13号　1996年
・小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』　文化財学論集刊行会　1994年
・桐生直彦「竈を有する竪穴住居の外周にみられるピットについて」『土曜考古』第20号　土曜考　古学研究会　1996年
・佐々木達夫「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究』Ⅰ　校倉書房　1974年
・篠崎譲治「古代の竪穴住居における"竪穴外柱" "竪穴外壁"について」『東国史論』第12号　群馬考古学研究会　1997年
・宮本長二郎「掘立柱建物の普及」『世界考古学大系　日本補遺編』　天山舎　1987年
・和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」『日本の考古学』Ⅴ古墳時代下　河出書房新社　1966年

註6　本書掲載の200SI237は竪穴部の外周に11個のピットを配しており、上記註5の桐生氏による「竪穴壁外柱穴」との類似点が見出される。しかし、その機能については、積極的にこれを示す確証は得られていないことと、周辺において他にこのような事例が見られないことから、これに結びつける根拠が今のところはない。なお、桐生氏のいう「竪穴壁外柱穴」は、「竪穴外柱（穴）」（篠崎1991：106)、「側柱穴」（岩田1994：424）と同義語である（桐生1996：註5)。

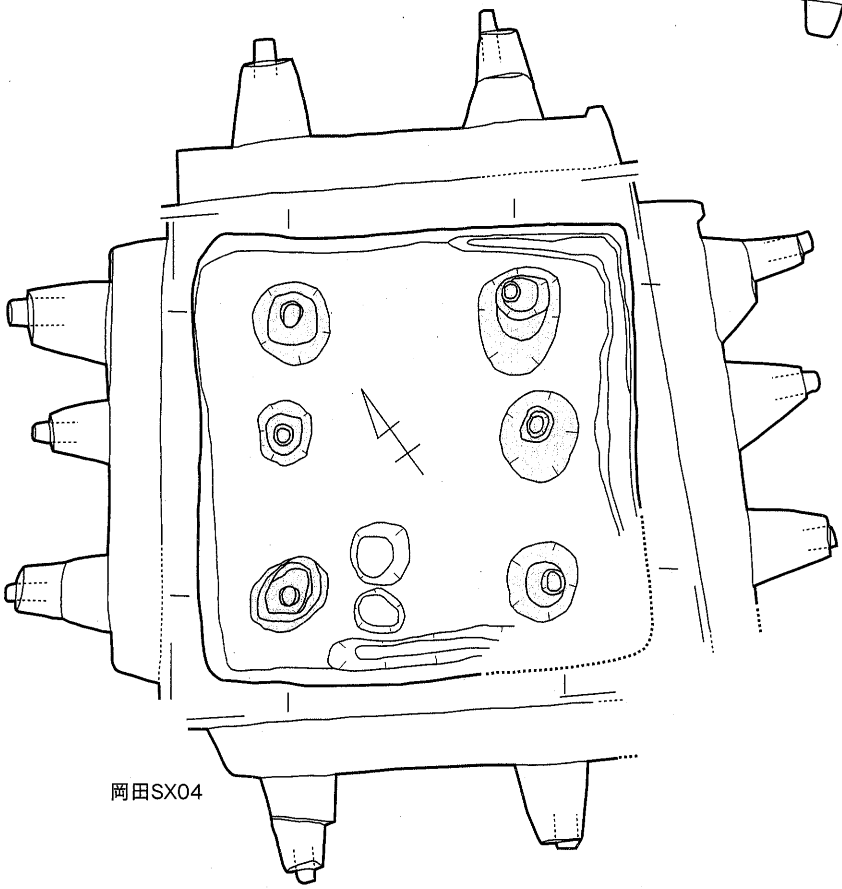
・篠崎譲治「沖積地における奈良・平安時代の住居構造および調査方法－東京都南広間地遺跡の調査から－」『東京考古』9　東京考古談話会　1991年
・岩田昭広『樋ノ下遺跡（第2分冊）　埼玉県住宅供給公社リバーサイド玉淀建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第135集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994年



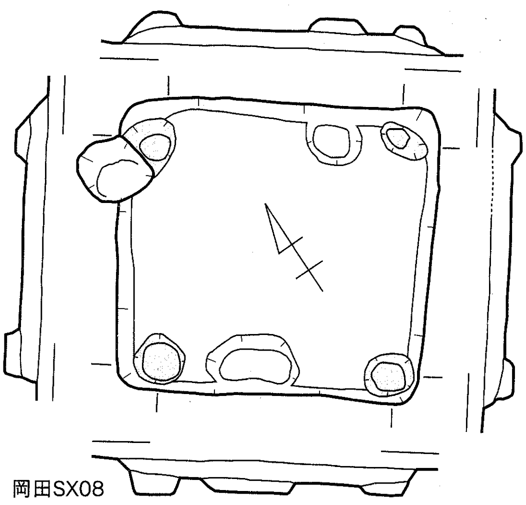
岡田SX03



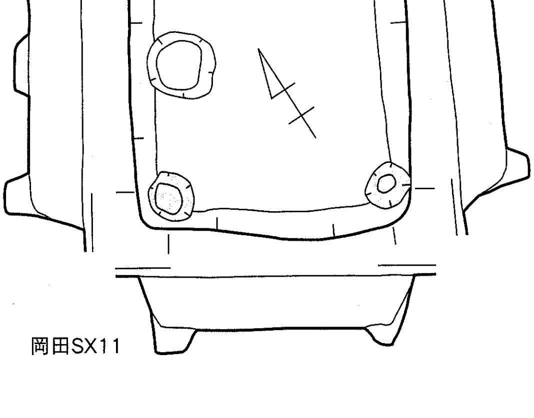
岡田SX05



岡田SX04



岡田SX08



岡田SX11

Fig.149　小形竪穴住居の検出事例（その1）

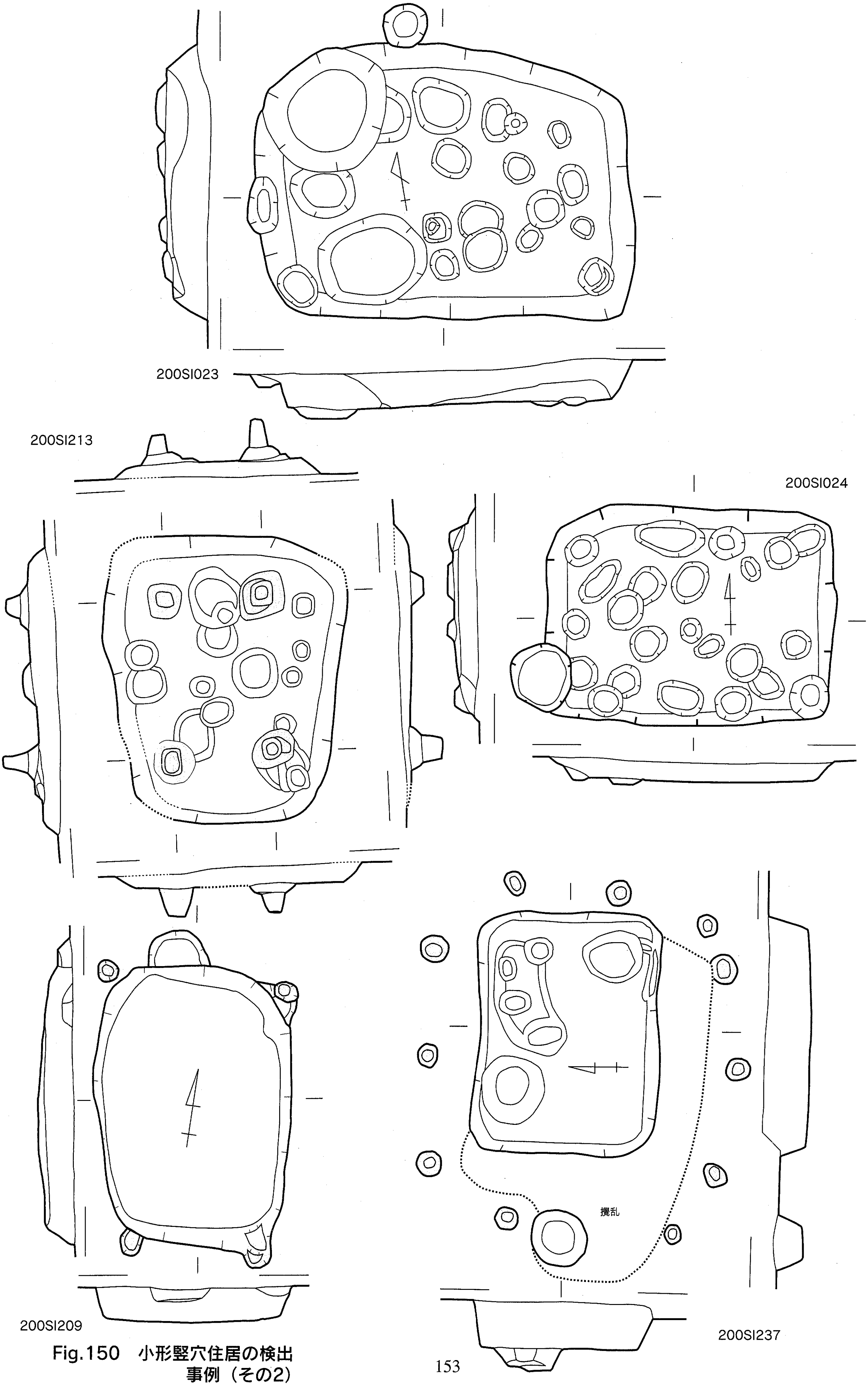
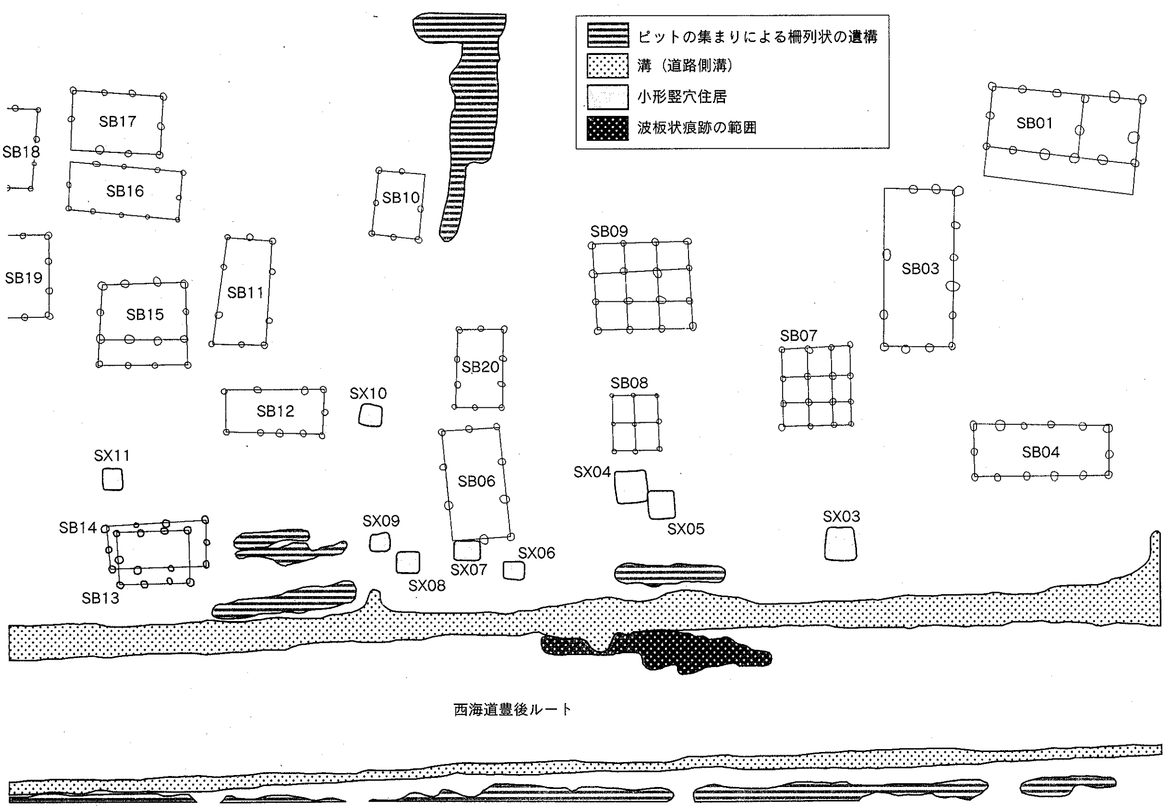


Fig.150　小形竪穴住居の検出事例（その2）

岡田地区遺跡



大宰府条坊跡第200次

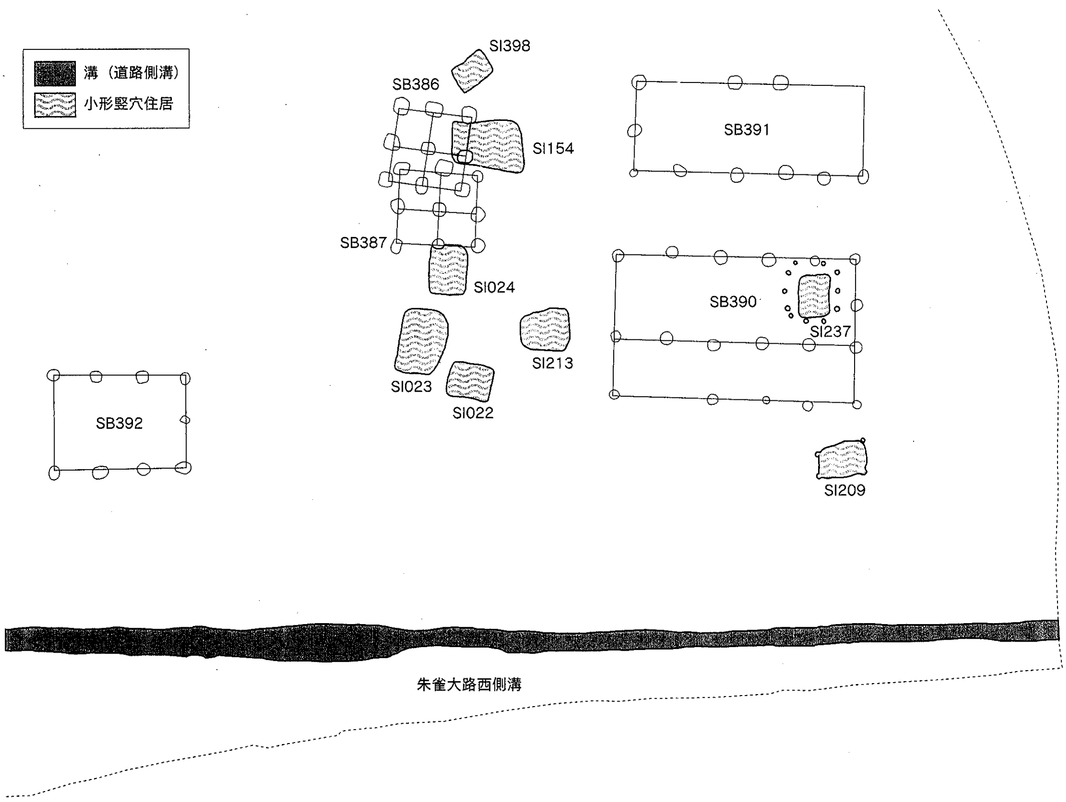


Fig.151　小形竪穴住居の道路・掘立柱建物との位置関係

6)本調査地点における搬入遺物について

大宰府へは国内外から各種の食器が持ち込まれている。これらの多様かつ多量な遺物の出土により、時間軸の決定はもとより、多くの分析・研究が行われてきている。いずれ条坊内における小エリアごとの食器組成の状況等を概観してみたいが、それぞれの調査地点の状況を把握できていないため、今回は本調査地点における特徴をまとめておくことに留めることとする。

今回の調査地点からは、越州窯系青磁・白磁・長沙窯系黄釉褐彩陶器・初期高麗・磁州窯系白釉陶器・緑釉陶器・灰釉陶器などの搬入品が出土している。

●搬入品の出土傾向

1)越州窯系青磁（Fig.150・160）

輸入陶磁器の中で総量が一番多いのが、越州窯系青磁である。輸入陶磁器の総量のうちの61.2%を占める。該当遺構と内容については、Tab.5のとおりである。特徴としては200SE214、200SE230、200SK253、200SE254などの遺構に偏っている。器種構成としては、越州窯系青磁17点のうち碗が11点、水注（or壷）2点、合子2点であり、碗がそのほとんどを占める。

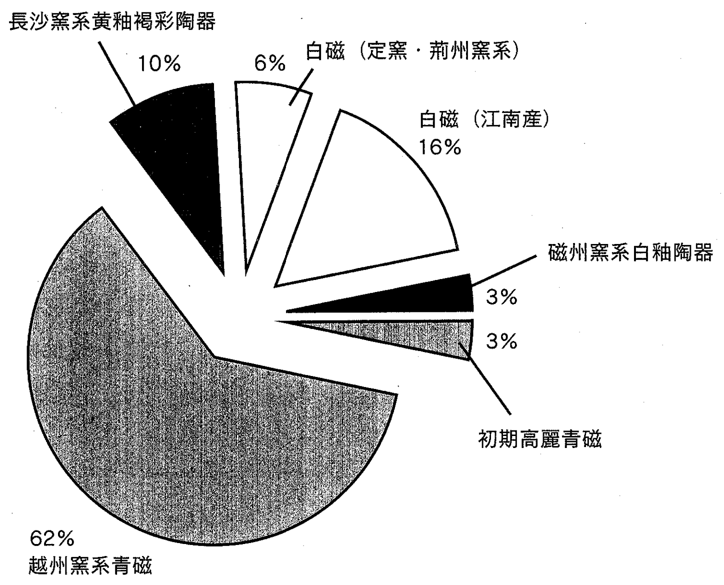
分　類		数　量	該　当　遺　構
Ⅰ　類 (7　点)	碗Ⅰ－1a類	1点	SE230・2点、SE254・1点
	碗Ⅰ－1類	1点	SE230・1点
	碗Ⅰ－2オ類	1点	SE230・1点
	碗Ⅰ－5類	2点	SE230最終埋没土・1点、SE230・1点
	大碗Ⅰ－2ウ類	1点	SE230・1点
	大碗Ⅰ－2aウ類	1点	SK253・1点
	皿Ⅰ類	1点	SK253・1点
Ⅱ　類 (5　点)	碗Ⅱ－2類	1点	SE230最終埋没土・1点
	碗Ⅱ－2a類	1点	SE230・1点
	碗Ⅱ－2c類	2点	SE230・2点
	碗Ⅱ－2d類	1点	SE230・1点
	小碗Ⅱ－2d類	1点	SE214・1点
その他 (5　点)	香炉	1点	SE230裏込め・1点
	水注or壷	1点	SE230・1点
	水注	1点	SE254・1点
	合子蓋	1点	SK253・1点
	合子身	1点	SE230・1点

Tab.5　越州窯系青磁一覧表

2)長沙窯系黄釉褐彩陶器（Fig.161、PL.62）

長沙窯産と見られる黄釉褐彩陶器は、破片資料が3点出土している。器種は全て水注で、部位は胴部片2点と底部片1点である。該当遺構は、200SE210・200SE214・200SK253である。筑紫野市においては、本調査区南側隣接地の条107次調査（未報告）においてその胴部片が1点出土しているが、今回の事例も含めていずれも朱雀大路の周辺エリアである。

輸入陶磁器の量比



施釉陶器の量比

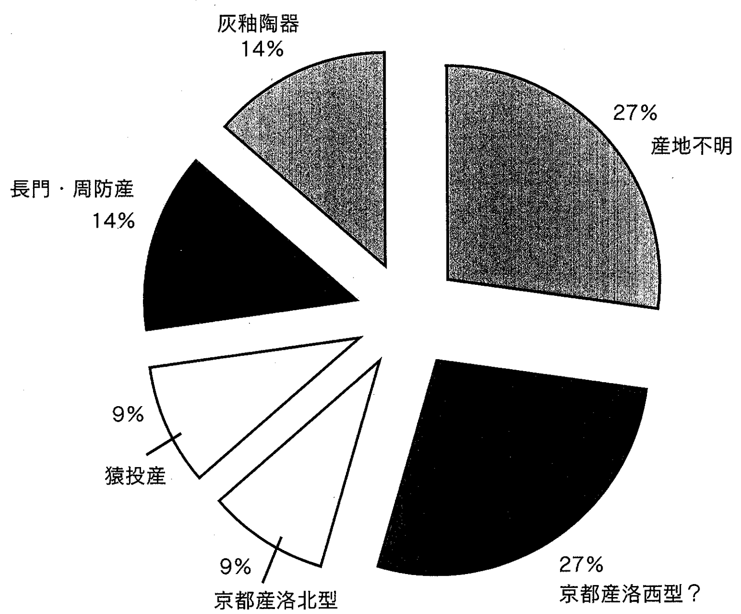


Fig.152　搬入遺物の量比グラフ

我が国において長沙窯系黄釉褐彩陶器が出土した事例は、把握できる範囲では50例程度と初期貿易陶磁器の中では少数派であるが、広域に分布する製品である。分布中心は福岡県と京都府である。[註1]

スタンプについては、湖南省文物考古研究所・湖南省博物館・長沙市文物工作隊による『長沙窯』[註2]の調査報告書が刊行されているので、今回は掲載されているものとの整理比較してみた。内容を以下に示す。

2)−1　長沙窯系黄釉褐彩陶器に見られる印紋の類例

①戳印（191件）　陽印（Fig.157）

- i　双魚（140件）　鯉に似ている魚。
- ii　龍　（　2件）　龍。四本獣が走る姿を呈する。
- iii　蓮花（ 10件）　開花した蓮の花。
- iv　牡丹（　9件）　牡丹の花葉と折れた枝。
- v童子（仏陀？）蓮花（　5件）童子と蓮の花。蓮の花を抱いた裸身の童子が大きく開花した蓮の花の中で座している。
- vi　飛蝶（ 18件）　飛ぶ蝶。
- vii　獅　（　1件）　獅子。[註3]

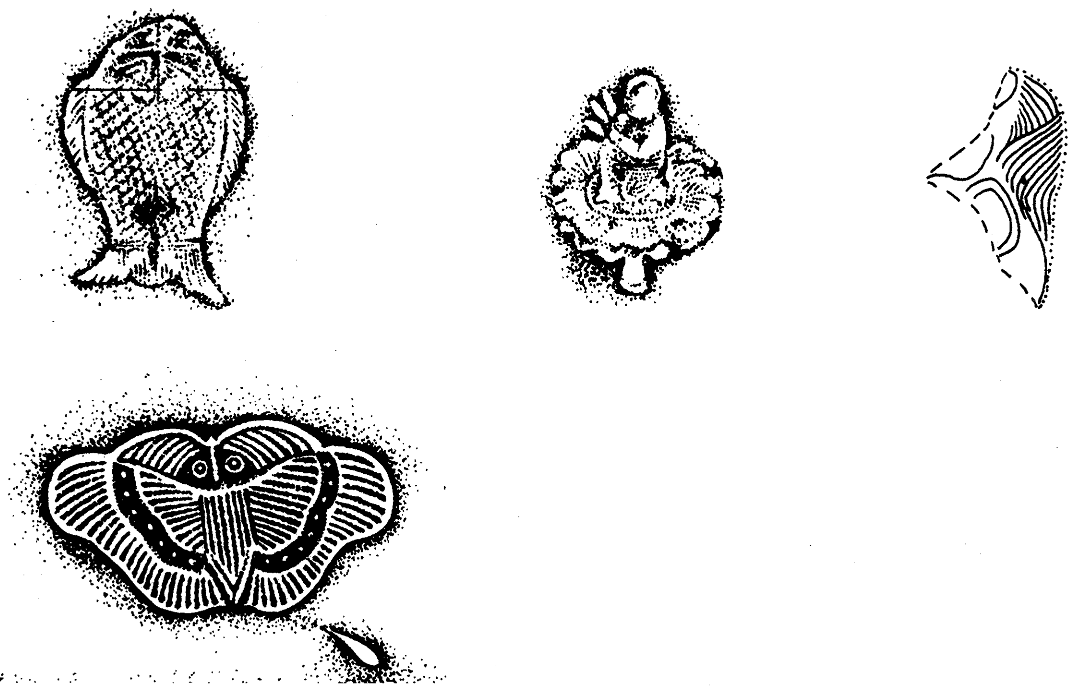


Fig.153　長沙窯・戳印のモチーフ

②模印貼片（53件）陰印

i　桫椤 樹（51件）

ヘゴ。ヘゴ科の常緑木生シダ。八丈島・紀伊半島南部・九州に稀に生える。高さ３m・径３０cm位になる。葉は２回羽状複葉で長さ１～２m、棘のある長柄を持ち幹頂で傘状に開く。小羽片は線状披針形、終裂片は鎌形で縁に細かい鋸歯がある。

A型　（27件）高く大きな椰子の木に似る。その頂部には開花した大きな花があり、ヘゴに似ている。その下は菱形格子状の柵で囲み、その内面には一対の鳥紋のような飾りが見られる。

B型　（16件）一対の鳥紋と桫椤の花葉状の図形であるが、高く大きな樹木は見られない。

C型　（８件）団花状（一つに集まった球状）を呈し、その中心付近に桫椤の花が一つ配される。四周は放射状に葉が延び、このモチーフは双耳罐に多く見られる。

ii対鳥団花（対鳥羽状複叶）（33件）（Fig.154）

桫椤樹の変形。基本形は上端に花弁の図案を配し、両側に一対の鳥が向かい合う。その下に密に茂った葉が下垂する。このモチーフは壶（水注）に多く見られる。上端部の花弁と中央部のモチーフで追加細分した。

1　上端部の花紋が４弁になるもの。

2　上端部の花弁が３弁で、下側の弁を伴わないもの。

2'　上端部の花弁が３弁で、下側の弁のみ簡略化された 複数の弁で表現されるもの。２類の亜種と考えられ る。

3　上端部の花弁が最上部の１弁のみで、左右の両弁は葉片状になるもの。

4　上端部が花弁状をなさずに簡略化された葉片状になるもの。

　a　中心部が垂下した葉片状を呈するもの。

　b　中心部が二重線に囲まれた楕円形を呈し、内部周縁には珠文が配される。その内部が簡略化した葉片状を呈するもの。

　c　中心部が二重線に囲まれた逆達磨形を呈し、その内部は簡略化されたもの。この場合は、垂下する葉片は簡略化傾向にある。

　d　中心部が小さな楕円形状を呈し、内部に珠文が配されるもの。

　e　中心部が退化し、小さな５弁状を呈するもの。

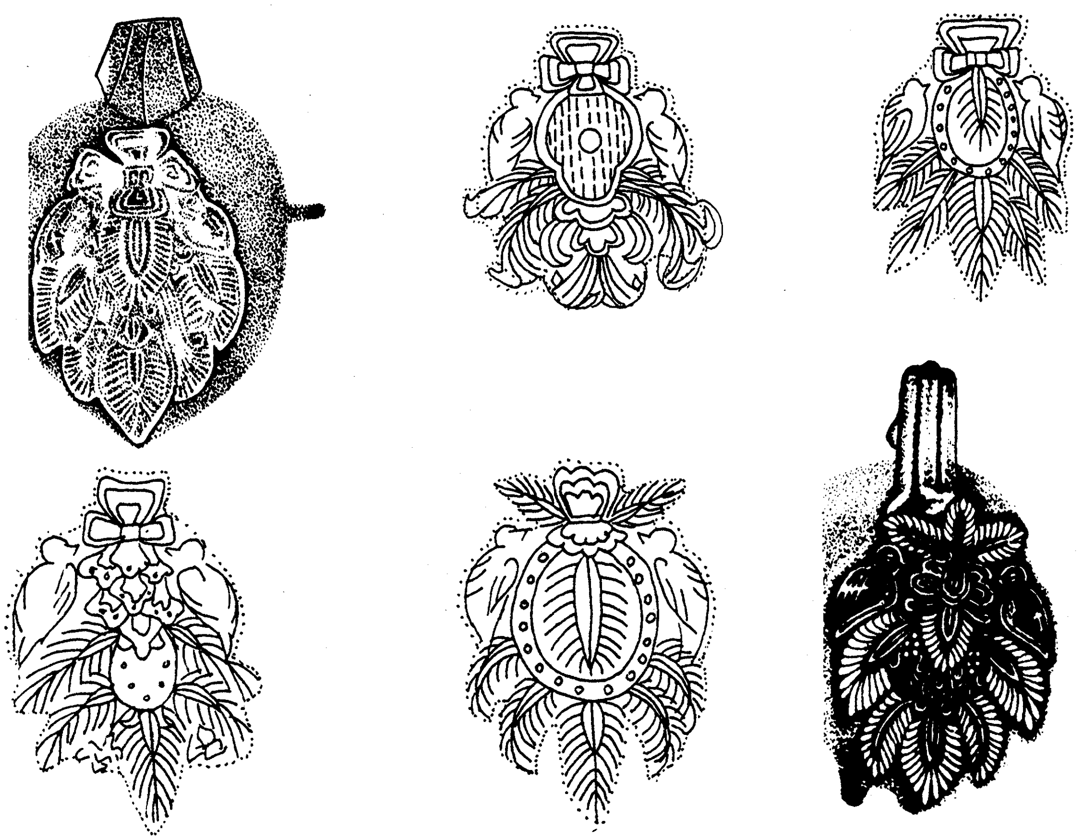


Fig.154　長沙窯・対鳥団花紋のモチーフ

iii 椰枣（27件）（Fig.155・156）

「椰枣」とは、棗椰子（Fig.155）を意味する。ヤシ科の常緑高木で、ペルシャ湾沿岸原産。熱帯の各地で広く栽培されている。葉は羽状複葉で長さ１～３m。果実は長さ３～４cmの長楕円形で下垂する花穂に多数群がって付く。果実の外形は檳榔（林檎に似る果物。）に似る。サハラ砂漠およびアラビア半島の砂漠地帯で多く産する。果実が葡萄状であるため、旧来は「葡萄紋」と称されていたが、葉片は椰子樹状であることから「椰枣紋」と改称された。蔓の向きと羽状複葉文の配置で追加細分した。

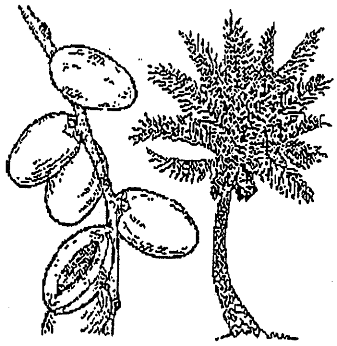


Fig.155　棗椰子のイメージ図

1　中心の蔓が左側に巻くもの。

2　中心の蔓が右側に巻くもの。

- a　羽状の複葉文が上から２＋２＋３の数で配されるもの。
- b　羽状の複葉文が上から２＋２＋２の数で配され、最下端の右側が欠落するもの（左巻の場合。右巻の場合は逆になる。）。
- c　羽状の複葉文が上から２＋１＋２の数で配され、中央部両側にそれぞれ蝶と鳥を配するもの。

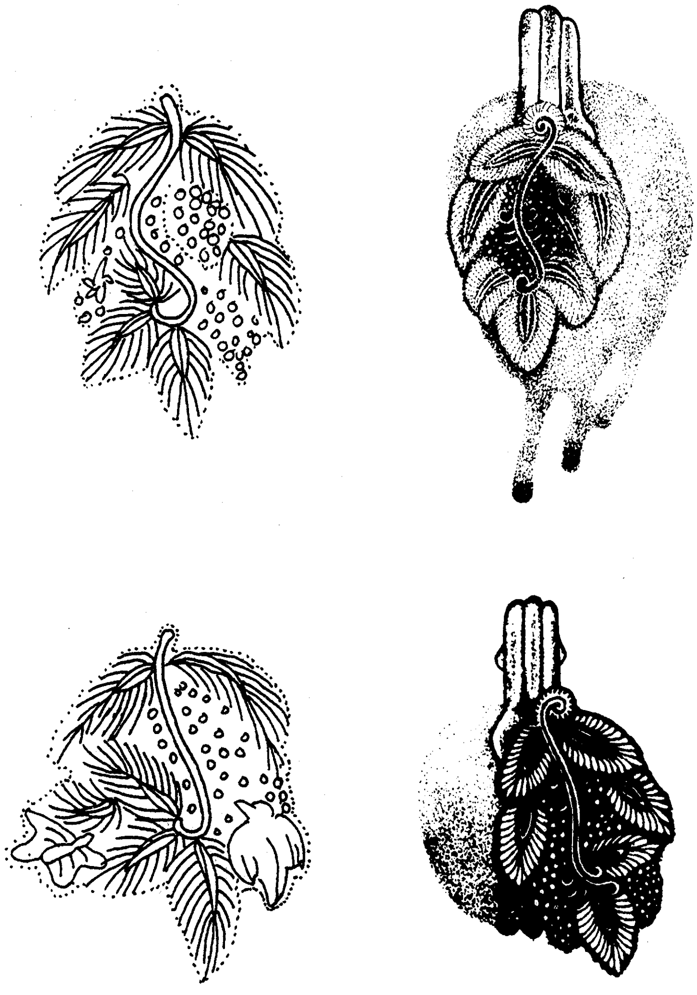


Fig.156　長沙窯・椰枣紋のモチーフ

iv 金翅鳥（６件）

金翼の鳥。鳳鳥に似るが、嘴と爪が更に鋭利である。

v　鳳鳥（12件）

鳳凰。伝説上の不死鳥。雄を「鳳」、雌を「凰」という。飛んでいる鳳がラッパ状に飾られる。壷の把手部に多く見られる。

vi 人物（23件）（Fig.157）　菩薩状のものは除く

・舞人　・側面人物　・胡人　・武士（甲冑）

・舞人踏方毯　・舞人踏圓毯

vii その他（22件）

A型（11件）　葉が放射状に円く展開する。

B型（ 9件）　花葉状を呈し、頂部には花が配される。その下には宝瓶状に垂下する葉があり、中心には「十」字状の図案が見られる。

C型（ 1件）　垂下した葉があり、鉢の把手部に配される。

D型（ 1件）　建築物に似る。イスラム教のモスクに類似している。その所蔵品の宝塔状のモチーフ。

E型（追加）　横長の五角形を二重線で形取り、内部周縁に珠文、内部に幾何学文を配する。

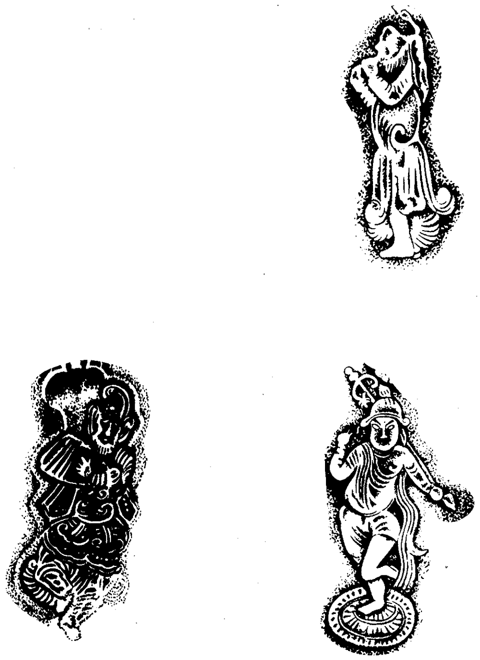


Fig.157　長沙窯・人物紋のモチーフ

以上の内容をモチーフ別に出現頻度をグラフ化してみた（Fig.158）。これによると、技法別には戳印・模印貼花の双方とも半分ずつで頻度に差異は見られないが、種類別に細かく見てみると、戳印の場合は双魚文が75.7％（140件）と全体の3/4を占める。模印貼花の場合は、禽鳥文（金翅鳥・鳳鳥）が1～3％と少数であることを除けば、その他は6～14％とほぼバランスがとれた状況になっている。本調査地点で出土した資料は対鳥団花（対鳥羽状複叶）文をスタンプしたものであり、その他の国内出土事例から見ても後述する人物文または対鳥団花の施された製品のみが日本に将来された状況がうかがえる。

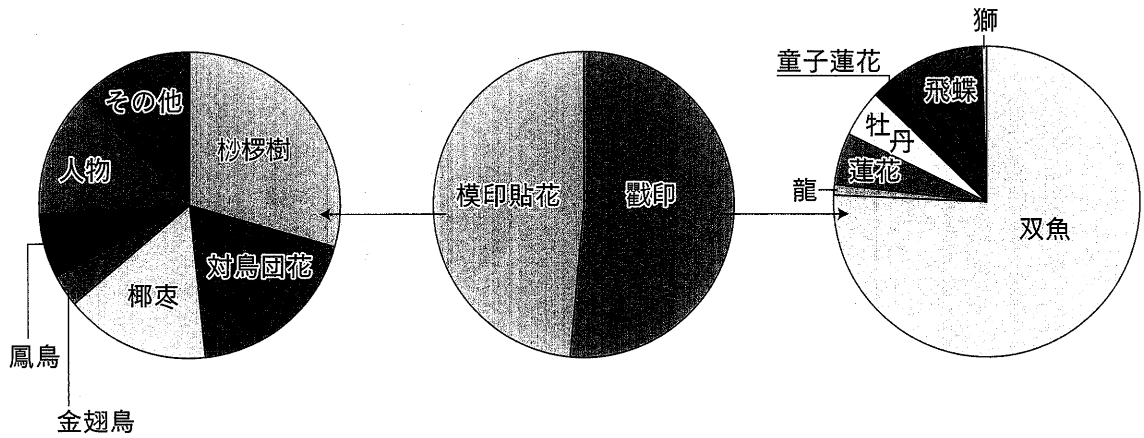


Fig.158　長沙窯モチーフ別出現頻度

また、スタンプの組み合わせについてであるが、長沙窯の水注（中国では壷）には、把手部を除く3ヶ所に施される。通常、同一文様が施される例がほとんどであるが、人物像＋対鳥団花文など同一個体に異なった文様をスタンプする例も僅かに確認されている[註4]。条107次調査のものは人物像であり、本調査地点のものと同一個体である可能性も残される。本調査地点の3点については、胎土や施釉の状況などを勘案すると、同一個体と考えてよい。

3)白磁（Fig.161・163）

定窯・荊州窯系のⅠ類に該当するものは、SE208・SE026から3点出土している。また、広南系のⅡ類はSE230から1点・SE026から2点出土している。合計15点の出土がある。詳細は以下のとおり。

分　類	数量	該　当　遺　構	分　類	数量	該　当　遺　構
碗Ⅺ類？	1点	SE254・1点	碗Ⅳ－2a類	1点	SE026・1点
碗Ⅰ類	1点	SE208・1点	碗Ⅴ類	1点	SE026・1点
碗Ⅱ類	1点	SE230・1点	皿Ⅴ－2類	1点	SE026・1点
碗Ⅱ－1類	1点	SE026上層・1点	皿ⅥorⅦ類	1点	SE026・1点
小皿Ⅱ－1a類	1点	SE026・1点	碗Ⅵ類	1点	SE026・1点
碗Ⅰ－4類？	1点	SE026・1点	碗Ⅰ類	2点	SE230・2点
碗Ⅻ類	1点	SE026・1点	碗ⅩⅢ類	1点	SE230・1点

Tab.6　白磁一覧表

4)初期高麗青磁（Fig.163）

SE026より初期高麗青磁の盤口壷口縁部片が1点（30頁・抽出番号709）出土している。筑紫野市域においては、初期高麗青磁の類例は知られていなかったが、太宰府市域においては観世音寺周辺域での出土例が多く知られている[註5]。

5)磁州窯系白釉陶器（Fig.163）

SE026より出土した磁州窯系の可能性がある白釉陶器皿の底部片（30頁・抽出番号681）がある。胎土は乳白色で不純物が多く、微量の黒色粒と気泡が認められる。釉下には化粧を施している。釉は光沢がある透明釉でムラがあり、細かい貫入が多い。畳付のみが露胎となり、楕円形の目跡が1ヶ所に残っている。11～12世紀の所産と考えられる[註6]。

■国産施釉陶器（緑釉陶器・灰釉陶器）（Fig.161・162）

本調査地点における緑釉陶器・灰釉陶器は、合計24点（18点・6点）が出土している。産地がある程度確定できたものはそのうちの13点で、器種は椀・坏・皿などがある[註7]。

該当遺構	産　地	器　種	該当遺構	産　地	器　種
SE230	？	稜皿	SE208上層	京都産洛西型	椀？
SE214上層	？	椀	SE230	京都産洛西型	輪花椀
SK253	？	椀or皿	SE253	京都産洛西型	坏
SE026	？	椀or皿	SE253	京都産洛西型	椀
SD001上層	？	椀or皿	SE210	京都産洛北型	椀？
SK253	猿投産	皿？	SE210	京都産洛北型	皿
－	猿投産	狭縁段皿	SE251	防長産	椀
SE210	京都産	坏	SE251	防長産	坏
SE251	京都産洛西型	椀？	SK253	防長産	高台付皿

Tab.7　緑釉陶器一覧表

該当遺構	器　種	該当遺構	器　種
SE012	椀	SE208	椀
SE012	坏	SE230	椀？
SE026	椀（山茶椀）	SK253	瓶

Tab.8　灰釉陶器一覧表

1)周防・長門産

本調査地点においては、周防・長門産と見られる緑釉陶器は、SE251・SK253出土資料があり、総量としては3点と非常に少ない。逆に本調査地点の南側隣接地に当たる条107次においては、周防・長門産のものが過半数を占め、また器種についても風炉などの大型品が多いといった特殊な状況を示す。高橋分類碗A-2類、碗D類、碗F類が出土している。

2)京都系洛北型

SE210から2点出土している。このうちの1点は、白磁Ⅰ類を模した緑釉陶器がある。蛇の目高台を呈し、胎土は軟質であるが精良、釉は白色である。

3)京都系洛西型？

SE208上層・SE210・SE230・SE251・SK253から5点出土している。器種は、輪花碗1点・碗3点・坏1点がある。これらの緑釉陶器は小塩窯産のものに近似しているとのこと[註8]。

4)猿投産

SK253から2点出土している。器種は、狭縁段皿1点・皿1点がある。ほとんどがK-90窯式期に相当する。

稜皿小片は体部上半のみの小片である。外面に屈曲、内面に段がついており、立ち上がりが浅いことから稜皿と判断した。焼成は硬陶で、胎土は灰褐色で精良、微量の白色粒を含む。釉は残存部位には全て施釉され、光沢がある淡黄緑色を呈する。産地は不明だが、猿投ではK14-1窯式に出現する可能性が指摘されている。また時期はやや下るが、灰釉陶器については3点が出土している。

註1　出土事例の検索には国立歴史民俗博物館の陶磁器データベースを参考にした。アドレスは次のとおりである。(http://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/boue/db_param)
註2　湖南省文物考古研究所・湖南省博物館・長沙市文物工作隊『長沙窯』紫禁城出版社　1996年
註3　出土点数が不明であったので、グラフ化に際しては1点としてカウントした。
註4　林田和人氏（熊本市教育委員会）ご教示。熊本市二本木遺跡第18次地点の井戸から出土している。
註5　山本信夫氏（山本考古研究所）ご教示。
註6　森本朝子「博多出土の磁州窯系陶器と仿定器」『楢崎彰一先生古希記念論文集』1998年
註7　山本信夫氏、斎藤孝正氏（文化庁）ご教示。
註8　吉村正親氏（(財)京都市埋蔵文化財研究所）ご教示。

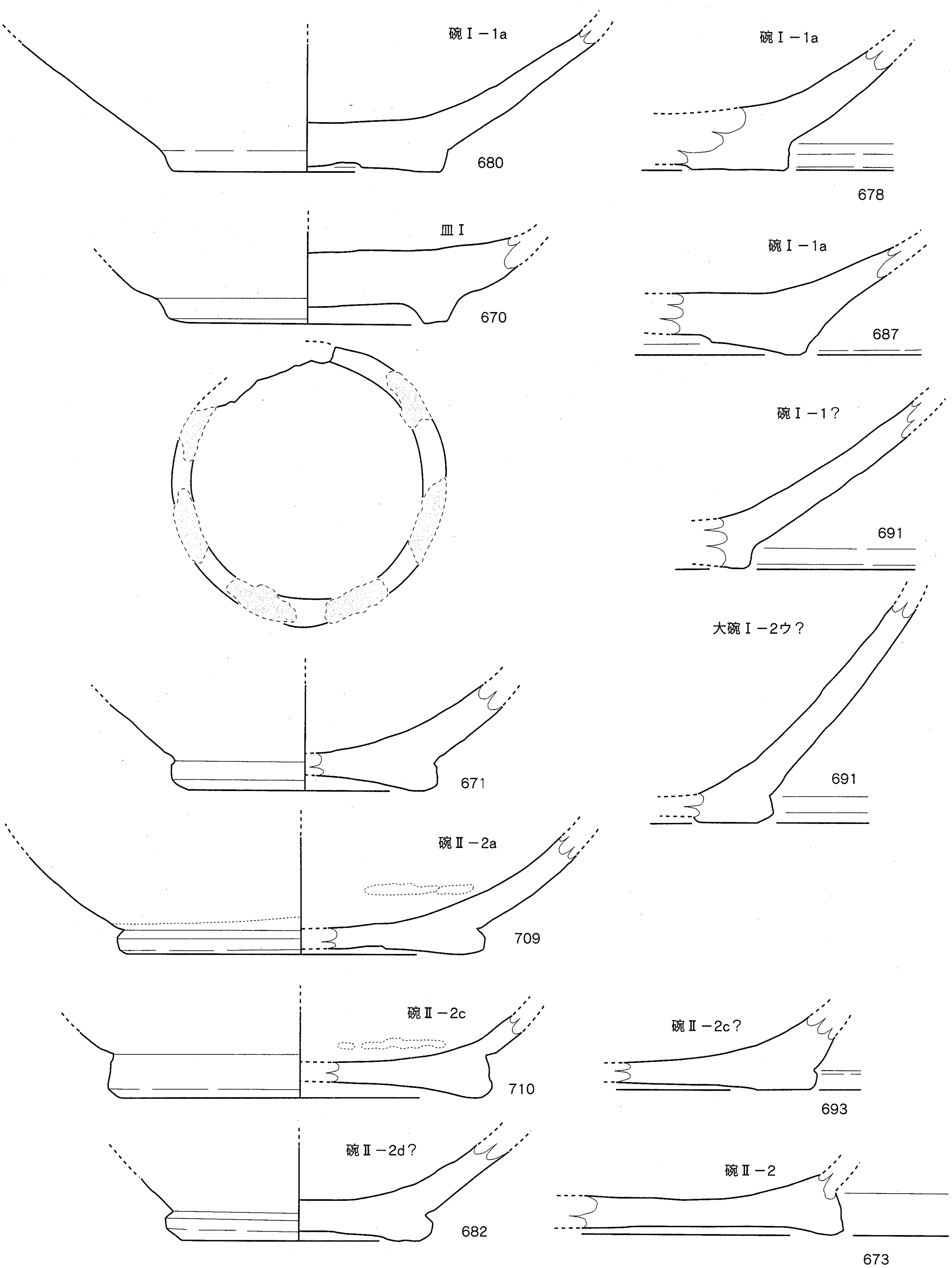
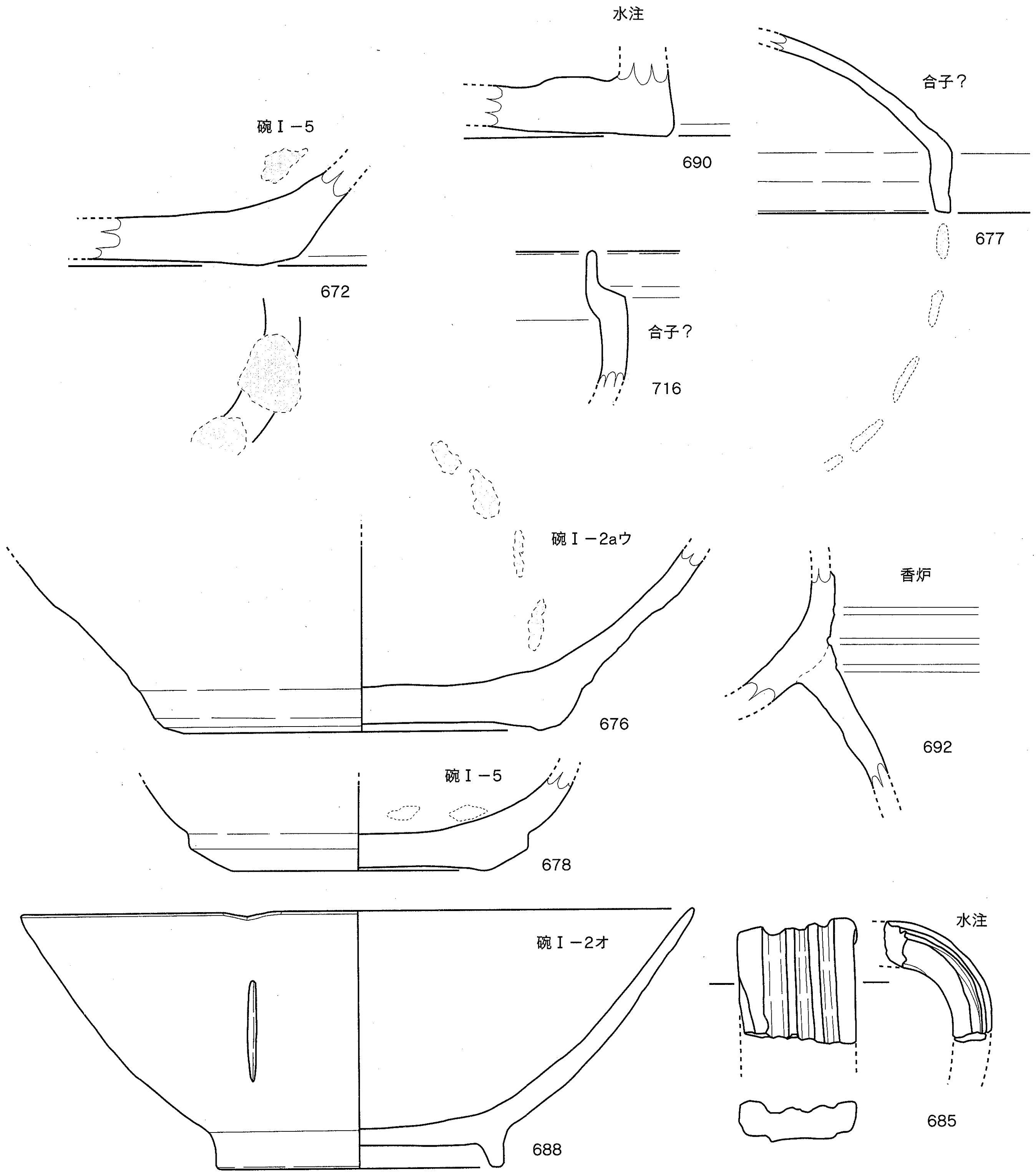
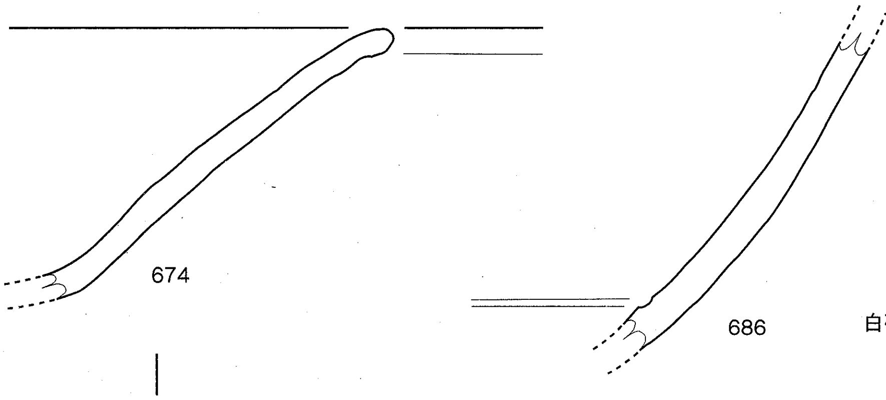


Fig.159　本調査地点における搬入陶磁器その1（越州窯系青磁1/1）

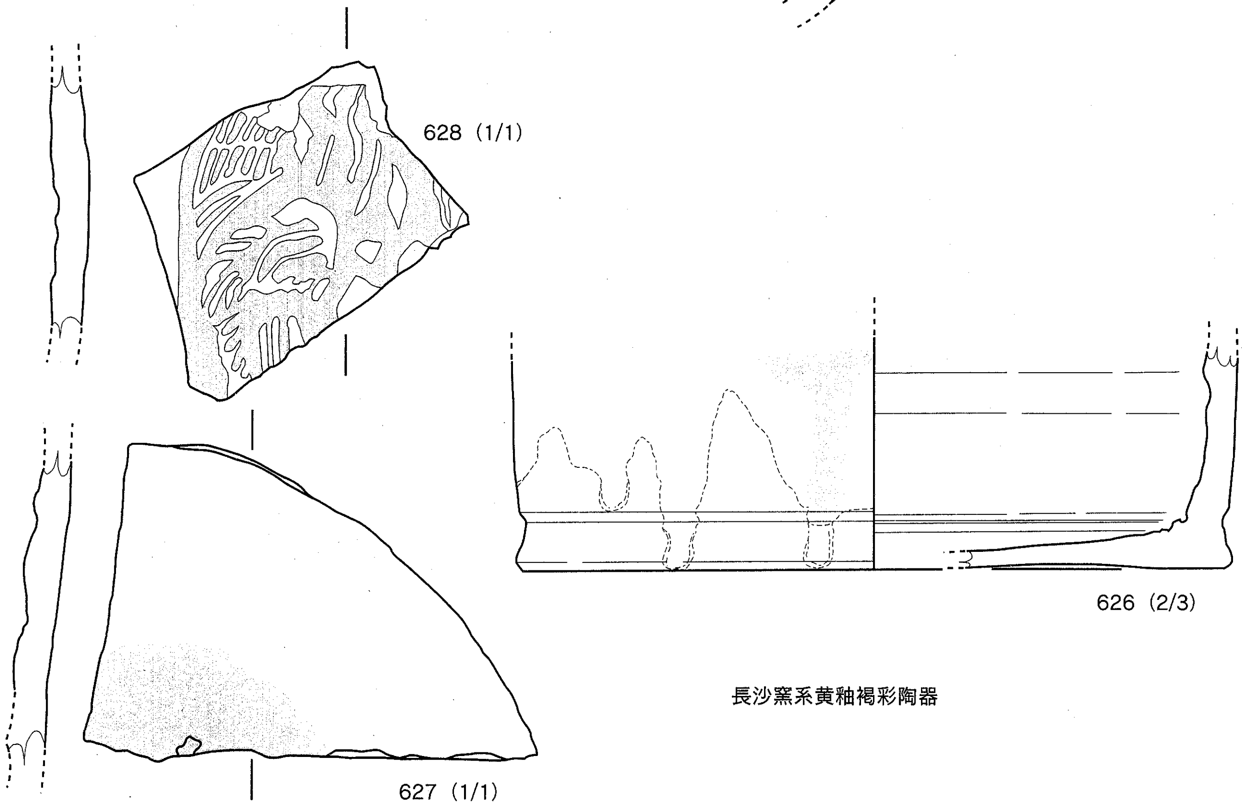


672,676,677,678,688は2/3
685,692,690,716は1/1

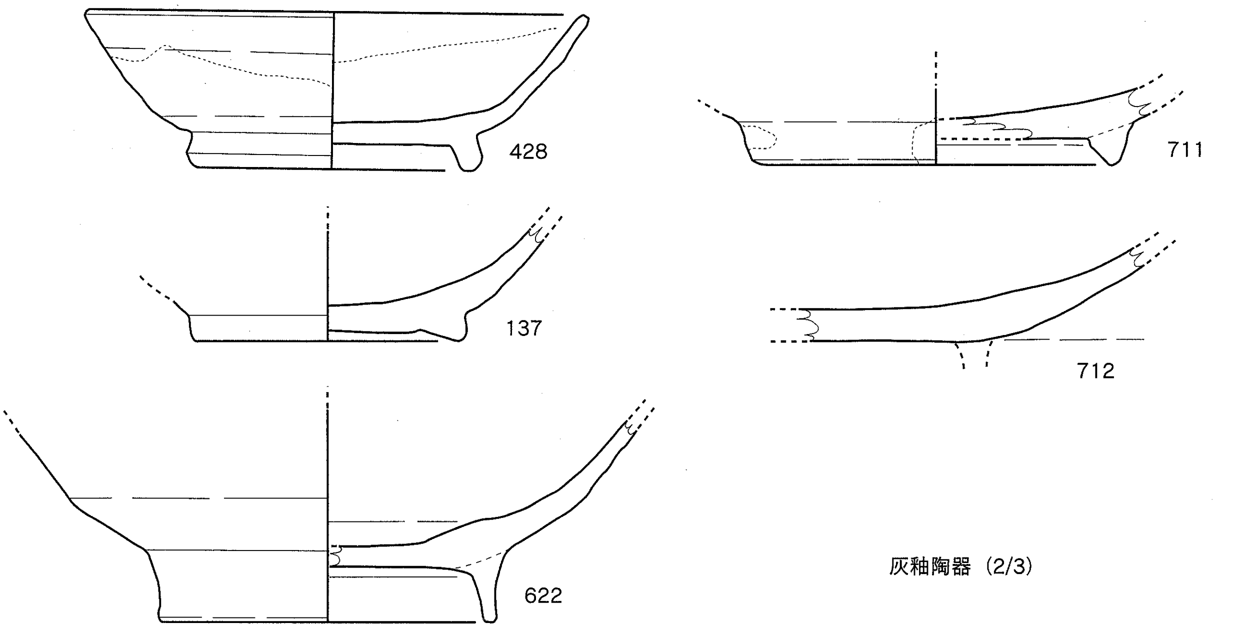
Fig.160　本調査地点における搬入陶磁器その2（越州窯系青磁）



白磁Ⅺ類（1/1）



長沙窯系黄釉褐彩陶器



灰釉陶器（2/3）

Fig.161　本調査地点における搬入陶磁器その3
（白磁・長沙窯系黄釉褐彩陶器・灰釉陶器）

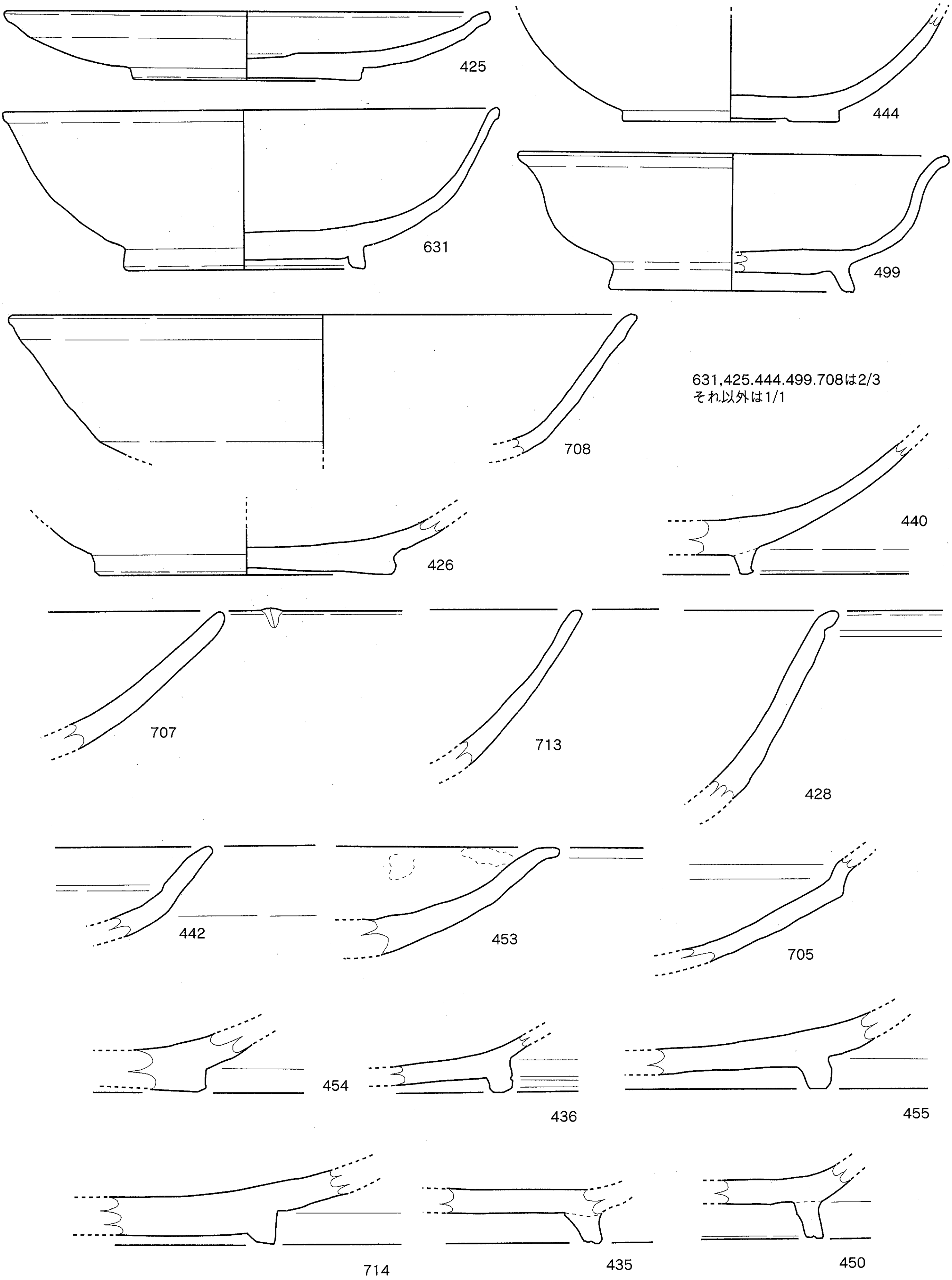


Fig.162　本調査地点における搬入陶磁器その4

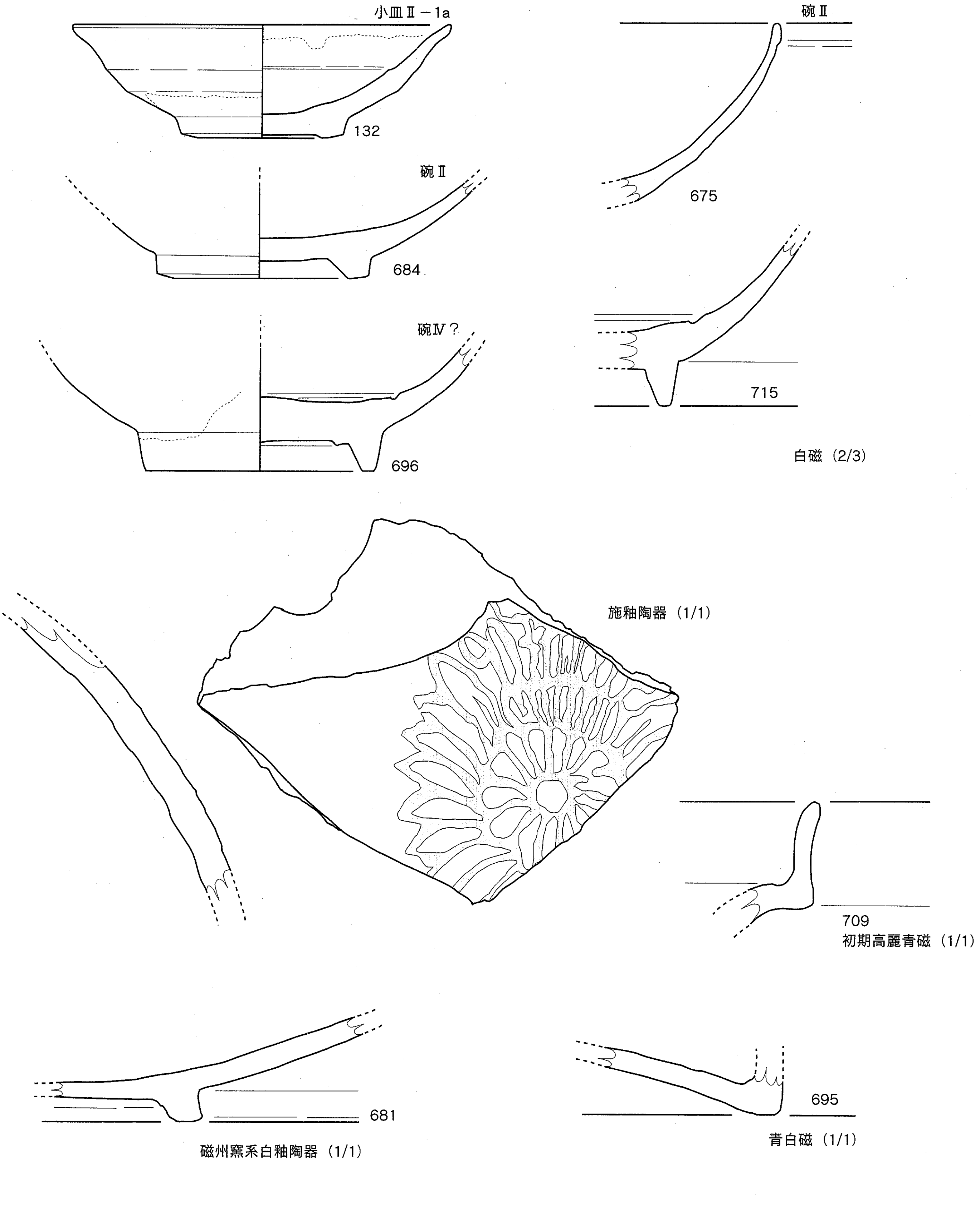


Fig.163　本調査地点における搬入陶磁器その5
（白磁・施釉陶器・青白磁・磁州窯系白釉陶器・青磁）

7)SK298出土の権衡器について(108～113頁・抽出番号683、Fig.121、PL.62)

「権」とは、はかりに使われた「おもり」のことである。「はかりざお」を意味する「衡」を併せて、重さをはかることを「権衡」という。日本の場合、大宝令では「権衡」としてその単位を定めており(史料1)、器具については検定制度として「凡そ官私の権衡度量は、年毎の二月、大蔵省に詣で平校せよ」(史料2)としている。また、その管理者を大蔵省と諸国の国司とし、「様」と呼ばれる銅製の標準器によって検定がなされていたこと(史料3)が確認できる。計量器の規定および管理は、律令政府が中央集権を推進していくうえで、必要不可欠であったことがうかがえる。

●類例

吉村靖徳氏による一連の検討（吉村1995・2001）が参考になる。吉村氏による分類・検討の成果を援用しつつ、一定の整理を行っておきたい。「権」ならびに「権状製品」については、類例も増加しているので、集成を行った。その結果を示したものがTab.9である。

●形態の検討

権衡器の形態については、宮本1994と吉村1995・2001による分類に従って説明を行う。

金属製権衡器の分類（宮本1994、吉村2001）

A類　笠形の体部と円柱状の高台をなすもの。瓶の栓状を呈する。

－1　半球形部には縦方向に数本の稜がある。

－Ⅰ　笠部の分割が稜によって均等分割されるもの。

－Ⅱ　不均等分割されるもの。

－a　稜間に小さな稜を挟むもの。

－b　稜間に2条の小さな稜を挟むもの。

－c　2条1対の稜間に小さな稜を挟むもの。

－2　半球形部に稜がないもの。

B類　束腰形と呼ばれている縦長の本体で、途中にくびれ部があり、くびれ部の上は球形で、くびれ部の下は裾広がりの台上になるもの。

本調査地点でみつかった「権」（110頁・遺物番号683）は、釣鐘形を呈しており、笠部は断面三角形の稜で8分割されている。台部は短い円柱状をなし、紐は欠失している。天上部には若干のくぼみが確認でき、そこに輪金が接合されていたものと考えられる。法量は、現存高2.2㎝、笠部最大径2.5㎝、台部径1.9㎝、台部高0.4㎝、重量45.6±0.1ｇを測る。本調査地点の金属権は、太宰府市教育委員会が調査を行った大宰府条坊跡第89次調査(太宰府市通古賀)で出土しているものと形状に若干の違いがあるものの、ほぼ同等といってもよい。遺存状況は良好で、鈕の付近には使用時に用いられた紐と推測される繊維が付着している。条200SK298は8世紀末～9世紀初頭に埋没したものと考えられるので、恐らくは8世紀代に使用されたものであろう。

●重量の検討

最大値は平城京左京九条一坊出土の短頸壷模倣形（B類）の資料が329.1g、最小値は平城京右京8条1坊の資料が40.0gである。最大値は他のものとは形状も異なっており、また重量もこれのみが重く、特殊なものと見るべきであろう。

その他の傘形を呈するA類の重量分布をグラフ化したものがFig.164である。これによると、40～50gのものが全体の28%、90～100gのものが18%を締め分布中心の傾向が看取できる。概ね1:2の関係にあるものと思われるが、出土点数が少ないこともあってこれ以上の言及はできない。小両の1両をこの28%の範囲に想定する考え方もあるが、令に規定される大両との関係を前提とした場合に、その関係を積極的に看取できるデータはない。

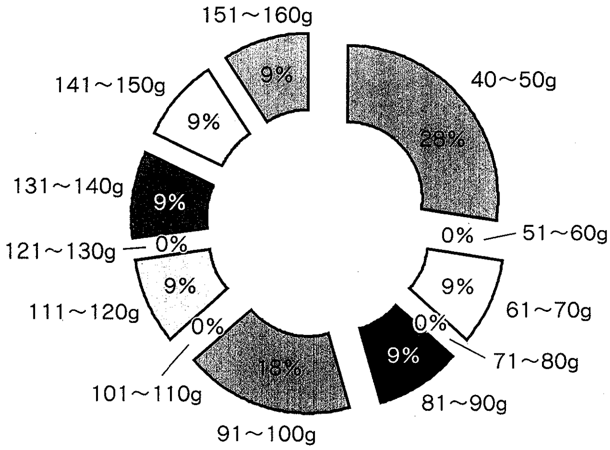


Fig.164　権衡器の重量別分布グラフ

またその他の重量を示す資料も存在しており、重量には大きくばらつきが見られ一概にはその特性の抽出はできない。この理由としては、出土点数が少ないこと、時期的な重量の変化が考えられるが、「分銅」であるのか「錘」であるのかの峻別が困難である点も考慮に入れる必要があろう。

権衡制に関する史料

【史料1】『令義解』巻十 雑令 度十分条

「権衡。廿四銖為両。謂。以秬黍中者百黍重為銖。廿四銖為両。三両為大両一両。十六両為斤。」

【史料2】『令義解』巻九 関市令 関市権衡条

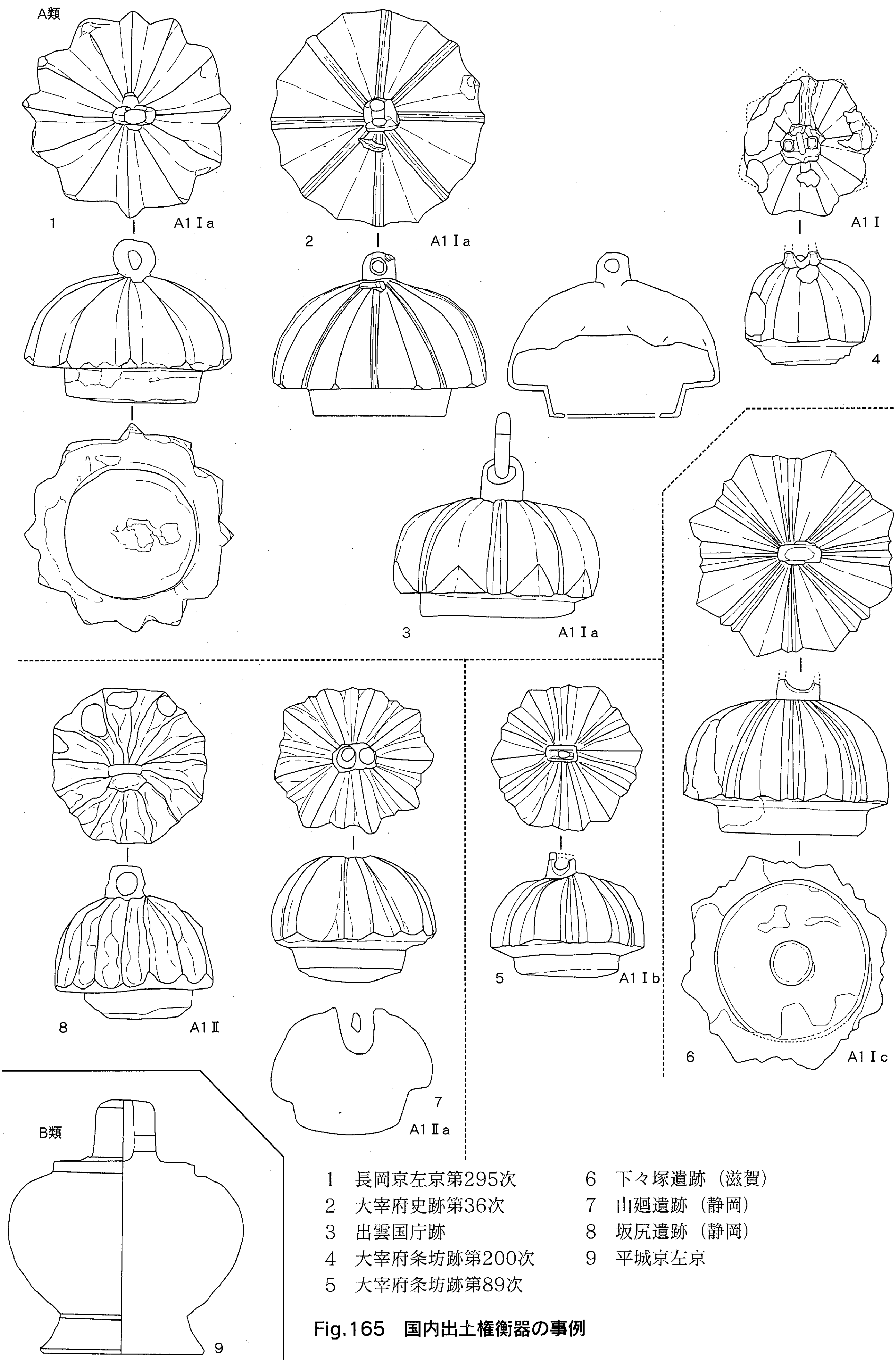
「凡官私権衡度量、毎年二月、詣大蔵省平校。謂。凡諸司及庶人。権衡度量者。皆詣大蔵省平校。然不経官司印者。苔卅。即知平校日。官司題印。但唐令云。並印暑然後聴用。
此令除印暑文。故不可暑。唯依律可印。即興量函不同。不在京者。詣所在国司平校。然後聴用。」

【史料3】『令義解』巻十 雑令 用度量条

「凡用度量権官司。謂。大蔵省及諸国国司之類。皆給様。其様皆銅為之。」

参考文献

・宮本佐知子「国内出土の権衡資料」『大阪市文化財論集』大阪市文化協会　1994年
・吉村靖徳「権衡に関する一考察－福岡県内出土権状製品の検討と課題－」『九州歴史資料館研究論集』20　1995年
・太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡Ⅶ』　1995年
・吉村靖徳「大宰府学校院出土衡器の一例」『九州考古学』第75号　2001年



1　長岡京左京第295次
2　大宰府史跡第36次
3　出雲国庁跡
4　大宰府条坊跡第200次
5　大宰府条坊跡第89次
6　下々塚遺跡（滋賀）
7　山廻遺跡（静岡）
8　坂尻遺跡（静岡）
9　平城京左京

Fig.165　国内出土権衡器の事例

遺　跡　名	遺構名	所　　在	素材	重量(g)	分類（吉村2001）
博多遺跡		福岡市	青銅		金属権
博多遺跡第065次調査	土坑	福岡市	金属	115.0	金属権
河合遺跡		大阪府	金属		金属権
桜内遺跡		滋賀県	金属		金属権
出雲国府跡		島根県	金属		金属権
大宰府史跡第036次調査	包含層	福岡県太宰府市	金属	91.5	金属権Ⅱb類
元岡遺跡第20次調査	SD002	福岡市	金属	97.2	金属権Ⅱb類
大宰府条坊跡第200次調査	SK298	福岡県筑紫野市	金属	45.6	金属権A-1-Ⅰ類
井樋遺跡	大溝	静岡県	金属		金属権A-1-Ⅰ類
坂尻遺跡	包含層	静岡県	金属	82.0	金属権A-1-Ⅰ類
大網山田台遺跡		千葉市	金属		金属権A-1-Ⅰ類
武蔵国府		東京都	金属		金属権A-1-Ⅰ類
山廻遺跡	包含層	静岡県藤枝市	金属	69.6	金属権A-1-Ⅱa類
下々塚遺跡	SD32	滋賀県	金属	142.0	金属権A-1-Ⅱb類
大宰府条坊跡第089次調査	表土	福岡県太宰府市	金属	46.5	金属権A-1-Ⅱb類
長岡京跡左京第295次調査	SD17	京都府長岡京市	金属	134.7	金属権A-1-Ⅱc類
平城京右京8条1坊		奈良県大和郡山市	金属	40.0	金属権A-2類
平城京左京9条1坊		奈良県奈良市	金属	329.1	金属権B類

Tab.9　国内出土の金属製権衡器一覧

8）出土文字資料について

出土文字資料は極めて少なく、墨書土器が24点・土器焼成前の刻書が4点の出土である。調査当初は、木簡の出土も期待されたが、地質的な状況が悪かったため空振りに終わった。出土文字資料一覧はTab.10に示した。土器の時期は概ね8世紀中頃から9世紀初頭に属するものと考えられる。以下、判読が可能であったものについてその所見を記載する。本書では、墨書土器の検討についての具体的な検証方法を担当者が持ち合わせていないため、以下、それぞれの特徴ならびに解釈を管見の範囲内で示すことのみにとどめた。なお、文字の判読については、松川博一氏にご教示をいただいた。

個体No	S番号	種別	器種	墨書位置	判読
637	SD-001上層	須恵器	坏c	高台内中央	「葪」（アザミ）
638	S-017	土師器	坏a	体部外面逆位	「言」
639	S-022	土師器	坏d	底部外面周縁・口縁部外面	？
640	S-023	須恵器	蓋a4	天井部外面	？
641	S-023	土師器	坏a	底部外面中央	「全」
642	S-024	須恵器	坏？	底部外面	？
643	S-028	須恵器	蓋	天井部外面	？「川」カ
644	S-198	須恵器	坏or皿	外面	？
645	S-215	土師器	坏	体部外面	「卅」
647	S-223	土師器	蓋	口縁部外面・天井部内面	⍂・？
648	S-223	土師器	坏or皿	底部外面中央	？
649	S-223	土師器	坏	体部外面中央	？
650	S-223	土師器	蓋b	天井部外面	？
651	S-223	土師器	坏or皿	底部外面	？（人物の戯画か）
652	S-229	須恵器	蓋	天井部内面	？
653	S-230	須恵器	蓋？	内面	？
654	S-237	須恵器	坏or皿	内面	？
655	S-252	土師器	坏d？	底部外面中央	？
657	S-298	須恵器	坏c	体部外面中央	？
658	S-306	須恵器	蓋？	内面	？
659	S-360	須恵器	蓋c	撮み脇	？
660	S-360	土師器	蓋c4	撮み脇	？
646	S-215	土師器	坏or皿	底部外面中央	？
630	S-208	須恵器	坏	高台内中央	⦸（記号）

Tab.10　本調査地点における黒書文字資料

今回出土した墨書土器の内で判読が可能であったものは、5点（総数の21％）である。判読ができたものでもその解釈ができるものは皆無に等しく、一応の追跡調査ができたものはNo.637の「葪」のみである。「葪」は、通常「薊」または「蓟」と表記するが、古代では「葪」と書きならわしていたらしい。[註1]正倉院文書にも見え、当時食用として比較的出回っていたようである。なぜ、この文字が記載されたのかは不明である。

●文字の記載位置

以前、岡田地区遺跡出土の69点の墨書位置について傾向を把握しようと試みたことがあるが、[註2]坏・椀の場合は底部外面(高台内を含む)に、蓋の場合は天井部外面に書かれる可能性が高

Fig.166　本調査地点における出土文字資料一覧

く、他遺跡の諸例とも同じような状況を示していた。特殊な状況としては、口縁部内面に正位で書かれるものが見受けられ、検討課題としていた。本調査地点出土のものを対比してみると、概ね一致傾向にあった。

本調査地点においては、このエリアの性格にアプローチできる出土文字資料はないが、須恵器坏・蓋の転用硯7点、円面硯1点[註3]が出土しており、文字に関係が深いエリアであることは認識できる。これは、所在する建物が官的な性格が強いことを示す一つの傍証になると考えている。前節において記述してきたが、大宰府条坊南半域において最大レベルの大きさの建物が所在し隣接して総柱建物が付随している点（4節）、搬入遺物が豊富である点（6節）、金属製の権衡器が出土している点（7節）などは、それを考える上での一助となろう。

註1　関根真隆『奈良朝食生活の研究』　吉川弘文館　1993年を参考にした。以下、その内容をまとめて示す。

1.三百廿八文買薊七十四圍（宝字4年、造金堂所解案）

2.葉薊二石二斗（宝亀2年、奉写一切経所解）

3.薊羽十三石六斗<SIZE 6>請自西園<SIZE 9>（宝亀2年、写経所解）

などとある。『新選字鏡』に「薊挙欣反阿佐美」とあり「アサミ」と読むから、今日のアザミ類と思われる。薊羽は薊の葉であろう。現在、植物学的にアザミに類別されるものは多く、その多くは食用できるようであり（『日本植物図鑑』）、奈良時代のアザミもそのような種類であったと思われる。

上記文書3によれば、多量を西園より進めているから、これを園地で栽培していたと考えられる。延喜内膳式耕種園圃条にも薊の栽培法が見られる。文書中薊、薊葉は3、閏3、5、6、8、9、10、11月等に食用している。『延喜式』によると2月～9月とあり、ほぼ一致する。真冬以外はいつも栽培していたのである。

註2　筑紫野市教育委員会『岡田地区遺跡群II』筑紫野市文化財調査報告書第56集　1998年

註3　転用硯はSK99（1点）、SK298（5点）、SK360（1点）の計7点。円面硯はSE251（硯面1点）、SE210（脚部1点）。接合はできなかったが、同一個体かと思われる。

参考文献

・西別府元日「平安時代初期における西海道の地域政治史的研究－西海道諸国地域史からみた大宰府支配について－」平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書　2000年

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S－001	SD001	16～23	S－032	Pit032	123･124
S－001上層	SD001上層	16･17･19･20	S－033	Pit033	
S－002	SD002	23･24	S－034	Pit034	
S－005	SK005	65	S－035	Pit035	
S－006	SK006	65	S－036	Pit036	
S－007	SK007	65･66	S－037	Pit037	
S－008	SK008	66～68	S－038	Pit038	
S－009	SK009	68･69	S－039	Pit039	
S－010	SK010	69	S－040	Pit040	
S－011	Pit011	123･124	S－041	Pit041	
S－012	SE012	26～28	S－042	Pit042	
S－013	Pit013		S－043	Pit043	
S－014	Pit014		S－044	Pit044	
S－015	Pit015		S－045	Pit045	
S－016	Pit016		S－046	Pit046	
S－017	SD017	24･25	S－047	Pit047	
S－018	Pit018		S－048	Pit048	
S－019	Pit019		S－049	Pit049	
S－020	Pit020		S－050	Pit050	
S－021	Pit021		S－051	Pit051	
S－022	SI022	55･56	S－052	Pit052	
S－023	SI023	56～61	S－053	Pit053	
S－024	SI024	61	S－054	Pit054	
S－025	Pit025		S－055	Pit055	
S－026	SE026	28～31	S－056	Pit056	
S－027	SK027	70	S－057	Pit057	
S－028	SK028	70	S－058	Pit058	
S－029	SK029	71	S－059	Pit059	
S－030	SK030	71	S－060	Pit060	
S－031	Pit031		S－061	Pit061	

Tab.9-1 遺構番号対照表（1）

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S－062	Pit062		S－094	Pit094	
S－063	Pit063		S－095	Pit095	
S－064	Pit064		S－096	Pit096	
S－065	Pit065		S－097	Pit097	
S－066	Pit066		S－098	Pit098	
S－067	Pit067		S－099	Pit099	
S－068	Pit068		S－100	Pit100	
S－069	Pit069		S－101	Pit101	
S－070	Pit070		S－102	Pit102	
S－071	Pit071		S－103	Pit103	
S－072	Pit072		S－104	Pit104	
S－073	Pit073		S－105	Pit105	
S－074	Pit074		S－106	Pit106	
S－075	Pit075		S－107	Pit107	
S－076	Pit076		S－108	Pit108	
S－077	Pit077		S－109	Pit109	
S－078	Pit078		S－110	Pit110	
S－079	Pit079		S－111	Pit111	
S－080	Pit080		S－112	Pit112	
S－081	Pit081		S－113		
S－082	Pit082		S－114	SK114	81·82
S－083	Pit083		S－115	SD115	
S－084	Pit084		S－116	SD116	
S－085	Pit085		S－117	SD117	
S－086	Pit086		S－118	Pit118	
S－087	Pit087		S－119	Pit119	
S－088	SK088	72～80	S－120	Pit120	
S－089	SK089	81	S－121	Pit121	
S－090	Pit090		S－122	Pit122	
S－091	Pit091		S－123	Pit123	
S－092	Pit092		S－124	Pit124	
S－093	Pit093		S－125	Pit125	

Tab.9-2　遺構番号対照表（2）

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S−126	Pit126		S−159	Pit159	
S−127	Pit127		S−160	Pit160	
S−128	Pit128		S−161	Pit161	
S−129	Pit129		S−162	Pit162	
S−130	Pit130		S−163	Pit163	
S−131	Pit131		S−164	Pit164	
S−132	Pit132		S−165	Pit165	
S−133	Pit133		S−166	Pit166	
S−134	Pit134		S−167	Pit167	
S−135	Pit135		S−168	Pit168	
S−136	Pit136		S−169	Pit169	123.124
S−137	Pit137		S−170		
S−138	Pit138		S−171		
S−139	Pit139		S−172	SK172	
S−140	Pit140	123.124	S−173	Pit173	
S−141	Pit141		S−174	Pit174	
S−142	Pit142		S−175		
S−143	Pit143		S−176	Pit176	
S−144	Pit144		S−177		
S−145	SK145	82	S−178	Pit178	
S−146	Pit146		S−179		
S−147	Pit147		S−180	Pit180	
S−148	Pit148		S−181	Pit181	123.124
S−149	Pit149		S−182	Pit182	
S−150	Pit150		S−183	SK183	
S−151	Pit151		S−184	Pit184	
S−152			S−185	Pit185	
S−153	SK153	83	S−186	Pit186	
S−154	SX154		S−187	Pit187	
S−155	Pit155		S−188	Pit188	
S−156	Pit156		S−189	Pit189	
S−157	Pit157		S−190		
S−158	Pit158		S−191	Pit191	

Tab.9-3　遺構番号対照表（3）

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S−192	Pit192		S−223	SK223	89〜95
S−193	Pit193	123･124	S−224	SK224	95･96
S−194	Pit194		S−225	SK225	96
S−195	Pit195		S−226	SK226	96･97
S−196	Pit196		S−227	SK227	98
S−197	Pit197		S−228	SK228	98･99
S−198	Pit198	124･125	S−229	SX229	
S−199	Pit199		S−230	SE230	
S−200	Pit200	85･86	S−231	SE231	
S−201	Pit201		S−232	SK232	99〜101
S−202			S−233	SC233	
S−203	Pit203		S−234	Pit234	
S−204	Pit204	124･125	S−235	Pit235	125･126
S−205	Pit205		S−236	Pit236	
S−206	Pit206		S−237	SX237	
S−207	Pit207		S−238	Pit238	
S−208	SE208		S−239	Pit239	
S−209	SX209		S−240		
S−210	SE210	35〜38	S−241	Pit241	
S−211	SK211	83･84	S−242	Pit242	
S−212			S−243	Pit243	
S−213	SX213		S−244		
S−214	SE214		S−245		
S−215	SK215	84〜87	S−246	Pit246	
S−216	Pit216		S−247	Pit247	
S−217	Pit217		S−248	Pit248	
S−218	SD218		S−249	Pit249	
S−219			S−250		
S−220	SK220	88･89	S−251	SE251	
S−221	Pit221	124.125	S−252	SE252	
S−222	Pit222		S−253	SK253	101〜104

Tab.9-4　遺構番号対照表（4）

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S−254	SE254		S−286	Pit286	
S−255	SK255	105	S−287	Pit287	
S−256	SK256	105	S−288	Pit288	
S−257	SK257	105·106	S−289	Pit289	
S−258	SK258	107	S−290	Pit290	
S−259	SK259	107·108	S−291	Pit291	
S−260	Pit260	125·126	S−292	Pit292	
S−261	Pit261		S−293	Pit293	
S−262	Pit262		S−294	Pit294	
S−263	Pit263		S−295	Pit295	125·126
S−264	Pit264		S−296	Pit296	
S−265	Pit265		S−297	Pit297	
S−266	Pit266		S−298	SK298	108〜113
S−267	Pit267		S−299	Pit299	
S−268	Pit268		S−300	Pit300	
S−269	Pit269		S−301	Pit301	
S−270	Pit270		S−302	Pit302	
S−271	Pit271		S−303	SK303	
S−272	Pit272		S−304	Pit304	
S−273	Pit273		S−305	Pit305	
S−274	Pit274		S−306	Pit306	125·126
S−275	Pit275		S−307	Pit307	
S−276	Pit276		S−308	Pit308	
S−277	Pit277		S−309	Pit309	
S−278	Pit278		S−310	Pit310	
S−279	Pit279		S−311	Pit311	
S−280	Pit281		S−312	Pit312	
S−281	Pit280		S−313	Pit313	
S−282	Pit282		S−314	Pit314	
S−283	Pit283		S−315	Pit315	
S−284	Pit284		S−316	Pit316	
S−285	Pit285		S−317	Pit317	

Tab.9-5　遺構番号対照表（5）

S番号	遺構名	本書掲載頁	S番号	遺構名	本書掲載頁
S−318			S−351	SK351	
S−319	Pit319		S−352	Pit352	
S−320	Pit320		S−353	Pit353	
S−321	Pit321		S−354	Pit354	
S−322	Pit322		S−355	Pit355	
S−323	Pit323		S−356	Pit356	
S−324	Pit324		S−357	Pit357	
S−325	Pit325		S−358	SK358	114
S−326			S−359	Pit359	
S−327	Pit327		S−360	SK360	115·116
S−328			S−361	Pit361	
S−329			S−362	Pit362	
S−330	Pit330		S−363	Pit363	
S−331	Pit331		S−364	Pit364	
S−332	Pit332		S−365	Pit365	
S−333	Pit333		S−366	Pit366	
S−334	Pit334		S−367	Pit367	
S−335	Pit335		S−368	Pit368	
S−336	Pit336		S−369	Pit369	
S−337	Pit337		S−370	Pit370	
S−338	Pit338		S−371	Pit371	
S−339	Pit339		S−372	Pit372	
S−340	Pit340		S−373	Pit373	
S−341	Pit341		S−374	Pit374	
S−342	Pit342		S−375	SK375	116
S−343	Pit343		S−376	Pit376	
S−344	Pit344		S−377	Pit377	
S−345	Pit345		S−378	Pit378	
S−346	Pit346		S−379	Pit379	
S−347	Pit347		S−380	Pit380	
S−348	Pit348		S−381	Pit381	
S−349	Pit349		S−382	Pit382	
S−350	Pit350		S−383	Pit383	

Tab.9-6　遺構番号対照表（6）

S番号	遺構名	本書掲載頁
S−384	Pit384	
S−385	Pit385	125.126
S−391	SX391	
S−393	SK393	117
S−394	SK394	117
S−395	SK395	117
S−396	SK396	117
S−398	SI398	64
SF整地層	SF整	
地表	GS	126
攪乱	攪乱	

Tab.9-7　遺構番号対照表（7）

S001

須恵器	坏c、小坏c
土師器	小甕a、中甕a、高坏（脚部片）、大蓋c３、甕片147点、坏c片９点
緑釉陶器	小片１点
青白磁	壷？（小片１点）
製塩土器	小片（II類）１点
平瓦	小片３点
灰釉陶器	K90・1点

S-001　上層

緑釉陶器	坏（or皿）１点、坏１点
越州窯系青磁	小片１点

S-002

須恵器	蓋c１点、壷片３点、甕片７点、細片19点
土師器	高坏b（脚部）１点、細片106点
龍泉窯系青磁	小片１点

S-005

須恵器	壷片６点、甕片76点、坏c片10点、細片33点
土師器	坏a１点、坏c１点、皿a１点、細片226点
緑釉陶器	小片１点（431）

S-006

須恵器	細片83点
土師器	皿a１点、細片251点

S-007

須恵器	甕片６点、坏c片１点、蓋片１点、細片34点
土師器	坏d２点、高坏（脚部片）１点、細片240点

S-008

須恵器	坏c２点、椀c１点（パレットに転用）、大皿c１点、壷e２点（同一個体）、壷（底部）片１点、甕片44点、坏片20点、坏c片15点、高坏片4点、蓋片27点、細片101点
土師器	坏a１点、坏d1点、甕a1点、甕片101点、蓋片13点、坏（or皿）片28点、坏c片６点、高坏片２点、細片488点

S-009

須恵器	坏c１点、細片4点
土師器	高坏（脚部片）１点、細片41点

S-010

須恵器	坏c3点、細片35点
土師器	小甕a1点、細片24点

S-011

須恵器	細片5点
土師器	小甕a（小片）1点、細片28点

S-012 裏込め

須恵器	甕（小片）27点、細片10点
土師器	甕（小片）75点、坏c（高台部）８点、細片151点
黒色土器	A類細片59点、B類細片８点
瓦器	細片10点
緑釉陶器	小片１点（432）

S-013

土師器	細片（甕？）３点

S-014

土師質土器	（鉢？口縁部）１点

Tab.10-1　遺構別出土遺物一覧表（1）

S-015

須恵器	細片１点

S-016

土師器	細片４点

S-018

須恵器	細片６点
土師器	細片１７点
平瓦	小片１点

S-019

土師器	高坏（脚部）１点

S-020

須恵器	細片４点
土師器	細片（小甕a?）３点

S-021

土師器	細片１点
平瓦	小片１点

S-022

須恵器	小坏a１点、皿a1点、坏c（小片）１点、細片63点
土師器	坏d４（内１点は灯明器）２点、皿a４点、坏c（小片）３点、高坏（小片）１点、細片338点
平瓦	小片１点

S-023

須恵器	坏a２点、坏c４点、蓋c31点、鉢b（小片）１点、壷（片）１点、高坏（脚部）１点、壷（小片）15点、甕（小片）70点、坏c（小片）14点、細片83点
土師器	蓋２点、蓋b31点、坏a５点、皿a３点、坏c９点、小壷１点、甕（小片）202点、高坏（脚部）１点、小甕1点、碗Ｉ－６（Ⅶ～Ⅸ期）１点、細片540点（内２点は灯明器）
黒色土器	Ａ類（Ｉ－２）１点、細片11点
緑釉陶器	坏１点、坏１点、小片１点
越州窯系青磁	小片１点
平瓦	小片6点
粘土塊	4点
製塩土器	小片１点

S-024

須恵器	蓋１点、坏c１点、細片31点
土師器	細片46点
粘土塊	1点

S-025

須恵器	細片19点
土師器	細片55点
越州窯系青磁	碗Ｉ類（小片）１点
平瓦	小片７点
炭化材	
粘土塊	５点

S-026

須恵器	蓋c32点、坏c２点、坏a２点、甕(小片)181点、坏（小片）111点、坏c（小片）42点、蓋（小片）８点、壷（小片）11点、細片251点
土師器	椀（Ｉ－６）１点、蓋（撮み部）５点、高坏（脚部）１点、甕（小片）119点、坏c（高台部）17点、細片2043点
瓦器	椀（小片）31点、椀（高台部）５点、細片109点
緑釉陶器	坏？１点、小片２点、坏(or皿）１点
灰釉陶器	椀１点
白磁	碗Ⅱ—１（or３)類１点、碗Ⅳ—１類（高台部）３点、

Tab.10-2　遺構別出土遺物一覧表（2）

	碗Ⅳ—2類１点、碗Ⅴ—2a類（口縁部）１点、碗Ⅴ類（高台部）２点、碗ＸⅡ—1b類１点、皿Ⅱ—1a類２点、皿Ⅴ—２a１点、小片58点
龍泉窯系青磁	壷（口縁部）、小片4点
滑石製石鍋	小片（底部）１点
平瓦	小片16点
丸瓦	小片１点
瓦	細片13点
製塩土器	小片１点
陶器	小片１点

S-026下層

須恵器	甕（小片）19点、壷（小片８点)、細片28点
土師器	皿a１点、細片113点
瓦器	椀（小片）４点
白磁	碗Ⅳ—１a類（高台部）２点、小片２点
平瓦	小片６点
丸瓦	小片１点
製塩土器	小片２点

S-026上層

須恵器	坏c１点、細片22点""高坏(脚部）２点、坏c２点、細片56点
白磁	碗Ⅱ—１類？１点
平瓦	小片１点

S-027

須恵器	蓋２点、壷（小片）１点、細片６点
土師器	坏a１点、細片16点

S-028

須恵器	細片16点
土師器	坏c（小片５点)、細片126点

S-029

須恵器	細片11点
土師器	坏a１点、細片36点
製塩土器	小片１点

S-030

須恵器	細片11点
土師器	細片62点

S-031

須恵器	細片２点
土師器	坏a（灯明器）１点、細片７点

S-032

須恵器	細片22点
平瓦	小片44点

S-033

土師器	細片３点
平瓦	小片１点

S-034

黒色土器	B類細片１点

S-035

須恵器	細片１点
土師器	細片１点
黒色土器	A類細片１点

S-036

須恵器	細片１点

S-037

土師器	細片２点

S-038

土師器	細片４点

S-039

土師器	細片５点

S-040

須恵器	細片１点
土師器	細片７点

Tab.10-3　遺構別出土遺物一覧表（3）

S-041

土師器	皿a（小片）１点、細片８点

S-042

土師器	細片２点

S-043

須恵器	蓋（小片）１点
土師器	細片１点

S-044

須恵器	細片２点
土師器	細片14点

S-045

土師器	細片２点

S-046

土師器	細片１点

S-048

土師器	細片２点

S-049

土師器	細片４点

S-050

土師器	細片１点

S-052

須恵器	細片１点

S-053

須恵器	細片３点

S-054

須恵器	細片１点

S-055

土師器	細片２点

S-056

須恵器	細片１点

S-057

須恵器	細片２点

S-058

土師器	細片１点

S-059

須恵器	細片２点

S-060

土師器	細片２点

S-061

土師器	細片１点

S-062

須恵器	細片２点
土師器	細片５点

S-063

土師器	細片２点

S-064

土師器	細片１点

S-065

土師器	細片３点

S-066

須恵器	細片３点
土師器	細片２点

S-067

土師器	細片3点

S-068

須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-069

土師器	細片３点
黒色土器	A類椀（小片）１点

Tab.10-4　遺構別出土遺物一覧表（4）

S-070
土師器	細片３点

S-071
土師器	細片１点

S-072
須恵器	細片１点
土師器	細片20点

S-073
須恵器	蓋（撮み部）１点
土師器	細片３点

S-074
土師器	細片21点

S-075
土師器	細片２点

S-076
須恵器	細片２点
土師器	細片７点

S-078
土師器	細片２点

S-079
土師器	細片１点

S-080
土師器	細片14点

S-081
須恵器	細片１点

S-082
須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-083
土師器	細片１点

S-084
土師器	細片１点

S-085
須恵器	細片２点
土師器	細片７点

S-086
須恵器	細片１点

S-087
須恵器	細片２点

S-088裏込め
須恵器	坏c１点、坏a１点、坏c（小片）21点、蓋（小片）28点、壷（小片）5点、甕（小片）32点、坏（小片）42点、細片70点
土師器	小甕a（小片）1点、坏d31点、甕（小片）117点、坏or皿（小片）85点
平瓦	小片３点
製塩土器	(Ⅲ―２類) 1点、小片24点
粘土塊	14点

S-088上層
須恵器	蓋c34点、壺b１点、坏a１点、坏c１点（硯に転用）、甕（小片）23点、坏c（小片）15点、蓋（小片）21点、壷（小片）9点、高坏（脚部）1点、細片42点
土師器	坏d21点、坏d31点、甕（小片）73点、坏or皿（小片）45点、細片62点
製塩土器	小片15点

S-088下層
須恵器	皿a１点、坏a２点、坏c（パレットに転用）１点、高坏１点、甕（小片）10点、蓋（小片）10点、坏c（小片）

Tab.10-5　遺構別出土遺物一覧表（5）

7点、坏or皿（小片）４点、壷（小片）４点、高坏b（小片）２点、細片30点

土師器　坏a１点、皿a１点、小皿a１点、高坏b（脚部）１点、小甕a１点、鉢１点、蓋（小片）11点、甕（小片）56点、細片16点

平瓦　４点

製塩土器　(Ⅲ―２類）２点、小片５点

粘土塊　２点

S-089

須恵器　坏c１点、細片14点

土師器　坏a１点、甕（小片）44点、細片59点

粘土塊　６点

S-090

須恵器　細片７点（内柱痕より４点）

土師器　細片11点（内柱痕より２点）

平瓦　小片１点

S-091

須恵器　細片６点

土師器　細片14点

平瓦　小片１点

S-092

須恵器　細片11点

土師器　細片1点

S-093

須恵器　細片６点

土師器　細片15点

平瓦　小片１点

S-094

須恵器　鉢（小片）１点、細片４点

土師器　細片12点

S-095

須恵器　細片２点

土師器　細片８点

S-096

須恵器　細片４点

土師器　細片21点

S-097

須恵器　細片６点

土師器　細片19点

S-098

須恵器　細片27点

土師器　細片29点

黒色土器　A類細片１点

S-099

須恵器　壷（長頚壷）１点、壷b１点、高坏a１点、高坏b１点、皿a５点、坏c５点、椀c１点、蓋c３点（内１点は硯に転用）３点、坏a２点、甕a１点、甕（小片）80点、壺a？（小片）２点、坏c（小片）24点、坏or皿（小片）106点、蓋（小片）41点、細片（内１点は硯に転用）25点

土師器　細片１点

S-100

土師器　細片２点

S-101

須恵器　細片２点

土師器　細片５点

S-102

須恵器　細片１点

S-103

須恵器　細片２点

土師器　細片４点

Tab.10-6　遺構別出土遺物一覧表（6）

S-104
土師器	細片１点

S-105
須恵器	坏c１点、細片６点
土師器	細片３点

S-106
土師器	細片１点

S-107
土師器	細片１点

S-108
土師器	細片１点

S-109
土師器	細片11点

S-110
須恵器	細片４点
土師器	細片11点
黒色土器	A類細片１点

S-111
須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-112
須恵器	細片２点
土師器	細片４点

S-113
須恵器	細片２点
土師器	細片34点

S-114
須恵器	坏c１点、蓋２点、細片13点
土師器	坏c１点、細片37点

S-115
須恵器	細片１点
土師器	細片13点

S-116
土師器	細片２点

S-117
須恵器	甕（小片）16点、坏c３点、細片10点
土師器	細片87点
平瓦	１点
粘土塊	２点
炭化材	１点

S-118
土師器	細片１点

S-119
須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-120
土師器	細片４点

S-121
須恵器	細片２点
土師器	細片８点
平瓦	１点

S-122
土師器	細片１点

S-123
須恵器	細片１点
土師器	細片５点

S-124
須恵器	細片１点
土師器	細片４点

S-125
須恵器	坏a（小片）１点
土師器	細片１点

S-126
土師器	細片５点

Tab.10-7　遺構別出土遺物一覧表（7）

S-127
土師器　　細片２点

S-128
須恵器　　細片１点
土師器　　細片３点

S-129
土師器　　細片５点

S-130
須恵器　　坏c（小片）１点

S-131
土師器　　細片２点

S-132
土師器　　細片２点

S-133
須恵器　　細片１点
土師器　　細片20点

S-134
須恵器　　細片１点

S-135
須恵器　　細片３点
土師器　　細片12点

S-136
須恵器　　細片１点
土師器　　細片１点

S-137
須恵器　　甕（小片）１点

S-138
須恵器　　細片２点

S-139
土師器　　細片２点

S-140
土師器　　細片４点

S-141
須恵器　　細片４点
土師器　　細片11点
白磁　　小片１点

S-142
須恵器　　細片１点

S-143
須恵器　　細片５点
土師器　　細片13点

S-144
須恵器　　細片１点
土師器　　細片２点

S-145
須恵器　　蓋（小片）１点、横瓶（小片）１点、細片２点
土師器　　細片９点

S-146
須恵器　　甕（小片）１点、細片１点
土師器　　細片４点

S-147
土師器　　細片２点

S-148
土師器　　細片７点

S-149
須恵器　　細片１点
土師器　　細片11点

S-150
須恵器　　細片３点
土師器　　細片４点

Tab.10-8　遺構別出土遺物一覧表（8）

S-151

須恵器　細片１点
土師器　細片３点

S-152

須恵器　細片２点
土師器　細片５点

S-153

須恵器　甕（小片）１点、蓋（小片）１点、坏c（小片）１点、細片21点
土師器　坏c（高台）９点、細片87点
黒色土器　A類細片16点、Ｂ類細片２点
平瓦　小片１点
粘土塊　３点

S-154

須恵器　細片７点
土師器　細片29点

S-155

須恵器　細片１点
土師器　細片８点

S-156

須恵器　細片２点

S-157

須恵器　細片１点
土師器　細片３点

S-158

須恵器　坏ｃ１点、蓋（小片）２点
土師器　細片10点

S-159

須恵器　細片２点
土師器　細片３点

S-160

須恵器　細片２点
土師器　細片11点

S-161

土師器　細片２点

S-162

須恵器　細片１点

S-163

須恵器　細片３点
土師器　細片４点

S-164

土師器　細片１点

S-165

須恵器　細片１点
土師器　細片３点
平瓦　小片１点

S-166

土師器　細片１点

S-167

須恵器　細片４点
土師器　細片10点

S-168

土師器　細片７点

S-169

須恵器　細片３点
土師器　細片19点

S-170

須恵器　細片２点
土師器　細片24点

S-171

須恵器　細片１点
土師器　細片15点

Tab.10-9　遺構別出土遺物一覧表（9）

S-172

須恵器　細片７点
土師器　細片58点

S-173

土師器　細片13点

S-174

須恵器　蓋c（小片）１点
土師器　細片１点

S-175

須恵器　細片２点
土師器　細片３点

S-176

須恵器　細片２点
土師器　細片９点

S-177

須恵器　細片３点
土師器　細片20点

S-178

須恵器　細片２点
土師器　細片１点

S-179

須恵器　細片３点
土師器　細片９点

S-180

須恵器　細片３点
土師器　細片５点

S-182

須恵器　細片１点

S-183

須恵器　細片11点
土師器　細片19点

S-184

須恵器　細片１点
土師器　細片１点

S-185

須恵器　細片５点
土師器　細片14点

S-186

土師器　細片１点

S-187

須恵器　細片１点

S-188

須恵器　細片３点
土師器　細片10点

S-189

須恵器　細片１点
土師器　細片４点

S-190

土師器　細片４点

S-191

土師器　細片１点

S-192

土師器　細片１点

S-193

須恵器　細片１点
土師器　細片７点

S-194

須恵器　甕（小片）１点

S-195

須恵器　坏c（小片）１点
土師器　細片１点

Tab.10-10　遺構別出土遺物一覧表（10）

S-196

須恵器	細片２点
土師器	細片１点

S-197

須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-198

須恵器	細片10点
土師器	細片20点

S-199

須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-200

須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-201

土師器	細片２点

S-203

土師器	細片12点

S-204

須恵器	細片３点
土師器	細片16点

S-205

須恵器	細片２点
土師器	細片１点

S-206

土師器	細片７点

S-207

須恵器	細片１点
土師器	細片７点

S-208

須恵器	坏ｃ（小片）29点、蓋（小片）26点、甕（小片）186点、細片125点
土師器	坏a（内２点は灯明器、１点は３ヶ所に穿孔）５点、皿a３点、鉢１点、蓋a（小片）１点、椀（小片）１点、坏c（小片）16点、甕（小片）380点、坏（小片）285点、高坏（小片）１点、椀（１－７類）１点、椀（１－５類）１点
黒色土器	A類椀（１－１類）１点、椀（１－５類？）５点、椀（高台）５点、細片12点
緑釉陶器	坏１点（猿投産k-90-2）、段皿１点、（猿投産k-90-2）、坏１点
灰釉陶器	坏１点（k-90-2併行期）
白磁	碗１類（小片）１点
平瓦	３点、小片24点
製塩土器	小片38点

S-208上層

須恵器	坏c（小片）６点、甕（小片）40点、壺（小片）12点、細片27点
土師器	椀（１－６類？）５点、甕（小片）50点、細片225点
黒色土器	A類細片１点

S-208下層

平瓦	小片４点
製塩土器	小片２点

S-209

須恵器	細片24点
土師器	高坏b（脚部）１点、甕（小片）33点、細片54点
黒色土器	A類細片３点
平瓦	小片３点

Tab.10-11　遺構別出土遺物一覧表（11）

S-210

須恵器	蓋c3 ３点、坏a１点、坏c１点、鉢１点、枡状製品１点、甕（小片）70点、壷（小片）８点、蓋（小片）13点、皿（小片）64点、坏c（小片）８点、細片12点
土師器	皿a６点、小坏a１点、蓋b31点、大坏c１点、片口鉢１点、甕（小片）82点、細片172点
黒色土器	A類細片１点
緑釉陶器	皿１点（洛北産、印刻あり）、坏１点（猿投産？白磁１類模倣）、坏（or皿）１点
長沙窯系黄釉褐彩陶器	水注１点
平瓦	８点、小片19点
製塩土器	小片９点

S-210裏込め

須恵器	円面硯（脚部）１点、坏c（小片）２点、蓋（小片）１点、細片48点
土師器	高坏（脚部）２点、細片68点
平瓦	小片２点
製塩土器	小片６点

S-210最終埋没土

須恵器	蓋（小片）17点、坏c14点、甕（小片）18点、壷（小片）10点、細片78点
土師器	細片102点
製塩土器	小片８点

S-211

須恵器	甕（小片）25点、細片40点
土師器	細片148点

S-212

須恵器	細片２点
土師器	細片３点

S-213

須恵器	坏c(小片）１点、蓋（小片）１点、細片５点
土師器	細片23点

S-214

須恵器	甕（小片）32点、細片26点
土師器	丸底坏a１点、細片133点
黒色土器	A類細片１点
緑釉陶器	坏１点、壷？１点
越州窯系青磁	碗Ｉ－２類１点
長沙窯系黄釉褐彩陶器	水注１点
平瓦	５点、小片７点
丸瓦	２点

S-214上層

須恵器	甕（小片）20点、坏e（小片）２点
土師器	細片36点
平瓦	小片７点
粘土塊	１点

S-214下層

須恵器	甕（小片）８点、細片13点
土師器	細片29点
平瓦	小片12点

S-215

須恵器	甕（小片）44点、壷（小片）15点、坏or皿65点、蓋（小片）28点、坏c（小片）15点、細片48点
土師器	坏c（小片）11点、甕（小片）139点、高坏（脚部）３点、蓋（小片）22点、細片458点
黒色土器	A類細片４点
緑釉陶器	壷？１点（釉が厚い、体部片）
越州窯系青磁	小片１点
平瓦	小片２点
製塩土器	小片５点

Tab.10-12　遺構別出土遺物一覧表（12）

S-216

須恵器	細片12点
土師器	細片11点

S-217

須恵器	高坏（脚部）１点、蓋（小片）１点、細片21点
土師器	細片67点
粘土塊	２点
製塩土器	小片４点

S-218

須恵器	細片19点
土師器	細片65点

S-219

須恵器	細片３点
土師器	細片６点

S-220

須恵器	甕（小片）10点、蓋（小片）１点、細片38点
土師器	細片192点
軒丸瓦	１点

S-221

須恵器	細片５点
土師器	細片32点

S-222

土師器	細片４点

S-223

須恵器	蓋（小片）78点、壺（小片）７点、坏c（小片）24点、甕（小片）43点、細片175点
土師器	甕（小片）763点、高坏（小片）４点、坏c（小片）１点、蓋（小片）１点、細片311点
黒色土器	Ａ類細片２点
平瓦	小片７点
粘土塊	19点
製塩土器	小片19点

S-224

須恵器	蓋１点、細片13点
土師器	蓋、細片45点
粘土塊	４点

S-225

須恵器	細片９点
土師器	細片49点
黒色土器	A類細片３点
平瓦	小片１点
粘土塊	５点

S-226

須恵器	円面硯、細片38点
土師器	細片143点

S-227

須恵器	細片４点
土師器	細片54点

S-228

須恵器	細片11点
土師器	細片35点

S-229

須恵器	甕（小片）30点、壷（小片）11点、高坏（小片）４点、細片49点
土師器	鉢？２点、細片222点
黒色土器	A類細片２点

S-230

須恵器	転用硯１点
土師器	坏c（小片）10点、椀c（小片）79点、甕or壷（小片）217点、細片481点
黒色土器	A類細片94点、B類細片19点
瓦器	細片11点
緑釉陶器	椀１点（k-14-2後半、硯に転用）、坏１点（洛北産）、

Tab.10-13　遺構別出土遺物一覧表（13）

	坏２点（洛西産）、壷？１点、段皿１点、小片５点
越州窯系青磁	碗Ⅰ－１a類２点、碗Ⅰ－５類１点、碗Ⅱ－２類４点、碗Ⅱ－２a類１点、碗Ⅲ－１b類１点、合子（受部）１点、水注？（底部）１点、香炉（底部）１点、小片15点
白磁	碗Ⅱ－１類（底部）２点、碗Ⅳ－１a(底部)３点、碗・類４点、碗Ⅴ－４a（orⅧ）類（口縁部）１点
滑石製石鍋	小片７点
平瓦	小片69点
丸瓦	小片３点
不明土製品（移動式竈？）	１点
製塩土器	小片９点

S-230裏込め

須恵器	蓋（小片）29点、坏（小片）71点、坏（底部）53点、甕or壺（小片）503点、細片78点
土師器	細片130点
黒色土器	A類細片14点、B類細片１点
平瓦	小片７点
丸瓦	小片１点

S-230泥炭土

須恵器	細片13点
土師器	細片28点
越州窯系青磁	小片３点

S-230最終埋没土

須恵器	坏c1点、高坏（高台部）１点、細片138点
土師器	椀（高台部）１点、細片81点
越州窯系青磁	碗Ⅰ－２bウ’類１点、碗Ⅰ－５類１点、碗Ⅱ－２類１点
平瓦	小片13点
丸瓦	小片2点
製塩土器	小片１点
不明土製品（移動式竈？）	１点

S-231

須恵器	細片１点
土師器	細片１点

S-232

須恵器	坏c２点、蓋４点、坏a１点、高坏（坏部）１点、細片209点
土師器	坏a１点、皿a４点、蓋２点、坏c１点、細片553点
黒色土器	A類細片３点
瓦器	細片１点
滑石製石鍋	小片１点
平瓦	小片５点
製塩土器	小片73点

S-233

須恵器	蓋（小片）１点、細片５点
土師器	細片11点（うち竈から２点）

S-234

須恵器	細片７点
土師器	細片35点

S-235

須恵器	蓋c31点
土師器	細片３点

S-236

須恵器	蓋（小片）１点
土師器	細片１点

S-237

須恵器	壺蓋（小片）１点、細片60点
土師器	坏d１点、高坏（脚部）１点、細片33点
粘土塊	２点
製塩土器	小片２点

S-238

土師器	細片２点

Tab.10-14　遺構別出土遺物一覧表（14）

S-239
土師器	細片8点

S-240
須恵器	細片４点
土師器	皿a１点、細片７点
製塩土器	小片２点

S-241
須恵器	細片４点
土師器	細片14点
製塩土器	小片３点

S-242
須恵器	細片１点
土師器	細片２点
製塩土器	小片２点

S-243
須恵器	坏c（小片）２点、細片２点
土師器	細片６点

S-244
土師器	細片２点

S-245
須恵器	細片１点
土師器	細片15点

S-246
須恵器	坏a１点、細片１点
土師器	細片10点

S-247
須恵器	蓋（小片）１点、坏c（高台部）２点、細片10点
土師器	細片31点
粘土塊	１点

S-248
土師器	細片９点

S-249
須恵器	細片４点
土師器	細片４点

S-250
須恵器	細片１点
土師器	細片６点

S-251
須恵器	坏c３点、壷（底部）１点、（底部外面に タタキ）、円面硯（脚部）１点、細片1337点（うち器種不明、漆付着１点）
土師器	碗c（高台部）３点、壷b１点、細片1711点（うち器種不明の漆付着片１点）
黒色土器	A類椀（高台部）１点、細片22点、B類椀（高台部）１点、細片４点
緑釉陶器	坏１点（防長産古期）、坏（or皿）１点（洛北産）、坏１点（洛西産）、小片７点
白磁	椀Ⅴ（orⅩⅠ）類２点、小片４点
平瓦	小片66点
製塩土器	小片11点

S-252
須恵器	坏c（高台部）7点、蓋（小片）11点、細片93点
土師器	坏d １点、高坏（脚部）１点、細片252点
黒色土器	A類椀（高台部）２点、皿（小片）１点、細片21点、B類細片１点
越州窯系青磁	椀Ⅰ－１a類１点、小片２点
白磁	小片３点
平瓦	小片１点
丸瓦	小片６点
製塩土器	小片３点

Tab.10-15　遺構別出土遺物一覧表（15）

S-252裏込め

須恵器	坏a（小片）１点、坏c（小片）２点、蓋（小片）４点、短頚壺１点、細片50点
土師器	細片85点
平瓦	小片１点
製塩土器	小片１点

S-252最終埋没土

須恵器	皿a１点、坏c１点、細片411点
土師器	坏a２点、坏d１点、椀c１点、蓋（小片）１点、細片246点
白磁	碗Ｖ―１（or３）類（口縁部）１点
平瓦	小片２点
製塩土器	小片14点

S-253

須恵器	甕（口縁部）１点、蓋b１点、坏c（高台部）１点、高坏（脚部）１点、小壷１点、細片１点（器種不明、漆付着）
土師器	蓋b２点、坏a１点、碗c１点、細片977点
黒色土器	A類椀１点、細片20点
緑釉陶器	皿１点（洛西産）、坏９点（洛西産）、香炉蓋（k-90前半）、椀、小片5点、（猿投産k-90、２点、防長産１点）
越州窯系青磁	碗Ｉ―１b類１点、碗Ｉ－２aア類１点、碗Ｉ類（体部）１点、大碗Ｉ―２bウ類１点、香炉蓋２点、小片２点
長沙窯系黄釉喝彩陶器	水注１点
陶器	１点【河南産北宋期？】
平瓦	小片51点
製塩土器	小片２点

S-254

須恵器	坏c（高台部）２点、蓋c１点、細片76点
土師器	丸底坏２点、細片133点
黒色土器	A類細片12点、Ｂ類椀（高台部）１点、細片12点
緑釉陶器	碗（k-90後半）、瓶（k-90前半）、耳皿
越州窯系青磁	碗Ｉ―１a類１点、水注（把手部）１点、小片２点
白磁	小片２点
滑石製石鍋	小片１点
平瓦	小片22点（うち文字瓦「佐」１点）
製塩土器	小片１点
粘土塊	２点

S-255

須恵器	壷１点、細片１４点
土師器	細片27点
黒色土器	A類椀（高台部）１点、細片３点
平瓦	小片３点
丸瓦	小片１点

S-256

須恵器	坏c（高台部）１点、蓋（小片）１点、細片37点
土師器	細片56点
黒色土器	A類細片２点
越州窯系青磁	小片１点

S-257

須恵器	坏c(高台部）１点、皿a（小片）１点、壷１点、甕（小片）１点
土師器	細片87点
黒色土器	A類椀１点、細片２点
平瓦	小片６点
製塩土器	小片１点

S-258

須恵器	蓋（小片）４点、細片22点
土師器	大皿a１点、皿a１点、細片58点
製塩土器	小片３点

Tab.10-16　遺構別出土遺物一覧表（16）

S-259

須恵器	蓋２点、壷蓋１点、坏a１点、長頚壷（小片）２点、細片56点
土師器	細片105点
平瓦	小片１点
製塩土器	小片１点

S-260

須恵器	細片５点
土師器	坏a１点、細片37点

S-261

土師器	細片２点

S-262

須恵器	細片１点
土師器	細片１点

S-263

須恵器	細片１点
土師器	細片９点

S-264

土師器	細片２点

S-265

須恵器	細片１点
黒色土器	A類細片５点

S-266

土師器	細片２点

S-267

土師器	細片２点

S-268

須恵器	蓋（小片）１点、細片５点
土師器	細片17点
黒色土器	A類細片１点

S-269

須恵器	細片１点
土師器	細片３点
黒色土器	A類細片１点

S-270

土師器	細片１点

S-271

土師器	細片６点

S-272

土師器	細片２点

S-273

須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-274

土師器	細片１点

S-275

土師器	細片１点

S-276

須恵器	蓋（小片）１点、高坏（脚部）１点、細片３点
土師器	細片８点
平瓦	小片１点

S-277

須恵器	細片３点
土師器	細片17点
越州窯系青磁	小片１点

S-278

須恵器	蓋（小片）１点、細片１点

S-279

土師器	細片１点

S-280

土師器	細片１点

Tab.10-17　遺構別出土遺物一覧表（17）

S-281
土師器　細片２点

S-282
土師器　細片９点

S-283
土師器　細片５点

S-284
土師器　高坏（小片）１点、細片２点

S-285
須恵器　細片３点
土師器　細片20点
瓦器　椀（小片）１点

S-286
須恵器　細片２点
土師器　皿a（小片）１点（朱塗り？）、細片12点

S-287
須恵器　細片５点

S-288
須恵器　細片１点
土師器　細片１点

S-289
土師器　細片５点

S-290
土師器　坏d１点、細片28点

S-291
須恵器　蓋（小片）１点、細片１点
土師器　細片１点

S-292
平瓦　小片１点

S-293
須恵器　細片８点
土師器　細片１点

S-294
土師器　細片９点

S-295
須恵器　細片１点
土師器　細片３点

S-296
土師器　細片１点

S-297
土師器　坏a１点、細片１点

S-298
須恵器　坏a４点、坏c４点、坏d１点、蓋a３点、蓋c６点（うち５点は硯に転用）、壷蓋１点（天井部に穿孔）、皿a１点、高坏１点、壷or甕（小片）114点、細片151点
土師器　蓋２点、高坏（脚部）２点、皿a１点、皿c１点、坏a１点（うち１点は灯明器）、坏d６点、甕or壷（小片）383点、高坏（小片）14点、蓋（小片）36点、坏（小片）402点
平瓦　小片５点
製塩土器　Ⅰ類（小片）55点、Ⅱ類（小片）77点

S-299
瓦器　細片１点

S-300
土師器　細片２点

S-301
須恵器　細片３点

Tab.10-18　遺構別出土遺物一覧表（18）

土師器	細片24点
製塩土器	小片１点

S-302

須恵器	細片２点
土師器	細片10点

S-303

須恵器	蓋（小片）１点、細片４点

S-304

土師器	甕（口縁部）１点

S-305

土師器	細片２点

S-306

須恵器	蓋（小片）１点、細片１点
土師器	皿a（小片）１点、細片10点

S-307

須恵器	細片６点
土師器	細片７点

S-308

須恵器	坏c（高台部）１点、蓋（小片）２点、細片４点
土師器	細片２点

S-309

須恵器	坏c（高台部）１点
土師器	甕（小片）１点（豊後系）

S-310

須恵器	細片１点
土師器	細片５点

S-311

須恵器	細片３点
土師器	細片３点

S-312

須恵器	坏c（高台部）１点、細片２点
土師器	細片３点

S-313

須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-314

須恵器	細片１点
土師器	細片６点

S-315

須恵器	細片２点
土師器	細片１点

S-316

須恵器	細片１点
土師器	細片１点

S-317

須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-318

須恵器	蓋（小片）１点

S-319

土師器	細片６点

S-320

土師器	細片６点

S-321

須恵器	坏c（高台部）１点、細片４点
土師器	細片９点

S-322

須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-323

須恵器	細片１点

Tab.10-19　遺構別出土遺物一覧表（19）

S-324

須恵器	細片１点
土師器	細片３点

S-325

須恵器	壷（口縁部）１点、細片２点
土師器	細片２点

S-326

土師器	細片１点

S-327

土師器	細片６点

S-328

土師器	細片３点

S-329

土師器	細片２点

S-330

土師器	細片７点

S-331

須恵器	細片１点

S-332

土師器	坏（小片）１点

S-333

土師器	細片６点

S-334

土師器	細片１点

S-335

須恵器	坏c（高台部）２点、細片４点
土師器	細片４点

S-336

土師器	細片１点
須恵器	細片１点
土師器	細片９点

S-338

須恵器	細片５点
土師器	細片16点

S-339

土師器	細片１点

S-340

須恵器	細片２点

S-341

須恵器	細片２点

S-342

須恵器	細片２点
土師器	細片７点
平瓦	小片１点

S-343

土師器	細片９点

S-344

須恵器	甕（小片）１点、細片１点
土師器	細片１点

S-345

須恵器	細片４点
土師器	細片12点
製塩土器	小片2点

S-346

須恵器	鉢？１点、細片１点
土師器	細片13点

S-347

須恵器	細片１点
土師器	細片２点

S-348

須恵器	蓋c１点、細片４点

Tab.10-20　遺構別出土遺物一覧表（20）

土師器	細片15点

S-349

土師器	細片１点

S-350

須恵器	坏c（高台部）１点

S-351

須恵器	蓋１点、高坏（脚部）１点、細片１点
土師器	細片26点

S-352

須恵器	蓋（小片）１点、坏c（高台部）１点、壷（小片）２点、甕（小片）１点
土師器	細片３点

S-353

須恵器	甕（高台部）１点、壷（小片）１点、蓋（小片）１点

S-354

須恵器	甕（胴部）１点

S-355

須恵器	壷（高台部）６点
土師器	坏c（高台部）１点、甕（小片）９点、細片９点

S-356

土師器	細片５点

S-357

須恵器	細片３点
土師器	細片９点

S-358

須恵器	蓋a１点、蓋（小片）２点、坏c（小片）２点、細片48点
土師器	細片147点
平瓦	小片１点

S-359

土師器	細片１点

S-360

須恵器	坏c１点、坏c（小片）１点、蓋（小片）12点（うち１点は硯に転用）
土師器	蓋（小片）１点薬壷（小片）１点、細片276点
黒色土器	A類細片３点
平瓦	小片２点
製塩土器	小片６点
粘土塊	10点
不明土製品	１点

S-361

土師器	細片２点

S-362

須恵器	坏a１点
土師器	細片11点
粘土塊	２点

S-363

土師器	細片４点

S-364

須恵器	細片１点
土師器	細片10点

S-365

須恵器	細片１点
土師器	坏a１点、坏c（高台部）１点、蓋b１点
平瓦	小片１点

S-366

須恵器	細片１点
土師器	細片１点
製塩土器	小片１点

Tab.10-21　遺構別出土遺物一覧表（21）

S-367

土師器　細片10点
黒色土器　B類細片１点

S-368

須恵器　蓋（撮み部）１点、細片１点

S-369

須恵器　細片１点

S-370

土師器　細片１点

S-371

土師器　細片１点

S-372

須恵器　蓋１点、坏c（高台部）１点、細片５点
土師器　細片４点

S-373

須恵器　坏c（高台部）１点、甕（口縁部）、細片１点
土師器　細片４点

S-374

土師器　細片５点

S-375

須恵器　細片１点
土師器　細片３点

S-376

須恵器　坏c（高台部）１点、細片３点
土師器　甕（把手部）１点、細片13点

S-377

土師器　細片１点

S-378

須恵器　細片１点
土師器　細片２点
白磁　小片１点

S-379

須恵器　細片３点
土師器　細片９点

S-380

須恵器　細片１点
土師器　細片７点

S-381

須恵器　蓋（小片）１点、細片７点
土師器　細片７点

S-382

須恵器　細片１点
土師器　細片１点

S-383

須恵器　細片５点
土師器　細片10点

S-384

土師器　細片１点

S-385

土師器　甕１点、細片18点

SF整地層

須恵器　蓋（撮み部）２点、蓋（小片）３点、坏c（高台部）１点、細片43点
土師器　細片79点

地表

須恵器　長頸壷（頸部欠失）１点、細片41点
土師器　坏a１点、皿a１点、細片229点
黒色土器　A類細片２点
白磁　皿XⅠ－３（or４）類１点
龍泉窯系青磁　碗Ⅰ類（小片）１点

Tab.10-22　遺構別出土遺物一覧表（22）

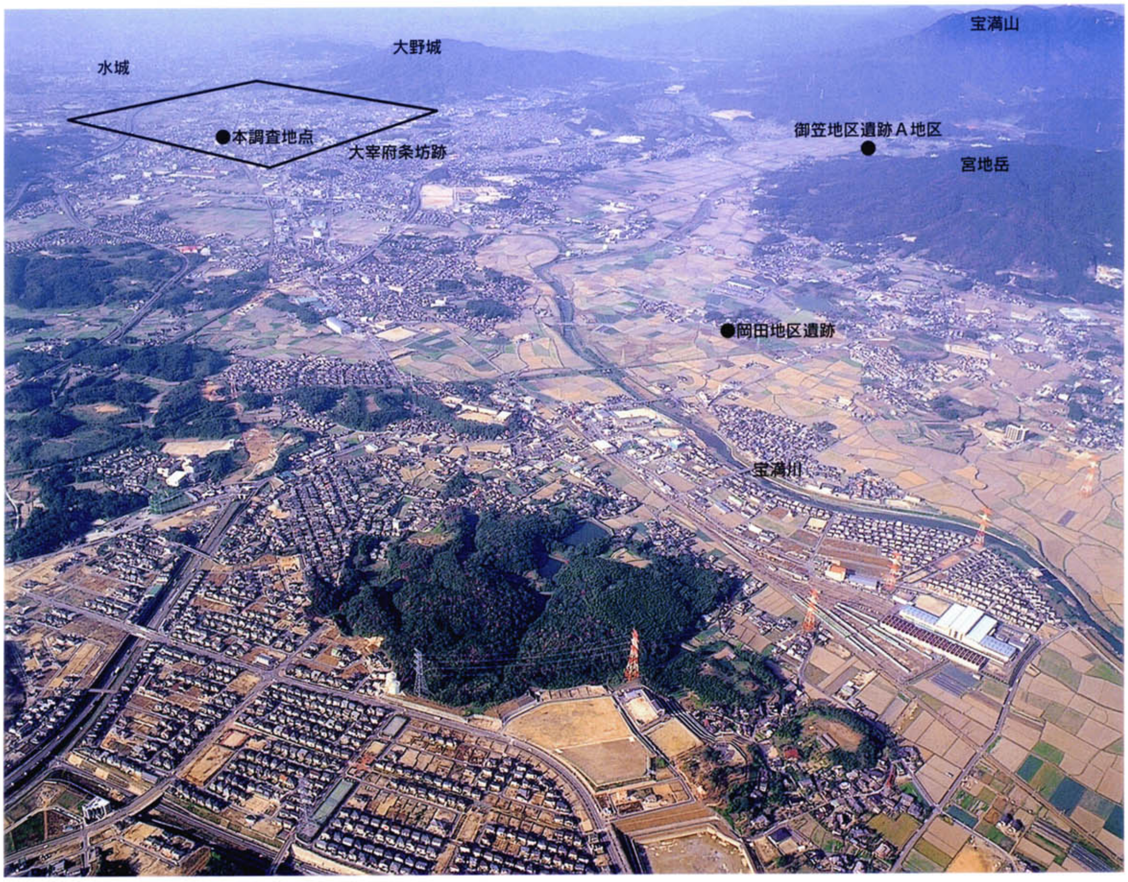
攪乱

須恵器	坏c 1 点、壷（底部） 1 点
白磁	碗Ⅳ類（口縁部） 1 点
青白磁	小片 1 点

Tab.10-23　遺構別出土遺物一覧表（23）

写真図版

(PLATES)

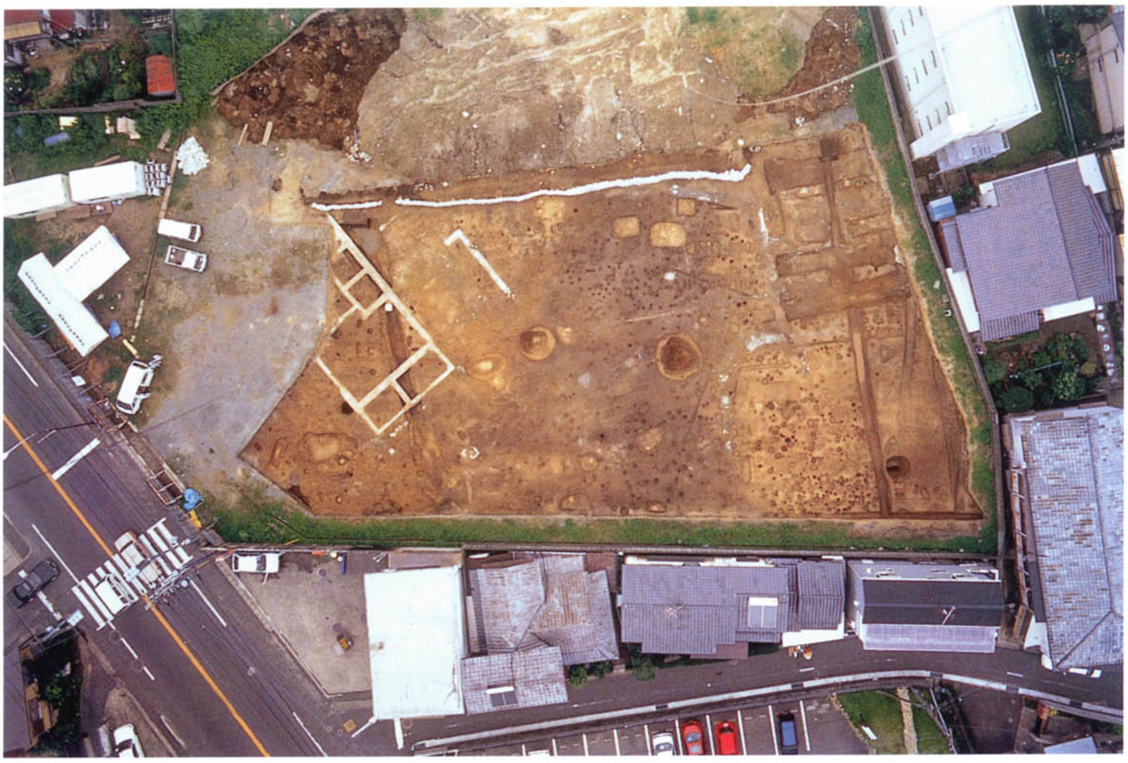


筑紫野市周辺航空写真（南東より）

本調査地点周辺航空写真（南東より）

SD001 周辺斜め写真（南より）

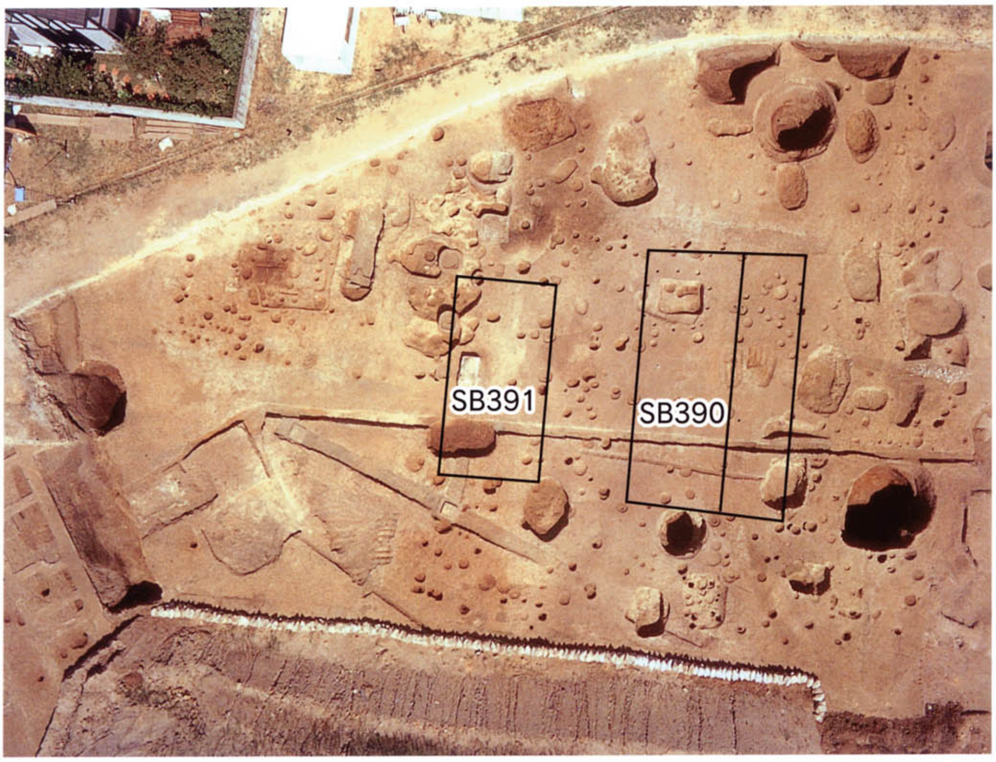
SD001 周辺斜め写真（北より）



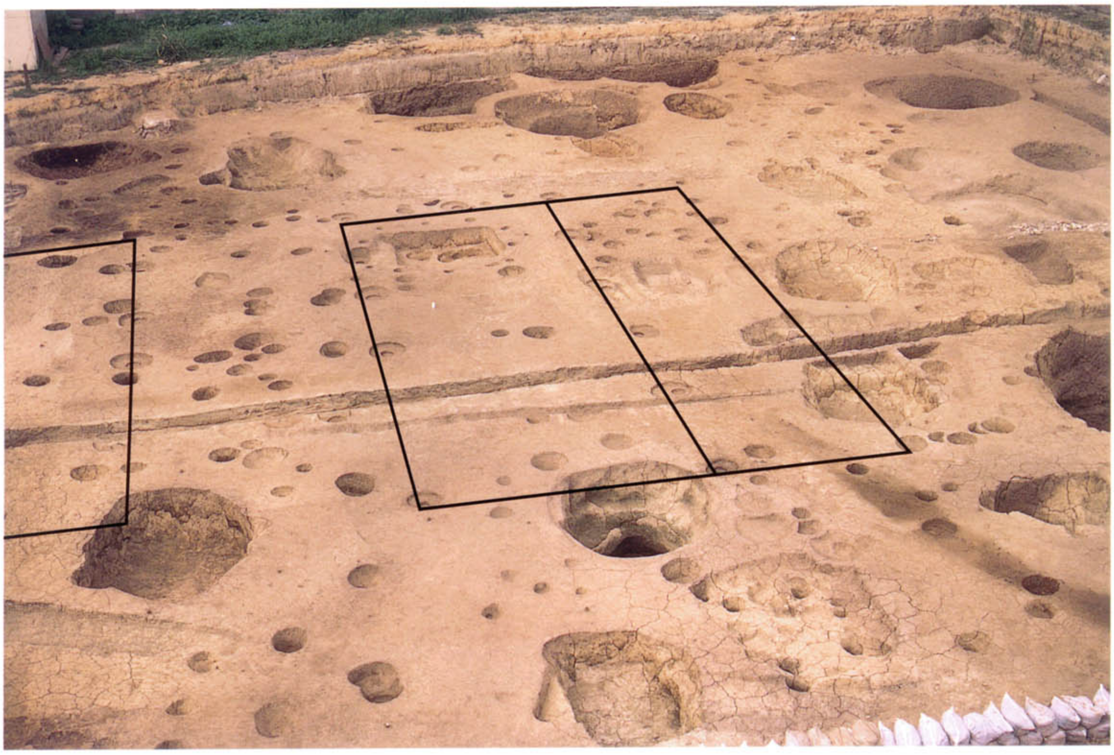
調査区垂直写真（Ⅰ区）

調査区垂直写真（Ⅱ区）

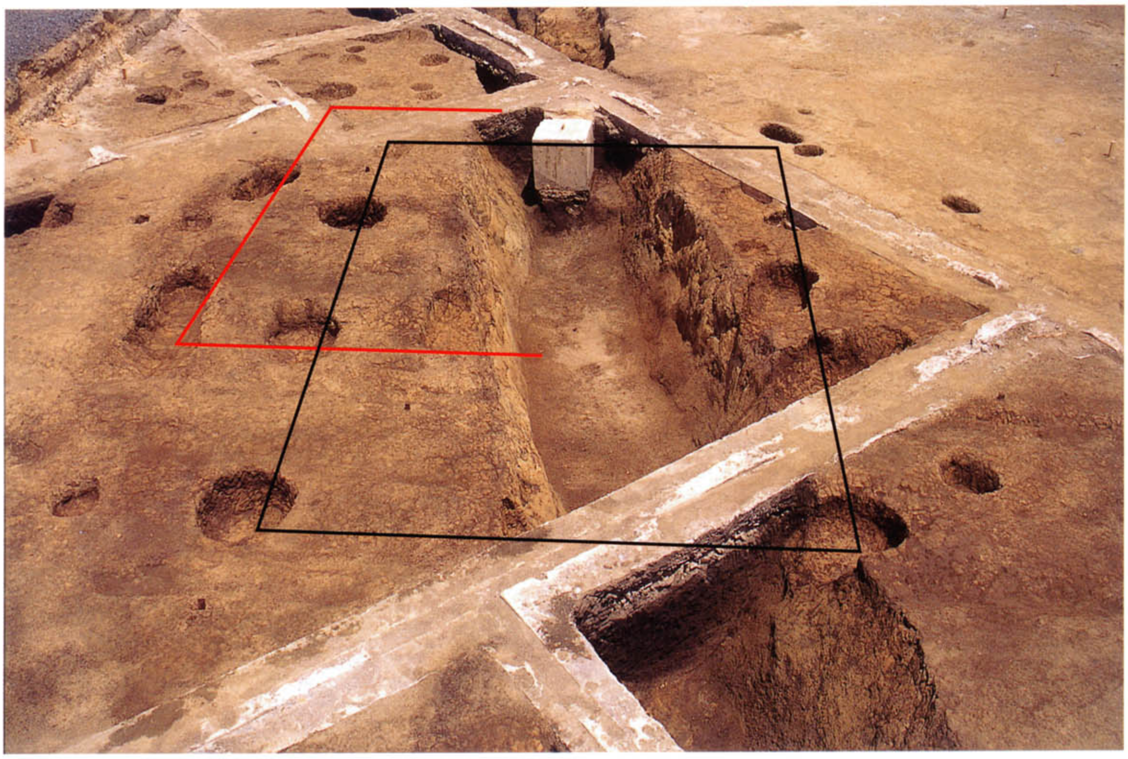
Ⅱ区斜め写真（東方を望む）



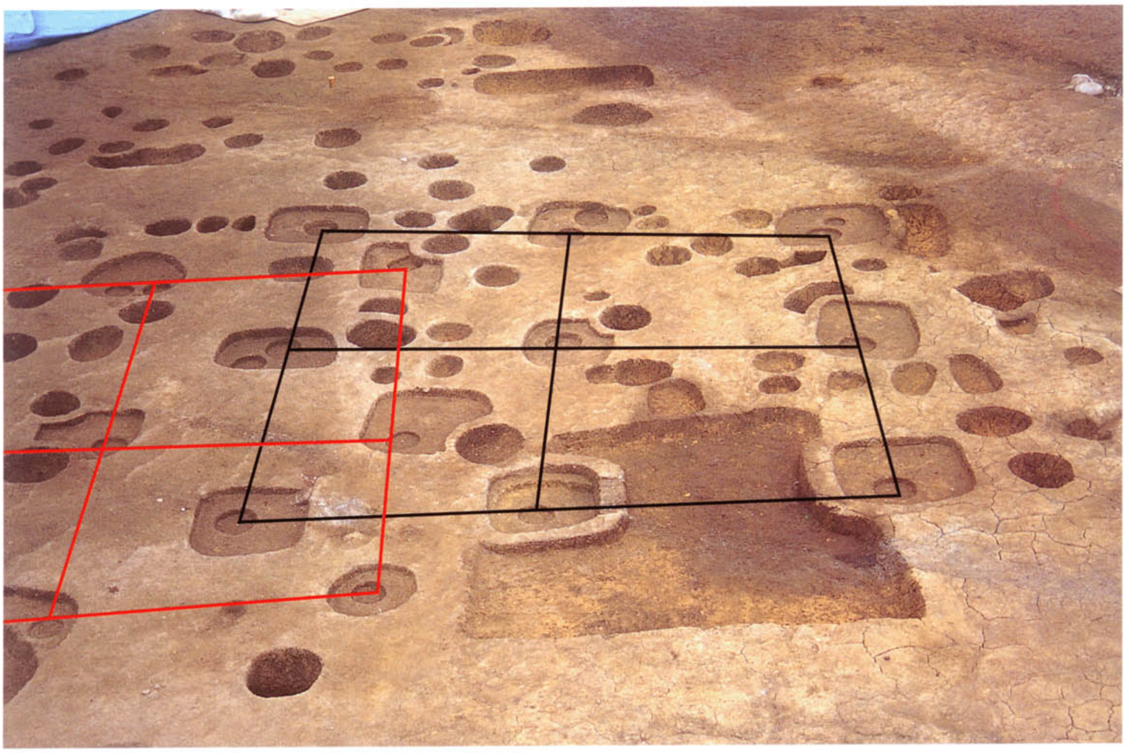
Ⅱ区垂直写真（拡大）



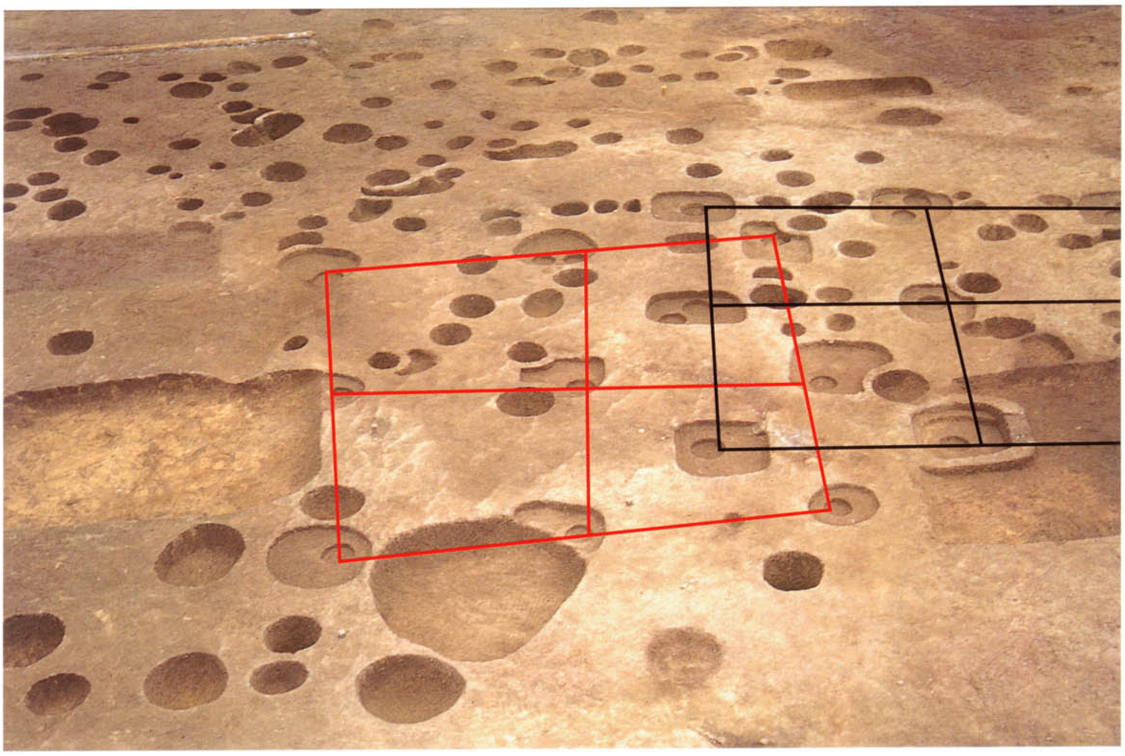
SB390



SB388・SB389



SB386



SB387

SD001（北より）

SD001（南より）

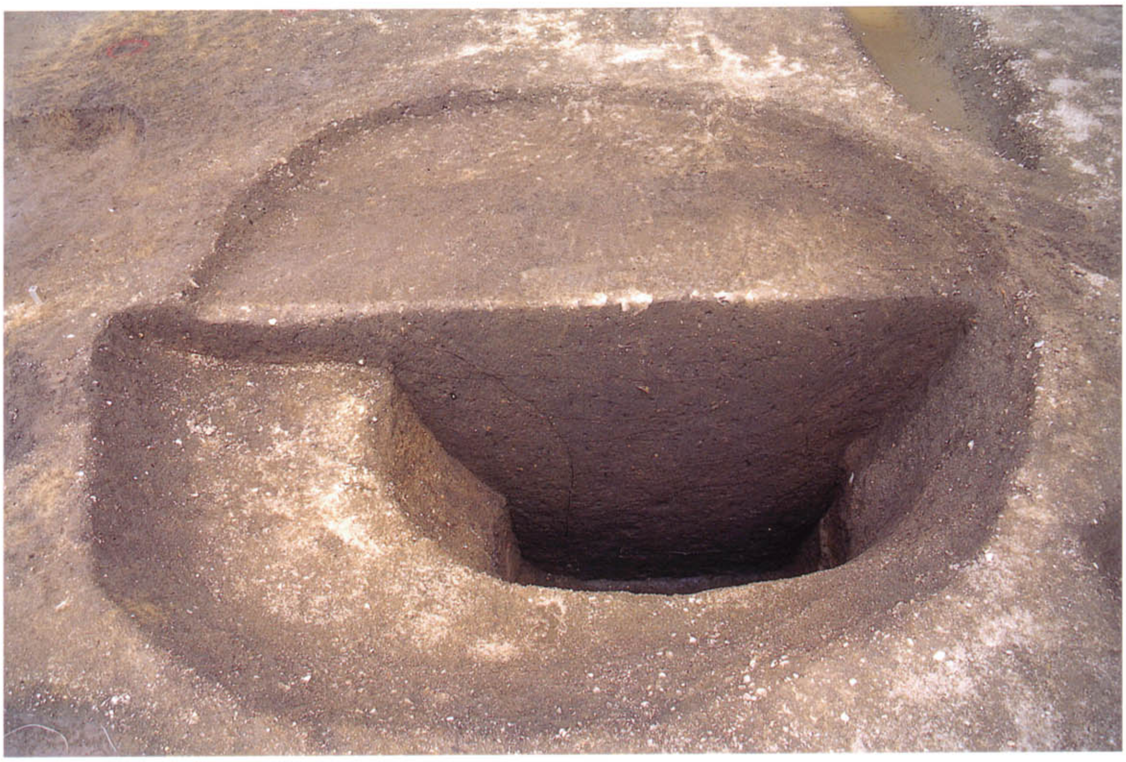
SD001調査区南壁

SE012土層

SE026

SE026土層

SE208



SE208土層

SE210

SE210土層

SE214

SE230

SE251

SK088土層

調査区南壁土層（道路部分）

調査区南壁土層（拡大）

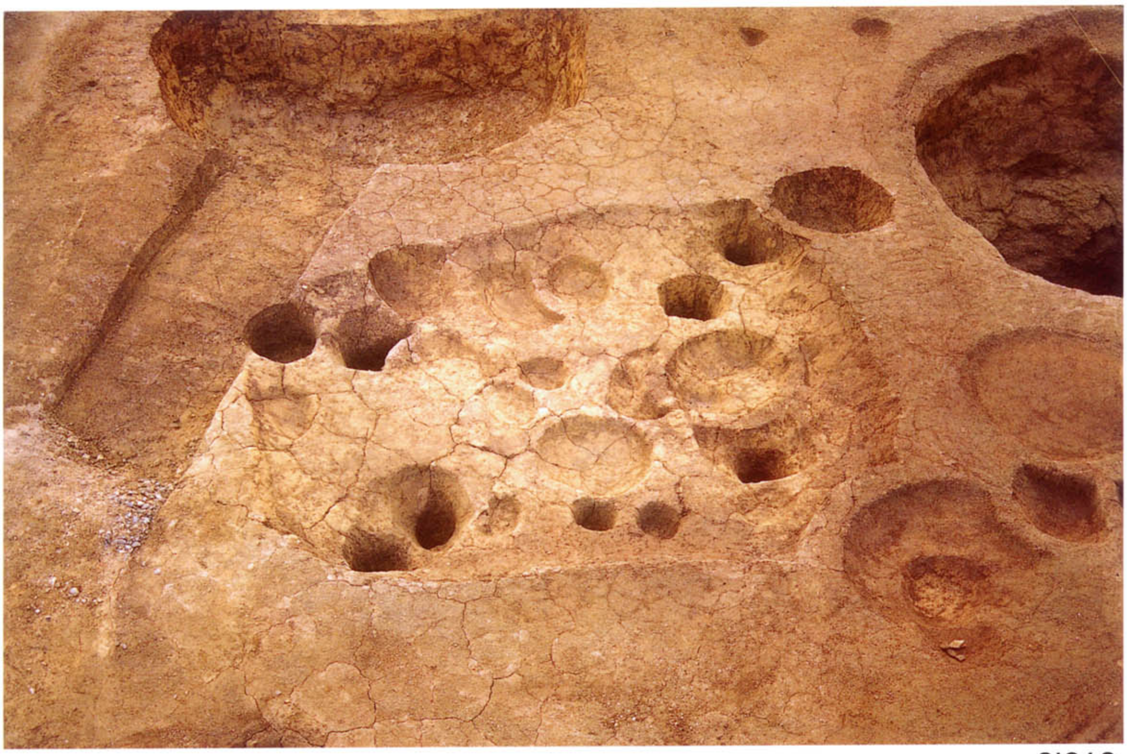
路面部分の調査状況

路面部分横断土層断ち割り状況

SI022

SI023

SI024



SI213

SI237

SI233


001

002

003

004

005

006

007

008

009

010

011

012

013

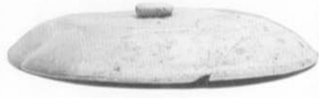
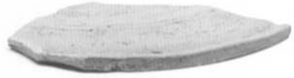
014

015

016

017

018

019

020

021

PL.20　SD001 出土遺物　その1


022


023


024


025


026


027


028


029


030


031


032


033


034


035


036

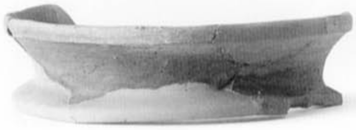

037


038

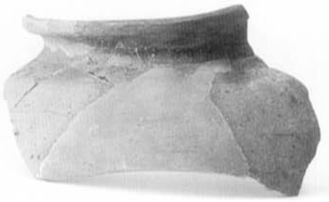

039

PL.21　SD001 出土遺物　その2

040

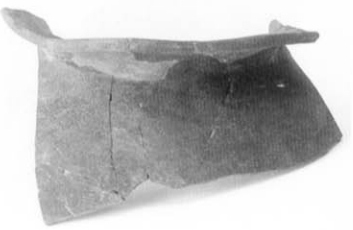


041



042

043



044

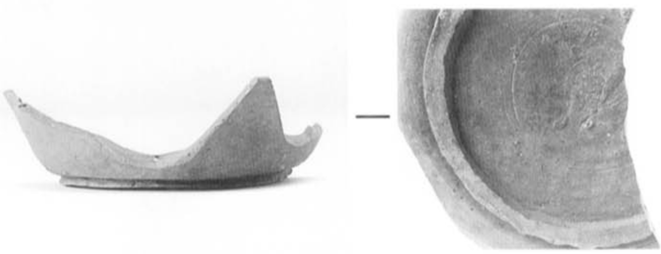
045

179

191

612

616



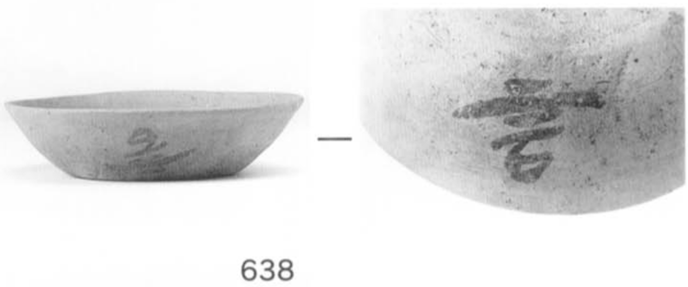
637

SD001

SD002

046

SD017



638

PL.22　SD001・SD002・SD017　出土遺物


073

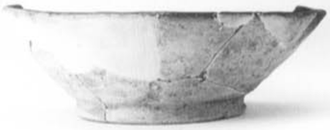

074

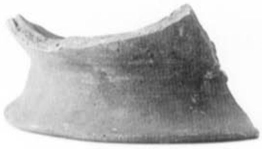

076

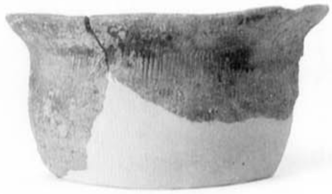

077


078


079


080


082


083


084

SE012

SE026


129


130


131


133


134

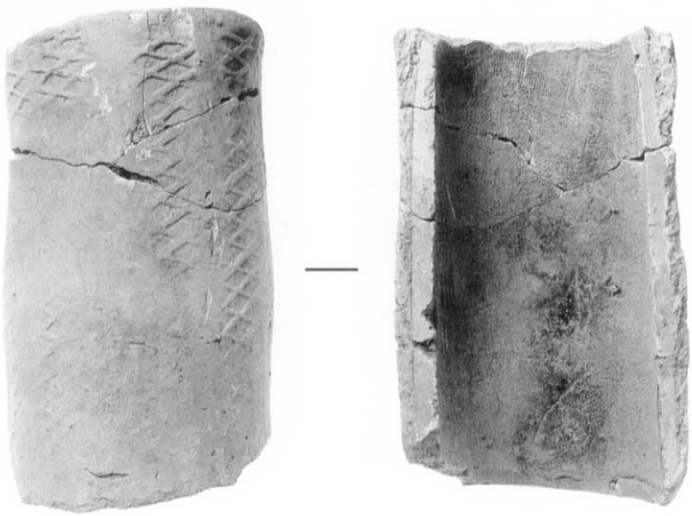

135


136


138


139

PL.23　SE012・SE026　出土遺物



142

143

144

666

598

SE026

SE208

227

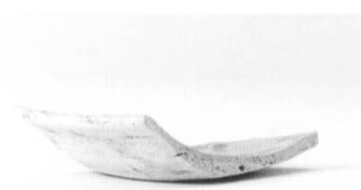
228

229

230

234

233



235

236

PL.24　SE026・SE208　出土遺物

237

238

630

240

603

SE208

239

604

SE210

253

254

255

256

257

258

260

261

262

PL.25　SE208・SE210　出土遺物

263

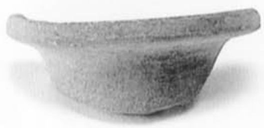
264

265

266

268

286



602

667

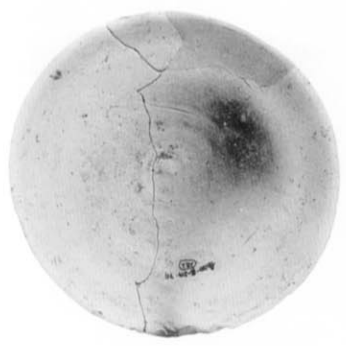
PL.26　SE210　出土遺物

281

282

284

283



285

288

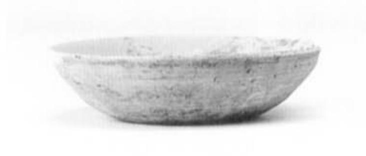
280

SE214

SE252

493

494



498

655

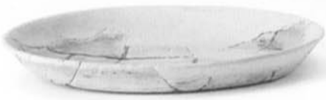
664

PL.27　SE214・SE252　出土遺物

095

096

097



098

099

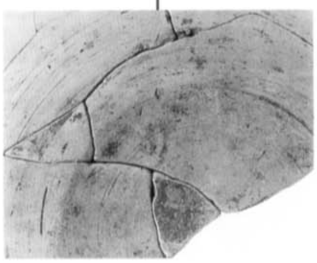
101

102

100

618

639



SI022

SI024

642

PL.28　SI022・SI024　出土遺物


103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

118

119

120

121

PL.29　SI023　出土遺物

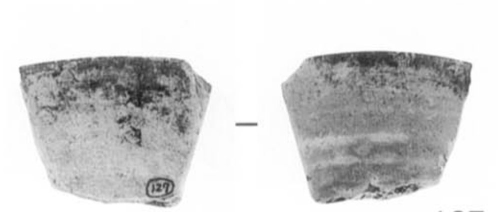

122


123

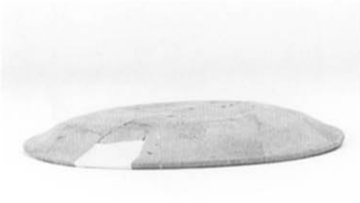

124


125

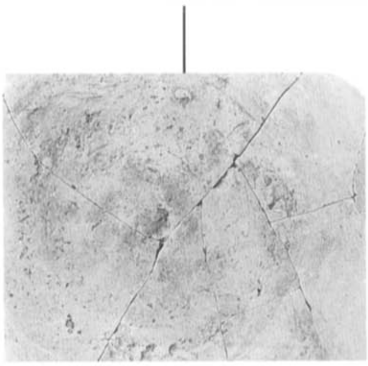

126


127


161


640


641




605

SI023

SI213


274


275


276


277


278


279

PL.30　SI023・SI213　出土遺物


059


060

SK005

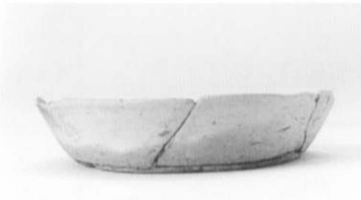
SK008

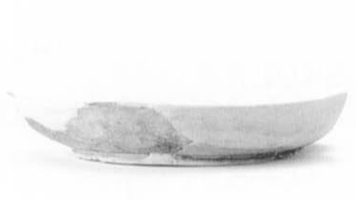

061


062


063


064


065

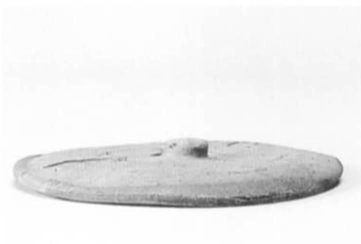

066


067


068


069


070


632

PL.31　SK005・SK008　出土遺物


SK009 072


SK010 071


252


SK027 145


SK029 146


601

SK088


149


151


152


153


154

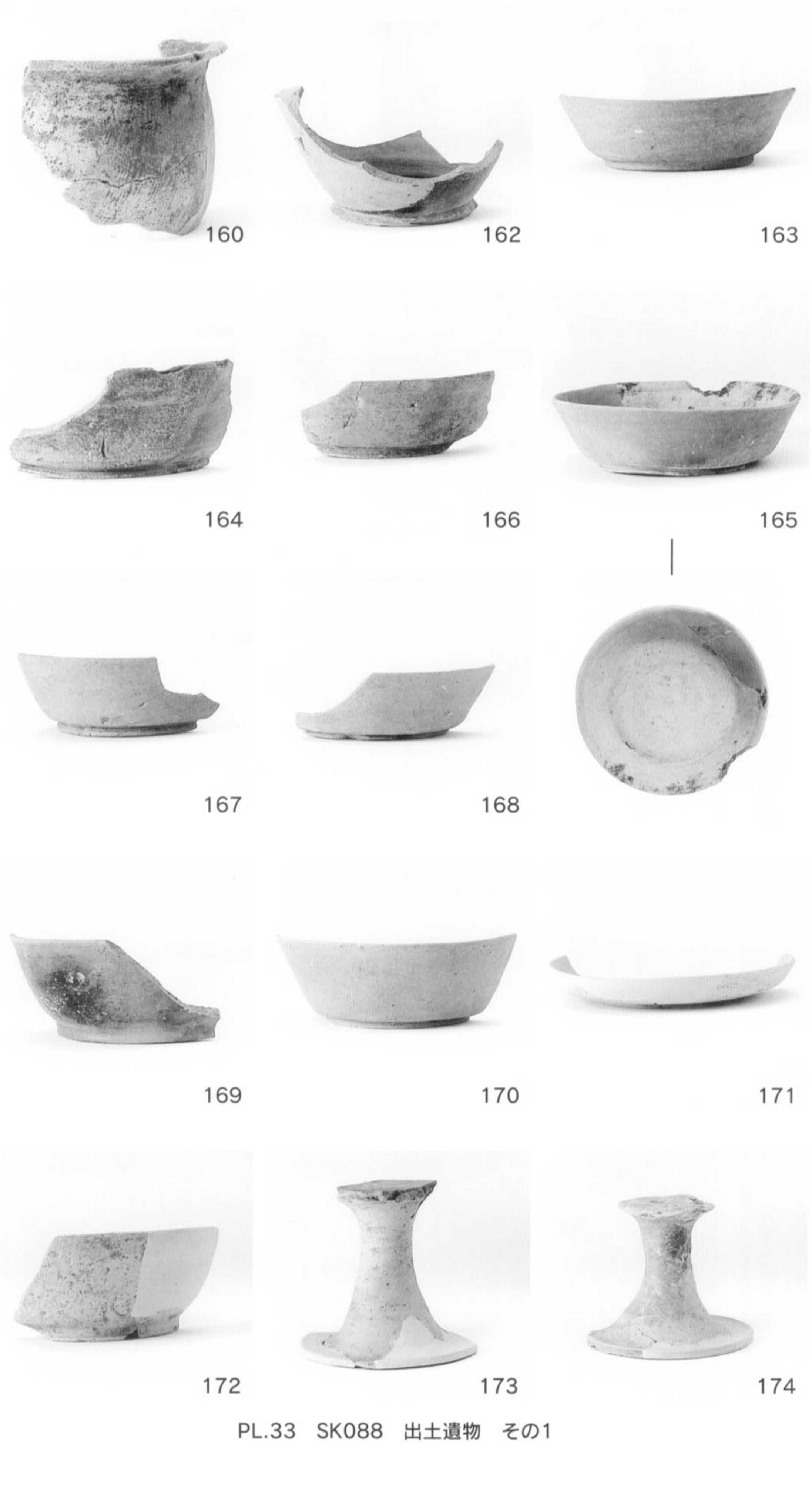

155


156

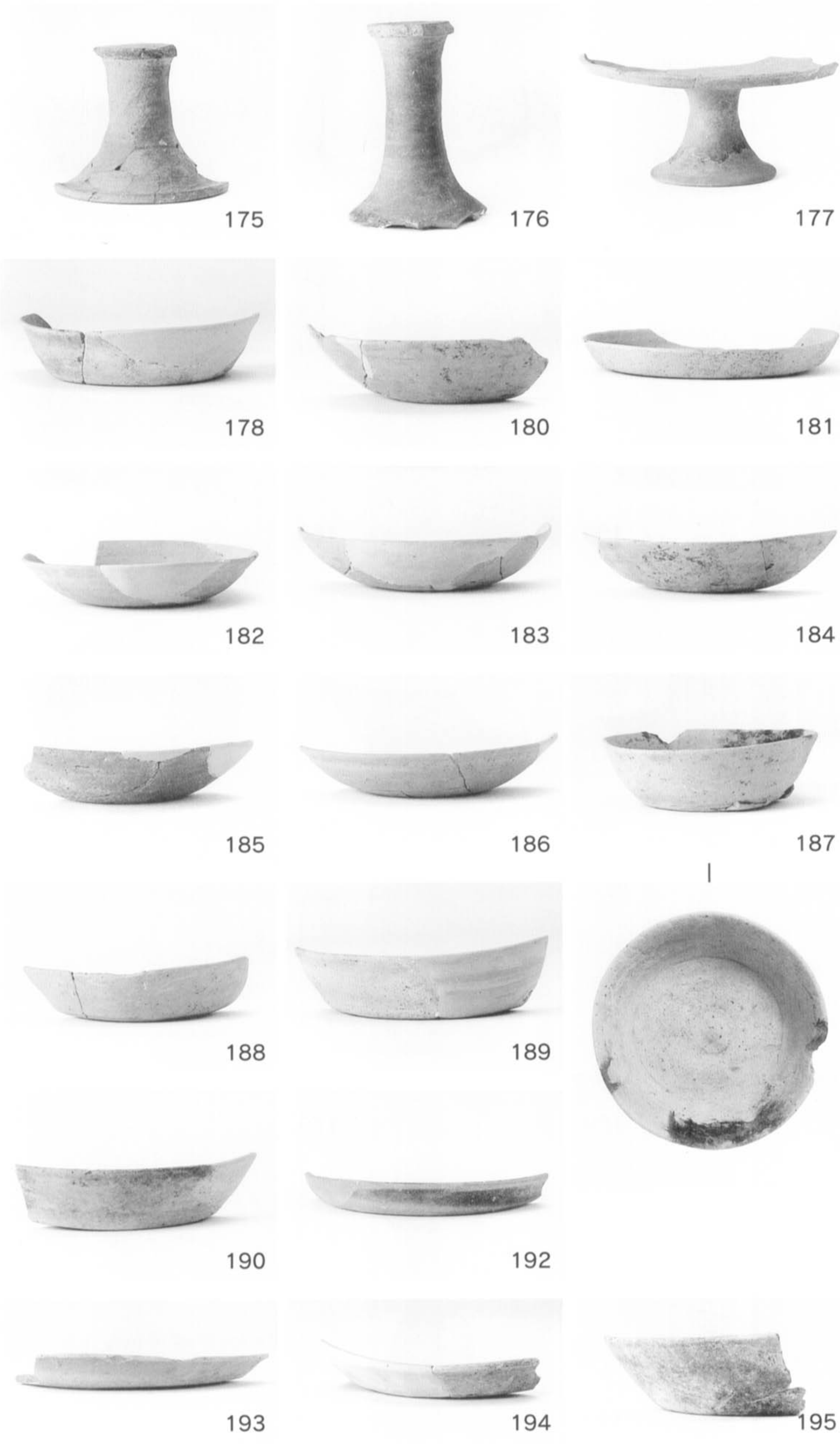

157


158

PL.32　SK009・SK010・SK027・SK029・SK088　出土遺物



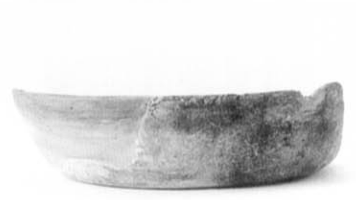
PL.33　SK088　出土遺物　その1



PL.34　SK088　出土遺物　その2

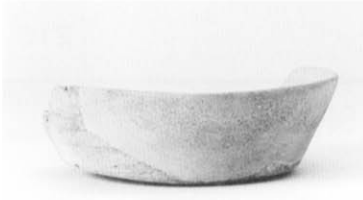
196

197



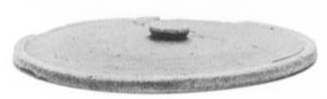
198

199



200

201

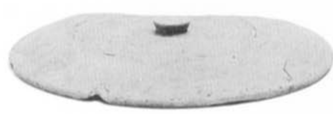


202

203

204

205



206

207

208

210

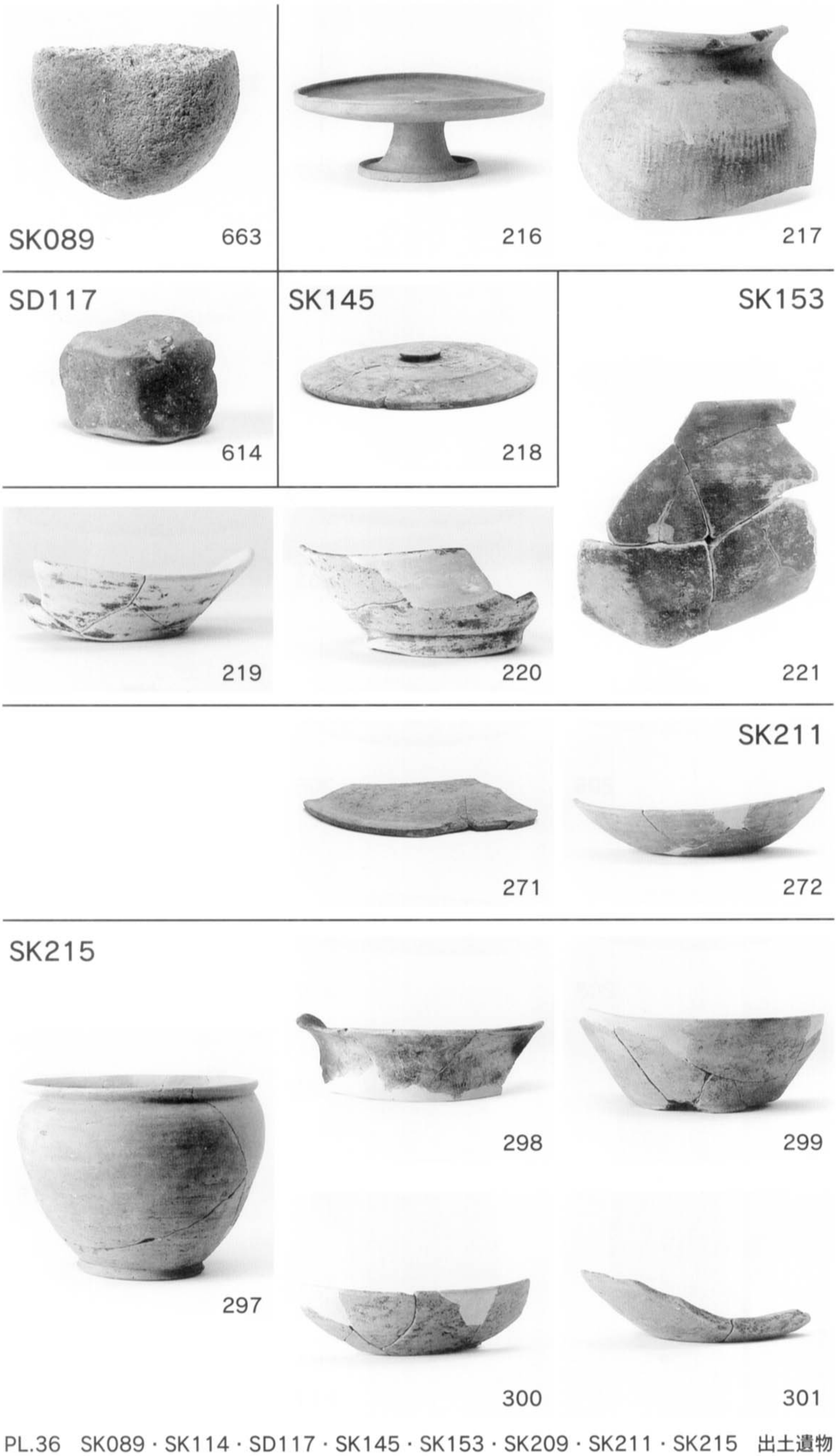
214

215

211

213

PL.35　SK088　出土遺物　その3



PL.36　SK089・SK114・SD117・SK145・SK153・SK209・SK211・SK215　出土遺物


302


303


304


305


306


307


308


309


310

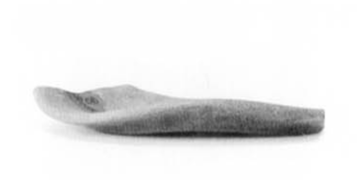

311


312


313

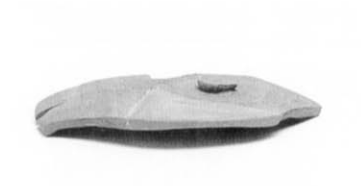

314


315


316

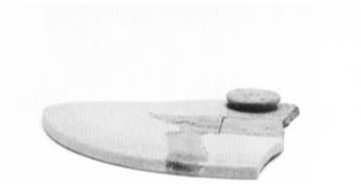

318


319


320


321


322


323


324


325

PL.37　SK215出土遺物


645


646

SK215

SD218


327

SK220


328


329


330


668


334

SK223


336


337

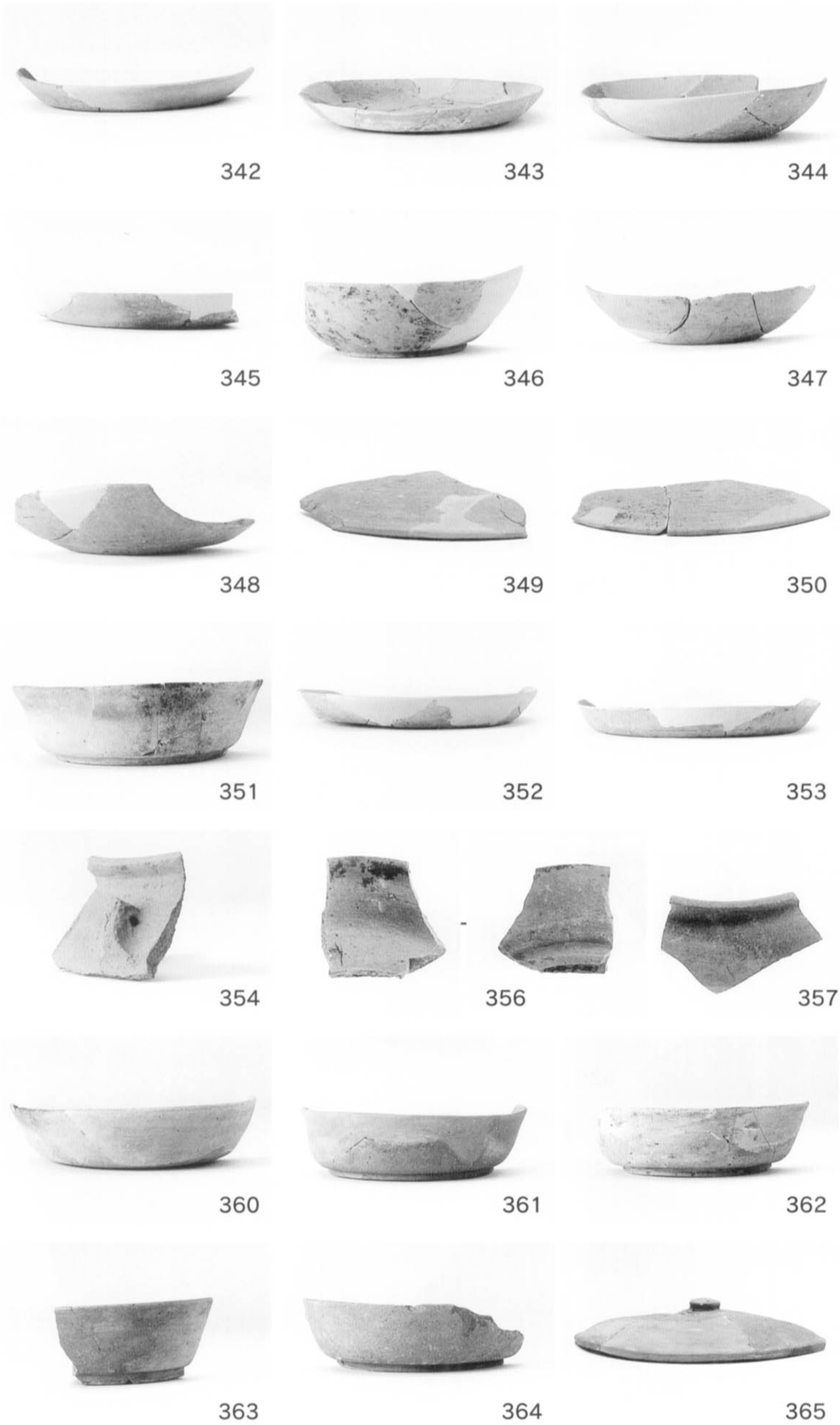

338


339


340


341

PL.38　SK215・SD218・SK220・SK223　出土遺物



PL.39　SK223　出土遺物　その1


366


367


369

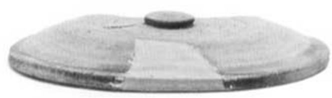

372


373

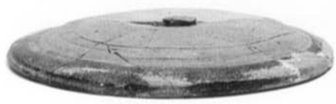

374


375


378


379


380

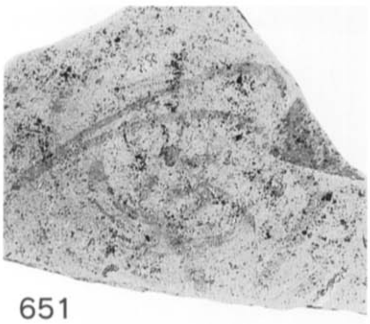

381


383


636

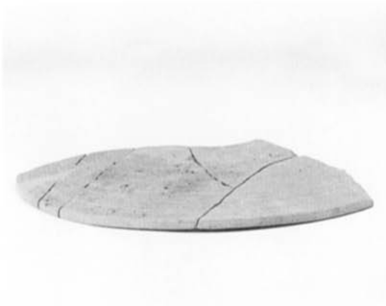

647


384

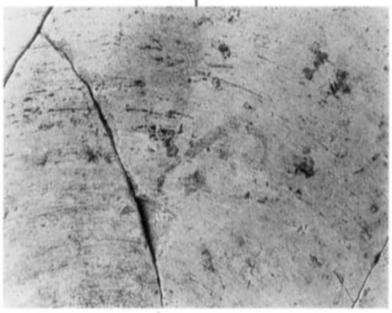

651

PL.40　SK223　出土遺物　その2

649



650



SK223

SK226

388

389

390

391

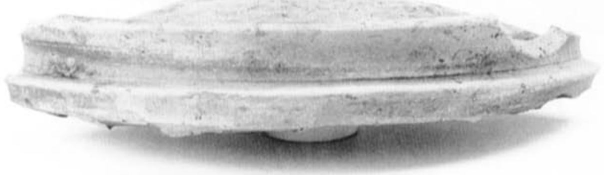
392

393

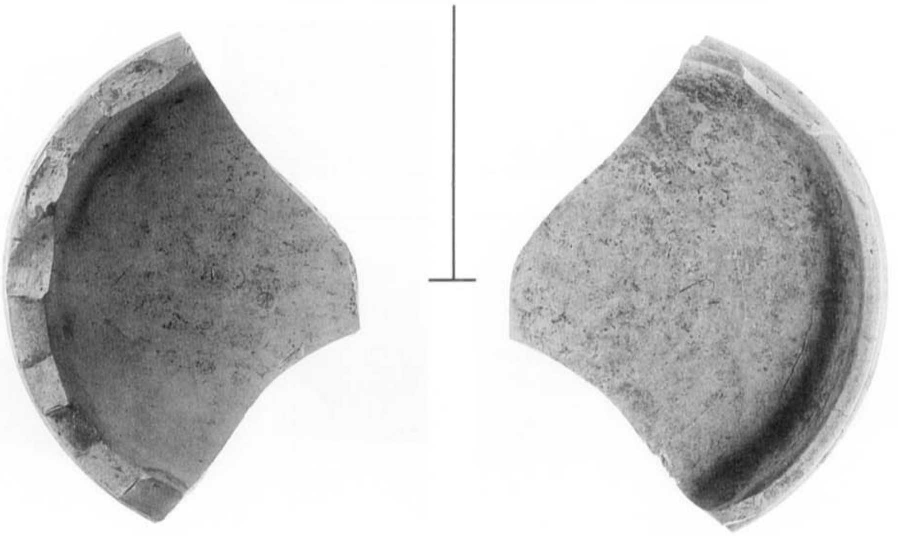
394

395

PL.41　SK223・SK226　出土遺物



396

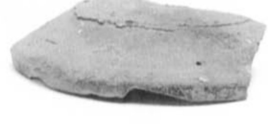


SK226

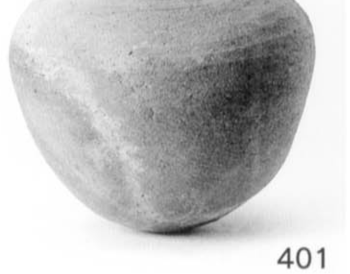
SK228

398

399



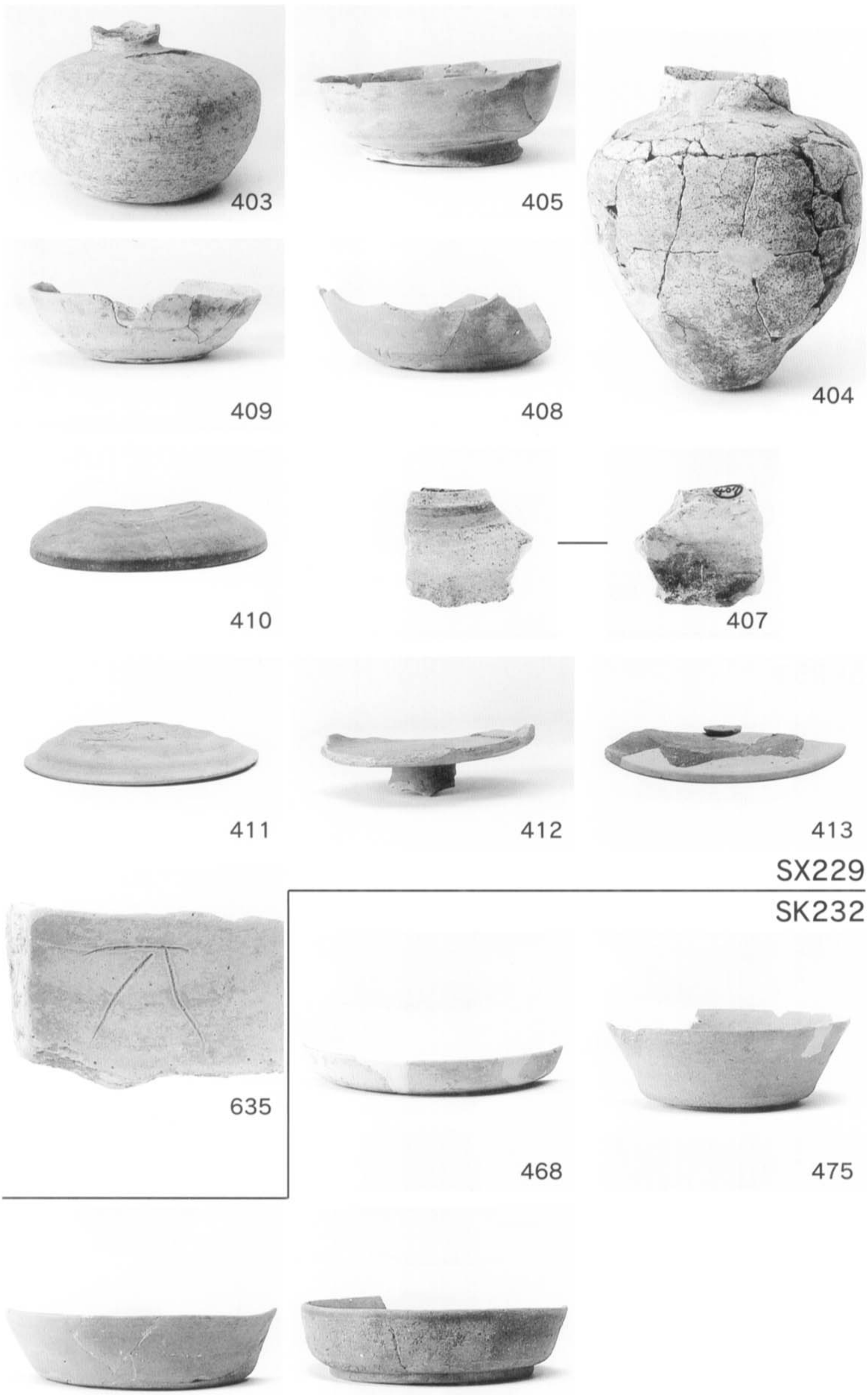
400



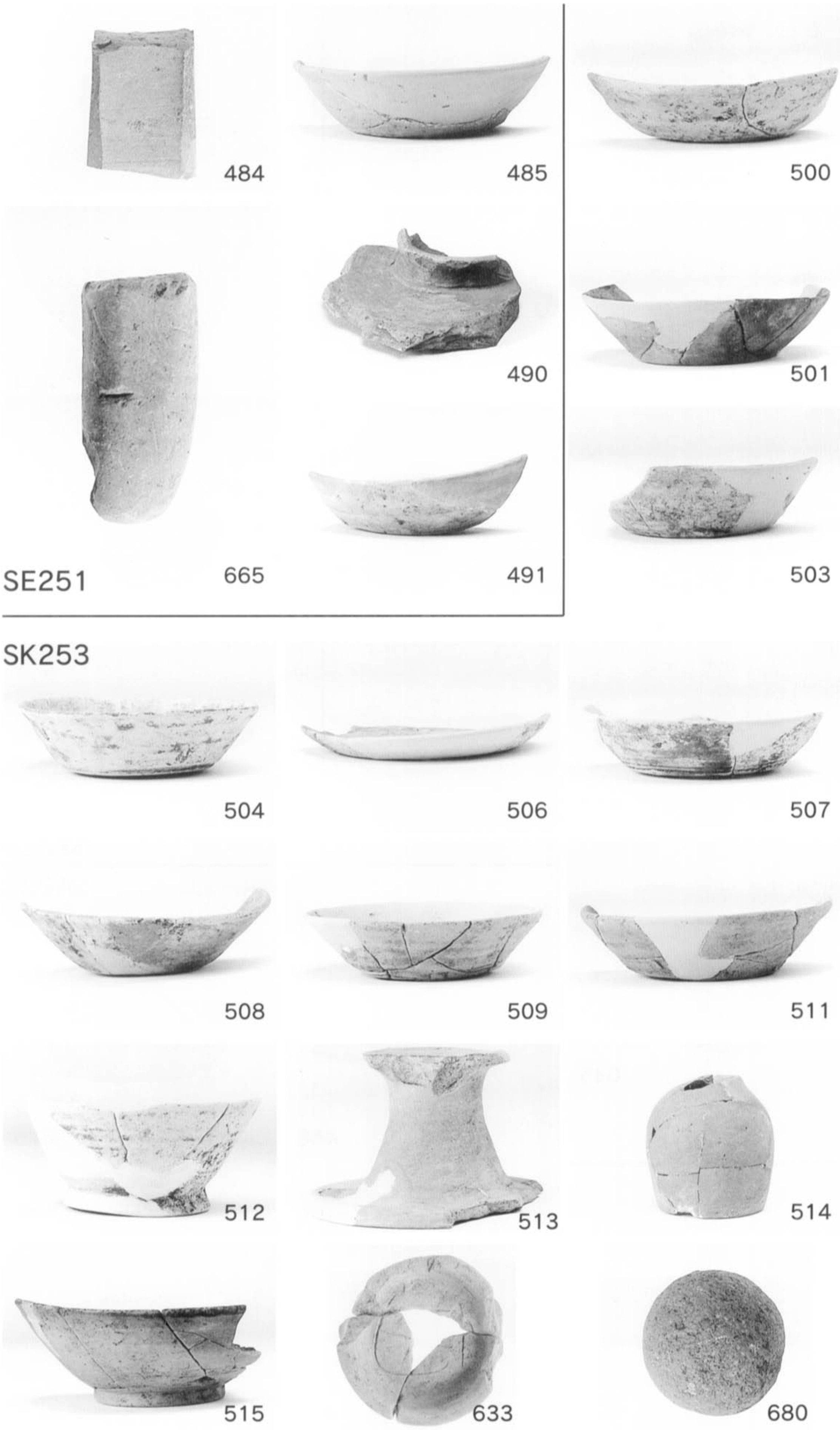
401

402

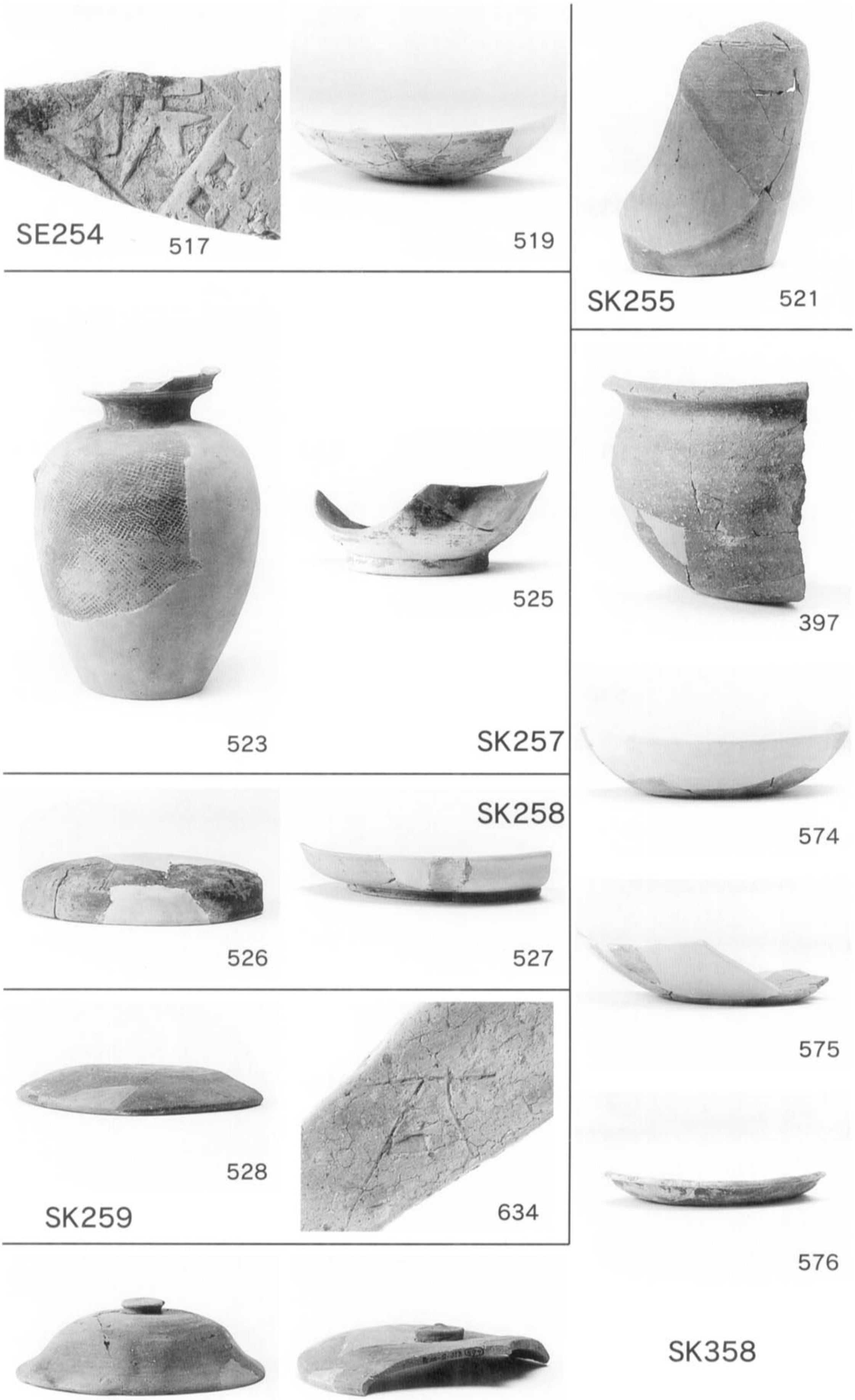
PL.42　SK226・SK228　出土遺物



PL.43　SX229・SK232出土遺物



PL.44　SE251・SK253　出土遺物



PL.45　SE254・SK255・SK257・SK258・SK259・SK358　出土遺物

533

534

535

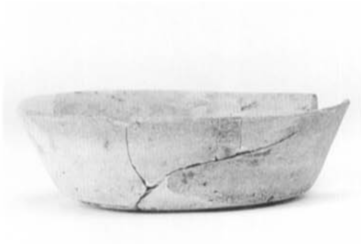
536

537

539

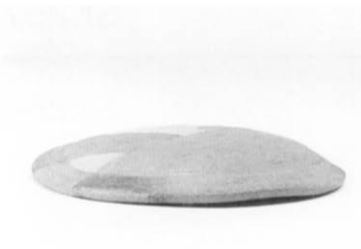
540

541

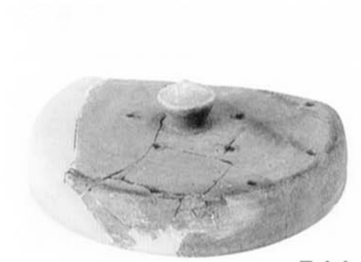


542

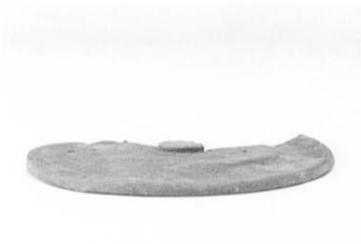
543



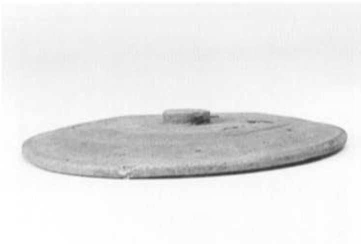
546



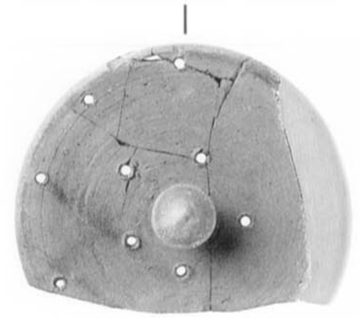
544

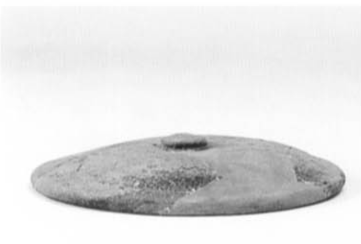


548



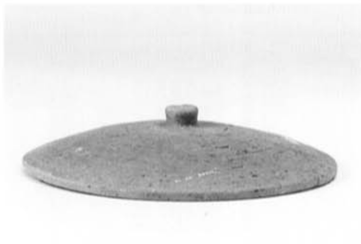
549





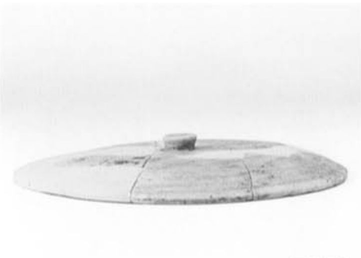
550

551



552

PL.46　SK298　出土遺物


553


557


554


558


559


560


561


562

SK298


567


568


569

SK360


581


584


585


586


587

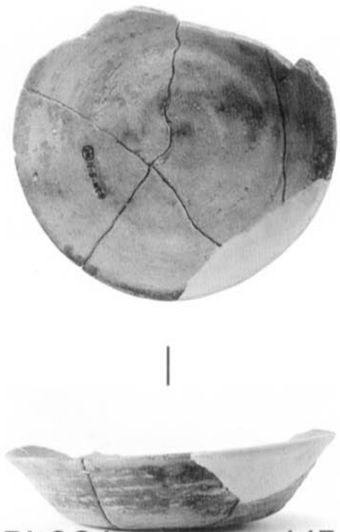

661


662

PL.47　SK298・SK360　出土遺物


Pit011 092


Pit025 128




Pit032 418


Pit140 221

Pit031 147


Pit169 225


Pit198 644


Pit193 223

Pit181 594


Pit204 226


Pit221 335


Pit260 531

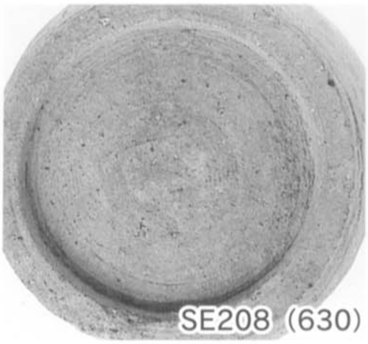

Pit295 565


Pit385 589


GS 572


573

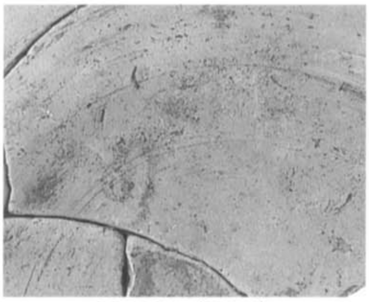
PL.48 Pit・GS 出土遺物



SE208（630）

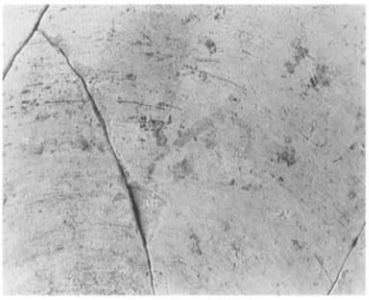
SD001（637）

SD017（638）

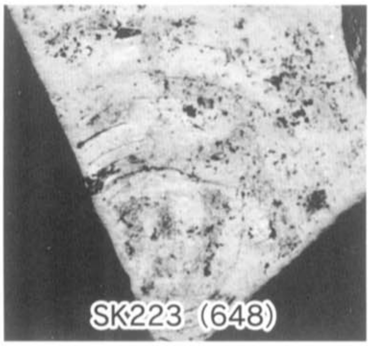


SI022（639）

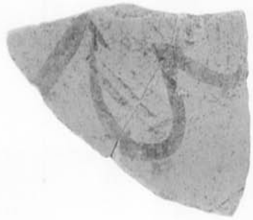
SI023（641）



SK223（650）

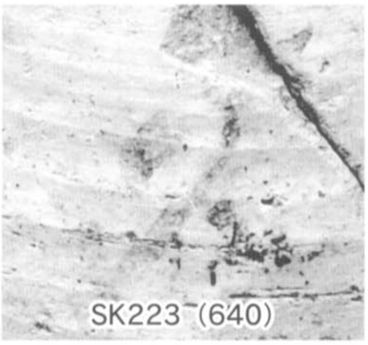


SK223（648）

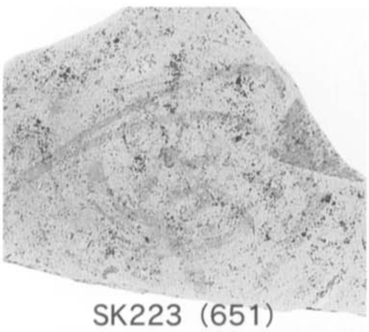


SK215（646）

SK215（645）



SK223（640）

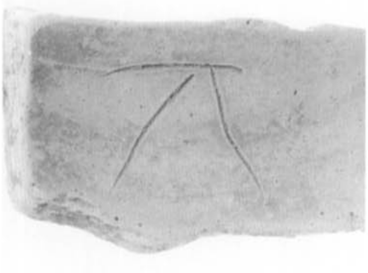


SK223（651）

SK223（636）

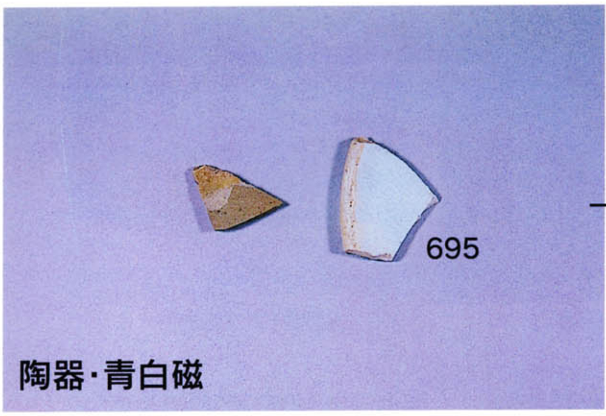
SK254（517）

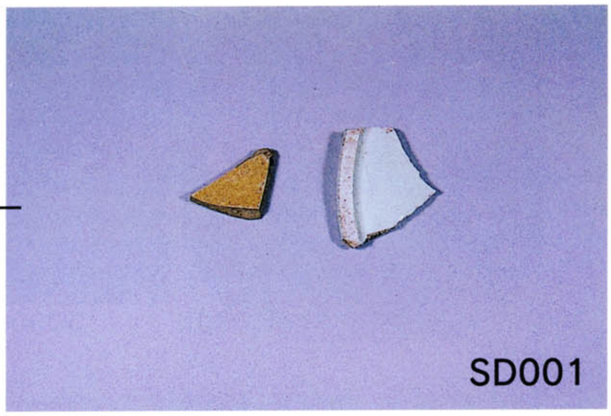
SK259（634）

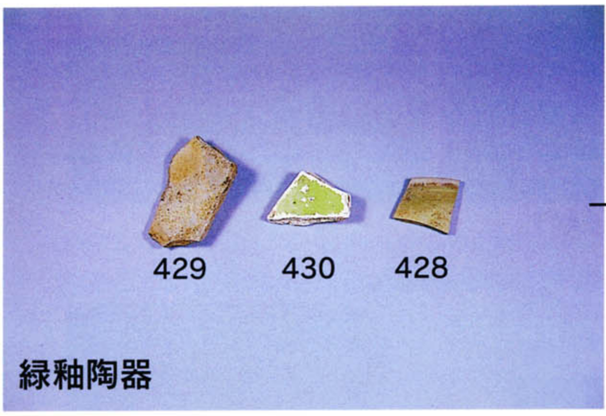


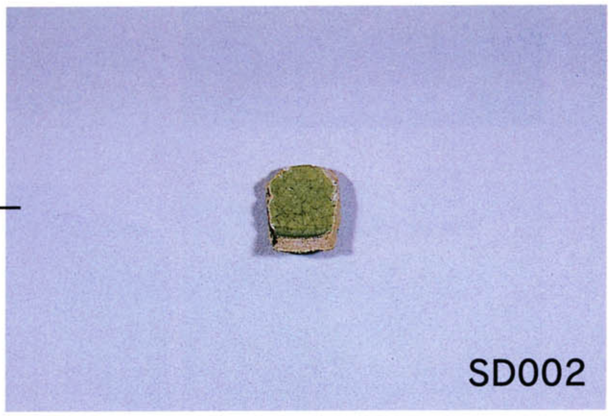
SK232（635）

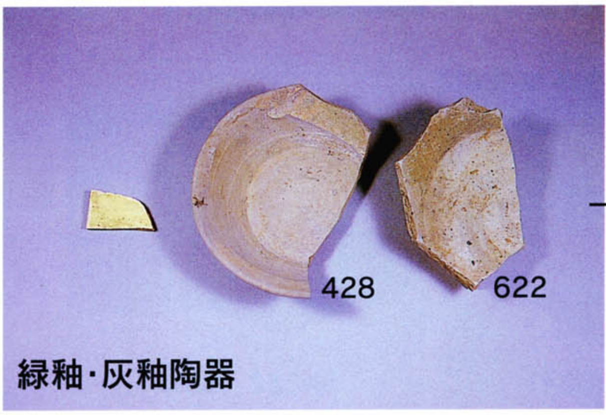
PL.49　出土文字資料（一部）





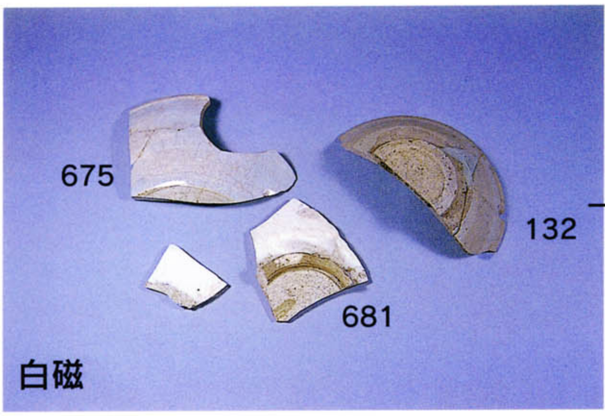


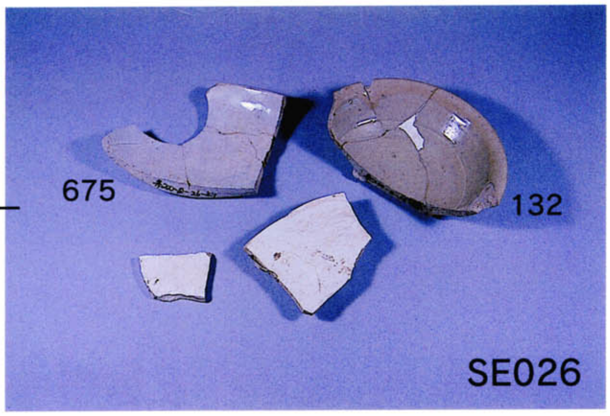




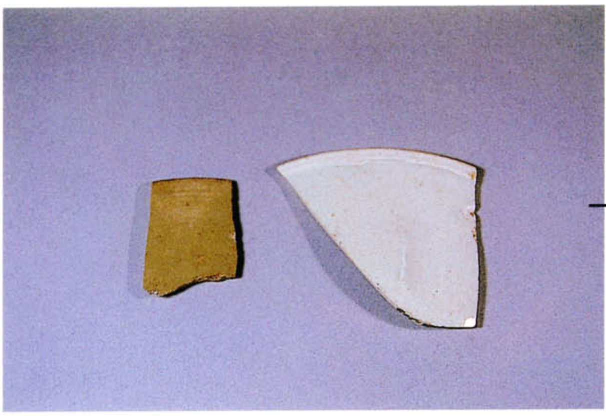
PL.50　搬入陶磁器その1

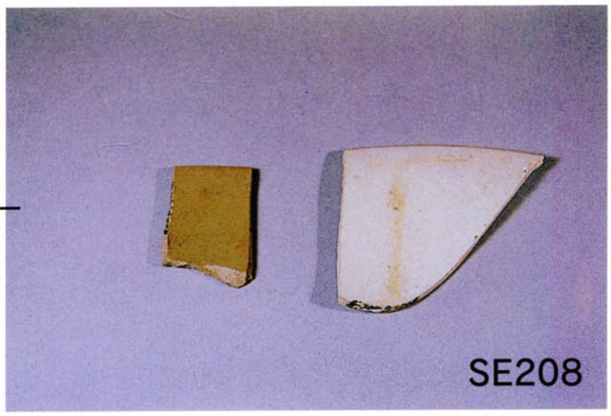
PL.51　搬入陶磁器その2

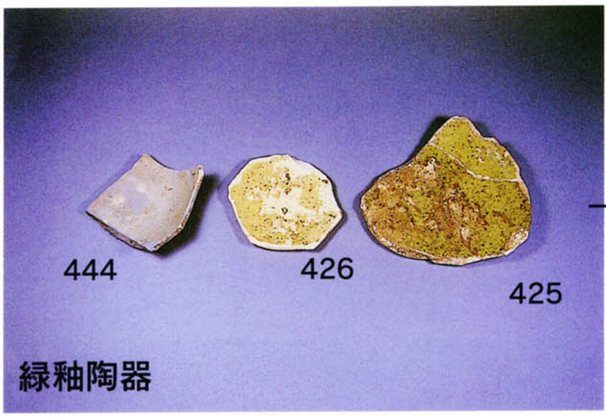


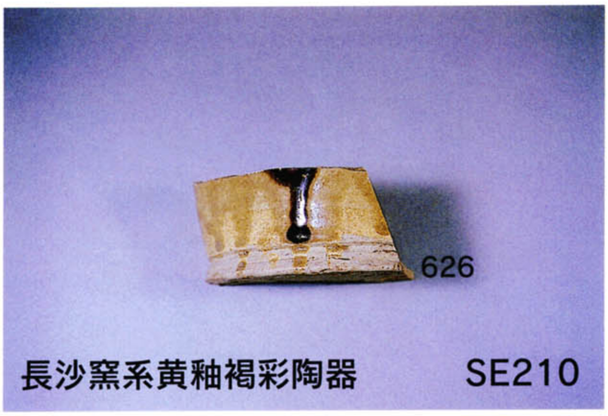


PL.52　搬入陶磁器その3

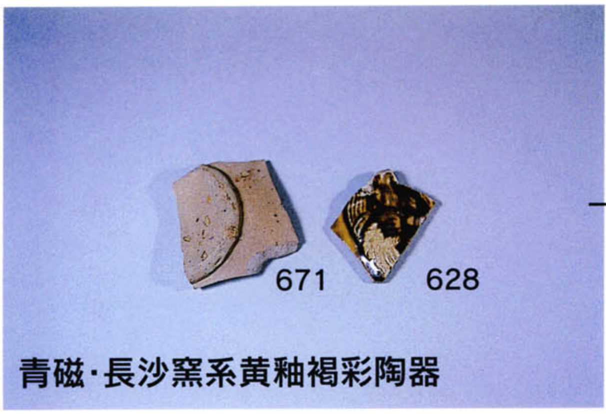






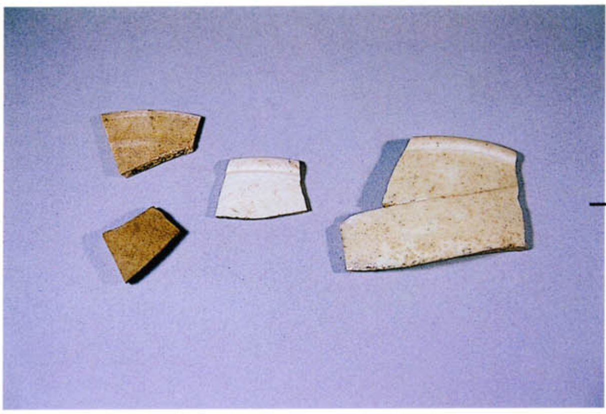


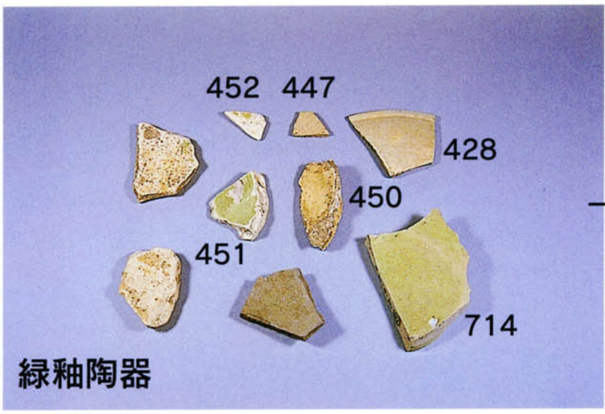
PL.53　搬入陶磁器その4



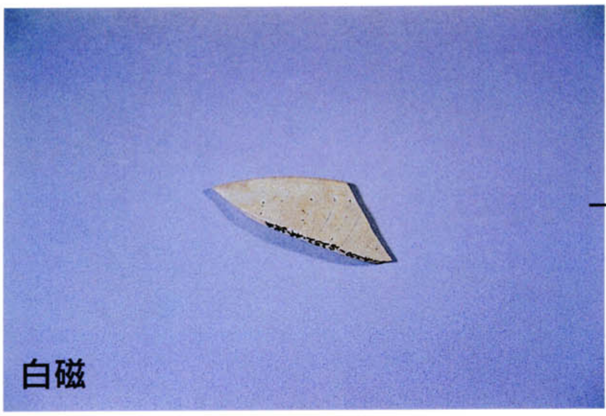
PL.54　搬入陶磁器その5

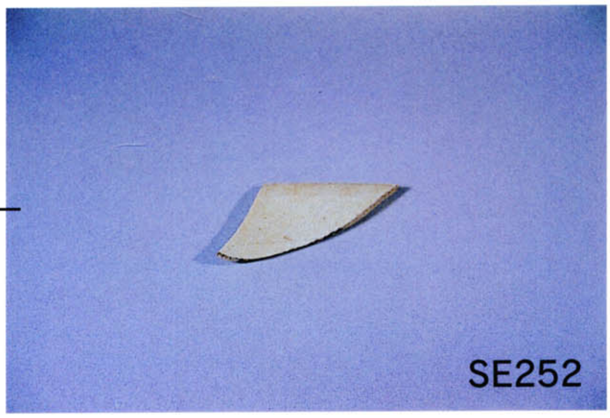

青磁



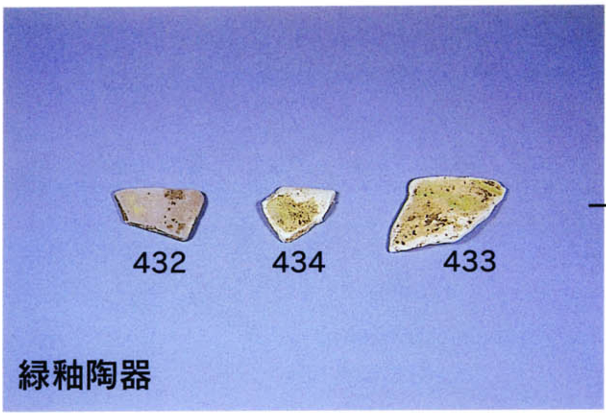



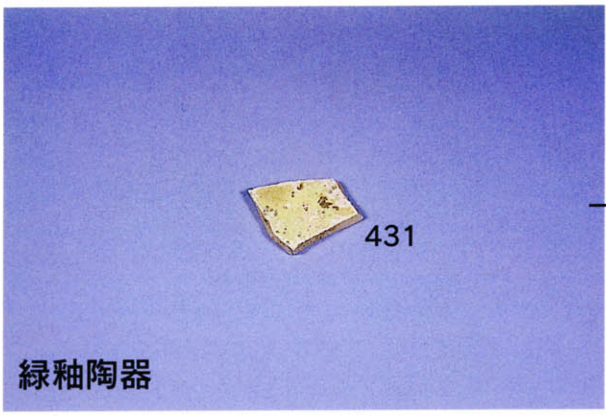
PL.55　搬入陶磁器その6

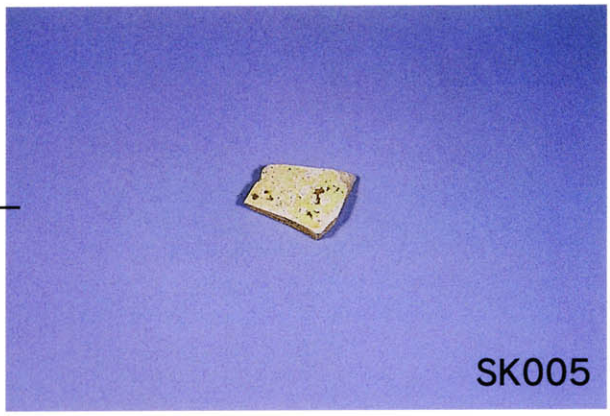


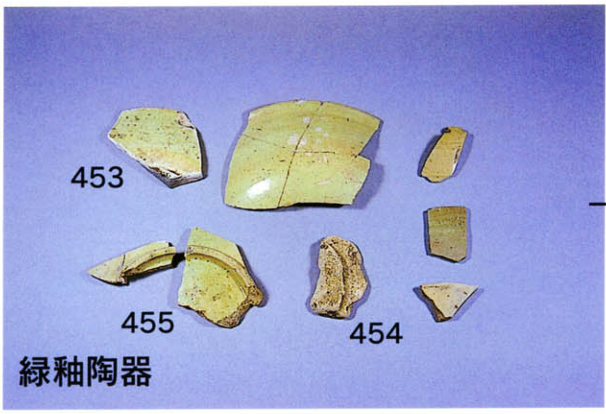


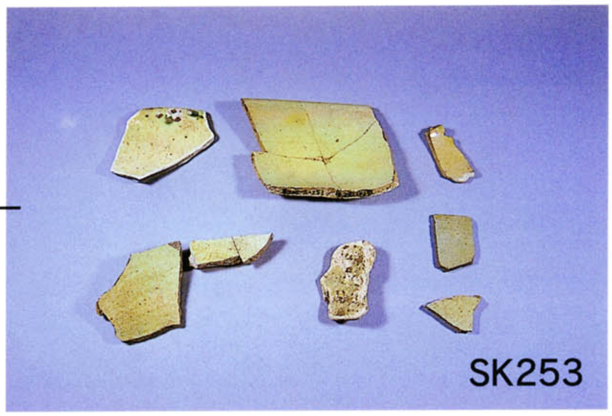
PL.56　搬入陶磁器その7





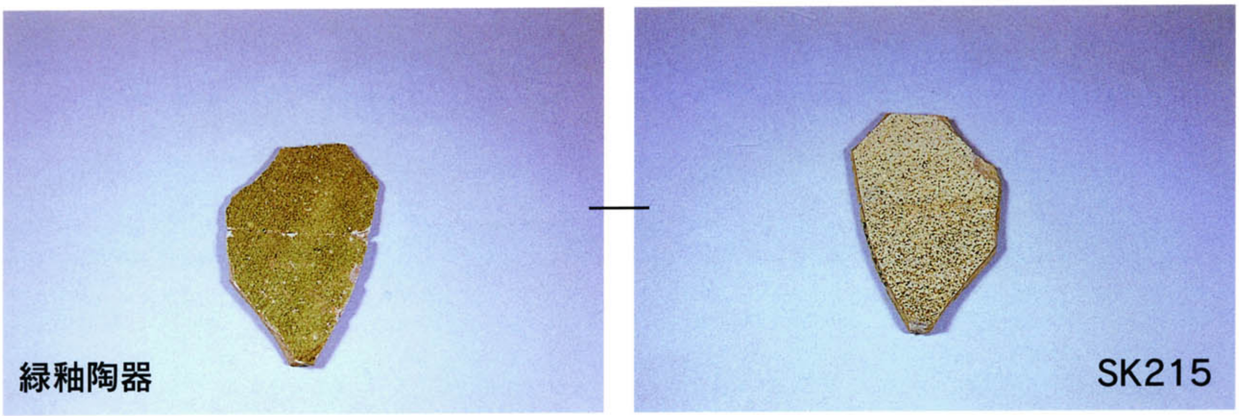


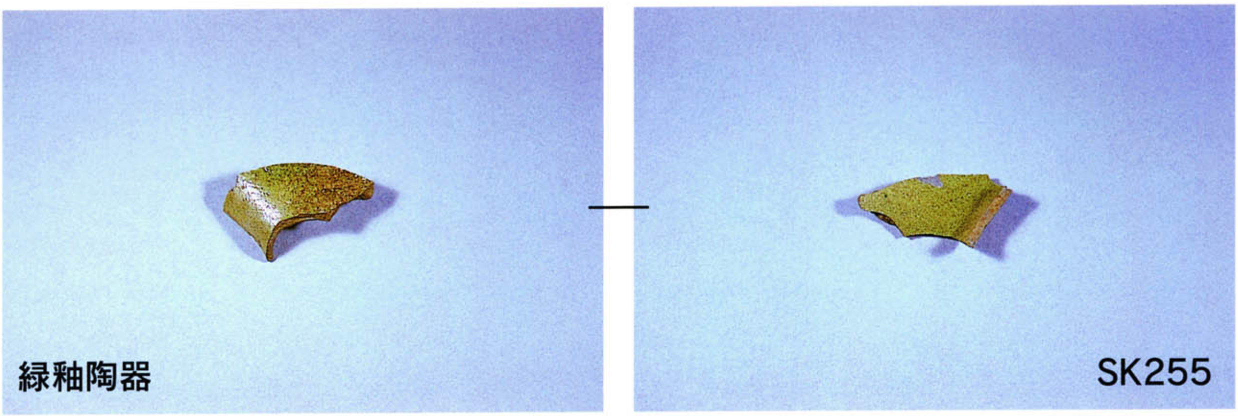


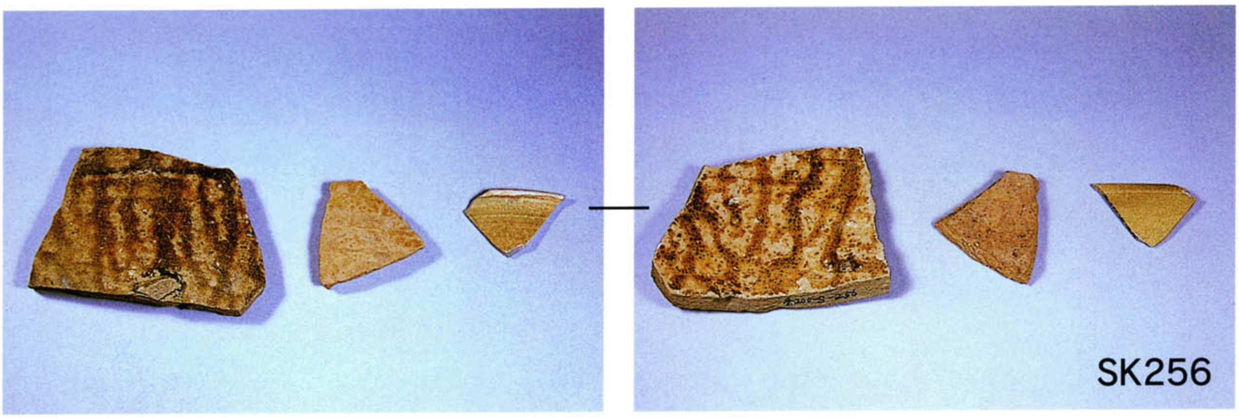


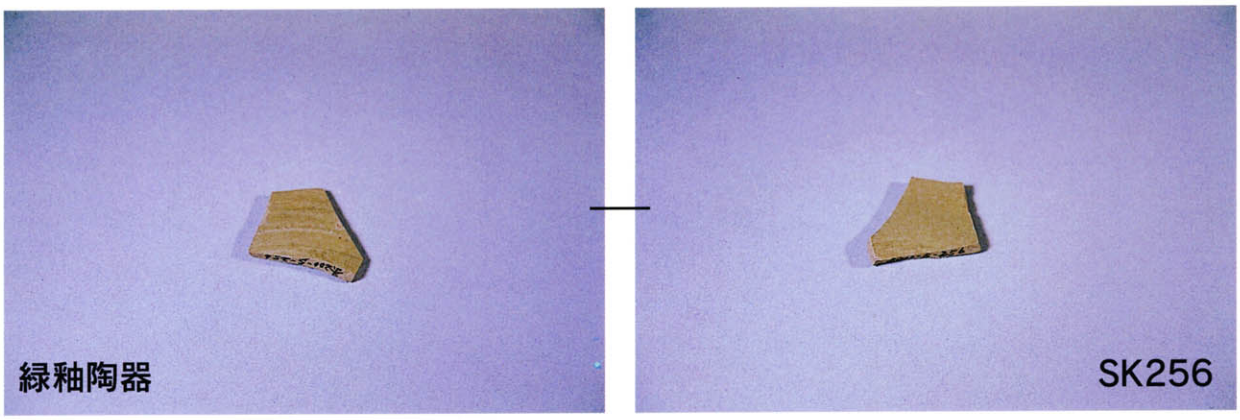
PL.57　搬入陶磁器その8

PL.58　搬入陶磁器その9

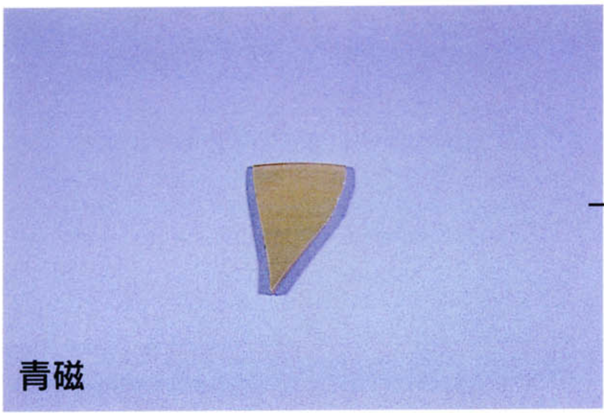




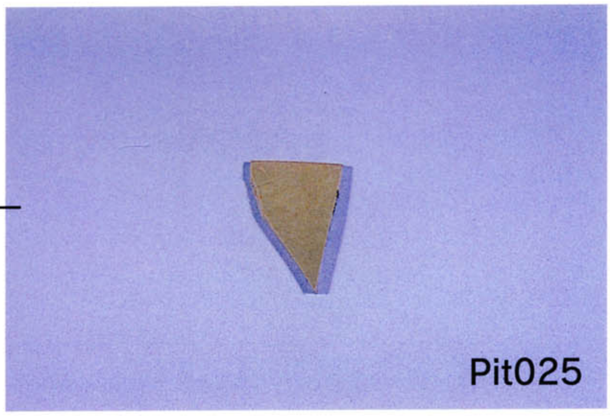




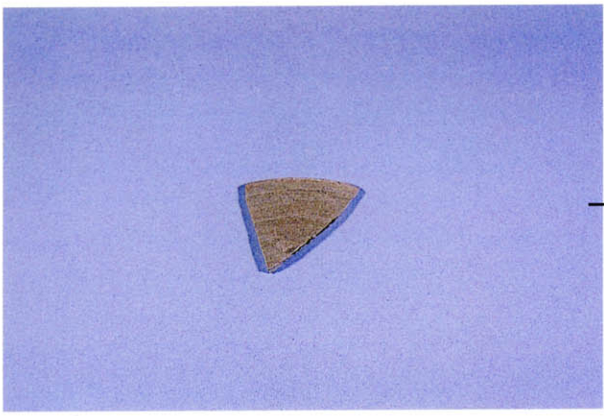
PL.59　搬入陶磁器その10

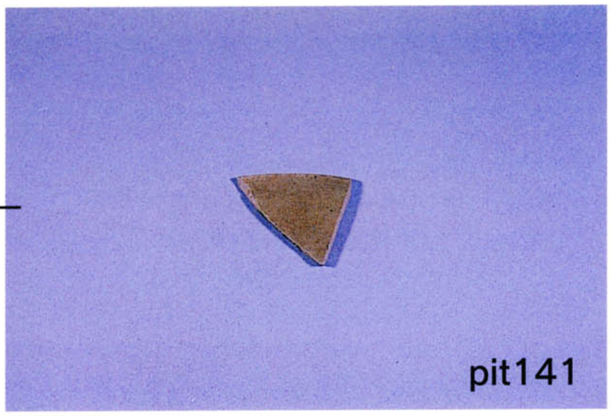


青磁



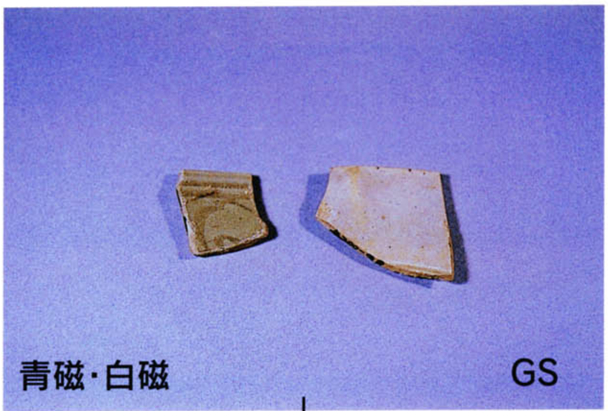
Pit025





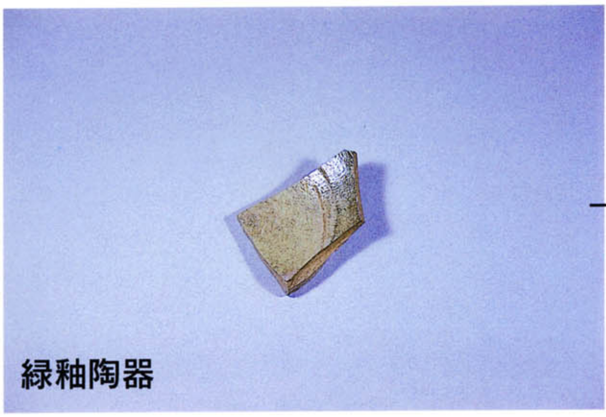
pit141

灰釉陶器　GS

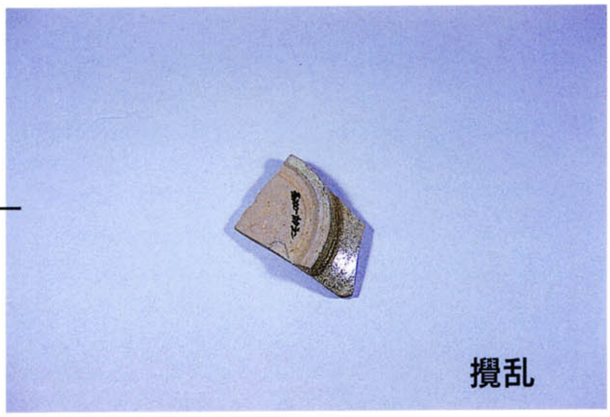


青磁・白磁　GS

PL.60　搬入陶磁器その11

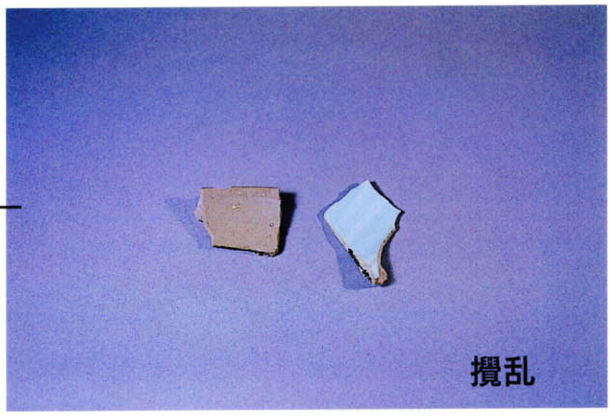


緑釉陶器



攪乱

白磁・青白磁

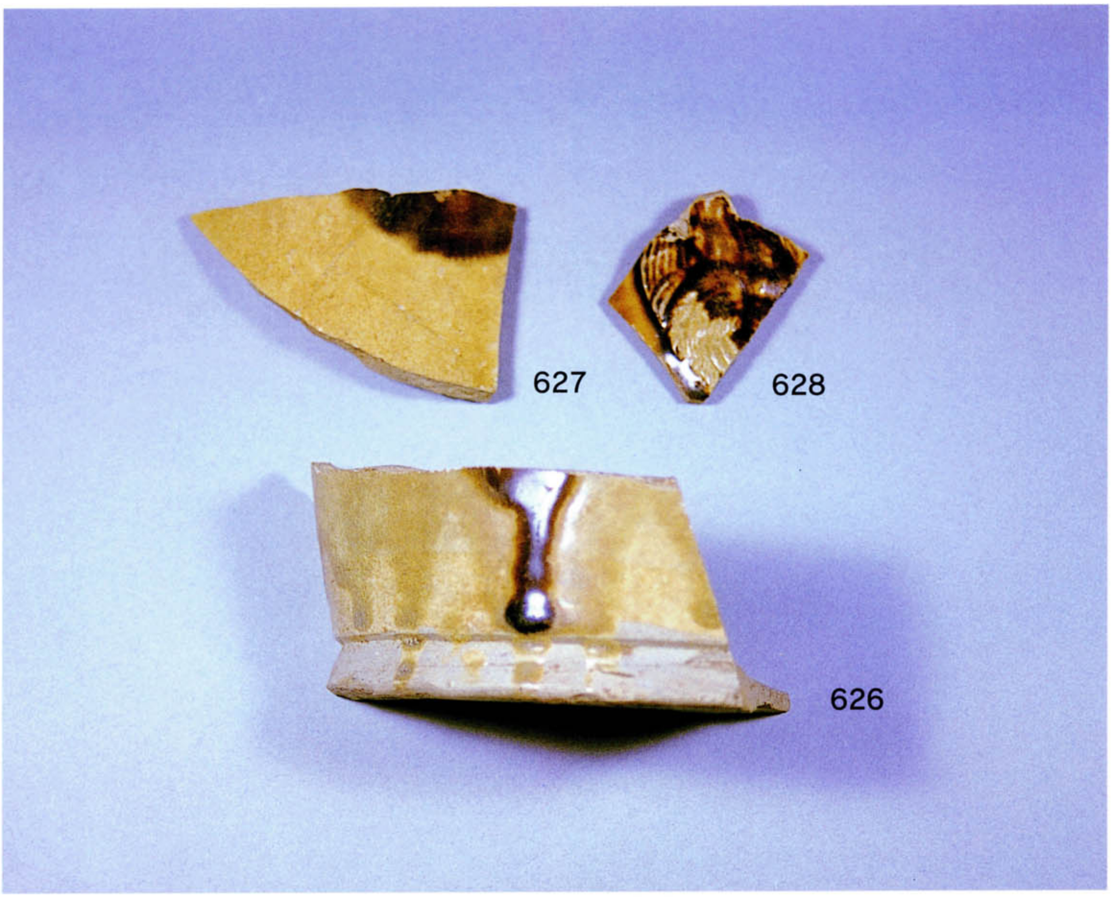


攪乱

石製銙帯（表）（421）

石製銙帯（裏）

金属製権衡器（683）



長沙窯系黄釉褐彩陶器

SI237移動式カマド片

報告書抄録

フリガナ	ダザイフジョウボウアト　ダイ200ジハックツチョウサ
書名	大宰府条坊跡　第200次発掘調査
副書名	筑紫野市文化財調査報告書
巻次	第75集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小鹿野　亮
編集機関	筑紫野市教育委員会（教育部　文化財課　文化財担当）
所在地	〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号　TEL092-923-1111
発行年月日	平成15年３月31日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
ダザイフジョウボウアト 大宰府条坊跡	福岡県 筑紫野市 二日市 700番1	402176	210044	30° 29′ 52″	130° 31′ 01″	980413 ～ 980920	2,700	店舗建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
条坊跡	奈良～平安	柵　1列 掘立柱建物　7棟 溝　6条 井戸　10基 道路　1条 竪穴住居　10軒 土坑　40基 性格不明遺構　1基 ピット　15基	土師器 須恵器 黒色土器 緑釉陶器 (防長・京都産洛北型・京都産洛西型・猿投産) 灰釉陶器 越州窯系青磁 長沙窯系黄釉褐彩陶器 磁州窯系白釉陶器 初期高麗青磁 白磁 軒丸瓦(老司Ⅱ式) 平瓦 石帯(巡方) 金属製権衡器	鏡山推定条坊右郭1坊17～18条付近に位置し、推定朱雀大路西側溝が検出された。

調査ならびに整理中には多くの方々からご指導ならびにご意見を賜りました。巻末ではありますが、記して謝意を表します。(敬称略・順不同)

網田龍生・美濃口雅朗・赤星雄一・林田和人(熊本市教育委員会)、石井扶美子(夜須町教育委員会)、小池史哲(前原市教育委員会)、小林勇作・上村英士(筑後市教育委員会)、齋藤孝正(文化庁文化財保護部美術工芸課)、狭川真一((財)元興寺文化財研究所)、白木守(久留米市教育委員会)、白水寿一・辻久弘((株)東亜建設技術)、杉原敏之(福岡県教育庁筑豊教育事務所)、早川泉(大成エンジニアリング(株))、中島恒次郎・山村信榮・井上信正(太宰府市教育委員会)、松川博一(独立行政法人国立博物館 九州国立博物館[仮称]設立準備室)、百瀬正恒・吉村正親((財)京都市埋蔵文化財研究所)、山本信夫(山本考古研究所)、横田賢次郎(九州歴史資料館)、吉村靖徳(福岡県教育庁福岡教育事務所)

大宰府条坊跡

第200次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 75 集

平成15年3月31日

発　行　筑紫野市教育委員会
〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1丁目1—1
TEL　092-923-1111(代)
FAX　092-923-9644

印　刷　株式会社　三光
〒812-0015　福岡県福岡市博多区山王1丁目14—4
TEL　092-475-6271
FAX　092-475-6274